

Title	日本語モダリティの史的研究
Author(s)	高山, 善行
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.11501/3155732">https://doi.org/10.11501/3155732</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 日本語モダリティの史的研究

## はしがき

日本語モダリティの研究は、主に現代日本語を対象として進められ、着実に成果を挙げている。しかし、モダリティの史的側面については、いまだに体系的研究がなされていない段階である。この段階でとどまっていたのでは、文法史の研究を進展させることは望めないであろう。現代語研究の成果をふまえ、モダリティの史的研究、体系的研究が速やかにおこなわれるべきである。本論の研究は、この要請を承けておこなわれた。

全体は二部構成をなしている。

序論では、これまでのモダリティ研究のながれを押さえた上で、本論における研究の目的、方法について述べる。第一部は総体的研究を展開したものであり、モダリティ論の全体を見通すことを目的としている。具体的には、文とモダリティ助動詞の交渉のあり方について考究することになる。モダリティ助動詞と文との交渉のあり方は二つの側面がある。一つは「文構造との交渉」である。第一章〜第五章は、この側面からの考究であり、中古語のモダリティ助動詞を述語構造において位置づける。もう一つは、「文表現との交渉」である。第六章〜第九章は多様な文表現とモダリティ助動詞の交渉をめぐって考究する。

第二部は個別的研究を展開したものであり、個々のモダリティ助動詞の問題を掘り下げてみようを試みる。といっても、個々の助動詞の概説的な記述を意図するものではない。第一部で立てた見通しに基いて、いくつかのテーマを設定し、考究を進めていく。第一章〜第四章では連体ナリに関わる問題を中心に「断定のモダリティ」について考究する。第五章〜第九章では、「推量のモダリティ」をめぐって、各モダリティ助動詞の機能と意味について考究する。

このように、モダリティという枠組みで研究を進めていくことによって、文法研究に資する部分が少なくないと思

われる。この枠組みをとることによって、意味解釈が重視されてきた助動詞研究を構文的機能重視へと転換していくことが可能になる。そして、古代語の述語構造の中で助動詞を位置づけることができ、文法カテゴリーの一つとしてモダリティを定位することができる。それは、今後様々な文法現象を分析する上で、重要な役割を担うであろう。文法史の研究に新しい局面を切り開くことにつながる。本論は、そのための基礎的研究である。

ただし、新しい試みは、あくまでも先行研究の蓄積を継承し、有効に活用する方向においてなされるべきである。本論では、かつて先人によっておこなわれた調査であっても、可能な限り再調査し、それらを客観的に観察した上で、事実の確認、先行調査の修正をおこなった。また、場合によっては、資料の本文の問題に立ち入って吟味した。結果的に、数万の用例を観察することになったが、個々の例の解釈についてはおろそかにしないよう心がけたつもりである。

モダリティの研究は文法研究の本質に直結するものである。そのことは、これまでの研究のながれによって証明されている。したがって、文法研究を続けていくかぎり、一生関わっていかなければならない研究課題である。ここに十数年間にわたる考究のささやかな成果をまとめ、批判、叱正を受けることによって、少しでも研究の質を高めたいと切実に願っている。

平成九年八月二十二日

高山善行

## 目次

はしがき	一
序論 研究の方法	五
第一部 文とモダリティ助動詞の交渉	
はじめに	二三
第一章 モダリティ助動詞の相互承接	二五
第二章 従属節とモダリティ助動詞	四五
第三章 係り結びとモダリティ助動詞	六一
第四章 叙法副詞とモダリティ助動詞	八三
第五章 中古語モダリティの階層構造	一一一
第六章 疑問表現とモダリティ助動詞	一二九
第七章 仮定表現とモダリティ助動詞	一四七
第八章 否定表現とモダリティ助動詞	一六五
第九章 まとめと課題	一八三
おわりに	一九三

## 第二部 モダリティ助動詞の機能と意味

はじめに	一九五
第一章 断定モダリティ論の前提―ナリ論争の展開と学史的意義―	一九七
第二章 断定と推定―連体ナリと終止ナリの差異―	二二九
第三章 コブラ形式の組織―連体ナリと体言ナリの差異―	二五一
第四章 コブラ論の有効性―連体ナリの機能と意味―	二六七
第五章 モーダルな意味の派生―ベシの成立をめぐって―	二八七
第六章 推定形式とテンス―メリ・終止ナリとテンス―	三〇三
第七章 現実性と非現実性―ムとマシの対立をめぐって―	三二七
第八章 モーダルのスコ―プラムの特殊性―	三三七
第九章 否定推量の諸相―ガラムの機能と意味を中心に―	三五三
おわりに	三七一
あとがき(付 既発表論文との関係)	三七三
参考文献	三七七

序論

研究の方法

## 序論 研究の方法

はじめに

日本語モダリテイの史的研究は、どのような方法によってなされるべきであろうか。序論では、まず、本論における、モダリテイの基本的理解を明らかにする。そして、これまでのモダリテイ研究の流れを押さえた上で、研究の目的、方法を明示したいと思う。

## 一 モダリテイとは

文の構造に関して、「文は客観的な事態を表す部分と話者の心的態度を表す部分から構成される」という理解がある。この「心的態度を表す部分」がモダリテイ (modality) である。モダリテイは、大きく二種類に分かれる。一つは、「事態の把握に関わるもの」であり、もう一つは「聞き手への伝達に関わるもの」である。

これは、国語学における陳述論の流れと言語学における文構造論とが合流し、一体化した結果できた文構造理解であり、現在の文法研究において、もはや常識化したとさえ言えるものである。本論でのモダリテイに対する基本的理解も、このような一般的理解に従うものである。(注1) 現在、モダリテイの史的研究は開拓期にあるから、一般的理解に立つて進めていくべきであろう。

ところで、日本語の文法研究において「モダリテイ」という術語が広く用いられるようになったのは、比較的最近

のことである。この術語は、伝統的な国語学の研究ではほとんど用いられていないし、現代語の研究を中心とする日本語学においても、むしろ「ムード」(mood) が広く用いられてきている。(注2) 「モダリテイ」と「ムード」の概念規定は、研究者によって異なるけれども、ほぼ同義に用いられることがしばしばある。しかし、厳密には、両者は区別されるべきだろう。

益岡隆志(一九九一)では、「ムード」について、

動詞類の屈折体系に関わる文法範疇の一つとする。この立場からすると、「ムード」は屈折の体系を有する類型の言語に対してのみ有意味な概念である。例えば、スペイン語は直接法、接続法、命令法の区別が動詞の屈折に関与する、といった具合である。

とする。それに対して、「モダリテイ」については、

言語の個別的、類型的なあり方に縛られない、一般性の高い概念として定める。すなわち、「モダリテイ」は、その現れ方こそ言語によって様々であろうが、何らかの形ですべての言語に関わり得る文法概念と考えたいとする。

また、近藤泰弘(一九八九)によれば、

「ムード」は動詞の活用に結びつけた文法論よりの概念としてとらえ、「モダリテイ」はより広くむしろ意味論までも含む概念としてとらえるのが一般的であろう。

という。

結局、「モダリテイ」とは、「ムード」の概念をも含み込んだ広い概念であり、助詞・助動詞の表現や語用論的内容もその範囲に収めている。多様な言語現象を抜く「モダリテイ」の方が、文法の史的研究において有効性を持つことは明らかであろう。このような理解に立つて、本論では「ムード」ではなく、「モダリテイ」を用いるのである。

## 二 研究のながれ

次に、モダリテイ研究のながれを概観しておこう。「モダリテイ」という概念の広さに対応して、これまでの研究がきわめて多岐にわたるのは当然のことである。従来の文法研究のほとんどが、何らかの形でモダリテイと接触していると言っても過言ではない。それだけに、研究の流れを押さえておき、研究が現在どの段階にあるか、どのような研究が要請されるかを知っておくことは、今後の研究の方向性を考える上で重要となるであろう。以下、現代語研究、古代語研究に分けて、研究史を概観していく。

## 二・一 現代語のモダリテイ研究

日本語モダリテイの研究は、主に現代語を対象としておし進められてきたと言える。しかし、一口に現代語の研究（他言語との対照も含めて）と言っても、研究者の方法、立場によって多岐に渉る。以下、日本語学、国語学、言語学に分けて整理するが、言うまでもなく、それらは截然と分かれるものではなく、整理していくための目安に過ぎないということをおかねばならない。

日本語学においては、まず三上章（一九五九）が挙げられよう。その流れを継承するものとして、寺村秀夫（一九八四）があり、モダリテイ形式の優れた個別的記述がなされている。寺村の研究は、現在のモダリテイ研究の基礎をなすものである。さらに仁田義雄（一九九二）、益岡隆志（一九九二）によつて、現代語モダリテイの体系的研究がなされている。森山卓郎、三宅知宏の一連の研究も注目される。

談話の情報管理という観点からは、神尾昭雄（一九九〇）、金水敏（一九九二）などの研究がある。これまではほとんど手つかずだった、終助詞、感動詞の研究に大きな進展をもたらしたと言える。

国語学においては、時枝誠記（一九四一）が出発点と言えるだろう。以後、金田一春彦（一九五三）、渡辺実（一九七二）などによる批判が行われた。いわゆる、「陳述論争」が国語学のモダリテイ論を形成しているのである。また、山田文法の流れを継承する、川端善明（一九七九）、尾上圭介（一九九七）では、意味の面を中心に深い分析がなされている。同じ立場から、大鹿薫久（一九九五）、野村剛史（一九九五）では、興味深い個別的記述が行われている。また、宮地裕（一九七九）では、文の表現意図の観点から、モダリテイ論が展開されており、文とモダリテイ形式との相関を考える上で重要である。

言語学では、中右実（一九九四）、山梨正明（一九九五）による認知言語学的観点からの研究が注目される。また、田野村忠温（一九九〇）はモダリテイ論の本質に関わる重要な提言を含んでいる。

英語学のモダリテイ論は、法助動詞の研究が中心になっている。小野茂（一九六九）、細江逸記（一九七三）、荒木一雄他（一九七七）、毛利可信（一九八〇）、沢田治美（一九九三）、中野弘三（一九九三）などがあり、日本語のモダリテイを考える上で有益である。さらに、パーマー（一九七九）（一九八四）、コーツ（一九八三）、スウィッツァー（一九九〇）なども基本的文献と言えるだろう。また、山田小枝（一九九〇）では、日本語と英語、仏語、独語の対照がおこなわれており、興味深い観察がなされている。

## 二・二 古代語のモダリテイ研究

古代語のモダリテイの研究は現在、開拓期にあると言える。たとえば、現代語のように体系的な研究が公刊された

り、モダリティをテーマに論文集が編まれる、といった段階には程遠いと言えよう。体系的な研究が望まれるところであり、本論はまさに、その要請を承けておこなわれているのである。

ただし、古代語のモダリティ研究がこれまで全くなされてこなかったかという点、そうではない。モダリティの研究という枠組みではないが、助詞・助動詞の個別的研究という形ではなされており、江戸時代以来、かなりの量の蓄積がある。残念なことに、その蓄積は現在、文法の史的研究において十分活用されているとは言いがたい。その原因の一つとして、助詞、助動詞の個別的研究が分散してしまっていることが挙げられよう。

研究史を見ていくとき、このような助詞・助動詞の個別論まで含めて考えると膨大な量になるし、それらを網羅しようとする、文献目録のようなものになってしまうだろう。そこで、そこまで範囲を広げず、モダリティ研究に直接関わる助動詞の体系的なおこなわれているものに絞って取り上げることにした。

まず最初に挙げるべき研究は、北原保雄（一九八一）である。北原（一九八一）は、古代語、現代語の助動詞の総合的研究として著名なものである。意味中心、解釈中心であった、これまでの研究のあり方を修正し、構文的機能重視することによって、新しい局面を切り開いた研究であることは言うまでもないが、同時にモダリティ研究に関しても有益な点が多い。たとえば、連体ナリに上接するか、下接するかという客観的な方法によって、個々の助動詞の表現性を明らかにするなど、従来意味的観点から十分捉えられなかった現象を見事に捉えている。また、現代語との対照がなされている点も重要である。

山口佳紀（一九八五）は、現代語のモダリティ研究の成果をふまえて、古代語（厳密には上代語）のモダリティ表現をシステムティックに捉えようとする。叙法を大きく、叙述法と叙想法に二分し、未然形述語と終止形述語を対応させている。古代日本語のモダリティを体系的に捉える上では、未然形と終止形の機能的な異なりと意味とを対応させる視点は重要である。

近藤泰弘（一九九一）は、北原、山口の研究を継承しつつ、やはり現代語研究の成果を応用して、古代語モダリティ助動詞の体系的なおこなっている。将来進むであろう研究の方向性を示したものと見えよう。次に、山田文法の流れを継承する学派について見よう。

川端善明（一九七八）は、モダリティの助動詞と述語階層との関係について論じるもので、述語構造論として重要である。助動詞論において重視されてきた、相互承接現象の本質理解が示されており、助動詞と文とを連絡させる。

山口堯二（一九九一）は、意味的観点からの分析を中心に、モダリティの助動詞の体系が論じられている。モダリティ体系の変遷の見取り図が示されている。また、山口堯二（一九六八）は推量という意味領域の体系論であり、基本文献となっている。

以上、これまでの古代語のモダリティ研究について見てきた。近年、比較的若い世代の研究者によって研究が着実に進められており、今後の展開が大いに期待される分野と言えよう。（注3）

## 二・三 研究の目的

研究史の把握を承けて、本論の研究がどのような目的でおこなわれるものであるか述べてみたい。研究の目的は大きく三つある。

まず、文法研究に貢献する形で古代語モダリティを定位することである。文法カテゴリーの中でモダリティが重要な位置を占めることは言うまでもないが、それは、とりわけ古代語において重要である。たとえば、ケム、ケリのように形式でテンシの意味とモダリティの意味を共有するものがある。いわば、テンシ・アスペクトがモダリティにかぶさっているのである。したがって、古代語においては、テンシ・アスペクトの考究をおこなう上で、モダリティに



ついで分析は欠かすことの出来ないものであると言えよう。

モダリテイの研究は他のさまざまな構文現象との有機的連関が期待される。たとえば、「係り結び」は古代語の構文現象として最も重要なものである。その結びについて、助動詞、終助詞を個別に扱うようでは、システムティックな記述は望むべくもない。従属節の分析にも有益である。モダリテイ要素をどれだけ含み得るかという観点より、従属度を測定することができる。これらは、ほんの一例に過ぎないのであって、モダリテイの記述が整備されることが、文法研究に寄与する部分は少なくないのである。

次に、助詞・助動詞の個別論を統合し、体系化を進めていくことである。これまでの助詞・助動詞の研究が個別化し、分散してしまったのは、それらを統合化する枠組みがなかったことに起因している。今後は個別的行われてきた助詞・助動詞研究の統合が図られるべきであろう。そのために、これからの研究では、助詞・助動詞の個別論としてはなく、「モダリテイ論」、さらには「述語構造論」という大きな枠組みで研究をおこなう必要がある。同時に、従来の研究成果をモダリテイの研究という形で統合していくことも可能であろう。

第三の目的としては、現代語と古代語の史的対照を図ることである。これまでの日本語研究においては、現代語の研究と古代語の研究とが別々になされている感が強い。研究の分業化によって、より緻密な記述が期待されるという点はよいが、両者を有機的に連関させることがそれぞれの研究において必要であろう。では、どのような方法を使つて、現代語研究と古代語研究の連関が可能になるであろうか。本論では、「史的対照」という方法を用いる。その詳しい内容については、三・三で述べることにする。

### 三 研究の方法

#### 三・一 時代と資料

研究対象として、どの時代の日本語を取り上げるかを選択するためには、日本語史の時代区分をどう考えるかの検討が前提となる。ただ、日本語史の時代区分に関してはすでに、阪倉篤義（一九七七）、宮地敦子（一九七九）、前田富祺（一九八五）によつて諸説の整理、検討がなされている。これらの整理をふまえて、本論では、上代語、中古語、中世語（前期・後期）、近世語、近代語、現代語に区分するという、一般的な時代区分を採用することにす。ただし、実際の論述に際しては、上代語と中古語を括って「古代語」（または「古代日本語」と呼ぶことがある）。

さて、本論で明らかにしようとするのは、中古語のモダリテイの体系である。文法史に言うところ、中世語を境界に大きな変化がおこっていることは周知であるが、まず、中古の共時面を押さえておくことが、古代日本語のモダリテイを明らかにする基礎となると思われるのである。

しかし、研究の対象となるのは、中古語だけではない。後述のように、「史的対照」という方法を採用することから、現代語が研究の対象として重要な位置を占めることになる。もちろん、中古語の前後に位置する、上代語、中世語も視野に入れてある。

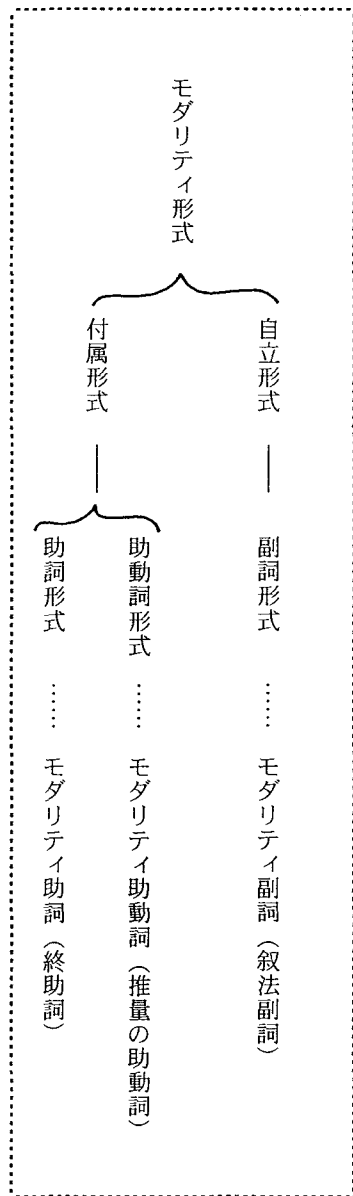
次に本論で用いる資料について述べる。中古語については、主に仮名文学作品を資料とする。散文資料ではほとんどの場合、『源氏物語』を中心に用いる。ただし、問題によっては、平安初期作品が中心となる場合もある。韻文資料としては八代集が中心である。

また、用例調査については、現代の代表的な注釈書を用いる。用例調査の見通しを立てる段階では、索引、コンピユータを利用した。(注5) 個々の用例については、複数の注釈書を参考に自分なりに解釈をおこなっている。訓点資料などの漢文系資料は、そもそもモダリテイ助動詞が使われにくい。係り結び等の現象が出にくいという問題もある。資料の文体面での均質性をも考慮し、あくまでも補助的に用いることにする。

現代語については、稿者自身の内省による作例を中心に、小説等の活字資料によって補うことにする。

### 三・二 研究の対象

本論では、モダリテイの表現形式(以下「モダリテイ形式」と称する)の範囲を以下のように考えている。



モダリテイ形式の中で助動詞形式のものを**モダリテイ助動詞**と呼ぶことにしよう。(注5) 本論では、このモダリテイ助動詞を中心に、中古語、現代語のモダリテイについて考究を進めていくことになる。モダリテイ助動詞を中心におくのは、それらがモダリテイ研究の核に位置すると思われるからである。つまり、事態に対する判断、認識というものを担う表現形式なのである。実際、中古語、現代語のモダリテイ研究は、これらの助動詞の研究を中心に積み重ねられてきているが、その重要性が自覚されているからであろう。

では、他のモダリテイ形式については、どうであろうか。まず、終助詞については個別的記述が十分なされていない段階である。モダリテイ副詞についても同様である。したがって、本論では、これらをモダリテイ研究の中心に据えることはできず、モダリテイ助動詞との関係において考究するにとどめる。(注6)

モダリテイに関わる形式は、先に挙げたモダリテイ形式だけではない。たとえば、ツ、ヌ、タリ、リという、テンス・アスペクト助動詞、述語用言の終止形、ト見ル、ト思フのような動詞形式、モゾ、モコソ、モヤのような係助詞複合形式もある。これらについては、深く立ち入ることはできないけれども、当然視野に入れておかなければならない。

では、本論で考究の中心となるモダリテイ助動詞とは、具体的にどのような形式を範囲とするであろうか。まず、中古語については、以下の形式を考究の範囲とする。

ベシ、メリ、終止ナリ、ム、ラム、ケム、マシ、マジ、ジ

ラシ、ベラナリはモダリテイ助動詞として扱うことが可能だが、使用がほぼ和歌に限られるため、文体面での均質性を考慮して考究の範囲からはずしておくことにする。

次に、これらと対応すると見られる現代語のモダリティ助動詞を挙げておこう。(注7)

ソウダ(態)、ヨウダ、ミタイダ、ラシイ、カモシレナイ、ニチガイナイ、ハズダ、ソウダ(態)、ダロウ

さらに、右のモダリティ助動詞とは異質だが、やはりモダリティに直接関わるものとして、断定ナリ(中古語)、ノダ(現代語)がある。これらも当然、考究の対象としなければならない。

右に挙げた形式からわかるように、本論では、認識系モダリティの形式について扱うことになる。当為系、願望系のモダリティについては、中心的に扱うことはしない。モダリティの中心的存在である認識系モダリティをまず押さえることが重要と思われるからである。

ところで、先に挙げたモダリティ助動詞はいずれも、国語学では「推量の助動詞」と呼ばれているものである。したがって、「わざわざモダリティ助動詞などと呼び替える必要があるのか」という疑問が起こるかもしれない。なじんだ術語で済ませられるものなら、事新しく呼ぶ必要はなく、無用な呼び替えは、むしろ混乱を招くだけであろう。ここで、モダリティ助動詞として括る意図とその有効性について述べておかなければならない。

第一に、本論では、文との連絡、文法カテゴリーとしてのモダリティ研究を目指している。ところが、従来の「推量の助動詞」という括り方は意味中心の規定であり、伝統的な助動詞論の枠内にとどまるものである。

第二に、現代語との対照、他言語との対照がおこないやすい。いつまでも「推量の助動詞」などと言っているのは、言語学における研究の成果を活用する道を閉ざすことになる。

第三に、もともと術語が不統一であったということである。「推量」は、よくなじんだ術語ではあるが、その表す内容については、いまだ研究者間のコンセンサスが得られていないのである。依って立てるほどきちんとした概念規

定がなされていない「推量」に固執する必要は全くないのである。(注8)

以上の理由から、本論では、「モダリティ助動詞」と呼称する。これは、単なる呼称の問題ではなく、研究の枠組み、研究の目的に関わることなのである。

### 三・三 史的対照

本論では、史的対照の観点から日本語モダリティの記述・説明をおこなう。史的対照という観点は、日本語の史的研究においては、あまりなじみのない方法であろう。これまでの日本語の「史的」研究と言えば、共時的研究か通時的研究のどちらかであったと言える。また、「対照」研究と言えば、日本語と外国語との対照研究が一般的であろう。しかし、稿者は、個別言語における特定時期の言語体系とそれと異なる時期の言語体系との対照も可能であると考えている。この対照を「史的対照」と呼ぶのである。理論的には、どの分野においても可能と思われるが、文法史研究においても大きな有効性を持つものと期待される。

二つの時代の文法体系を対照するのであるから、先の時代区分によれば、いくつかの組み合わせが想定できる。しかし、実際に史的対照が力を発揮するのは、現代語と「××時代語」との対照であると思われる。内省の効く現代語は、他の時代語とは明らかに異質であり、理論的に深いところまで探ることができる。その特性を生かして、分析の方法やその成果を過去の「××時代語」の分析に応用するのである。史的対照という方法は、閉塞状況にある文法の史的研究に新たな局面を切り開く方策として注目されている。

史的対照の必要性については、北原保雄(一九八四)、寺村秀夫(一九八二)、金水敏(一九九五)などによって指摘されている。また、『講座日本語学』の編集方針にもはっきりと明示されている。

では、史的対照の有効性は、どのようなところにあるのだろうか。

(1) 二つの体系を対照することによって、「何が問題になるのか」がわかる。一つの時代の言語だけを見ては気づきにくい問題（研究テーマ）が見えてくる。これによって、新たな問題の発見、他の時代の言語との相対化が期待できる。

(2) 先述のように、現代語は内省が効くため、理論的に深いところまでわかる。理論的に進んでいる現代語研究の成果が活用でき、理論面での深まりが得られる。(注9)

(3) そして、この研究方法を取ることによって、言語の普遍性の解明につながってくる。類型論的研究への発展性が見込まれるのである。(注10)

本論で、史的対照という方法を積極的に採用するのは、このような有効性に基づいているのである。中古語のモダリティを考究する上で、現代語のモダリティとの対照という観点をとることになる。(注11)

おわりに

以上、本論における研究の方法について述べた。ここで述べた方法の妥当性については、第一章以下の論述の内容によって明らかになるであろう。

注

1 寺村秀夫（一九八二）では、次のように述べられている。

「文を、話し手が客観的に世界の事象、心象を描こうとする部分と、それを「素材」として話し手が自分の態度を相手に示そうとする部分から成るとする考え方をうけ入れ、前者（渡辺文法の「叙述内容」、シャルル・バイイの *Diction*、フィルモアの *Proposition*）を「コト」、後者（渡辺文法の「陳述」、バイイの *Modus*、フィルモアの *Modality*）を「ムード」と呼ぶことにする。

ムードには二種類ある。一つは「コトに対するもの（対事的ムード）」であり、確言（現在形・過去形の活用語尾）、概言的表現（ダロウなどの助動詞）、事態説明的表現（ハズダなどの助動詞）によって表される。もう一つは、「話し手に対するもの（対人的ムード）」であり、『働きかけ』『問いかけ』『意向表明』『主張』『説得』『敬意』を表すものがこれにあたる。

また、仁田義雄（一九九一）は、以下のように述べている。

〈モダリティ〉とは、現実との関わりにおける、発話時の話し手の立場からした、言表事態に対する把握の仕方、および、それらについての話し手の発話・伝達の態度のあり方の表し分けに関わる文法的表現である。

仁田（一九九一）では、やはりモダリティの下位的タイプとして二つのタイプを挙げている。「発話時における話し手の言表事態に対する把握のし方の表し分けに関わる文法表現」を「言表事態めあてのモダリティ」とし、「文をめぐっての発話時における話し手の発話・伝達の態度のあり方、つまり言語活動の基本的単位である文が、どのような類型的な発話―伝達的作用、機能を担っているのかの表し分けに関わる文法表現」を「発話・伝達のモダリティ」とする。

2 近年、国語学においても、「モダリティ」が使用されるようになってきた。山口堯二（一九九一）、阪倉篤義（一九九三）、渡辺実（一九九六）など。

3 森野崇（一九九二）、小田勝（一九九〇）、柴田敏（一九九四）などがある。

- 4 文字列検索ソフトG R E Pを使って、中古の文学作品のテキストファイルから用例を検索した。用例分布の見出しを得る上できわめて有効であった。
- 5 すでに、近藤泰弘（一九九一）で「モダリティの助動詞」という呼び方が使われている。
- 6 実際の論述に際しては、説明の簡明さを考慮して、「叙法副詞」、「終助詞」という一般的な呼称を使うことにする。

7 これらは、寺村（一九八四）において「概言のムード」とされるものである。（ハズダは「説明のムード」と位置づけられているが、本論では、モダリティ助動詞の範囲に含めた）これらは、現代語モダリティの研究の対象としてほぼ定着したものである。また、ウ、ヨウ、マイは文章語と見て除外した。

8 術語の不統一に関して、次の表（左頁）を参照されたい。いわゆる「推量の助動詞」（本論でいう「モダリティ助動詞」）について、「推量」「推定」「想像」…という風に、実に多様な術語が用いられていることがわかる。さらに言うならば、「推量」にも広義と狭義の二つの用いられ方があって、厳密には、「広義推量」（推量の助動詞全般を指す）と「狭義推量」（推量の助動詞のうち、テンス形式が下接していないものだけを指す）というように、いちいち呼び分けなければならぬ煩雑さが生じてくる。これは、「推量」というものの概念規定がなされていないことに根本的な原因があると思われる。たとえば、「推定」と「推量」はどう異なるか、「断定」と「推量」の位置づけはどうなるか、といった基本問題が十分検討されないまま、今日に至っていることの頭れであろう。これらの概念規定は、抽象論としてではなく、具体的な言語事実をもとになされるべきであり、今はそのための準備段階にあると思われる。

術語一覧表

著者名	術語	書名
大槻文彦	《未来》《推量》《詠嘆》	広日本文典（明30）
三矢重松	《想像》	高等日本文法（明41）
松下大三郎	《推想》	改撰標準日本文法（昭7）
山田孝雄	《推量》	日本文法学概論（昭11）
時枝誠記	《推量》	日本文法文語篇（昭29）
森重敏	《推定》	日本文法通論（昭34）
橋本進吉	《推量》《未来》	助詞助動詞の研究（昭44）
宮地裕	《推定》	新版文論（昭和54）
北原保雄	《推量》《様態》	日本語助動詞の研究（昭56）
阪倉篤義	《推定》《推想》	日本語表現の流れ（平5）

9 現代語研究の方法を適用する上での重要な問題として、「非文をどのように扱うか」ということがある。これまでの伝統的な国語学において一般的だった帰納的方法では、「非文」が考究の対象になることはほとんどなかった。それなりの量の用例があれば、用例分布の量的傾向、偏りは確認されようが、「なぜ無いのか」という説明ができない。結果的に、用例として確認できる現象の分析だけで終わってしまうのである。これでは、言語の本質に近づくことはできないだろう。

この問題点を明確に指摘したのが、近藤泰弘（一九八六）「文法（史的研究）」（『国語学』一四五）である。

…研究の内容の点でも新しい方向は見られる。それはいわゆる「非文」を古代語研究においても研究対象とするようになったことである。「非文」とは文法的に存在不可能な文のことであり、「非文法的」(ungrammatical) な文とも言われる。もちろん現代語の場合とは異なり、話し手の語感によってそれを判別することはできないために完全な判断は不可能であるが、おおよそは用例の有無により判別できる。

—中略—

古典の中に見られる文を解釈するというだけなら、「非文」の研究などは不要である。しかし、古代語の文法体系について正確な構文規則を知るためにはどうしても、なぜある文が存在しないかということの研究しなくてはならないであろう。

…言語の体系は、現に存在する、あるいは既に存在した文だけではなしに、存在を予想されるところの無限の文にも適用されるものでなければならぬ。すなわち、これからの文法論は、従来の文法論のようにすでに存在している文（研究の資料たる文）の構造を説明するにとどまるのではなく、新しい文を無限に作り出せるような射程をもった理論でなければならぬであろう。

この指摘は重要である。非文の問題を方法論上の問題として明確化したことは高く評価されなければならない。

10 ところで、右に引用した文章からは、多分に生成文法の影響がうかがえる。周知のように、生成文法の影響を直接的に受けたのは現代語の文法研究なのであるが、古代語研究においても、生成文法の積極的な適用が図られるべきであろう。ただ、具体的な構文解析より前に、むしろ理念そのものが積極的に導入されなければならない。それは、北原保雄（一九八四）で指摘されているように、これまでの帰納法重視の方法から演繹法重視の方法への転換という要請につながるであろう。

11 コムリー（一九九二）など参照。

11 時系列を基準にした場合、史的対照の仕方には、二種類考えられる。「順行型」（古典語→現代語）と「逆行型」（現代語→古典語）である。本論は逆行型であり、現代語の分析を通して得た成果を中古語に活用する。たとえば、金水（一九九五）は順行型であり、古典語の分析で得た成果を現代語研究に活用する方法を取っている。このように、史的対照は、設定する研究テーマによって両方の見方が可能である。

# 第一部 文とモダリティ助動詞

## の交渉

## 第一部のはじめに

文論が文法研究の中心に位置するものであることは誰もが認めるところであろう。モダリティが文の述べ方に關わるものである以上、モダリティ論は文論との関わりにおいて成立するものであろうし、本来、文論と切り離して論じることができないはずである。このような了解のもとで、第一部は文とモダリティ助動詞との交渉の全体を見通すことを目的とする。

文論には三つの柱がある。まず、「文がいかにして成立するか」を問う**文成立論**、次に「文がどのような構造を成しているか」を問う**文構造論**、そして、「文がどのような意味内容を表しているか」を問う**文表現論**である。これらは、一応は異なる種類のものであるが、深いところで有機的に連関しているものである。モダリティ論はこれら三つの柱との関係において、論じられていくべきものである。

第一部では、文とモダリティ助動詞の交渉のあり方を次の二つの側面から考えていく。すなわち、「文構造との関係」(第一章～第五章)と「文表現との関係」(第六章～第九章)である。(文成立論との関係については、第二部で取り上げる)

第一章では、モダリティ助動詞の相互承接の実態について観察する。第二章では、従属節とモダリティ助動詞との関係について考える。第三章では、係り結びとモダリティ助動詞との関係について検討する。第四章では、叙法副詞とモダリティ助動詞との共起関係について検討する。これらの検討をまとめる形で、第五章において、モダリティの階層モデルを提示する。

第六章では、疑問表現との関係を取り上げる。疑問表現の類型とモダリティ助動詞との関係についての考究である。

続く第七章では、仮定表現との関係について検討し、事態の現実性、非現実性との関わりを見ていく。第八章では、否定表現との関わりを見ていく。第九章では、第六章～第八章のまとめをおこない、併せてその他の文表現との関係についても言及する。

第一部は総体的研究であり、本論全体の基礎をなす部分となる。総体の論なくして、個別論は成り立ち得ないであろう。そこは、これまで充分に果たされてきたとは言いがたい、文と助動詞との連絡をおこなう場でもある。本来文の構成要素にすぎない助動詞を、文という本来あるべき場所に還す営みと言ってもよい。



## 第一章 モダリティ助動詞の相互承接

## はじめに

モダリティ助動詞と文構造との関係について見ていこうとすると、まず押さえておかなければならないのは相互承接である。相互承接の研究は、現在までかなりの蓄積がある。ただし、それらの多くは、助動詞全般を対象としたものであり、本論の目的からすると、緻密さに欠ける点が多い。本章では、モダリティ助動詞を中心に、相互承接の実態を整理してみたい。

## 一 研究史

助動詞の相互承接に関しては、近世以降相当な量の研究の蓄積がある。これをみても、相互承接という現象が、助動詞研究、文法研究にとつていかに重要であるかが知らるであろう。たとえば、富士谷成章（一七七三）において「継脚結」として指摘されているし、近代以降の主な研究では、芳賀矢一（一九〇四）、三矢重松（一九〇八）、徳田浄（一九三六）、橋本進吉（一九六九）、渡辺実（一九七一）、北原保雄（一九八一）、竹内美智子（一九八六）、紙谷栄治（一九八二）などがある。（注一）

助動詞の研究において、相互承接が重視される理由としては、

（一）文構造と助動詞をつなぐ接点となること

（二）客観的な分析が可能であること

の二点が考えられよう。このような有効性を生かしておこなわれた先行研究によって、相互承接の実態についての大きな見通しは既についているものと思われる。（注二）

しかし、従来の研究に全く問題がないわけではない。承接に関する基礎的なデータが公開されていないため、どの資料に、どの承接形が、何例あるかといった承接形の分布が明らかでない。個々の研究者がデータを保有しており、学界として共有できていないのが現状である。

また、分析の仕方においても問題がある。たとえば、少数例についてどの程度吟味されているか、当事者以外にはわからない場合が多い。稿者は相互承接をリストアップした、いわば「相互承接の索引」を作成する必要を感じている。

こうした現状をふまえて、今後なされるべきことは、まず、

（A）範囲を限定して、より緻密な記述を目指すこと。

である。助動詞全般といったレベルでの記述は、どうしても目の粗いものになりがちである。いずれかの助動詞群に範囲を狭めてよりきめこまかな記述をなす必要があるだろう。

こういう基礎的研究の上に、

（B）承接形の存在、非存在についての適切な説明をすること。

が要請される。従来の研究では、存在する承接形についてはよく観察されている。しかし、存在していない承接形について、「なぜ、無いのか」ということの説明がなされていないようである。（注三）さらに、

（C）従来の調査結果についての確認や修正

ということも要請される。調査には見落としや誤認がつきものである。他者によるチェックを受けて、はじめて正しさが確認されるのである。また、資料として用いた文献の本文研究の進展も視野に入れておく必要がある。

以上のような研究史の把握と今後の研究に対する要請のもとに、本章ではモダリティ助動詞を中心に置いて、相互承接現象の観察・整理を行うことにする。なお、資料は『源氏物語』に限定する。少数例や孤例については『源氏物語大成』（校異篇）によって本文の異同を示すことにする。

## 二 承接の実態

### 二・一 モダリティ助動詞相互の承接

まず、モダリティ助動詞相互の承接の実態について観察してみよう。

推量的判断は原則的に一文に一回とされるから、モダリティ助動詞相互の承接はおこなわれにくいはずである。しかし、ベシ、マジだけは例外である。以下、ベシ、マジの承接形を挙げておく。承接形の下に記した数字は、『源氏物語』で確認された用例数を示す。孤例は承接形の上に●を付けて明示する。

表1 モダリティ助動詞相互の承接

	ベシ	マジ	メリ	ヰナリ	ム	ラム	ケム	マシ	ジ
ベシ	—	×	○	○	○	×	△	△	×
マジ	×	—	○	△	×	×	×	×	×
メリ	×	×	—	×	×	×	×	×	×
ヰナリ	×	×	×	—	×	×	×	×	×
ム	×	×	×	×	—	×	×	×	×
ラム	×	×	×	×	×	—	×	×	×
ケム	×	×	×	×	×	×	—	×	×
マシ	×	×	×	×	×	×	×	—	×
ジ	×	×	×	×	×	×	×	×	—

#### ○ベカメリ 一三九

(1) かの岡辺の家も、松の響き波の音にあひて、心ばせある若人は身にしてみて思ふべかめり。(明石)

#### ○ベカナリ 一〇

(2) 「近江の君」あなかま。みな聞きてはべり。尚侍になるべかなり。(行幸)

#### ○ベカラム 四二

(3) つれづれも慰む方なくては、いかが明かし暮らすべからむ。(薄雲)

#### ●ベカリケム

(4) (源氏) 「ただ、いとあまり乱れたるところなく、すすすしく、すこしさかしとやいふべかりけむと、思ふには頼もしく、見るにはわづらはしかりし人さまになん。」(若菜下)

(青) へかりけむとへかりけん三

(河) ×

(別) けむとーけん阿

## ●ベカラムシ

(5) (惟光)「この君達の、すこし人数に思しぬべからましかば、宮仕よりは、奉りてまし。」(少女)

(青) ×

(河) ×

(別) おほしぬへからましかは—おほしぬへうは国

## ○マジカメリ 九

(6) よかめり、憎げにおし立ちたることなどはあるまじかめりと思すものから、(若菜上)

## ●マジカナリ

(7) (源氏)「仏の御しるべは、暗きに入りても、さらに違ふまじかなるものを」とのたまふ御声の、いと若うあ

てなるに、く(若紫) 異文ナシ

ベカメリ、ベカラムはまとまった数の用例が見られるが、それ以外は少ない。特にベカリケム、ベカラマシ、マジカナリは孤例である。注意すべき点としては、ベシとマジは相互に承接しないことである。当たり前のようだが、両者が同一の階層に属していることを示している事実として押さえておく必要がある。ベシとマジは意味的にはほぼ対応すると言われているが、モダリティ助動詞の承接に関しては必ずしも対応していないことがわかる。

## 二・二 テンス・アスペクト助動詞との承接

次に、テンス・アスペクト助動詞との承接について見ていくことにしよう。

まず、テンス・アスペクト助動詞が下接する場合について、表2にまとめておこう。

以下、まとまった数の見られる承接形については挙例を省略し、少数例のみを挙げておく。

表2 テンス・アスペクト助動詞の下接

	キ	ケリ	ツ	ヌ	タリ	リ
ベシ	○	○	△	×	×	×
マジ	△	○	△	×	×	×
メリ	○	×	△	×	×	×
止カ	○	×	△	×	×	×
ム	×	×	×	×	×	×
ラム	×	×	×	×	×	×
ケム	×	×	×	×	×	×
マシ	×	×	×	×	×	×
ジ	×	×	×	×	×	×

## ○ベカリツ 四

(8) (夕霧)「くなどで、すこし隙ありぬべかりする日ころ、よそに隔てしらむ」とのたまふさまも、いと若うあはれげなれば、(少女) 異文ナシ

(9) (源氏)「あやしくあえかにおはする宮なり。女どちは、もの恐ろしく思しぬべかりつる夜のさまなれば、げにおろかなりとも思ひつらむ」とて、く(野分)

(青) ×

(河) おほしぬへかりつる―おほされぬへかりつる河

(別) おほしぬ―おほされぬ

(10) (夕霧)「世の例にもなりぬべかりつる身を、心もてこそかうまでも思しゆるさるめれ。く」(藤裏葉)

(青) へかりつる―へかりける御

(河) ×

(別) へかりつる―へかりける麦阿

(11) 内裏の御前に、今宵は月の宴あるべかりつるを、とまりてさうさうしかりつるに、この院に人々参りたまふと聞き伝へて、これかれ上達部なども参りたまへり。(鈴虫)

(青) ×

(河) ×

(別) あるへかりつるを―あるへかりける保―有るへきを麦阿

●マジカリキ

(12) 源氏の君を限りなきものに思しめしながら、世の人のゆるしきこゆまじかりしによりて、坊にも据ゑたてまつらずなりにしを、(紅葉賀 異文ナシ)

○マジカリツ 二

(13) (僧都)「く天変頻りにさとし、世の中静かならぬはこの気なり。いとぎなく、ものの心知ろしめすまじかり

つるほどこそはべりつれ、やうやう御齡足りおはしまして、何ごとともわきまへさせたまふべき時にいたりて、咎をも示すなり。く」(薄雲)

(青) ましかりつる―ましかりし横

(河) ×

(別) しろしめしましかりつる―しろしめさゝりつる陽

(14) (中将)「く、なべてのさまにはあるまじかりつる人の、うち垂れ髪の見えつるは、世を背きたまへるあたりに、誰ぞとなん見おどろかれつる」とのたまふ。(手習)

(青) ×

(河) ×

(別) あるましかりつる人の―あるましけなる保

○メリツ 二

(15) (母君)「く、ただかの遺言を違へじとばかりに、出だし立てはべりしを、身にあまるまでの御心ざしの、よろづにかたじけなきに、人げなき恥を隠しつつ、交らひたまふめりつるを、人のそねみ深くつもり、やすからぬこと多くなり添ひはべりつるに、く」(桐壺)

(青) 給ふめりつるを―給めるを肖三

(河) たまふめりしを河

(別) 給めりしを御国妻―ナシ陽

(16) 君は入りて臥したまひて、「はしたなげなるわざかな。ことごとしげなるさましたる親の出でゐて、離れぬ仲らひなれど、これかれ、灯明かくかかかけて、すすめきこゆる盃などを、いとめやすくもてなしたまふめりつるかな」

と、宮の御ありさまをめやすく思ひ出でたてまつりたまふ。(宿木)

(青) ×

(河) もてなし給めりつるかなと—もてなし給めりつるなど大  
(別) ×

●ナリツ

(17) いよいよあやしう、ひなびたる限りにて、見ならばぬ心地ぞする。  
いとど、愁ふなりつる雪、かきたれいみじう降りけり。空の気色は  
げしう、風吹きあれて、大殿油消えにけるを、点しつくる人もなし。  
(末摘花)

(青) ×

(河) うれふなりつる—うれへなりつるに七宮尾大鳳—うれえなりつ  
るも平

(別) うれふなりつる—うれう(へ)なりゆ(つ)るに御

○タラジ 四

(18) (女一の宮)「いな、持たらじ。乗むつかし」とのたまふ。(蜻蛉)

(青) もたらし—もたし横—もたちし池

(河) ×

(別) もたらし—もたし陽

表3 テンス・アスペクト助動詞の上接

	ベシ	マジ	ヌリ	紐ナリ	ム	ラム	ケム	マシ	ジ
キ	×	×	×	×	×	×	×	×	×
ケリ	×	×	×	×	×	×	×	×	×
ツ	○	×	×	×	○	○	△	○	×
ヌ	○	×	○	○	○	○	○	○	×
タリ	○	△	○	○	○	×	○	○	△
リ	△	△	×	?	○	×	△	○	×

(19) くと思ひわづらひにたれど、姫君の人知れず思いたるさまのいと心苦しくて、生きたらじ、と思ひ沈みたまへ  
る、ことわりとおぼゆれば、く(玉鬘)

(青) いきたらし—いきたえ(ら)し肖

(河) いきたらし—いきたし七

(別) ×

(20) く、しばしは、「さりとも、さやうならむ事もあらば隔てては思したらじ」と思しけれど、(朝顔)

(青) おほしたらしと—おほしたしと御肖—よもおほせしと耕

(河) おほしたらしと—よもおほしたしと河

(別) おほしたらし—よもおほしたし陽保平—よもをはせし坂—よも国

(21) 「情なき人なりてゆかば、さて心やすくても、えおきたらじをや」など言ふもあり。(若紫)

(青) えをきたらしをや—をきたらしをや御

(河) えをきたらしをやなと—おきたえしをやと七—をきたらしをやと宮尾大鳳

○タルマジ 二

(22) (女三の宮)「なほ、え生きたるまじき心地なむしはべるを、かかる人は罪も重かなり。尼になりて、もしそ  
れにや生ぎとまると試み、また亡くなるとも、罪を失ふことにもやとなん思ひ隔てたるなむいとつらき。」  
と言ふにつけても、(柏木)

(青) ×

(河) いきたるまじき—いきとまるまじき河

(別) いきたるまじき—いきとまるまじき御—いくまじき国

(23) 中将「くさやうの所によき女はおきたるまじきものにこそあめれ。明け暮れ見るものは法師なり。」(手習) 異文ナシ

## ●ルベシ

(24) (源氏)「あやしく御気色のかはれるべきころかな。罪もなしや。」(朝顔)

(青) かはれるへき―かはれるつき耕―かはるへき肖

(河) かはれるへきころ―かはれるつきころ宮

(別) かはれるへき―かはるへき陽―なれるへき坂―かはれる国

## ○ルマジニ

(25) (近江の君)「めでたき御仲に、数ならぬ人はまじるまじかりけり。中将の君ぞつらくおはする。さかしらに迎へたまひて、軽め嘲りたまふ。せうせうの人は、え立てるまじき殿の内かな。あなかしこあなかしこ」(行幸)

(青) ×

(河) ×

(別) えたてるましき―たてるましき陽―えたへたてるましき保

(26) 帝「などか御子をだに持たまへるまじき。口惜しうもあるかな。」(濔標) 異文ナシ

## ○リケム三

(27) (薫)「く棄てがたく落しおきたてまつりたまへりけん心苦しさを思ひきこゆる方こそ、また、ひたぶるに、身をもえ思ひ棄つまじけれ。」(総角)

(青) 給へりけん―給けん御

(河) たてまつり給へりけん―たてまつりけん河

(別) 給へりけん―給つらむ横―たまへりける保―給はん平

(28) (朱雀院)「く一つあまりてや、宰相にて大将かけたまへりけん。それに、これはいとこよなく進みにためるは。次々の子のおぼえのまさるなめりかし。」(若菜上) 異文ナシ

(29) 人目も絶えて、心やすく語らひ暮らしたまふ。かの人のものしたまへりけむに、かくて見えてむかし、と思しやりて、いみじく恨みたまふ。(浮舟) 異文ナシ

## ○テケム 四

(30) く、たち返り、女君に、(源氏)「昨日、風の紛れに、中将は見たてまつりやしてけん。かの戸の開きたりしによ」とのたまへば、(野分)

(青) してけん―しけむ三

(河) みたてまつりやしてけん―みたてまつりもやしけん七―みたてまつりやしけむ宮尾平大―みたてまつり―焼失しけん鳳

(別) みたてまつりやしてけん―みたてまつりやしけん保―いかゞみけん麦阿

(31) まして、さばかり違ふべくもあらざりしことどもを見たまひてけむ、恥づかしく、かたじけなく、かたはらいたきに、く(若菜下)

(青) み給てけむ―み給けん柳

(河) み給てけむ―み給けん河

(別) み給てけむ―み給けんか阿

(32) く、「いで、さりとも、それにはあらじ。いといみじく。さることはありなんや。隠いたまひてけむ」と思ひ

表5 終助詞の下接

	I類			II類			
	ソ	カ	カナ	ヨ	ヤ	ガシ	ナ
ベシ	○	○	○	△	○	○	×
マジ	△	△	×	×	△	×	×
メリ	×	×	○	×	△	○	○
終止ナリ	×	×	○	×	×	×	○
ム	×	×	×	○	○	○	△
ラム	×	×	×	△	○	○	△
ケム	×	×	×	○	○	○	×
マシ	×	×	×	△	○	○	×
ジ	×	×	×	△	○	○	○

モダリティ助動詞と終助詞との承接に関する体系的な研究はまだなされていない。(注4)そこで、終助詞との承接について調べてみる。終助詞は多種多様であつて、それらすべてを取り上げるても、あまり意味がない。そこで、整理をしておこう。まず、そもそも文類型の異なる願望系終助詞は除外する。次に終助詞を接続によつて二類に分けておく。連体形接続のものをI類とし、終止形接続のものをII類としておこう。(注5)こうして、取り上げた終助詞との承接の実態を表に示しておく。

以下、承接の認定上、問題になると思われる、少数例、孤例のみを挙げておく。

●マジキカ

(34) (句宮)「ただ一言もえ聞こえさすまじきか。く」とのたまふ。(浮舟)

(青) ×

表4 ズとの承接

	ズ上接	ズ下接
ベシ	○	△
マジ	×	×
メリ	○	×
終止ナリ	○	×
ム	○	×
ラム	×	×
ケム	○	×
マシ	○	×
ジ	×	×

三 終助詞との承接

否定の助動詞ズとの承接について見ていきたい。ズもテンス・アスペクト助動詞と同じく、モダリティ助動詞に上接する場合と下接する場合がある。両者を一括して表4に示しておくことにする。

上接については、ラム以外はすべて可能である。下接については、ベシのみが可能で他の助動詞には下接していない。ただし、そのベシについても、直接下接するベカラズは孤例である。ベシと否定との関係については、第一部第八章で詳述する。

二・三 否定の助動詞との承接

なす。(若菜下)

(青) かくいたまひて―かくい(シ)て給て横―かくい(し)給て池―かくしたまひて陽肖

(河) かくいたまひてけむと―かくい給けんと御七宮尾平大鳳―かくい給けんも国

(別) たまひてけむ―給てん阿

(33) (浮舟)「げに隔てあり、と思しなすらんが苦しさに、ものも言はれでなむ。あさましかりけんありさまは、めづらかなる事と見たまひてけんを、さてうつし心も失せ、く」とのたまへば、(夢浮橋)

(青) ×

(河) ×

(別) み給てけん―み給けん宮国麦阿―みたてまうてけん桃

## ●マジヤ

(河) えきこえさすましき—えきこゆましき河  
 (別) えきこえさすましき—えきこゆましき宮陽国

(35) (夕霧) 「親王たちおはします御送りにには参りたまふまじや」と、押しとどめさせて、く(匂宮) 異文ナシ

## ○メリヤ 三

(36) (相木) 「花乱りがはしく散るめりや。桜は避きてこそ」などのたまひつつ、く(若菜上) 異文ナシ

(37) 「あやにくなめる雪を、いかで分けたまはんとすらむ。夜も更けぬめりや」とそそのかしたまふ。(真木柱)

(青) ×

(河) ×

(別) ふけぬめりや—ふけぬめり麦阿

(38) (娘) 「く、なほほけほけしき人の、神かけて聞こえひがめたまふなめりや」と解き聞かす。(玉鬘)

(青) ひかめ給なめりや—ひかめるなめりや—肖

(河) ×

(別) 給なめりやととききかすを・・・給ふるめりといふに・・・陽

## ○ムナ 三

(39) (薰) 「いかにぞ。おはしまさで後心細からむな」など問ひたまふ。(椎本)

(青) 心ほそからむな—心ほそからん肖

(河) 心ほそからむなと—心ほそからんたと御大

(別) 心ほそからむなと—心ほそからむなと横陽

(40) (源氏) 「いとかかるころは、遊びなどもすさまじく、さすがに暮らし難きこそ苦しけれ。宮仕する若き人々たへ難からむな。く」(常夏)

(青) たへかたからむなをひもとかぬほとよ—たえかたからむなおひもとかぬ程は横—たえかたからんおひもとかぬほとよ為—たえかたからんおひもとかぬほとよ池三—たへかたからむなをしひもとかぬほとよ佐—たえかたからんなをしひもとかぬ程よ肖

(河) たへかたからむなをひもとかぬ—たえかたからんかしなをひもとかぬ河

(別) たへかたからむなをひもとかぬ—たえかたからんやおひもとかぬ陽—たえかたからんおひもとかぬ保—たへかたからむかしなをひもとかぬ国

(41) (源氏) 「今宵ばかりはことわりとゆるしたまひてんな。く」(若菜上)

(青) ×

(河) ゆるし給てんな—ゆるしてんな大

(別) ×

## ●ラムナ

(42) (源氏) 「御息所の忌みはてぬらん。昨日今日と思ふほどに、三年よりあなたの事になる世にこそあれ。く」

(夕霧)

(青) ×

(河) いみはてぬらん—いみはみちぬらん七宮尾平加鳳—いみはみちぬらんかの人の院にまいり給し事は

大



(別) いみはてぬらんないみはみちぬらん別

○ラムヨ 三

(43) 「くかかることも知らで、さ思すらむよ」と、(浮舟)

(青) しらてさおほすらんよーしらてさおほすらんよ榊

(河) ×

(別) おほすらんよーおほすらん宮国

(44) 「くさばかりあはれる人をさておきて、心のどかに月日を待ちわびきすらむよ」と思す。(浮舟) 異文ナシ

(45) 「うたても答へをしてけるかな。書きかへでやりつらむよ」と苦しげに思して、(竹河)

(青) やりつらむよーやりつらむよ三

(河) ×

(別) ×

○マシヨ 三

(46) 「くあないみじや。田舎人にておはしまさましよ」など、うち語らひつつ、(玉鬘)

(青) ×

(河) おはしまさましよなとーをはしまさましかなと御

(別) おはしまさましよーおはしまさましかは麦阿

(47) 見るままにめでたく、思ふさまなる御容貌ありさまを、よそのものに見はててやみなましよと思ふだに胸つ

ぶれて、(真木柱)

(青) ×

(河) やみなましよとーやみなましよと尾

(別) やみなましよーやみなましかは麦阿

(48) くだ今書きたらんにも違はぬ言の葉どもの、こまこまとさだかなるを見たまふに、げに落ち散りたらましよと、うしろめたういとほしき事どもなり。(橋姫)

(青) おちりたらましよー(お朱) ちりた、(ら朱) ましよ大

(河) ×

(別) おちりたらましよーおちりたらましかは保麦阿

(49) (夕霧) 「親王たちおはします御送りには参りたまふまじや」と、押しとどめさせて、(匂宮) 異文ナシ

(50) (匂宮) 「いみじく思すめる人はかうはよもあらじよ。見知りたまひたりや」とのたまへば、(浮舟) 〴

(青) ×

(河) ×

(別) あらしよーあらし桃

●ベキヨ

(51) げに、千年の形見にしつべかりけるを、見すなりぬべきよ、と思せば、(幻)

(青) ×

(河) ×

(別) みすなりぬへきよとーみすなりぬへきよ御ーみすなりぬへきと保

さて、表より、以下のような特徴が見られる。

- ①ベシはナ以外の終助詞がすべて下接。終助詞がもつとも幅広く下接していることがわかる。マジは、ヤ、カが下接する例がいずれも孤例のため、認定が微妙である。
- ②メリはⅠ類ではカナだけが下接。しかし、Ⅱ類はすべて下接している。一方、終止ナリはカナとナが下接するだけであり、同じく狭義推定だがメリと異なる。
- ③ム、ラム、ケム、マシ、ジはほぼ同じ結果となっている。ジはマジと異なり、Ⅱ類が下接する例がかなり見られる。

目に付いた特徴を挙げてみた。十分予想されたことではあるが、終助詞の承接については異文が多く、認定が微妙なものが少なくない。それらについては、強引に認定せず、当面ありのままの形で示しておくことにしたい。今後、それぞれの終助詞の記述が進めば、さらに興味深い問題が発見される可能性があるだろうが、ここでは個別的問題に立ち入らず、現象の提示にとどめることにする。

#### おわりに

本章では、モダリティ助動詞の相互承接の実態を示した。今後他の資料を用いてデータの拡大をおこなう必要がある。また、それぞれの承接形が存在、非存在の認定については、本文の問題もあり、簡単に決められるものではない。本章ではありのままの形で示したが、これらの承接形をどう解釈するかは、個別研究における研究課題となろう。

#### 注

- 1 助動詞相互承接の研究史については、阪倉篤義（一九六六）参照。
- 2 竹内（一九八六）の承接表参照。
- 3 非文を研究対象とすることにつながる。序論参照。
- 4 終助詞の個別論については、森野崇氏による一連の研究がある。
- 5 森重敏（一九四六）に係助詞の論理性、感情性による分類がある。「終止としての係助辞は、係りとしての係助辞の論理性感情性の大別を更に鮮やかにあらはす」という。

## 第二章 従属節とモダリティ助動詞

はじめに

これまでのモダリティ助動詞に関する考究は、文末用法を対象におこなわれることが多かったように思われる。しかし、実際には、モダリティ助動詞は従属節においてもしばしば生起している。文末用法だけを見ているのでは、モダリティ助動詞の性格を明らかにしていくことはできず、複文レベルでの考究が要請されるのである。本章では、現代語、古代語の従属節におけるモダリティ助動詞の実態を観察し、それらの構文的特徴、意味的特徴を探っていかうと試みる。

## 一 研究史

従属節中のモダリティ助動詞の実態について取り上げた研究はさほど多くない。現代語では、野田尚史(一九八九)、益岡隆志(一九九七)などがある。古代語では、高山善行(一九八七)、近藤泰弘(一九九二)などがある。

英語学においても、従属節とモダリティとの関係についての研究がある。Allen (1966)・Huddleston (1969)では、モダリティ要素を許容しうる節を「自由節」(Free Clause)・許容しえない節を「拘束節」(Bound Clause)として區別している。前者としては、because などによって導かれる「原因・理由節」(Reason Clause)や although などによって導かれる「譲歩節」(Concession Clause)が挙げられている。後者としては、if などによってみちびかれる「仮定節」

(Condition Clause) や when などによって導かれる「時間節」(Time Clause)が挙げられている。

本稿では、日本語で右の四つの従属節に相当する節を取り上げることにする。ただし、後二者については、説明の便宜、本稿では「理由節」「逆接節」と呼ぶことにしたい。それらの節とモダリティ助動詞との関係について、現代語、古代語の順に観察していこうと思う。

従属節の種類については、主節との意味関係から様々な種類のものが認められよう。(注1)本章では、それらすべてを取り上げることはできないし、またその必要もない。本章は、あくまでもモダリティ助動詞の方に焦点があるのであるから、その目的に応じて、四種の従属節を取り上げることにしたい。

## 二 現代語

## 二・一 時間節

時間節としては、マエ(三)節、アト(デ)節、トキ(三)節、マデ(二)節、カラ節、ウチ(三)節などが考えられよう。たとえば、以下のようである。

- (1) 「寝るまえに」お祈りをした。
- (2) 「バスから降りるときに」切符を渡した。
- (3) 「督促状が来るまで」水道料金を払わなかった。
- (4) 「指名手配されないうちに」高飛びしよう。

さて、時間節においてモダリティ助動詞は生起するであろうか。たとえば、マデ節について観察してみよう。

(5) 「阪神が優勝するまで」応援しつづける。

のようにル形は当然生起しうるが、

(6) \* 「阪神が優勝しそうなまで」応援しつづける。

(7) \* 「阪神が優勝するような／みたいな／らしい／かもしれない／にちがいない／そう／だろうまで」応援しつづける。

のように、モダリティ助動詞はどれも生起しない。マエ節、アト節、カラ節なども同様であって、〈時間節〉全般にはモダリティ助動詞が生起しないことがわかる。この特徴は英語の場合とほぼ同じである。もっとも時間節は名詞＋助動詞形式のものが多く、連体節におけるモダリティ助動詞許容の問題に連続してくる。(注2)

## 二・二 仮定節

仮定節には、ナラ節、タラ節、バ節、ト節などがある。

(8) 「もしもピアノが弾けたなら」、心のすべてを歌にして君に伝えることだろう。

(9) 「もし雨が降ったら」、遠足は中止だ。

(10) 「もしあの人が来れば」、この手紙をわたしてください。

さて、モダリティ助動詞が生起するかどうか調べてみよう。

(11) 「雨が降りそうだったら」、買い物に行くのはおやめなさい。

(12) 「もし又悪い様だったら」、何にも云わずに置くから、貴方が始めから御話しなさい。(それから)

(13) 「北西の風が強いようでしたら」、低気圧が近づきつつあるものと見て引き返した方がいいだろうということでした。(八甲田山死の彷徨)

のように、様態ソウダ、ヨウダは生起可能である。しかし、他の形式は生起できないようである。

(14) \* 「もし雨が降るらしい／みたい／そう／かもしれない／にちがいない／だろうなら」明日のハイキングは中止だ。

様態ソウダはもちろん、このようなヨウダはやはり《様態性資が強く感じられる。この事実から、事態の様態を表すものだけが仮定節に生起しうると言えよう。そもそも《仮定すること》は、《推量すること》とは共存しないのである。(注3)

## 二・三 理由節

典型的な理由節としては、ノデ節、カラ節が挙げられよう。

(15) 「酒は体に良くないので」、ウーロン茶を飲もう。

(16) 「星野監督が来たから」、相手チームへのデッドボールが増えた。

ノデ節とカラ節については、接続助詞ノデとカラの違いをめぐって、しばしば議論されてきたところであるが、モダリティ助動詞の許容という観点からも、両者の違いが認められる。

カラ節には、

(17) あの国はこのごろ、奴隷も解放する、鉄道も作る、「なかなか進んだやり方をしてるらしいから」、お前もそのつもりで付合わねばならん。(春の雪)

(18) 田茂木野あたりでうろろろしている、「五連隊の者につかまるかもしれないから」、安方（現在の青森駅）に真直ぐ行って、そこから汽車に乗って帰れ。（八甲田山死の彷徨）

(19) けれども、「そののなおらないうちは、帰還もきつとゆるされないだろうから」、きつとなおして来るだろうと、そのお方も言っていたらそうです。（斜陽）

など、すべてのモダリティ助動詞が生起できる。一方、ノデ節にはダロウが生起しえない。

(21) \*「地震が生起るだろうので」、非常食を用意しておこう。  
ダロウ以外なら、すべてノデ節中に生起できる。

(22) その可哀らしい姿がとうとう下方の枯れ木林の中に消えてしまうまで見送りながら、一わたりその谷間を見畢った時分、「どうやら小屋の中も片づいたらしいので」、私ははじめてその中には行って行った。（風立ちぬ）

(23) 「足デ」の代りに「手デ」とするのが一番簡単であったけれども「実際の時は足でしたのに違いないので」、子供に嘘を書かせてはならないと考えた結果、いくらかあい味に取れるように、こう書き直したのであったが  
（細雪）

ノデ節、カラ節におけるモダリティ助動詞について考える上では、言語学研究会（一九八五）の記述が参考になる。

原因的なつきそい・あわせ文において、つきそい文が「するので」のかたちをとるばあいは、つきそい文も、いとおわり文も、はなし手である（私）の意識のそとで進行しているリアルな出来事をえがきだしている。（中略）これにたいして、「するから」のかたちをとるばあいは、この原因・結果の関係は、はなし手である（私）が設定するというすがたをとってあらわれてくる。その意味では主体的である。

ここで指摘されているように、ノデ節とカラ節との違いは、《事態に即して客観的に述べあげる》のか、《話し手の思

いれをこめて主観的に述べあげる》のかという表現意図の違いとしてとらえることができよう。この違いは、前者の表現意図を実現できるモダリティ助動詞と後者の表現意図のみを実現するダロウが意味の階層を分かつということを示唆している。これは、《推定》と《推量》あるいは《擬似モダリティ》と《真のモダリティ》として把握されてきた意味領域の境界線を表していると考えられる。

## 二・四 逆接節

逆接的な意味関係をあらわす節を逆接節と呼ぶ。具体的には、ガ節、ケレドモ節などが考えられよう。

(24) 「よし子はかわいいが」、怒るとこわい。

(25) 「藤田氏はよく泳いでいるけれども」、そのわりにはやせない。

逆接節にはすべてのモダリティ助動詞が生起している。

(26) 「学校の方はどうかこうか無事に勤まりそうだが」、こう骨董責めに逢ってはとも長く続きそうにない。（坊ちゃん）

(27) 会場は花 亭と云って、「当地では第一等の料理屋だそうだが」、おれは一度も足を入れた事がない。（坊ちゃん）

(28) 堀田君一人辞職させて、「私が安閑として、留まっていられると思っていられしやるかもしれないが」、私にはそんな不人情な事は出来ません。（坊ちゃん）

(29) 「雪姉ちゃんは見たとこ変った様子もないようだけれども」、お腹の中では独りでよくよ案じているかも知れないから（細雪）

(30) く、「まるきり女を知らない筈はないだろうけれど」と、自分がこの間会って見た感じでは、それこそ生真面目なサラリーマンで、遊びの味などを知っているような様子は微塵もなかった。(細雪)

こうして見ていくと、現代語における、従属節とモダリティ助動詞との関係は、大筋、英語の場合と変わらないようである。しかし、こまかく見れば、仮定節、理由節において注目すべき現象が認められる。この二つの従属節は、モダリティ助動詞をまったく許容しない時間節とすべて許容する逆接節という両極にはさまれた中間的な性質であると言える。従属節の側から言うと、それぞれの段階は独立度(文へのちかづきの度合)の段階差として位置付けることもできよう。

### 三 古代語

#### 三・一 時間節

古代語の時間節としては、マデ節、ヨリ節、ノチ節、マエ節、ホド節、ウチ節などが挙げられよう。

- (31) 風の音、虫の音につけて、もののみ悲しう思さるるに、弘徽殿には、久しく上の御局にも参り上りたまはず、月のおもしろきに、「夜更くるまで」遊びをぞしたまふなる。(源氏、桐壺)
- (32) (薰)「おぼえなきものはさまより見しより」、すずろに恋しきこと。さるべきにやあらむ。あやしきまでぞ思ひきこゆる」とぞ語らふべき。(源氏、東屋)
- (33) またの日、「山の端に日のかかるほどに」住吉の浦を過ぐ。(更級)

(34) とかくしつ、[「ののしるうちに」夜更けぬ。(土左)

さて、古代語では、時間節にモダリティ助動詞は生起しているであろうか。拙稿(一九八五)では、マデ節、ヨリ節について、中古の主な和文系文学作品を資料としてその調査をおこなっている。その結果、原則として《推量》を表すモダリティ助動詞の生起は見られなかった。また、他の時間節においてもモダリティ助動詞が生起することはきわめて稀であろう。ときに、ムがトキ節、ホド節に生起することがあるが、これについてはモダリティ助動詞と連体節との関係という観点より、掘り下げてみる必要があるだろう。

こまかい部分に問題は残るけれども、大筋は現代語と同様に、時間節にモダリティ助動詞が生起していないと言える。

#### 三・二 仮定節

古代語では、「活用形の未然形十バ(接続助詞)」の型式で《仮定》を表現していた。たとえば、

(35) 「便なきことも出で来なば」、いと人笑へなるべし。(源氏、東屋)

こういう節を以下、未然バ節と呼ぶことにしよう。未然バ節にモダリティ助動詞が生起しているかどうか調べてみる。まず、ム、ラム、ケム、メリ、終止ナリ、ジは仮定節には生起していない。生起する可能性を持つのは、マシ、ベシ、マジである。

まず、マシについて。マシの活用形のひとつであるマシカについては、これを未然形とする立場と已然形とする立場があった。たとえば、山口堯二(一九六七)は前者の立場であって、「もし、已然形の『ましか』に接続助詞『ば』が接しうるものなら、はたらきの上で『まし』にもっとも近い『む』の『已然形』め」にも、『めば』という形の用法

があつてもよさそうに思うが、そのような形は見当たらないであろう」という。この指摘に従つてマシを未然形と見ると、

(36) 「まして、竜を捕らへたらまじしかは」、また事もなく我は害せられなまし。」(竹取)  
 のような《仮定》をあらわしている例の存在から、仮定節にマシが生起していることが認められる。

つぎに、ベシについて。ベシの未然形ベクには係助詞ハに接続して《仮定》を表わす用法が確認されている。

(37) 「なほ、強ひて後の世の御疑ひ残るべくは」、よろしきに思し選びて、忍びてさるべき御あづかりを定めおかせたまふべきになむはべるなる」と奏したまふ。(源氏、若菜上)

仮定節にベシが生起していると言える。ただし、その場合のベシは、《様態》を表すことが多いようである。

最後に、マジについて。マジはベシと対立するものとして了解されてきたが、仮定節に生起するという点も対応している。

(38) 「さらずは、すこしも違ひ目ありて、心軽くもなど思しものせんに、いとあしくはべりなん。「さだにあるまじくは」、道のほども御送り迎へも、おりたちて仕うまつらんに、何のをりかははべらむ。」(源氏、宿木)

以上の考察により、仮定節にはマシ、ベシ、マジが生起し、他のモダリティ助動詞は生起しないということがわかつた。

### 三・三 理由節

《原因》《理由》を表す「活用語已然形十バ(接続助詞)」の節を取り上げ、その中のモダリティ助動詞の実態を見ていくことにしよう。

(39) (母北の方)「く、若君は、いかに思ほし知るにか、「参りたまはむことをのみなん思し急ぐめれば」、ことわり悲しう見たてまつりはべるなど。」(源氏、桐壺)

(40) (源氏)「何ばかり、世の常ならぬ事をかはものせん。……経などもあまたありけるを、「なにがし僧都みなその心くはしく聞きおきたなれば」、また加へてすべき事どもも、かの僧都の言はむに従ひてなむものすべき」などのたまふ。(源氏、幻)

(41) 弁ぞ、「かやうの御供にも、思ひかけず長き命いとつらくおぼえはべるを、「人もゆゆしく見思ふべければ」、今は世にあるものとも人に知られはべらじ」とて。(源氏、早蕨)

(42) 明けはなるるほどのまぎれに、御車寄す。「この人をえ抱きたまふまじければ」、上に押しくくみて、惟光乗せてまつる。いとささやかにて、うとましげもなくろうたげなり。(源氏、夕顔)

このように、メリ、ナリ、ベシ、マジは理由節に生起することがある。ところが、ム、ラム、ケム、マシ、ジが理由節に生起した例は見る事ができない。

### 三・四 逆接節

古代語の逆接節としては、下節、ドモ節について検討してみよう。

(43) 「次々順流るめれど」、酔の紛れにはかばかしからで、これよりまさらず。(源氏、藤裏葉)

(44) (良清)「けしうはあらず、容貌心ばせなどはべるなり。「代々の国の司など、用意はことにして、さる心はへ見すなれど」、さらに承け引かず。」(源氏、若紫)

(45) 「言はまほしきことは多かるべけれど」、心地せん方なくなりければ、(相木)「出でさせたまひね」と手か

ききこえたまふ。(源氏、柏木)

(46) (紫の上)「のたまふやうに、「ものはかなき身には過ぎにたるよそのおぼえはあらめど」、心にたへぬもの嘆かしさのみうち添ふやう」(源氏、若菜上)

(47) まして夏冬の時につけたる遊び戯れにも、「なまいどましき下の心はおのづから立ちまじりもすらめど」、さすがに情をかはしたまふ方はく(源氏、御法)

(48) 右は「かぐや姫の上りけむ雲のはげに及ばぬことなれば、誰も知りがたし。「・・・ひとつ家の内は照らしけめど」、もしもしきのかしこき御光には並はずなりにけり。く(源氏、絵合)

(49) 女は女御といま一ところとなむおはしける。わかんどほり腹にて、「あてなる筋は劣るまじけれど」、その母君、按察大納言の北の方になりて、さしむかへる子どもの数多くなりて、く(源氏、少女)

このように、マシ、ジ以外のモダリテイ助動詞はすべて生起している。ここにも、マシ、ジというモダリテイ助動詞の特殊性が明らかになる。

#### 四 まとめ

さて、ここまで述べてきたことについてまとめてみよう。(表1・表2参照)

表1によれば、時間節にはどのモダリテイ助動詞も生起せず、逆に、逆接節にはすべてのモダリテイ助動詞が生起している。また、モダリテイ助動詞の差異は、仮定節、理由節においてははっきり顕れている。現代語のモダリテイ助動詞は、仮定節、理由節における生起という観点からすると、次の三類に分かれる。

表1 現代語

	時間節	仮定節	理由節		逆接節
			ノデ	カラ	
様態ソウダ	×	○	○	○	○
ヨウダ	×	○	○	○	○
ミタイダ	×	×	○	○	○
ラシイ	×	△	○	○	○
伝聞ソウダ	×	×	○	○	○
カモシレナイ	×	×	○	○	○
ニチガイナイ	×	×	○	○	○
ダロウ	×	×	×	○	○



表2 中古語

	時間節	仮定節	理由節	逆接節
ベシ	○	○	○	○
マジ	×	○	○	○
メリ	×	×	○	○
終止ナリ	×	×	○	○
ム	×	×	×	○
ラム	×	×	×	○
ケム	×	×	×	○
マシ	×	○	×	×
ジ	×	×	×	×

まず、様態ソウダ、ヨウダのように仮定節、理由節に生起できるもの。ミタイダ、ラシイ、カモシレナイ、ニチガイナイ、伝聞ソウダのように、理由節に生起できるもの。ダロウのように理由節の中でも、ノデ節には生起できず、主観的な意味関係を実現するカラ節にのみ生起するもの。それらを順に、a類、b類、c類と呼ぶことにし、それらの意味的特徴について考えてみよう。

a類は、先にも述べたように、事態を様態的にとりあげて述べあげるといふ意味的特徴を持っている。これを、《様態性》と呼ぶことにしよう。次にb類は、広義（推量）のなかでも、客観的な意味の階層を表しているように思われる。これを、《推定性》と呼ぶことにしよう。c類は、より主観的な意味を表すものとして、《想定性》と呼ぶことができるであろう。これらは、より詞的なものからより辞的なものへという、主体的意味が深まる段階をなしており、《様態性》《推定性》《想定性》の順に連続しているであろう。

さて、現代語において見られた三つの段階をもとに考えると、古代語のモダリティ助動詞はどのようなにとらえられるであろうか。表2を参照されたい。

まず、仮定節に生起したベシは《様態性》を持っていることが確認される。これは、中西宇一（一九六九）の言う《様相的推定》（現代語の様態ソウダに相当するといふ）にあたる意味であろう。ただし、ベシは《論理的推定》（現代語ハズダに相当するといふ）を表すとも言われており、意味領域の広い形式である。（注4）ベシの意味領域は《様態性》《推定性》《想定性》の三段階に跨るものと推定される。

メリ、終止ナリは、知覚に関わることから、《様態性》を内包しているように思われるが、実際には仮定節に生起することができない。一方で、理由節に生起することから《推定性》の段階に位置づけられよう。

ここまでは、現代語とかなり対応しているようだが、以下、少しずつ異なってくる。

現代語では、ほぼすべての助動詞が理由節に生起していた。（ノデ節におけるダロウを除く）しかし、古代語のム、

ラム、ケムは、理由節に生起せず、逆接節にしか生起していないのである。これらを、相対的に《推定性》よりも碎的な段階として《想定性》と段階づけることは、一応は可能であろう。だが、この《想定性》が現代語におけるそれと同質のものとは言えないだろう。これが、モダリティ助動詞そのものの差異に起因するのか、従属節の性質の差異から来るのか、今のところ何とも言えない。現代語と古代語との表現スタイルのありかたの差によるものと見ることもできよう。

否定推量の形式であるマジ、ジについては、マジが仮定節、理由節、逆接節に生起しているのに対して、ジはどの従属節中にも生起していない。従来、否定推量という意味領域は、より客体的な部分をマジがカバーしており、より主體的な部分をジがカバーしていると言われてきた。本稿の考察によっても、それを客観的に確認できると思う。特にジは、もはや終助詞にちかい段階にあるとさえ言えるであろう。

最後に、マジについて。マジのように仮定節だけにしか生起しない形式は他にはない。その特殊性は、現代語との対照によっても明らかであるが、さらに追究されるべきであろう。(注5)

#### おわりに

本章では、従属節とモダリティ助動詞の関係について述べた。実態調査、全体の見通しに重点を置いたため、細部については、不明な点を残している。そのいくつかについては、第二部で述べることにする。

#### 注

- 1 従属節については、南不二男(一九七四) 宮島・仁田編(一九九五)、益岡隆志(一九九七) など参照。
- 2 現代語については、三原健一(一九九五) 参照。古代語に関する研究としては、井島正博(一九九六)、橋本修(一九九四) がある。この問題については、機会を改めて考えてみることにする。
- 3 《仮定》とモダリティとの関係をどのように位置づけるかは、今後の課題である。
- 4 これは、狭義の係結びにかかわる係助詞、ソ、ナム、ヤ、カ、コソの結びとなることや、連体ナリに上接も下接も可能であるという相互承接の事実からも明らかであろう。
- 5 マシの反事実性については、個別研究に譲る。なお、現代語の反事実条件文については、田窪行則(一九九三) 参照。

### 第三章 係り結びとモダリティ助動詞

#### はじめに

本章では、係り結びとモダリティ助動詞との関係について検討する。まず、実態を観察し、その結果をもとに、モダリティ助動詞が述語構造において、どのように位置づけられるか考えてみたい。

#### 一 研究史

助動詞が係り結びとの関係において論じられるとき、ほとんどの場合、係り結びが主であり、助動詞は係助詞の表現性の差異を求めるための手段として用いられてきたと言えよう。たとえば、二つの係助詞(ソとコソ、ヤとカナど)を取り上げ、「どの助動詞を結びにとるか」に注目して、表現性の差異をとらえようとする論がおこなわれている。

このような方法は係り結び研究の基礎的段階としてそれなりの意義を有するが、係り結びという、文の「意味―統語論的問題」が、個々の係助詞の表現性の差異として解消されてしまうと、文の表現性を個々の形式に担わせるだけに終わってしまう。そのような方向に傾かざるをえなかった背景には、助動詞研究が組織性、精密性を欠いていたことが挙げられよう。

係り結びという構文現象には二つの側面がある。一つは、文構造の骨格をなしているという側面である。もう一つ

は、文の表現性を決定するという側面である。助動詞との関係について考究するときには、この二つの側面から考えていかなければならない。これまでの研究では、後者に重きが置かれ、前者についての考究が十分行われていないようである。本章では、係り結びとモダリティ助動詞の交渉の実態を観察する。その結果をもとに、述語構造におけるモダリティ助動詞の位置づけについて考えてみたい。

#### 二 観察の手順

係助詞の範囲をどのように設定するかは、結局、係り結びの定義の仕方によるが、その共通理解 *consensus* がいまだ得られていないように思われる。本章では、「狭義係り結び」をなす係助詞であるところのゾ、ナム、コソ、ヤ、カを取り上げることにする。これらを二系統に分けて、

確定系―ゾ、ナム、コソ

不定系―ヤ、カ

としておく。まず、狭義係り結びについて観察し、ハ、モ、徒による、広義係り結びについては、次の段階で扱うことにしたい。

資料としては、狭義係り結び(以下、単に「係り結び」と呼ぶ)の働きが活発であったとされる、平安時代中期およびそれ以前の散文学作品を用いる。特に『源氏物語』『枕草子』を中心的な資料として用いることにする。まず、『源氏物語』『枕草子』における係り結びの全用例(約五千例)を抽出した。次にその中からモダリティ助動詞を結びにとる例をすべて抽出した。これらの用例を基本的なデータとして用いることにする。ただし、『竹取物語』『伊勢

物語』『大和物語』『土佐日記』『古今和歌集』『蜻蛉日記』の例は押さえてある。これらの用例についても用いることがある。挙例は、おおむね『源氏物語』（日本古典文学全集・小学館）、『枕草子』（日本古典文学大系・岩波書店）による。

### 三 現象の記述

#### 三・一 確定系（ゾ、ナム、コソの結び）

確定系係助詞ゾ、ナム、コソの結びの実態は表1のとおりである。以下、モダリティ助動詞が、ゾ、ナム、コソの結びとなつた用例を挙げておく。

#### ○ゾの結び

##### 〔ゾーベキ〕

(1) 〽、わろびたることも出でくるわざなめれば、とりどりにことわりて、中の品にぞおくべき。(源氏、帚木)

##### 〔ゾーメル〕

(2) また、かたみにうちて、をとこさへぞうつめる。(枕、三段)

表1 確定系の結び

	ゾ	コソ	ナム
ベシ	○	○	○
マジ	×	○	○
メリ	○	○	○
終止ナリ	○	○	○
ム	○	○	△
ラム	○	○	×
ケム	△	○	×
マシ	○	○	×
ジ	×	×	×

##### 〔ゾー終止ナル〕

(3) 里にまかでたるに、殿上人などの来るをも、やすからずぞ人々言ひなすなる。(枕、八四段)

##### 〔ゾーム〕

(4) 〽戯れにても、ものはじめにこの御ことよ。宮聞こしめしつれば、さぶらふ人々のおろかなるにぞさいなまむ。(源氏、若紫)

##### 〔ゾーラム〕

(5) 宮は内裏にまらせ給ひぬるも知らず、女房の従者どもは、二条の宮にぞおはしますらんとて。(枕、二七八段)

##### 〔ゾーケム〕

(6) 内裏には御物の怪のまぎれにて、とみに気色なうおはしましけるやうにぞ奏しけむかし。(源氏、若紫) (注1)

##### 〔ゾーマシ〕

(7) たしかにその車をぞ見まし。(源氏、夕顔)

#### ○コソの結び

##### 〔コソーベケレ〕

(8) よそふる心ありて、それをしもこそ、あはれと思ふべけれ。(枕、六七段)

##### 〔コソーマジケレ〕

(9) 奥のかたより見いだされたらんうしろこそ、外にさる人やとおぼゆまじけれ。(枕、八三段)

##### 〔コソーメレ〕

(10) をのこは、また、隨身こそあめれ。(枕、四八段)

##### 〔コソー終止ナレ〕

(11) いとわろき名の、末の世まであらんこそ、くちをしかなれ。(枕、八二段)  
〔コソーメ〕

(12) 「さし退きて、花の陰に立ち隠れてこそ、強き言は出で来ぬ」(源氏、少女)  
〔コソーラメ〕

(13) かしこき陰とささげたる扇をさへとり給へるに、ふりかくべき髪のおぼえさへあやしからんと思ふに、すべて、さるけしきもこそは見ゆらぬ。(枕、一八四段)

〔コソーケメ〕

(14) 「宮人をも御用意なく、愁はしきことのみ多かるに、つらしと思ひおきたまふ事こそはありけぬ」(源氏、少女)

〔コソーマシカ〕

(15) 「その聞きつらん所にて、きとこそはよまましか」(枕、九九段)

○ナムの結び

〔ナムーベキ〕

(16) 「年齢などこれよりまさる人、腰たへぬまで屈まり歩く例、昔も今もはべめれど、あやしくおれおれしき本性に添ふものうさになむはべるべき」(源氏、行幸)

〔ナムーマジキ〕

(17) つねに言ふことは、「おのれを思さむ人は、歌をなんよみて得さすまじき」(枕、八五段)  
〔ナムーメル〕

(18) 右近の内侍のまりたるに、「かかる者をなん語らひつけておきためる。すかして、つねに来ること」とて、(枕、

### 八七段

〔ナムー終止ナル〕

(19) 「この十五日になん、月の都より、かぐや姫の迎(へ)にまうで来なる」(竹取物語)  
表1から、モダリティ助動詞は、確定系係助詞の結びに関して五つのタイプに分かれる。

A 1	ゾ、ナム、コソの結びになる・・・ベシ、メリ、終止ナリ
A 2	ゾ、コソの結びになるが、ナムの結びにはならない・・・ラム、ケム、マシ
A 3	ゾ、コソの結びになるが、ナムの結びにはきわめてなりにくい・・・ム
A 4	ナム、コソの結びになるが、ゾの結びにならない・・・マジ
A 5	ゾ、ナム、コソの結びにならない・・・ジ

宮坂和江(一九五二)に「不確かな意味をあらわす助動詞群がナムの結びになりにくい」という指摘があるが、ムはその中でも例外なのであった。ムについて、いささか立ち入ってみよう。

まず、今回探しえた「ナムーム」の全用例を挙げてみる。

〔ナムーム〕

(20) 大将、「それをなむとり申さむ」と思ひはべりつれど、明らかならぬ心のままにおよすけてやは、と思ひたまふる。(源氏、若菜下)

(21) (玉鬘)「まめやかなる御心ならば、このほどを思ししづめて、慰めきこえんさまをも見たまひてなん、世の聞こえもなだらかならむ」など申したまふもく(同、竹河)

(22) 「女御は、いささかなる事の違ひ目ありてよろしからず、思ひきこえたまはむに、ひがみたるやうになん、世の聞き耳もはべらん」など、二ところして申したまへばく(同、竹河)

(23) 「今日、殿おはしますべきやうになむ聞く。こたみさへおりずは、いとつべたましきさまになむ、世人も思はむ、またはた、よにものしたまはじ。」(蜻蛉日記)

これらの例を吟味してみよう。

(20)は、夕霧が釈明している場面であつて、『それを言おう』と思つていたけれど、く」という発言である。したがつて、この場合のムは、《意志》を表している。(21)は、玉鬘が雲居雁に世間体を気にしながら忠告している場面である。よつて、このムも不確かな意味を表しているわけではない。実は、(22)(23)も同様であつて、いずれも、女房が世間体を気にして(あるいは、世間体を口実にして)忠告をしているのである、そのとき、ムはやはり不確かな意味を表しているとは認めがたい。「世の聞こえ」「世の聞き耳」「世人も思はむ」という類型的な表現が見られることも注意される。

このように、ムは事態を確定的に述べ上げることに参与している。ここに、モダリテイ助動詞におけるムの特異性がある。ただし、こういうムは、用例数が希少であること、類型的な表現で用いられていることから、慎重に扱う必要がある。そこで、このタイプを保留するならば、ムは結局、A2タイプに吸収されることになる。

#### 〔修正タイプ〕

- |     |                                      |
|-----|--------------------------------------|
| A 1 | ゾ、ナム、コソの結びになる・・・ベシ、メリ、終止ナリ           |
| A 2 | ゾ、コソの結びになるが、ナムの結びにはならない・・・ム、ラム、ケム、マシ |
| A 3 | ナム、コソの結びになるが、ゾの結びにならない・・・マジ          |
| A 4 | ゾ、ナム、コソの結びにならない・・・ジ                  |

確定系係助詞の結びに関しては、結局、四タイプに分かれるのである。

#### 三・二 不定系(ヤ、カの結び)

不定系係助詞の結びになるモダリテイ助動詞の実態は、表2に示すとおりである。まずは、用例を見ていくことにしよう。

表2 不定系の結び

	ヤ	(不読)カ
ベシ	○	○
マジ	×	○
メリ	△	△
終止ナリ	△	△
ム	○	○
ラム	○	○
ケム	○	○
マシ	○	○
ジ	×	×

○ヤの結び

〔ヤーベキ〕

(24) 世の中や、ただかくこそとりどりに苦しかるべき。(源氏、帚木)

〔ヤーム〕

(25) 「今とは絶えなく見たてまつるべければ、厭はしうさへや思されむ。(源氏、葵)

〔ヤールム〕

(26) 「まことにやさぶらふらむ。さらば、いかにめでたから

む。(枕、一四二段)

〔ヤーケム〕

(27) あな心うや、げに身を棄ててや往にけむと、うつし心ならずおぼえたまふをりもあれば。(源氏、葵)

〔ヤーマシ〕

(28) さりとならば、げにかう何心なきほどにや譲り聞えましと思ふ。(源氏、薄雲)

〔ヤームル〕

(29) 昔物語語りにも、心もてやはとある事もかかる事もあめる。(源氏、総角)(注2)

〔ヤー終止ナル〕

(30) 「……かくうきことあるためしは下衆などの中にだに多くやはあなる」(源氏、浮舟)(注3)

○カの結び

〔カーベキ〕

(31) 「いかでか聞こゆべき。世に知らぬ御心のつらさもあはれも、浅からぬ世の思ひ出は、さまざまめづらかなるべき例かな。」(源氏、帚木)

〔カーマジキ〕

(32) 「いと深う憎みたまふべかめれば、身もうく思ひはてぬ。などかよそにても、なつかしき答へばかりはしたまふまじき。伊予介に劣りける身こそ」(源氏、空蟬)

〔カーム〕

(33) なほめでたきこと、臨時の祭ばかりのことにあらむ。(枕、一四二段)

〔カーラム〕

(34) 待つべきにもあらずとて、走らせて、土御門さまへやるに、いつの間にか装束きつらむ。帯びは道の、ままにゆひて。(枕、九九段)

〔カーケム〕

(35) よろづのことを泣く泣く申したまひても、そのことわりをあらはにえ承りたまはねば、さばかり思しのたまはせしさまさまの御遺言は、いづちか消え失せにけん、と言ふかひなし。(源氏、須磨)

〔カーマシ〕

(36) あふことの夜をし隔てぬ仲ならばひるまも何かまばゆからまし。(源氏、帚木)

〔カーメル〕

(37) なのめにかたはなるをだに、人の親はいかが思ふめる。ましてことわりなり。(源氏、葵)(注4)

〔カー終止ナル〕

(38) 「さて、いかがさだめらるなる。親王こそまつはし得たまはむ。……」などのたまひては、(源氏、常夏)  
 ヤ、カの結びに関して、モダリテイ助動詞は、以下の四タイプに分かれる。

- |     |     |                    |               |
|-----|-----|--------------------|---------------|
| B 1 | ヤ、カ | の結びになる             | ベシ、ム、ラム、ケム、マシ |
| B 2 | ヤ、カ | の結びにきわめてなりにくい      | メリ、終止ナリ       |
| B 3 | カ   | の結びになるが、ヤの結びにはならない | マジ            |
| B 4 | ヤ、カ | の結びにならない           | ジ             |

ここで、疑問表現とモダリテイ助動詞との関係について、概略説明しておこう。モダリテイ助動詞の中で、疑問文に生起できるム、ラム、ケム、マシ、ベシと、きわめて生起しにくいメリ、終止ナリとがあつて対立している。その対立は、現代語における「真のモダリテイ」形式であるダロウが疑問化可能で、「疑似モダリテイ」形式(ヨウダ、ラシイ、カモシレナイなど)が疑問化しにくいという事実と対応する。(注5) また、メリ、終止ナリはヤ、カの結果になるときは必ず《反語》を表し、典型的な《疑問》を表すことはない。詳細は第一部第六章に譲りたい。さて、確定系、不定系の係り結びとモダリテイ助動詞の関係についてまとめると、表3のようになる。

表3 確定系と不定系の結び

	確定系			不定系	
	ゾ	コソ	ナム	ヤ	(不 <sub>定</sub> 語)カ
体言ナリ	○	○	○	×	○
連体ナリ	×	×	×	×	×
ベシ	○	○	○	○	○
マジ	×	○	○	×	○
メリ	○	○	○	△	△
終止ナリ	○	○	○	△	△
ム	○	○	×	○	○
ラム	○	○	×	○	○
ケム	○	○	×	○	○
マシ	○	○	×	○	○
ジ	×	×	×	×	×

表3では、体言ナリと連体ナリの実態についても併せて挙げた。ただし、「ナムーム」については、先述の処理によって×にしてある。

表から次のような特徴が見られる。

- ①ゾ、コソ、ヤ、カは否定系(マジ、ジ)を除いたすべてのモダリテイ助動詞に係るが、ナムは、ム、ラム、ケム、マシを結びにしない。
- ②ジと連体ナリは、係り結びの作用域の外にある。
- ③ヤ、カ、カ、カの結びは、メリ、終止ナリ、ベシ、マジ(カのみ)については、反語表現として実現することが多い。
- ④については、第一部第六章に譲ることにし、ここでは、①②について述べることにする。



## ①ナムの結び

係助詞ナムの結びについては、従来の研究において以下の指摘がなされている。

「言ふべき事をおし出してたしかにことわる」富士谷成章（一七七三）

「その事柄が、その状態でそこにある旨をしかじか見聞するとうふう強調しつつ語っていく」宮坂和江（一九五二）

「本来、聞き手への確かめを意図して用いられる」阪倉篤義（一九五三）

「卓立」の上に『聞き手への強い呼び掛け』という要素を合わせ持ったものである」近藤泰弘（一九七九）

「承ける語を確かなものと認めて相手に向かつて提示する」大野晋（一九八四）

「『なむ』は、確定的なモノ・コトをとりたて、それを聞き手に対して丁寧に、穏やかにもちかける機能を有する」森野崇（一九八六）

これまでの研究で、ナムの主要な文法的機能として指摘されているのは、

(甲)《事態について確定的に述べる》

(乙)《聞き手への呼び掛け、持ちかけ》(注6)

という二点であるが、今回の議論で特に関係が深いのは(甲)の機能である。係り結び側から見れば、(甲)の機能を認める一つの根拠は、ム、ラム、ケム、マシといった不確かな意味をあらわす(と見られる)助動詞を結びにとらない、という事実であったわけである。しかし、この事実を文の意味的階層に引きつけて言えば、ナムは、いわゆる狭義《推定》と狭義《推量》とを画定していると言えるであろう。両者の差異は、メリ、終止ナリ、加えて、それらと連続するケリといった、いずれもアリを含む形式の意味レベルと、ム、ラム、ケム、マシといったムを含む形式の意味レベルの差異を意味しているのである。ただし、この差異は、平叙文という閉じた枠、その限りにおいても

のであり、それを文表現の類型といった方向に開けば、《推定》と《推量》の異質性、さらに言えば、両者の判断そのものの異質性を意味していよう。尾上圭介（一九八七）では、現代語の文類型を見るうえで、「平叙文」とは別に「推量文」を特立しているが、この区別は、文法的にも根拠を持つものである。(注7)ただし、区別の意識は古代語と現代語とはおそらく違うのであって、係り結びが背後化し、格関係が卓越してきた現代語においては、その異質性よりも、むしろ事態成立の「確かさ―不確かさ」といった蓋然性の差異が強く意識されるであろう。一方、古代語では、その質的差異が係り結びによって、截然と区別されていたと言えよう。

(乙)の機能については、助動詞層の外の問題についての議論となるため、別の機会に検討していくことにしたい。次に、係り結びの外にある形式についても言及しておきたい。係り結びの外にあるのは、連体ナリとジである。

連体ナリが係り結びにかかわらないことについては、終止ナリと区別する上で注意されていた。(注8)だが、係り結びにかかわらない理由については、まだ説明されていないようである。連体ナリと終止ナリについては、かつて、《伝聞・推定》をあらわすナリを認めるか否か、といった点から論争がなされ、今では《伝聞・推定》説がほぼ定着したかに見えるが、多くの問題積み残されたままになっている。係り結びとの関係もその一つであろう。この問題については第二部第四章で改めて検討する。

## ②ジの位置づけについて

ジは、中古においては連体形、已然形の存在自体があやしい。(注9)まず、已然形については、中古に確例がない。中世に下れば、

(39)人はなど訪はで過ぐらむ、風にこそ知られじと思ふ宿の桜を(新統古今和歌集、春下)

(40)塵をこそ据えじと思ひし四つの緒(宇治拾遺物語)

のようなコソの結びと見られる例があるが、係り結びそのものが崩壊に向かっていている時期でもあり、文語めかした用

表4 係り結びとの関係によるモダリティ助動詞の区分

	関係のあり方	肯定系	否定系
係り結び のウチ	ゾ、ナム、コソ ヤ、カ の結び	ベシ	
	ゾ、ナム、コソの結び ヤ、カは少数	メリ 終止ナリ	
	ゾ、コソ、ヤ、カ の結び	ム、ラム ケム、マシ	
	ナム、コソ、カ の結び		マジ
係り結び のソト	終助詞的段階に位置		ジ

法であるとも考えられよう。また、連体形についても、中古においては連体法や終助詞を下接する用法のみで、文中係助詞の結びは原則的に見られない。よって、中古においては、ジは係り結びに関わらないと言えるのである。少数とは言うものの、連体法に立てる以上、ジを終助詞とすることはできないが、ジが文の意味的階層において終助詞的段階にあるという理解は可能であろう。ただ、係り結びの範囲を広げて、ハ、モについて言えば、「花は咲かじ」「花も咲かじ」のように結ぶ例が多いことに気づく。係助詞の「係りのスコープ」に関わる問題として、扱うことが可能であろう。

#### 四 モダリティ助動詞の階層性

係り結びとモダリティ助動詞との関係をまとめておこう。表4を参照されたい。

表4より、特徴的な点をいくつか挙げてみよう。

- (1) ベシは、すべての係助詞の結びとなる。これは、ベシ自身の意味の多様さと対応するであろう。
- (2) メリと終止ナリは、共通の意味レベルでとらえられることが多いが、その妥当性は係り結びからも、裏づけられるであろう。
- (3) 意味的、語源的にム系統として括られるム、ラム、ケム、マシだが、係り結びにおいても、共通性を示している。
- (4) ジはマジよりも辞性が強いとされるが、係り結びの外にあることがその証明になる。モダリティ助動詞の

最も外に位置すると思われる。

以上の分析をもとに、個々のモダリティ助動詞を述語構造に組込む形で記すと図のようになる。モダリティ階層において、レベルI、レベルII、レベルIIIに分かれる。

レベルIはゾ、コソ、ヤ、カ、ナムの結びになるレベルで、意味的には狭義《推定》が対応する。レベルIIはゾ、コソ、ヤ、カの結びになるが、ナムの結びにならないレベルであり、意味的には狭義《推量》が対応する。レベルIIIは、確定系、不定系いずれの係助詞の結びにもならないレベルで、該当するのはジだけである。もはや、終助詞的段階にあると言つてよい。このようにすれば、従来、文構造とは切り離された形で扱われてきたモダリティ助動詞を文構造に組み入れることが可能になる。

図 係り結びとモダリティ助動詞の階層

		ゾ	コソ	ヤ	カ	ナム
I	ベシ、メリ 終止ナリ、(マジ)	斜線	斜線	斜線	斜線	斜線
II	ム、ラム ケム、マシ	斜線	斜線	斜線	斜線	
III	ジ					

視点を變えて係助詞の側から言えば、各レベルは、それぞれの係助詞の係りの力が作用する領域を表わしていると言つこともできる。これを**係りのスコープ(作用域)**と呼ぶことにしよう。(注10)つまり、ゾ、コソ、ヤ、カは「係りのスコープ」が同じ広さだが、ナムは、「係りのスコープ」が他より狭いことになる。従来、ナムの特殊性については、漠然とした形で捉えられていたけれども、こうすれば、初めて客観的に把握することができるのである。このように、狭義係り結びの中でも、さらに細かく区分することができる。述語構造を客観的に示してやることによって、係助詞研究にも資する面が出てくるわけである。さらに、広義係り結びについても「係りのスコープ」を用いた記述を行なうことが可能である。別の機会に試みることにする。

おわりに

係り結びはモダリテイの階層性を見ていく上で、重要な視点であると思われる。同時にモダリテイ助動詞を述語構造に組み入れる形で整理していくことによって、係り結びの研究の基盤が作られることになる。ただし、この一つの視点だけでモダリテイの階層性について論じることはできない。他の観点からの分析を総合していく必要がある。

注

1 『源氏物語』には、ソの結びとなったケムは四例あり、すべてケムカシである。

2 三矢重松『高等日本文法』に、『大鏡』(平松本)の例が指摘されている。

「いみじかりける上手かな。あてたがはせたまへることやはおはしますめる。」(道長上)  
この例も、「ヤハーメル」で『反語』をあらわしている。

3 三巻本枕草子(二五五段)に次のような例がある。

「朝にさる色とかや、文つくりたなる。」

この部分、能因本にナシ。前田家本、堺本ではナルの部分メルで結んである。やで文が切れるとも考えられ、終止ナリをヤの結びと見てよいかどうか疑わしい。

4 『助動詞の研究』(白帝社)、第二節(四)「めりは疑問体に用られるか」参照。松尾氏は湖月抄本を引いている。

『源氏物語大成』によって異文を示す。

(河) いかがおもふめる―いかがおもふべかめる (七 源氏) いかがおもふべかめる (高松宮家本) (尾州家

本) (大島本)

(別) いかがいかがは (御物本)

異文には、ハやベシの介入が見られ、『反語』と理解されているようである。

その他、「カーメル」の例として次のようなものがある。

(中の君)「胸はいつともなくかくこそははべれ。昔の人もさこそはものしたまひしか。長かるまじき人のする

わざとか、人も言いはべるめる。」(源氏、宿木)

5 真のモダリテイと疑似モダリテイの区別については、仁田義雄(一九九一)参照。

6 (乙)の機能を最大限に認める立場をとるのが近藤泰弘(一九七九)である。おなじく、和歌に用いられない『ソ―ヤ構文』と比較しながら、和歌でナムが用いられにくい理由を説明しようとする。従来、口頭語的ということだけで片付けられてきた説明に新しい見方を提示した好論であるが、ナムと『ソ―ヤ構文』とが等価であるのか、疑問が残る。

一方、佐治圭三(一九七四)では、『もちかけ』の態度について、『なむ』は『弱い押しつけ』、『ぞ』は『強い押しつけ』、『こそ』は『強すぎる押しつけ』突きはなし』の性格があり、『』のように、聞き手に向かってはたらくナムの力はソ、コソよりも弱いと理解する。

7 「推量という表現は不確かながらことを承認する一つのあり方であるとも言えるし、また、それは承認ではなく、推量という別種の心的行為の表現であると言うこともできる。すなわち、ことの承認を述定と呼ぶならば、推量はある種の述定であるとも言えるし、既に述定の域をはみ出しているとも言えるであろう。」という。高山善行(一九八六)では、『質問表現』とのかかわりから、同じ趣旨の主張をおこなっている。

- 8 「断定・詠嘆説」と「伝聞・推定説」をめぐる、いわゆる「ナリ論争」。その展開と学史的意義については、第一部第一章参照。
- 9 ジの已然形については、山内洋一郎（一九八六）参照。
- 10 川端善明（一九六三）「係助詞は助動詞的言語層を覆う」という指摘、仁田義雄（一九八四）「係結び現象は、判断のムードよりも外側、つまり伝達のムードに属するものである」という指摘は重要である。

## 第四章 叙法副詞とモダリティ助動詞

はじめに

本章では、中古語の叙法副詞とモダリティ助動詞との関係について考えてみたい。中古語の叙法副詞カナラズを取り上げ、構文機能の面を中心に記述、説明を試みる。

## 一 研究史

近年、現代語の叙法副詞についての研究は、モダリティの研究の進展と連動して盛んになりつつある。(注1) 一方、古代語における叙法副詞の研究は、現代語ほど活発ではないようである。しかも、数少ない研究のほとんどが語史的研究である。その方法によって個々の副詞の語義記述や語義変化については一定の成果が得られることは間違いない。(注2) しかし、叙法副詞の重要な特徴的な部分である構文機能の分析がなされなければ、文法研究に寄与するところが少ないであろうし、語史研究としても不十分ではないだろうか。

ただ、実際に構文機能の分析を行なうにあたっては、いろいろ難しい問題がつきまとう。たとえば、叙法副詞の範囲をどのように定めるかといったことから容易なことではない。現代語においてさえ、明確な範囲を定めることは困難であるから、内省の効かない古代語においてはなおさら難しいと言わなければならない。古代語で叙法副詞の範囲を設定するにあたっては、演繹的 *abductive* にならざるをえないのである。

たとえば、山田孝雄『日本文法学概論』では、陳述副詞(本稿での叙法副詞の範囲とほぼ重なる)として以下の語を挙げている。(注3)

(ア) 述語に断言を要するもの

一、肯定を要するもの

かならず、もつとも、是非、まさに

二、打消を要するもの

いさ、え、さらさら、つやつや、つゆ、ゆめ

三、強めたる意をあらはすもの

いやしくも、さすが

四、決意をあらはすもの

是非、所詮

五、比況をあらはすもの

恰も、さも

(イ) 疑惑仮説を要するもの

一、述語に疑問の語を要するもの

など、なぜ、いかが かに、いかで (反語)

二、述語に推測の語を要するもの

けだし、よも、をさをさ

三、述語が 説条件を要するもの

もし、たとひ、よし  
疑問語の扱いなどの点については問題が残るが、これらが叙法に関わる副詞であることはほぼ認めてよいものと思われる。

さて、ここで挙げられたそれぞれの語について考えてみると、これまで十全な分析・記述がなされているとは言いがたい。今後はこれら一つ一つの語の個別的記述を積み上げていく必要があるだろう。ただ、稿者の当面の興味は語史研究にあるのではなく、先述のとおり、文法的側面にある。つまり、叙法副詞を古代語モダリティの領域に位置付けて体系的にとらえていきたいという構想を持っているのである。その大きな枠組みの中で個々の記述を積み重ねていく方が、品詞論の枠を超えて、中古語の文法研究、語彙研究に寄与する面が大きいであろう。今回はその試みとして、中古語の副詞カナラズを取り上げ、分析を試みる。

カナラズの語義について、たとえば『古語大辞典』（小学館）では、以下のように記述されている。

① どのようなことがあっても。きつと。確かに。

② （下に打消や反語の表現を伴って）必ず……とは限らない。必ずしも……でない。」

実際に用例にあたってみても、中古語カナラズは語義の面では現代語のキット、カナラズにほぼ対応するようであり、中古語の叙法副詞として扱うことについては、問題はないであろう。（注4）ただし、語義が対応したとしても構文機能について対応するとは限らないから、慎重に分析していかなければならない。このように、本稿は構文機能に焦点を当てようとするため、平安初期～中期の和文学作品を資料に用いて、中古の共時態においてきまかな分析・記述を目指すことにする。（注5）

## 二 現象の観察

まず、カナラズの用例分布と用例調査に用いた作品を示しておこう。（注6）

表1 作品別用例分布

作品名	用例数	作品名	用例数
竹取物語	4	古今集	0 (0)
伊勢物語	2	後撰集	1 (4)
大和物語	5	拾遺集	0 (0)
平中物語	2	後拾遺集	2 (3)
土佐日記	0	金葉集	1 (1)
蜻蛉日記	3	詞花集	0 (2)
枕草子	27	千載集	0 (2)
源氏物語	109	新古今集	4 (0)
全172例			

※ ( ) 内は詞書の用例数

表2 文タイプ

平叙文	152 (90.1%)
命令文	16 (9.3%)
疑問文	1 (0.6%)
感嘆文	0 (0.0%)

まず、カナラズが用いられている文タイプについて調べてみよう。ここでは一般的な文タイプについて考えることとし、平叙文、疑問文、命令文、感嘆文の四つを取り上げる。より細かいタイプ分けも可能であるが、この段階ではラフに設定しておくことにする。

表2に示すとおり、カナラズは平叙文、疑問文、命令文に生起している。

- (1) 「人にな語り給ひそ。かならずわらはねん」といひて、〔平叙文〕(枕)
- (2) (僧都)「なにがし、このしるべにて、必ず罪えは

べりなん。〕〔平叙文〕(源氏・夢浮橋)

(3) いと色にいでていはぬも、思ふ心なき人は、かならず来などやはする。〔疑問文〕(枕)

(4) 「この人の宮仕の本意、かならず遂げさせたてまつれ。」「命令文」(源氏・桐壺)

(5) 「く、かくわりなき齡過ぎはべりて、かならずかすまへさせたまへ。〕〔命令文〕(源氏・若紫)

(1)は、奇信が四月に七夕の詩を吟じたことを清少納言にとがめられて「(このことを)他人に話してはいけません。

きつと、笑われてしまふでしょう。」と口止めするところである。(2)は、薫が小君(浮舟の弟)を使いとして浮舟のもとへ手紙を届けることを横川の僧都に頼みこむ場面で、「自分がその依頼を引き受けるならば、かならずや、浮舟破戒のきつかけを作つてしまふでしょう。」と断る部分である。(3)は、宮仕えする女性が実家に宿下りしたところへ訪ねてくる人について述べている部分である。「(訪問先に居る女性に)好意を持っていない人は、きつと来たりなどしない」という意である。(3)は、疑問文(広義)に含めたが、厳密に言えば《反語》を表しており、典型的な疑問文ではないといえる。(注?)よつて、この例を保留すれば、疑問文の用例はなくなつてしまふ。典型的な疑問文に生起しないということは、現代語の叙法副詞に広く見られる現象であり、カナラズがモーダルな意味を色濃く持ち得ることの一つの根拠とならう。(注8)

疑問文の場合と同様に命令文を細かく区分するならば、(4)と(5)とは異なる。(4)は故大納言(桐壺更衣の父)が臨終の際、更衣の母に「更衣の宮仕えの宿願をきつと遂げさせてさしあげなさい」と言い残したもので、《命令》である。(5)は尼君が源氏に対して「しかるべき年齢になつたら紫の上を愛人に加えてほしい」と願う意で《希求》を表している。このような《希求》タイプは平叙文で《願望》を表わすタイプの文と意味的に連続することになるが、これについては後述する。

本項では、構造的観点、意味的観点から節タイプを立て、それぞれについてカナラズの生起を見ていくことにする。



表3 従属節 (構造的タイプ)

中止節	6 (9.2%)
準体節	14 (21.5%)
連体節	37 (56.9%)
接続節	8 (12.3%)

構造的観点からみた節タイプ別の分布は表3のようになる。それぞれのタイプ別に用例を挙げておく。

- (6) 何ごとももとのままにて、奏せさせたまふことなどは、「必ず聞こしめし入れ」、御用意深かりけり。(源氏・宿木) 「中止節」
- (7) かうやうに、例に違へるわづらはしさに、「必ず心かかる御癖」にて、(源氏・賢木) 「連体節」
- (8) かれがれにさまことに咲きて、「かならず五月五日にあふ」もをかし。(枕) 「準体節」
- (9) 「、御座のほとりに、「さるべき人必ずさぶらひたまへば」、いかなる

をりかは、隙を見つけはべるべからむ」と、わびつつ参りぬ。(源氏・若菜下) 「接続節」

ここで(6)のようにカナラズが中止節に用いられていることが注意される。南のA段階、B段階にあたる中止節にはモーダルな要素は許容されないはずであるから、中止節に生じた例は、カナラズの非モーダルな意味が取り出されていると見てよいのではなからうか。中止節に生じた用例は(6)および以下の五例がすべてである。

- (10) (朱雀院) 「さかしき人といへど、身の上になりぬれば、こと違ひて心動き、「必ずその報見え」、ゆがめることなん、いにしへだに多かりける。」(源氏・若菜上)
- (11) 「あやにくにのたまふ人、はた、八重たつ山に籠るとも「必ずたづねて」、我も人もいたづらになりぬべし、なほ、心やすく隠れなむことを思へと、」(源氏・浮舟)

表4 従属節 (意味的タイプ)

時間節	0
仮定節	1
理由節	4
逆接節	3

- (12) 「必ずそのゆゑ尋ねて」、うちとけ御覽せらるるにしもはべらねど、」(源氏・蜻蛉)
- (13) (僧都) 「、かくのごと、人住まで年経ぬるおほきなる所は、「よからぬ物必ず通ひ住みて」、重き病者のためあしきことどもや、と思ひたまへしもしるく」とて、(源氏・手習)
- (14) 「また、かの宮も、聞きつけたまへらんには、「必ず思し出でて」、思ひ入りに けん道も妨げたまひてんかし。」(源氏・手習)

## 二・二・二 意味的観点からの節タイプ

ここでは意味的観点から、時間節、仮定節、理由節、逆接節という四つの節タイプを考える。前二者はモーダルな意味を許容しない拘束節 (bound clause) であり、後二者は許容する自由節 (free clause) である。(注9)

さて、これらの節中に生じたカナラズの用例数は表4のようになる。表4によると、時間節には生起せず、仮定節に一例、理由節に四例、逆接節に三例生起している。

### 「仮定節」

- (15) ときどき物言ふ男、暮れゆくばかりなど言ひて侍りければよめる  
ながめつゝことありがほに暮らしても「かならず夢に見えは」こそあらめ(後拾遺六七九)(注10)

「物思いにせずんで、わけありげに一日暮らしたとしても、(夜になると) かならず夢で逢えるともいふのだから、よいのですが。(そうはいきまますまい)」という意の歌であるが、全用例中、仮定節に生起した例はこの一例だけである。仮定節には生起しにくいといつてよいであろう。

〔理由節〕

- (9) (再掲) 「く、御座のほとりに、「さるべき人必ずさぶらひたまへば」、いかなるをりかは、隙を見つけはべるべからむ」と、わびつつ参りぬ。(源氏・若菜下)
- (16) 「く、いかなりとも「必ず逢ふ瀬あなれば」、対面はありなむ。く」(源氏・葵)
- (17) 院の女の宮、悩みたまふ御とぶらひに「必ず参るべければ」、かたがた暇なくはべるを、(源氏・橋姫)
- (18) 月ことの八日は、「必ず尊きわざさせたまへば」、薬師仏に寄せたてまつるにもてなしたまへるたよりに、く(源氏・手習)

時間節、仮定節に生起しにくいのは、カナラズという副詞にモーダルな性質が濃厚であることを根拠づけるものである。

最後に逆接節に生起した例は以下の三例である。

〔逆接節〕

- (19) 秋きぬと松ふく風もしらせけり「かならずをぎの上葉ならねど」七条院権大夫(新古今三〇六)(注11)
- (20) 露は袖にも思ふ比はさぞなをく「かならず秋の習ひならねど」太上天皇(同 四七〇)
- (21) 桐の葉も踏みわけがたくなりけり「かならず人を待つとなけれど」式子内親王(同五三四)
- (19)は「秋がやって来た」と松に吹く風も知らせていることだ。秋風が吹くのは必ず秋の上葉であるというわけではないが、(20)は「露」というものはもの思う時分にこのように袖に置くのだから、必ず秋に置くとは限らない。

のだけれども。」という意。(21)は「桐の落葉も積み重なって人が踏み分けにくいまでになってしまった。必ずしも誰かを待つというのではないが」という意である。すべて、『新古今和歌集』の和歌の例であり、類型化した表現である。和歌における特殊な語法であろう。ただし、これらのカナラズはすべて、『かならずしも』の意味であり、後続の否定辞と呼応して用いられていることが注意される。否定形式との関係については次項で述べることにする。

## 二・三 否定化

カナラズが否定形式と共起した例は以下のようなものである。

- (22) いますこしおほくわたらせまほしきに、使はかならずよき人ならず、受領などなるは目もとまらずにくげなるも、藤の花にかくれたるほどはをかし。(枕)

(23) 「く。世の静かならぬことは、かならず政の直くゆがめるにもよりはべらず。く」(源氏・薄雲)

(24) 「く人の心みなさこそある世なめれ。必ずしもすべれじ。く」(源氏・常夏)

(25) 行幸といへど、必ずかうしもあらぬを、今日は親王たち上達部も、みな心ごとに、く(源氏・行幸)

用例を検討してみよう。(22)は「賀茂の臨時の祭の勅使は必ずしも良い家柄の人とは限らない。受領などである場合は目につかずいやだが……」という意。(23)は「世の中が静でないのは、必ずしも政治が正しいとか間違っているとかによるのではございません。」という意。(24)は「源氏の娘であるということと評判高くなるのであって、その娘(玉鬘)が必ずしもすべれてくるわけでもあるまい。」という意。(25)は大原野の行幸のありさまが見事であることを受けて、「行幸といつてもいつともこうとばかりは限らない。」という意である。つまり、すべて『かならずしも』の意味で用いられているわけである。

また、後二例のようにサシモ、カウシモを途中にはさむ例は、カナラズ……カナラズシモの中間に位置するものであろう。

一方、現代語カナラズはカナラズシモとの肯定／否定の対立が明確である。カナラズは肯定、カナラズシモは否定専用であると言える。(注12)

(26) 彼はかならず来る／\*来ない。

(27) 彼はかならずしも来るとはかぎらない／\*かぎる。

否定化が可能であるかどうかという点は、現代語カナラズと中古語カナラズの差異を考える上で見過ごすことのできない点である。

このように、カナラズだけでシモが担う限定的意味を表わし得ることについては、否定表現の研究やカナラズの語史的研究においては関心が持たれることであろう。興味深い問題だが今回は立ち入る余裕がないので、語史的研究に譲りたい。(注13)

以上、文タイプ、節タイプ、否定化といった観点からカナラズの実態を見てきた。

### 三 モダリティ助動詞との共起

本項ではカナラズがどのような文末、節末のモダリティ助動詞と共起しているか観察してみる。(注14) モダリティ助動詞と共起した例を作品別に示すと、表5、6のようになる。参考までにテンス・アスペクト助動詞の分布も挙げる。

表5 モダリティ助動詞の共起 (作品別分布・散文)

	竹	伊	大	平	土	蜻	枕	源
ベシ							9	27
マジ								2
メリ							1	
終止ナリ								3
ム	3	1	4	1			4	31
ラム								1
ケム								1
マシ								2
ジ								2
キ								1
ケリ								
ツ								
ヌ								
タリ							1	2
リ								

※参考までにテンス、アスペクト形式の用例数を挙げておく。

表6 モダリティ助動詞の共起 (作品別分布・八代集)

	古	後	拾	後拾	金	詞	千	新
ベシ		1						
メリ								
終止ナリ								
ム		3			1		2	
ラム								
ケム								
マシ								
ジ								
キ								
ケリ		1						
ツ								
ヌ								
タリ								
リ								

※すべて詞書に用いられた例である。

これを見ると、平安初期の段階では、モダリティ助動詞の中でムだけが共起していることがわかる。共起するモダリ

テイ型式がバラエティに富むようになるのは、平安中期になってからである。なお、八代集ではすべて詞書の例である。

では、カナラズがモダリティ助動詞と共起した例の割合がどのくらいあるか調べてみよう。ただし、もともとモダリティ助動詞が表われない中止節の例や

- (28) 〱、行きめぐりてもまたあひ見むことを必ずと思さむにてだに、(源氏・須磨)  
 (29) (句宮) 〱このごろのほどに、必ず。〱(源氏・総角)

- (30) 来むといひて来ざりける人の、暮にかならずといひて侍りける返り事に(後拾遺九〇四・詞書)

(31) くれにはかならずとたのめたりける人の、はつかの月のたかくなるまでみえざりければよめる(金葉集四七〇

・詞書)

のように述語が省略されている例があるから、あらかじめこれらを除外しておかなければならない。このような例を除外し、残った用例でモダリティ助動詞と共起した用例の割合を見ると、全一七二例中一三〇例(七五・六%)と高い割合を占めることになる。

さて、具体的にどのようなモダリティ助動詞が共起しているのだろうか。その実態については、主節と従属節に分けてそれぞれについて見ていくことにしよう。

三・一 主節の場合

カナラズが主節において用いられ、モダリティ助動詞と共起している例を表7に示す。

表7 モダリティ形式との共起（主節）

ム	46 (28)
ベシ	6
ズ	3
ジ	2
マシ	2
ラム	1
ケム	1
メリ	1
連体ナリ	1
タリ（完了）	1
ケリ	1
マホシ	1
カシ	1
バヤ	1
カハ	1
φ	5
述語省略	7

※（ ）はテム、ナムの用例数

表7より、主節ではムの場合が際立って多いことがわかる。ここで注意されるべきことは、ムの場合のほとんどがム単独ではなくて、完了の助動詞ツ、又が上接した複合形テム、ナムであることである。

- (32) 四月許、友だちの住み侍ける所近く侍て、かならず消息つかはしてむと待ちけるに、音なく侍ければ（後撰集 一四九・詞書）
- (33) (未摘花) 「く、風のつてにも、わがかくいみじきありさまを聞きつけたまはば、必ずとぶらひ出でたまひてん」と、（源氏・蓬生）
- (34) 「しかじかなん、なにがしの朝臣にはのめかしはべりしかば、かの院には必ず承け引き申させたまひてむ、く」

（源氏・若菜上）

- (35) 「たち返り、かならずまゐり来なむ。」（平中物語）
- (36) 「く、かならず来なんと思ふ人を、夜一夜起きあかし待ちて、く」（枕）
- (37) 「く、あるまじき疵もつき、恥ぢがましき事必ずありなんと、恐ろしうて寄りつきたまはず。」（源氏・真木柱）
- (38) 夏のころ越の国へまかりける人の、秋はかならず上りなん、待てといひけれど、冬になるまで上りまうでござりければ、つかはしける（千載集四九三・詞書）

これは、ツ、又の機能を考える上でひじょうに興味深い事実である。ツ、又はモダリティ助動詞に上接する場合、ある種のモーダルな意味を表わす用法を持つとされる。この用法は、「確述用法」（注15）「強意用法」と呼ばれたりするが、いずれにせよ、「事態成立の蓋然性の高さを表示する」という機能が想定されていたように思われる。しかし、この理解は主に意味的な面からなされていたもので、構文的に検証されているわけではない。意味的に事態成立の《確実性》を表わすカナラズが、文末のモダリティ助動詞としてム単独ではなくテム、ナムを積極的に選択するという具体的構文現象によって、ツ、又に「蓋然性表示機能」が存在することがはじめて確かめられたのではなからうか。（注16）

数はさほど多くないが、ム単独でカナラズと共起した例も無いわけではない。たとえば、以下のような例がある。

- (39) かく呼び据ゑて、このたびはかならずあはむと、の心にも思ひをり。（竹取物語）
  - (40) 「く少し秋風吹きたちなむ時、かならずあはむ」といへりけり。（伊勢物語）
  - (41) 宮は、「その夜必ず迎へむ。下人などによくけしき見ゆまじき心づかひしたまへ。」（源氏物語・浮舟）
  - (42) 「この花咲きなむ時、かならず消息せむ」と言ひ侍けるを、（後撰集三八・詞書）
- 傾向として言えば、ム単独で共起した場合は《意志》を表す例が多いようである。

全体的に見れば、ム、ベシ以外のモダリティ助動詞は総じて生起しにくいと言える。具体的には、メリ、終止ナリ、ラム、ケム、マシ、マジ、ジである。これらが共起しにくい理由については以下のように考えられるであろう。

カナラズは語義の面からもムと共起することが多いことからわかるように、未実現の事態が成立する確実性を表しているのを見てよい。一方、メリ、終止ナリ、ラム、ケムは基本的には既実現の事態について判断を加えるものであって、本来、未実現の事態には関わらない助動詞なのである。マシは未実現の事態について用いられることがあって、理論上は使用可能なはずである。しかし、マシは反実仮想の助動詞と呼ばれるとおり、典型的には非実現的な事態に用いられるものであって、そうしたたび使われるものではない。よって、偶然用例が少なかったのではないかと思われる。マジ、ジも未実現の事態を対象とするが、否定の意味を内に含むことによって生起しにくくなっているであろう。(注17)

次に注意されることは、マホシ、バヤといった願望表現形式が見られることである。

(43) ひとつ心に、をかしき事もにくきことも、さまざまにいひあはせつべき人、かならず一人二人、あまた誘はまほし。(枕)

(44) (薰)「くかのわたりは、かく、いとも埋れたる身に、ひき籠めてやむべきけはひにもはべらねば、必ず御覽ぜさせばやと思ひたまふれど、く」(源氏・橋姫)

これらは《希求》タイプの命令文での用法に連続するものである。このような場合のカナラズは、意味としては現代語ゼヒ(トモ)に近いものであるかもしれない。漢語副詞ゼヒ(是非)が一般化するのは中世以降のことであるから、それ以前の段階においてはカナラズが広い意味領域を持つていたことが推定される。中世以降、漢語副詞の流入によって叙法副詞が多様化していくわけだが、それらは叙法表現の分析化を実現していく上で大きな役割を担っているといえよう。カナラズとゼヒとの関係についてもその大きな流れの中でとらえるものであろう。この問題につい

ては、今後、通時的視点からの研究が要請される。

### 三・二 従属節の場合

次に従属節における共起の実態を確認しておく。表8を参照されたい。

表8 モダリティ形式の共起(従属節)

ベシ	30
ム	3
終止ナリ	3
ズ	3
マジ	2
タリ(完了)	1
キ	1
φ	18

主節ではムの利用(実際はテム、ナム)が目立って多かつたが、従属節ではベシが圧倒的に多く、ムはあまり見られない。主節以上に共起するモダリティ助動詞の制限が厳しく、メリ、ラム、ケム、マシ、ジは一例も生起していない。(注18)

(45) すこし大人びて、添ひさぶらはむ御後見は、必ずあるべきことなりけり。(源氏・濤標)

(46) (夕霧)「この律師に必ず言ふべき」ことのあるを、護身などに暇なげなめる、ただ今はうち休むらむ。く」(源氏・夕霧)

(47) 「く、行く先も、「かならずかたり伝ふべき」ことなり、などなん、みなさだめし」など。(枕)

(48) 「くまだ明けざらんに帰りぬべし。」「かならずいふべき」ことあり。く」(枕)

このように、形式名詞コトを底名詞とする連体節での使用が目立つ。形式名詞ヨシ、モノをとる例もある。また、こういう環境で用いられたベシは、《くするべきだ》《くしなければならぬ》という《義務》の意で用いられており、狭義《推量》を表してはいない。古代語は現代語と違って、連体節にモダリティ成分が許されるのだが、カナラズを含んだ従属節においては、対象の意味の濃いベシが多用され、ム系は少ないのである。主節よりも従属節の方が、より純粹にコトガラの意味が取り出されてくるのかもしれない。この問題に関しては不明な点が残るが、ここでは無理な説明はせず、従属節とモダリティ助動詞との関係についての今後の研究を待ちたいと思う。

### 三・三 モダリティ助動詞と共起しない場合

割合としては少ないけれども、モダリティ助動詞と共起していない用例もいくぶん見られる。以下のようなものがある。

- (49) 正月にはかならずまうでけり。(伊勢物語)
- (50) く、年ごとの春秋ごとに必ずかの御社に参ることなむはべる。(源氏・明石)
- (51) 年ごとの春秋の神樂に、必ず長き世の祈りを加へたる願ども、げにかかる御勢いならでは、はたしたまふべき事とも思ひおきてざりけり。(源氏・若菜下)
- (52) 下衆の詞には、かならず文字あまりたり。(枕)
- (53) かれがれにさまことに咲きて、かならず五月五日にあふもをかし。(枕)
- (54) 堀河院御時、中宮の御方にまいりて女房にも申しける程に、月の山の端よりたちのぼりけるをみて、をんなの、月は待つにかならず出づるなむあはれなる、と言ひければよめる(詞花集二九九・詞書)

(55) みな人の知りがほにして知らぬかなかならず死ぬる習ひありとは(新古今集八三二)

これらの例のカナラズはいずれも、《規則》もしくは《習慣》を表わしている。この点については現代語カナラズもほぼ同様であろう。

- (56) 毎年、年末になると、かならず宴会を開いた。
- (57) 寝る前にはかならず歯をみがく。
- モダリティ助動詞と共起しないことよって、脱テンス化し、モーダルな意味の発現が押さえられる。その結果、《いつもくする》というような恒常性を表すようになるのである。現代語では、
- (58) あしたはかならず早起きする。
- (59) 来月の研究会では彼はかならず発表する。
- (60) この授業を履修すれば、かならず単位が取れる。

のように《未来》や《意志》を表すことが可能だが、そもそも述語用言の裸の形だけで《未来》や《意志》を表すことのできない中古語においては、そうした表現にはなりえないのであろう。

### 四 まとめ

以上の分析の結果を図1にまとめておく。

まず、文タイプについて。平叙文、命令文に用いられ、典型的な疑問文には用いられないという特徴は現代語の叙法副詞全般に広く見られるもので、カナラズの叙法性の濃厚さを反映していると思われる。ただし、平叙文だけでなく命令文にも用いられているのは、「事態めあて」と「聞き手めあて」の両方にわたって働くことを表すから、単に事態成立の蓋然性だけを表すのではないことになる。また、通常、命令文（希求の場合も含む）には生起しない、現代語タブン（多分）、モシカシタラなどは異なる性格である。

次に、従属節での生起について。少数ではあるが、中止節で用いられるなど、対象の意味が取り出されてくる場合もある。しかし、構造的観点からも意味的観点からも、やはりモーダルな性質が強いと言えるであろう。

第三に否定化について。カナラズが否定辞と共起することは少ない。ただし、その場合は常に《かならずしも》の意味になることが注意される。形式としては共起するのだが、意味の面から言えば、現代語カナラズと同様に否定されないということになる。（注19）

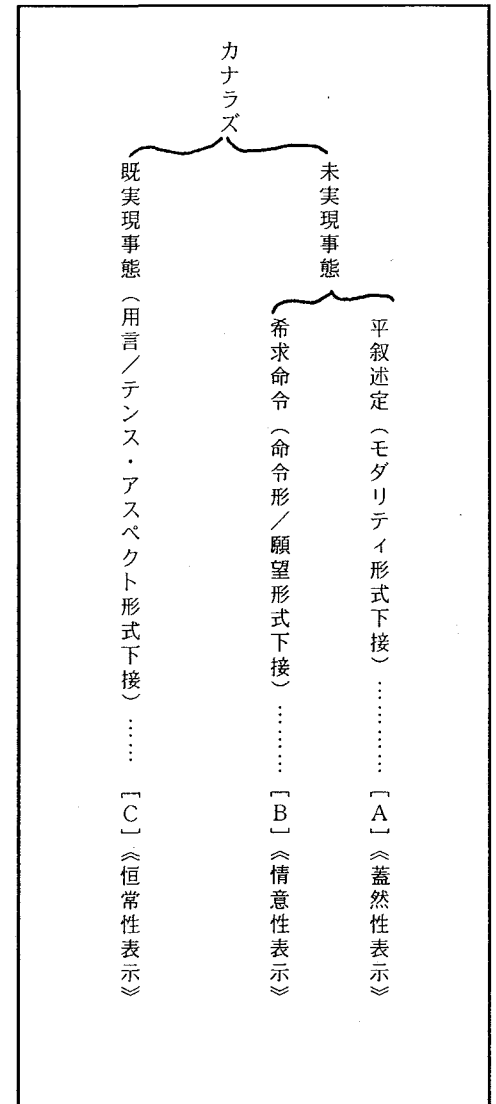
第四にモダリティ助動詞との共起について。全体的にモダリティと共起する例が多いことは先述のとおりである。主節については、ムが多い。ただし、その場合テム、ナムの比率が高いことが注意される。カナラズの示す事態成立の蓋然性の高さを表しているのであろう。一方、従属節ではベシが多くカナラズの対象的側面がより顕著に現れているようである。また、モダリティ助動詞と共起しない場合は、特定の事態の成立ということから離れて《規則》《習慣》を表している。

以上のような結果を総合してカナラズの機能をまとめてみると、図2のようになる。

表9 まとめ

文タイプ	平叙文		152例
	疑問文		1例（反語）
	命令文		16例
	感嘆文		用例ナシ
節タイプ	構造的タイプ	中止節	6例
		連体節	14例
		準体節	37例
		接続節	8例
	意味的タイプ	時間節	用例ナシ
		仮定節	1例
		理由節	4例
		逆接節	3例
否定化	否定不可《かならずしも》の意味でなら可		
モダリティ助動詞との共起	共起する	主節	ムが多い。テム、ナムの形をとる。他は希少。
		従属節	ベシが多く、ムが次ぐ。他はほとんどない。
	共起しない	用言裸の形、キ、タリなど。《規則》《習慣》を表す	





まず、カナラズはその叙法性の対象とする事態に二つの種類が認められる。未実現事態と既実現事態とである。未実現事態の述語形式には平叙述定の場合と希求命令の場合がある。前者は、ム、ベシなどのモダリティ助動詞が用いられ、これらと共に起こることによって意味としては事態成立の蓋然性の高さを表示していると見られる。これを「A」タイプと呼ぶことにしよう。後者は、述語形式としてはマホシ、バヤのような願望形式や命令形といったものがきて、事態成立の蓋然性といった意味は背後化し、行為遂行を強調するような情意的意味を表していると言える。これを「B」タイプと呼ぶことにする。

一方、既実現事態を表す述語形式は、助詞、助動詞の付いていない述語用言の裸の形やテンス、アスペクトの助動詞が下接したものである。前者は個別的な《習慣》を後者は一般的、普遍的な《規則》を表す。両者とも既実現事態の複数回成立することが前提となっており、結果的に事態が恒常的に成立することを表すことになる。これを「C」タイプと呼ぶことにする。

このように構文機能との関係によってカナラズの意味は三タイプに分かれることになる。では、その中のプロトタイプ（典型）はどれになるだろうか。用例分布の上からも、原理的把握の面からも、やはり「A」タイプがプロトタイプと考えるべきであろう。「A」タイプを典型とし、「A」タイプのより情意性に傾斜したものが「B」タイプ、より対象性に傾斜したものが「C」タイプであると言えよう。それぞれの意味の関係はこのように把握できるが、そうなる中古語カナラズはかなり広い（少なくとも現代語よりは）意味領域をカバーしていることになり、以後それぞれの意味が細分化、明確化の方向に進むことになるのである。

ここで視点を變えて、カナラズの意味を量性の面から見るとどうなるであろうか。先に述べたように「A」タイプは事態成立の《蓋然性大》を表しているとみてよい。それに対して、「B」タイプは行為遂行の《確実性大》を表していると言えよう。一方、「C」タイプは事態の実現が複数回起こったことを示しており、事態成立の《頻度多》を表している。この「C」タイプは叙法副詞性から最も離れ、程度副詞に近い性格を持っている。こうして、意味把握の上で量的相対化を許すこと自体、カナラズがすぐれて叙法性を有することの顕れであって、程度副詞との連続性を示す側面も注意されるべきであろう。

おわりに

今回は中古語の叙法副詞の中からカナラズを取り上げ、その構文機能と意味についての分析を試みた。係助詞の下の問題、副詞の語順の問題など論じ尽くせなかつた問題もあるが、カナラズの構文機能と意味の関係についての見取図は示したと思う。今後、他の叙法副詞についてもこのような調査・分析を試み、少しづつ個別的記述を積み上げていきたい。

注

- 1 現代語の叙法副詞の体系的研究としては、工藤浩（一九八二）、森本順子（一九九四）がある。個別的研究としては、安達太郎氏の一連の研究が注目される。
  - 2 たとえば、『国語副詞の史的研究』所収の諸論考がその成果を示している。
  - 3 山田孝雄の示した範囲が現在の叙法副詞論の基礎となっている。
  - 4 他に、事態成立の蓋然性に関わる叙法副詞としては、サダメテ、ケダシなどがある。この手の副詞は現代語に比して種類が少ないようである。
  - 5 ちなみに『万葉集』では次の二例のみである。  
木綿包み白月山のさな葛後もかならず逢はむとぞ思ふ（三〇七三）  
天地の神を祈りて我が恋ふる君いかならず逢はずあらめやも（三二七八）
- なお、中世語のカナラズについては、坂詰力治（一九九三）が詳しい。

- 6 橋本博幸（一九九〇）においても、カナラズの詳しい調査がなされている。主に文体的観点からサダメテ、カナラズについて調査、分析をおこなったものであり、有益である。
- 7 ただし、この部分は諸注によって解釈が分かれている。

旧大系……懸想の心のない人が必ず来るわけなどあるうか。

全集……わざわざこうして来などするはずがあるうか。

集成……（元来）好意を持たぬ人が、こまめに訪ねて来たりするものですか。

全注釈……（こんな待遇をされては、女を深く）愛する気持ちのない男は、絶対に（二度と）訪問などしないであろう。

なお、この部分の本文異同は以下のとおりである。（『校本枕草子』による）

（三）思・

は

（能）おもふ心・なき人はかならずきなとや・する

（前）こころ

は

- 8 疑問文で用いられにくいという特徴は、メリ、終止ナリといった推定形式と共通する。

- 9 それぞれの従属節とモダリティ助動詞との関係については、第一部第二章参照。

- 10 『後拾遺和歌集』ではこの歌の作者を相模としているが、それは撰者の誤りで、和泉式部が作った歌であるという指摘がある。

- 11 前の三〇五番歌「おぎの葉も契ありてや秋風のをとづれそむるつまとなりけん 俊成」を承ける。新大系では、秋風がまず萩の葉に吹くという常識に関する参考例として「萩の葉のそよぐ音こそ秋風の人に知らるるはじめなりけれ」（拾遺集・秋・紀貫之）を挙げている。

12 現代語カナラズは否定辞と共起しにくい。それに対して、キットは共起可能である。

\* 明日はかならず雨が降らないよ。

明日はきつと雨が降らないよ。

13 浜田・井手・塚原(一九九一)所収の塚原論文『部分否定と全面否定—土佐日記の「かならずしも」を契機にして—』土佐日記の『必ずしも』参照。

14 現代語の叙法副詞の研究においては、個々の叙法副詞が特定のモダリティ助動詞と共起する傾向が指摘されており、稿者の調査によってもそれが確認されている。工藤(一九八二)など参照。

15 山田孝雄の把握による。ツ、又がテム、ナム、テバ、ナバのように用いられた場合を説明する上で有効性を持つが、この用法は具体的な構文現象によって確かめられてはいない。

16 アスペクト用法の転用か。本来、アスペクト、テンス、モダリティは連続する面を持つが、古代語においてはその重なりが大きかったようである。

17 共起したマシの用例は以下のものである。

(朱雀院)「我、女ならば、同じはらからなりとも、必ず睦び寄りなまし。若かりし時など、さなんおぼえし。

〜(源氏・若菜上)

朱雀院が、「もし、自分が女だったら、同じ兄妹であっても源氏に恋をしていたら」と言う部分。

「必ずさるさまにてぞおはせまし。今思ふに、いかに重りかなる御心おきてならまし」(源氏・宿木)

中の君が、亡くなった姉の大君のことを回想する場面。「もし、姉様が生きていらつしゃつたならば、きつと尼になっていらつしゃつただろうに。今思えば、なんと思慮深い御心がけであったのだろう」と思う。どちらも、いわゆる反実仮想の例であって、事態が実現しないことを前提として用いられている。

18 ただし、マシ、ジはもともと従属節に生起しにくいので、ないのは当然である。

19 森本(一九九四)参照。

【用例調査に使用した注釈書】

『万葉集』『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』『源氏物語』(以上、日本古典文学全集・小学館)『枕草子』『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『後拾遺和歌集』『金葉和歌集』『詞花和歌集』『千載和歌集』『新古今和歌集』(以上、新日本古典文学大系・岩波書店)ただし、個々の用例の解釈にあたっては、ここに挙げた以外の複数の注釈書を参考にした。

## 第五章 中古語モダリテイの階層構造

はじめに

ここまで、文構造とモダリテイ助動詞の交渉について見てきた。本章では、これらの検討をもとに、中古語モダリテイの構造について考えてみたい。その検討の過程で、述語構造を階層的に把握することの有効性と問題点が浮き彫りにされるであろう。本章は、第一章〜第四章のまとめとなる。

## 一 研究史

古代語助動詞の意味研究は、かなりの蓄積があるが、同時に問題が山積されている。たとえば、《婉曲》という表現効果、《詠嘆》という文の情意的意味、《命令》という対他的行為―これらを助動詞の意味に担わせてしまう。《推量》とは何か、《伝聞》とは何かというような概念規定がなされていないなど枚挙のいとまがない。かつての意味のとらえかたは「意味記述」というよりは「あだ名をつけた」という程度のものである。助動詞が文表現において重要な役割を担うことは確かであるが、文構成においては文の構成メンバーの一つに過ぎないことを忘れてはならない。助動詞が文の述語構造と一体のものであるなら、そこに還して母胎と一体化した形で理解するのが正当だし、それ以外に述語構造と助動詞の意味との連絡をつける道はないであろう。

現在に至るまで、述語構造についていくつかの理解が示されてきた。それらにほぼ共通していることは、助動詞の相互承接現象を軸に（あるいはそれに依存した形で）階層構造がイメージされていることであろう。こうした述語構造の把握を「階層把握」と呼ぶことにしよう。その代表として北原保雄氏と仁田義雄氏の述語構造モデルが挙げられる。（注1）両氏のモデルは現代語の考究をもとに創案されたものであるけれども、「階層把握」そのものは古代語においてもかなりの有効性をもつことが期待される。たとえば、近藤泰弘（一九九二）はその流れを継承して中古のモダリテイの助動詞の体系をとらえる試みであって注目される。（注2）このように「階層把握」は古代語の文法研究においても広がりつつあるようである。

しかし、問題がないわけではない。特にモダリテイの議論においては「階層把握」ではとらえきれない問題が多いように思われる。以下、「階層把握」を古代語のモダリテイの研究に援用する際、問題となる点を挙げておく。

α 係助詞の述語構造へのかかわりが扱い切れない。文を平面的にとらえる以上仕方がないのかもしれないが、「階層把握」が述語構造の本質をついているとすれば、あたかも鏡が立体の姿を映すように、階層はなんらかの形で係助詞の作用を映し出すにちがいない。

β 助動詞という品詞論上の単位が階層設定の単位となつていないことである。形式の連鎖がそっくりそのまま述語の意味的階層に対応する保証は何もない。従来の理解では多義的形式（ベシ、ケリ、ムなど）が階層に位置づけられない。

γ 階層間の連続性が捨象される。階層を設定することと引換えに層と層との連続性が捨象されてしまうと問題である。たとえば、助動詞層と終助詞層、プロポジションとモダリテイの連続性をどうとらえていくか。より有効性の高い階層の設定をめざすなら、それは層と層との連続性を明らかにするものでなければならぬ。

ただ、こうした問題があるにせよ、「階層把握」が多数の支持を得ている事実は動かしがたい。仮に「階層把握」を認めない立場をとるにしても、方法論批判を意図するならば、いったんこの把握に立った上で、その有効性と限界とを見極めておくことが必要であろう。本章は、そうした要請にもとづいた、中古語のモダリティを対象とした「階層把握」の批判的実践である。

## 二 現象の記述

### 二・一 分析の方法

ここまで考究では、もっぱらモダリティ助動詞を分析の対象としてきたが、ここではそれらの周辺に位置する形式、たとえば、ツ、ヌ、タリ、ケリという、テンス・アスペクト助動詞も扱うことにする。これは典型的な Prototypical モダリティ形式と周辺のな形式との連続性をとらえる意図であり、同時にテンス、アスペクトとモダリティとが分離しにくい古代語の実情も考慮に入れてのことである。(注3)

続いて分析の具体的な方法について述べる。本稿では各形式にいくつかのテストをおこなって構文的特徴を取り出し、その結果から階層を設定してみようという手順を踏むことにする。どのようなテストをおこなうかが問題であるが、実は第一章〜第四章までの考究がテストになっている。

テスト形式をとる大きなメリツトは同一の尺度で測ることにより、各形式の共通性と差異とを相対化できることである。従来、形式間の差異に重点が置かれていたが、差異が本質的なものか否かを知るには共通性を押さえることが前提となろう。差異の価値は共通性と合わせてみてはじめて見えてくる。

### 二・二 構文的特徴の記述

以後、具体的に構文的特徴の記述をおこなうのだが、三つの観点からアプローチを試みる。すなわち、

- 1 助動詞の下接 …… 助動詞と助動詞との関係
- 2 従属節中の生起 …… 助動詞と節との関係
- 3 係助詞との関係 …… 助動詞と文との関係

### 二・二・一 助動助動詞の下接

#### ① 否定助動詞

否定辞が下接しうるのはツ、ヌ、ベシである。ツ、ヌについてはごく少数ながら例が報告されている。(注4) また、ベカラズの例は『源氏物語』には僧の会話文の一例だけであって、漢文的要素が顔をのぞかせた例と見てよい。

(注5)

〔ベカラズ〕

(1) 「…人の命久しかるまじきものなれど、残りの命、一二日をも惜しまずはあるべからず。…」(源氏、手習)

#### ② テンス助動詞

テンス形式キが下接しうるのは、ツ、ヌ、ベシ、マジ、メリ、終止ナリである。それぞれ、テキ、ニキ、ベカリキ、マジカリキ、メリキ、ナリキの形で承接する。このナリは、終止ナリの方である。連体ナリにはキが下接しない。(注

6)

〔ナリキ〕

(2) いと、昔物語のあやしきものの事のたとひにか、さやうなることも言ふなりし、と思ひ出づ。(源氏、蜻蛉)

ナリキは係助詞の結びと連体節中の例だけが見られ、文末終止「ナリキ」の例は今のところ見つからない。(注7)

③ モダリテイ助動詞

モダリテイ形式が下接しうるのはツ、ヌ、ベシ、マジである。やや詳しく言えば、ベシ、マジともメリ、終止ナリという証拠推量形式 Evidentials やそれらに連続するケリが下接し、ム、ケム、マシといったム系の形式はベシの方だけ下接する。(注8)

「ツベシ」

(3) …船子どもは、腹鼓をうちて、海をさへ驚かして、波立てつべし。」(土佐日記)

「ヌベシ」

(4) かくかたはにしつつありわたるに、身もいたづらになりぬべければ、つひにほろびぬべしとて、…(伊勢物語)

「ベカリケリ」

(5) …女宮たちのあまた残りとどまる行く先を思ひやるなん、さらぬ別れにも絆なりぬべかりける。」(源氏、若菜上)

「マジカナリ」

(6) 参り来て見出し立てんとするを、寄せ給まじかなれば、いかがすべからん。(蜻蛉日記)

「ベカラム」

(7) …いかならんをりにか、その御心ばへほころぶべからむと、世人もおもむけ疑ひけるを、…(源氏、若菜上)

二・二・二 従属節中の生起(注9)

④ 仮定節

仮定節中に生起しうるのは、ツ、ヌ、ベシ、マジ、マシである。

「テバ」

(8) …大人しく見なしてば、ほかへもさらに行くまじ。…(源氏、紅葉賀)

「ナバ」

(9) 「便なきことも出で来なば、いと人笑へなるべし。(源氏、東屋)

「ベクハ」

(10) 「…この、人の御車入るべくは、引き入れて御門鎖してよ。」(源氏、東屋)

「マジクハ」

(11) 「さだにあるまじくは、道のほども御送り迎へも、おりたちて仕うまつらんに、…(源氏、宿木)

「マシカバ」

(12) 「まして、「竜を捕らへたらまし」かば、また事もなく我は害せられなまし。」(竹取物語)

⑤ 理由節

理由節中に生起しうるのは、ツ、ヌ、ベシ、マジ、メリ、終止ナリである。ム、ラム、ケム、マシといったム系のものは理由節中には生起していない。

「ツレバ」

(13) 「風いたく吹きぬべしと人々の申しつれば、…(源氏、野分)

「ヌレバ」

(14) 「宮は、そのころまかでたまひぬれば、例の、隙もやとうかがひ歩きたまふを事に、大殿には騒がれたま

ふ。(源氏、紅葉賀)

「ベケレバ」

(15) 「…人もゆゆしく見思ふべければ、今は世にあるものとも人に知られはべらじ」とて、(源氏、早蕨)

「マジケレバ」

(16) 「えとどむまじければ、たださし仰ぎて泣きをり。」(竹取物語)

「メレバ」

(17) 「…若君は、いかに思ほし知るにか、「参りたまはむことをのみなん思し急ぐめれば」、…」(源氏、桐壺)

「ナレバ」

(18) 「…なにがし僧都みなその心くはしく聞きおきたなれば、また加へてすべき事どもも、かの僧都の言はむに従ひてなむものすべき」などのたまふ。(源氏、幻)

#### ⑥ 逆接節

モダリテイ助動詞は、ほとんど逆接節中に生起できる。(注10) 仮定節、理由節中に生起しなかつたム、ラム、ケムも逆接節には生起できる。

「メド」

(19) 「のたまふやうに、「ものはかなき身には過ぎにたるよそのおぼえはあらめど」、心にたへぬもの嘆かしさのみうち添ふや。」(源氏、若菜下)

「ラメド」

(20) 「…なまいどましき下の心はおのづから立ちまじりもすらめど」、…」(源氏、御法)

「ケメド」

(21) 「…ひとつ家の内は照らしけめど」、もしきのかしこき御光には並はずなりにけり。」(源氏、絵合)

逆接句中に生起しえないのはジとマシである。

#### ⑦ 準体句

ここで扱う準体句は連体ナリに上接した準体句である。ノの結びで文末終止した準体句もあるが、多くは和歌に見られるものであって文体的要因が介入してくる。(注11) ここでは、連体ナリに上接する準体句に限定しておく。連体ナリ上接の準体句中に生起できるのはツ、ヌ、ベシ、マジの四つである。

「ツ」

(22) 「しかじか。「権大納言殿の御八講に参りてはべりつる」なり。」(源氏、蓬生)

「ヌ」

(23) 昔、「忘れぬる」なめり」と問言しける女のもとに、…」(伊勢物語)

「ベシ」

(24) 「ただ今は、「人聞きのいとつきなかるべき」なり。」(源氏、須磨)

「マジ」

(25) …何にさる事をさださだどけざやかに見聞きけむと悔しきは、「わが御心ならなほえ思しなほすまじき」なめりかし。(源氏、葵)

#### 二・二・三 係助詞との関係

#### ⑧ ナムとの共起

係助詞ナムの結びになりうるか否かについて調べてみると、ツ、ヌ、ベシ、マジ、メリ、終止ナリ、ケリ、ムは結びになりうるが、ラム、ケム、マシ、ジは結びになりえないことがわかる。ただし、すでに旧稿で指摘したとおり、

ナムの結びとなるムは epistemic 用法としてはナムの結びにはならない。(注12)

⑨ ヤ、カとの共起

疑問表現と関わりの深い係助詞ヤやカ<sub>1</sub>の結びにはモダリティの助動詞すべてが結びになりうる。ただし、Evidential 系のメリ、終止ナリ、ケリと否定系のマジ、ジは普通、反語表現となるようである。

「―ヤ―メル」

(26) 「…院の御ありさまに並ぶべきおぼえ具したるやはおはすめる。」(源氏、若菜上)

「―ヤ―ナル」

(27) 「かくうきことあるためしは下衆などの中にだに多くやはあなる。」(源氏、浮舟)

「―カーケル」

(28) 「うたた寝はいさめきこゆるものを、などが、いとものはかなきさまにては大殿籠りける。」(源氏、常夏)

「―カーマジ」

(29) 「…などがよそにても、なつかしき答へばかりはしたまふまじき。」(源氏、空蟬)

「―カージ」

(30) はづかしく心づきなきことは、いかでか御覽せられじと思ふに、かかるそら言のいでくる、くるしけれど、…

(枕草子、二三八段)

⑩ ソ、コソとの共起

ジ以外のすべての形式は、ソ、コソの結びとすることができる。ただし、ジはハ、モの結びにはなる。

二・三 テストの結果

ここで、①～⑩を整理しておく。

テスト①について。〈判断〉そのものの否定は原理的に不可能であるから、用いられた形式が〈判断性〉を表すとしたらテスト①で on となる。逆に on の場合はプロポジション内の意味(コトガラの意味)がとりだされる。

テスト③。典型的な判断は文に一度のはずであるから、モダリティ形式が重複するとき、前項は〈様態性〉にずれこむであろう。また、基本的にモダリティ成分を許容しない仮定句中、準体句中に許容されるのは〈様態性〉のみである。そこで、テスト③④⑦を括って〈様態性〉の判定基準とする。

テスト⑤。理由節に生起して確定条件法をなし、確定的なコトガラに用いられるナムの結びとすることが〈狭義推定〉と〈狭義推量〉の境界となることはかつて述べた。テンスが現代語において真正モダリティと疑似モダリティとの境界をなすことから、テスト②もここに含め、テスト②⑤⑧を〈推定性〉判定基準として括る。

テスト⑥。逆接節は終助詞以外はすべて許容できる。また、テスト⑨⑩でとりあげた係助詞は作用が助動詞層全体を覆う。今、助動詞層の述語構造的意味を〈様相性〉と呼ぶことにすれば、テスト⑥⑨⑩を〈様相性〉判定基準として括ることができる。結局、テスト①～⑩は四類に整理されることになる。

I	①	……	〈+判断性〉	○	〈-判断性〉
II	③④⑦	……	〈+様態性〉	○	〈-様態性〉
III	②⑤⑧	……	〈+確定性〉	○	〈+想定性〉
IV	⑥⑨⑩	……	〈+様相性〉	○	〈-様相性〉



## 【テスト一覧】

- ① 否定形式下接
- ② テンス形式下接
- ③ モダリティ形式下接
- ④ 仮定節内生起
- ⑤ 理由節内生起
- ⑥ 逆接節内生起
- ⑦ 準体句内生起
- ⑧ ナムとの共起
- ⑨ ヤ、カとの共起
- ⑩ ゴ、コソとの共起

表 テストの結果

	①	③	④	⑦	②	⑤	⑧	⑥	⑨	⑩
ツ	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ヌ	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ベシ	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○
マジ	×	○	○	○	○	△	○	○	○	○
ケリ	×	×	×	○	×	○	○	○	○	○
メリ	×	×	×	×	○	○	○	○	△	○
終止ナ	×	×	×	×	○	○	○	○	△	○
ム	×	×	×	×	×	×	△	○	○	○
ラム	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○
ケム	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○
マシ	×	×	○	×	×	×	×	×	○	○
ジ	×	×	×	×	×	×	×	×	△	×
ゾ/カ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

※表を見やすくするために、形式は○の多い方から少ない方へと並べてある。

※助動詞層と終助詞層の連続性を見るために、終助詞ゾ、カの結果を掲げる。

以上の整理にもとづいた前節でのテストの結果を表に示しておこう。

さて、表からうかがえる特徴を挙げていくことにしよう。

第一にツ、ヌ、ベシは全く同じ結果を示している。マジもそれらの結果とほぼ一致する。一般に、ツ、ヌは「完了の助動詞」として括られ、ベシ、マジは「推量の助動詞」として括られており、切り離された扱いである。しかし、一般的理解に反して、ツ、ヌとベシとは近い位置にあると言える。今後、意味的性格の連続性が明らかにされるべきである。

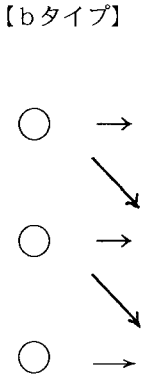
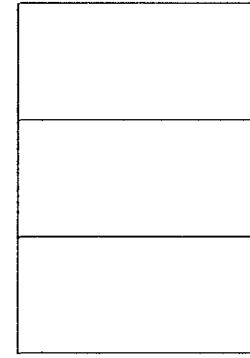
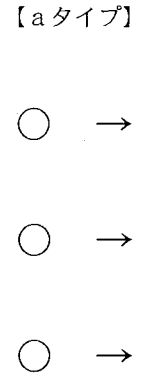
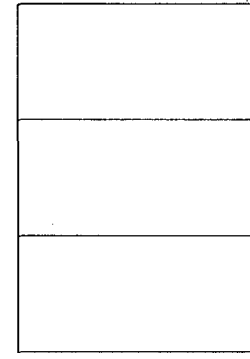
第二にケリ、メリ、終止ナリがほぼ同じ結果を示すことが注目される。メリと終止ナリの共通性については、すでに旧稿で検証したところである。ここで、ケリが両者と似た結果を示すことは注目されてよい。「推定の助動詞」として括られるメリ、終止ナリと「過去の助動詞」と呼ばれるケリとの連続性を示す事実と言えよう。テスト⑨において三者いずれもが、すべて反語になることはケリをモダリティの議論に参加させる上で重要な事実であって、形態面、接続面での近さと合わせて了解されるべきであろう。(注13)

第三に、ム、ラム、ケム、マシといったム系助動詞がほぼ同じ結果を示している。細かく見れば、ム、ラム、ケムが全く一致するのに対してマシだけがテスト④⑥において異なるが、これは述語構造的には説明できない問題であると思われる。この点については後述する。

第四に、ジは終助詞の結果とほぼ一致している。ジは形態変化もせず、終止法以外に用いられるのは例外的であって、もはや終助詞に近いことがわかる。

## 三 意味の階層

先の表をもとに階層モデルを設定してみる。従来の階層は相互承接をそのまま写像した設定方法であつて、形式群と層とが「一対一対応」していた。(aタイプ)しかし、それでは第一節βの問題が克服できない。ここで発想を転換して、形式と層とが「一対多対応」のモデル(bタイプ)を考えてみる。構文的特徴の束を基準として階層を設定するのである。



原理的には述語的意味の階層はアプリアリに存在しており、その階層の中で一形式が複数の層に位置するはずである。(注14)(一つの場合もある)一つの層に収まるか、複数の層にわたるかは形式の多義性に相関しているよう。このように、本稿の階層設定は相互承接という固定した統語連鎖から階層を設定するのは逆の設定方法になるのである。

本論で考えている階層モデルを示しておこう。階層モデルについて説明する。まず、先の表の横軸のテスト群を縦軸にして層を設定する。Pはプロポジション、Mはモダリティ層、Fは終助詞層を表わす。図のようにMには三つのレベルが存在すると仮定した。すなわち、(様態性)(確定性)(想定性)の三層である。そして、表の縦軸に置かれた形式群を層ごとに組み込んでいく。できるかぎり表に示したテストの結果に忠実に配置したが、従来の個別研究の成果を取り入れて補ったところもある。

述語構造	意味的階層	
P (プロポジション)	ツ <sub>1</sub> 、ヌ <sub>1</sub>	ケリ <sub>1</sub>
M 1 (様態性)	ツ <sub>2</sub> 、ヌ <sub>2</sub>	ベシ <sub>1</sub> マジ <sub>1</sub>
M 2 (推定性)	メリ、 <del>メリ</del>	ベシ <sub>2</sub> ケリ <sub>2</sub> マジ <sub>2</sub>
M 3 (想定性)	ム、ラム、ケム	ジ <sub>1</sub>
F (終助詞層)	終助詞	ジ <sub>2</sub>

(I)  
(II)  
(III)  
(IV)

※Pのツ<sub>1</sub>、ヌ<sub>1</sub>はアスペクトの意味、ケリ<sub>1</sub>はテンスの意味である。  
※マジはモダリティの階層に位置づけられない。

以下、この階層図においてポイントとなる点を挙げていく。

第一に、ベシ、マジが多層的であることである。これは、一般的に言われる両形式の多義性に対応している。たと

えば、ベシについて言われる《様相的推定》と《論理的推定》はここに表れてくる。(注15)そして、どちらが出力されるかは構文的环境によって決定されることになる。このような意味の決まりかたの詳細についてはそれぞれの形式の個別論で扱われることになる。

第二に、マジとジの分担関係が見てとれる。同じく否定推量の形式であっても、マジは客体的でありジはより主体的であると言われている。(注16)本稿のテスト結果においてもその理解は支持される。

第三に、文構造における係助詞の力の及ぶ範囲である。これを以下、係助詞の**作用域** *Scope* と呼ぶことにしよう。ナムはM2の層までしか作用が及ばない。一方、ヤ、カ、コソはM3まで作用が及ぶ。ハ、モにいたってはさらに深く最深部Fまで及ぶのである。よって作用域はナム(ソ)、コソ、ヤ、カ(ハ、モの順で広がる。本稿の階層モデルによって、従来直観的に把握されてきた係助詞の係りの作用が始めて客観的にとらえられたわけである。(注17)

試作ゆえ技術的にはまだまだ改良の余地があるが、原理的には形式と層との「一対多対応」モデルの方がよく述語構造をとらえているように思われる。今回は古代語が対象なので詳述は避けるが、本稿の方法は現代語の述語構造を見直す上でも有効であろうことを付け加えておきたい。

以上、「階層把握」の有効に効いてくる側面について述べ来たった。一方、その把握ではとらえきれない側面も当然ある。(もとより「階層把握」は何でも切れる万能のハサミではないので)

たとえば、前述のマシである。マシは述語構造上、ム系の助動詞と近い位置にあると一応言えはするが、テスト④の結果においては他のム系助動詞と異なっている。この差異を「階層把握」でもって説明することは不可能であろう。この点については「現実性―非現実性」という次元において説明可能と思われる。(注18)さらに「肯定―否定」関係をどう組み込むかという問題がある。根本的には「否定」そのものの原理的問題があり、検討を要する。また、終止ナリ、ケリについて言われる〈伝聞性〉の位置づけ、連体ナリとの複合形式であるナメリ、ナルベシなどの扱い

など「階層把握」で扱える範囲を越える問題であろう。(注19)「階層把握」という方法は睡眠薬と同様、ほどほどに適用すれば薬だが、強く適用しすぎると毒にもなるということに注意しておくべきであろう。

おわりに

「階層把握」の有効性と限界とについての議論は今後さらに積み重ねていくべきものである。その議論をとおして、モダリティとして括ることの有効な領域が見えてくるであろう。モダリティの助動詞の意味体系が多次元的な構造を持つとしても、まず文との連絡のつく範囲を押さえておくことが先決である。

注

- 1 北原保雄(一九八一)、仁田義雄(一九八九)参照。
- 2 近藤論文からは教えられるところが多かった。ただし、助動詞の理解に関して、本稿とは基本的な立場が異なる。
- 3 ツ、ヌヤケリのモーダルな側面に関する議論はすでにある。しかしながら、その大半は意味的観点からのものであつて具体性、客観性を欠くものが多い。
- 4 ツ、ヌの否定については近藤明(一九八九)に詳しい記述があり、有益である。
- 5 『古典を読むための助動詞と助詞の手帖』(学燈社 昭和五九・六)「べからず」の項(森野宗明氏担当)参照。
- 6 第二部第一章参照。
- 7 『伝聞』とテンスについては、第二部第六章参照。

- 8 ツ、又については「確述用法」「強調用法」として知られており、モトダルな意味で理解されることが多い。
- 9 第一部第二章参照。
- 10 逆接的な意味関係を広く求めるならば、ヲ、ニなど格助詞出自の接続助詞も射程に入れておく必要があるだろう。本稿では、また、それらをも含めて検討する準備が整っていない。
- 11 近藤泰弘(一九八六)、高山善行(一九九〇)参照。
- 12 第一部第三章参照。
- 13 アリを含む形態であること、及び接続が連用、終止の二様にわたること。
- 14 川端善明(一九七八)に次の記述があり、示唆的である。「或る一つの助動詞が、その属する層を、常に唯一にもっているものとは限らない。一つの助動詞がその意味において、二つ(以上)の層に収まるならば―収まると解釈され得るならば、それは、述語の意味の層自体の部分的な交渉である。」なお、福沢によつて本論で提示した階層モデルについての修正案が示されている。
- 15 中西宇一(一九六九)参照。
- 16 中田祝夫(一九六三)、北原保雄(一九八二)参照。
- 17 係助詞の文末述語への作用については、係りが「浅い」「深い」などという表現が用いられてきた。これは述語の階層構造を承認していたことの証拠と言えないだろうか。その指摘が直観の域から出ないのは作用の受け皿としての階層がうまく設定されていなかったことによるのではないか。
- 18 ム、ベシ等も当然この問題に絡む。マシとム、ベシ等との意味的な関係については山口堯二(一九六八)参照。「現実―非現実」とモダリティ助動詞との関係については、第二部第七章参照。
- 19 ナナリ、ナメリ、ナルベシ、ナリケリ等もはや複合辞化し独立したものとして、終止ナリ、メリ、ベシ、ケリ

等とは別に扱うことも可能であろう。ちなみに、文体的観点からの研究においてはこの見地から数々の成果が挙げられている。本稿では取り上げる余裕がなかったが、今後「複合モダリティ形式論」として取り組みたいと思う。

## 第六章 疑問表現とモダリティ助動詞

## はじめに

本稿では、疑問表現とモダリティ助動詞との関係について考究する。疑問文という環境において、現代語、古代語のモダリティ助動詞がどのような振る舞いをみせるか考究してみたい。

## 一 研究史

疑問表現とモダリティ助動詞との関係については、現代語、古代語ともに先行研究がある。ただし、それらの多くはモダリティ助動詞の個別的記述の中で、「疑問表現で用いられるかどうか」に言及したものであり、疑問表現とモダリティ助動詞全体との関係について論じた研究は、比較的最近になって行われるようになったものの、未解決の部分が多いようである。

現代語の研究では、モダリティ助動詞の構文的特徴、意味的特徴を記述していく上で、疑問化というテストがおこなわれおり、寺村秀夫（一九八四）、仁田義雄（一九九二）、森山卓郎（一九九二）などがある。一方、古代語では、高山善行（一九八六）、近藤泰弘（一九八八）、山口堯二（一九九〇）などがあるが、十分研究が積み重ねられていない段階である。

そこで、本稿では、現代語と古代語との対照という観点から、疑問表現とモダリティ助動詞との関係について考究してみようと思う。疑問表現においてモダリティ助動詞はどのように用いられているか、用いられていないか、その実態について観察することから始めていきたい。（注一）

## 二 疑問表現の類型

まず、疑問表現の類型について整理しておくことにする。

疑問表現の類型については、国立国語研究所（一九六〇）、阪倉篤義（一九七五）などによって整理が試みられている。本稿では、そうした研究を基にして、以下のように整理する。まず、典型的な (protypical) 疑問表現と非典型的な疑問表現に分ける。典型的かどうかは、その疑問表現が「知識として不明なことを知ろうとしているかどうか」で弁別されることになる。なお、厳密には、疑問表現と質問表現を分けるべきだが、記述の簡明を期し、この段階では質問表現の場合も含めて疑問表現として扱うことにする。（注二）

以下、現代語の例文により、疑問表現の類型を示しておく。

- a 不定疑問タイプ（文中に必ず不定語を含み、答えとしては「くだ」「くです」という説明の形式をとる）
  - (1) 彼はいつ来るのですか？
  - (2) きのは、だれが休みましたか？
- b 判定疑問タイプ（文中に不定語を含まず、「はい」「いいえ」で答えることができる。肯否の判定を示す答えとなる）
  - (3) あなたはタイガースのファンですか？

(4) この服気に入ってくれましたか？

c 選択疑問タイプ（二項以上の選択枝を示し、その中から答えを選ばせる）

(5) 今晩は中華料理にしますか、和食にしますか？

(6) (きわどい打球を見て) あれはファウルでしょうか、フェアでしょうか？

以上の三タイプが典型的な疑問表現である。次に、非典型的な疑問表現を見ていく。

d 反語タイプ（話し手自らが確信ある答えを持ちながら、敢えて疑問の形にして答えの確かさを強調する）

(7) こんな仕事、だれができますか？

(8) おれがそんなこと言ったか？

e 確認要求タイプ（話し手と聞き手が共有すると見込まれる知識を確認する）

(9) ねえ、今日は水曜日じゃない？

(10) その話もう終わったじゃないか？

f 問い返しタイプ（相手の言ったことをそっくりそのまま投げ返す）

(11) A…「きのうUFOを見た」

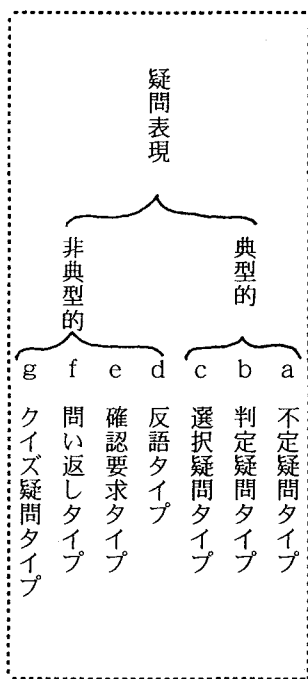
B…「えっ、UFOを見た？」

g クイズ疑問（なぞなぞ疑問）タイプ（話し手が相手の知識を試す意図で質問する）

(12) 琵琶湖と四国全体とはどちらが広いでしょうか？

(13) 足が一本で目が三つのものなあに？

d、gに共通するのは、「話し手が不明な点を有していない」ことである。つまり、話し手はそもそも疑問解消を目指していないものと言える。よって、これらを非典型的としてまとめたのである。



a、gのようなタイプ分けは、かなり一般的なものである。もちろん、さらに細かく分けることも可能ではあるが、現代語、古代語の対照の観点からすると、あまり細かく分けても意味がない。見通しを得る目的では、この程度でよいと思われる。

ただし、古代語においては—原理的には存在するとしても—すべてのタイプが文献上に現れるわけではない。たとえば、cタイプなどはそうそうまとまった数の用例が見られるものではない。(注3) もともと選択疑問の形式を取ること自体があまりなく、おそらく運用論的レベルの問題であろう。fについては、理論的に存在するはずだが、やはり用例を見いだすのはきわめて困難であろう。gもかなり特殊な場面（たとえば、上位者が下位者を試問するような場面）が必要とされる。(注4) これらについては、対照は困難である。

しかしながら、当面は全体の見通しを立てる段階であるから、まずは典型的な疑問表現を取り上げて、観察していくことが必要である。対照しにくいものを強引に対照させる必要はない。今回は、a、b、dの三タイプを取り上げ、

それらの疑問表現と現代語、古代語のモダリティ助動詞とがどのように関わっているか考えてみたい。

### 三 疑問文とモダリティ助動詞

#### 三・一 不定疑問

##### ○現代語

このタイプの文に生起できるのは、様態ソウダとダロウだけである。

〔様態ソウダ〕

(14) その仕事はいつ終わりそうすか？

(15) 彼は来そうすか？

〔ダロウ〕

(16) これからどこへ行くのでしょうか？

(17) 独身生活は、いつ終わるのだらうか？

##### ○古代語

古代語では、ベシ、ム、ラム、ケム、マシがこのタイプの疑問文に生起できる。

〔ベシ〕

(18) 「なにわざをし、いかなる官・位をか賜ふべき」と仰せられければ、く(枕)

〔ム〕

(19) あなかたはらいたや、いかが聞こえん、と思しわづらふ。(源氏、若紫)《意志》

〔ラム〕

(20) 人の冠もひしげ、うへのきぬも下襲もひとつになりたる、いかにわびしかるらんと見えたり。(枕)

〔ケム〕

(21) 何をしてかく生ひ出でけむと、言ふいかひなくおぼゆべし。(源氏、帚木)

〔マシ〕

(22) いかに心憂くつらからまし。(枕)

メリ、終止ナリは原則的に生起しない。また、マジ、ジは否定の働きによって、典型的な疑問文にはなりにくく、《反語》に傾くことになる。

#### 三・二 判定疑問タイプ

##### ○現代語

(23) やはり、様態ソウダ、ダロウが生起する。

〔様態ソウダ〕

(24) おおい、そこから出られそうか？

〔ダロウ〕

(25) 彼は元気でやつているんでしょうか？

(26) 明日は巨人が勝つだらうか。

○古代語

不定疑問文の場合と同様、ベシ、ム、ラム、ケム、マシが生起し、メリ、終止ナリ、マジ、ジは生起しない。

「ベシ」

(ヤーベキ)

(27) (薫)「く、何ごとにつけても、心寄せきこゆべき人となん思つたまふるを、もし便なくや思しめさるへき」(源氏、早蕨)

氏、早蕨)

(一ベシヤ)

(28) 行き離れぬべしや。《疑問》(源氏、賢木)

(ヤーム)

(29) あまたものしたまふなる中の、あなづらはしき人にてや交りたまはん。(源氏、若紫)

(一ムヤ)

(30) この世にのしりたまふ光源氏、かかるついでに見たてまつりたまはんや。(源氏、若紫)

(ヤールム)

(31) (尼君)「あないみじや。いとあやしきさまを人や見つらむ」とて、簾下ろしつ。源氏(源氏、若紫)

(ヤークム)

(32) もとよりさる心をかはせるにやありけん(源氏、帚木)

(ヤーマシ)

(33) いかにせまし、迎へやせましと思し乱る。下りやしなまし。(源氏、葵)

### 三・三 反語タイプ

現代語で疑問化可能だったダロウは反語文でも使うことができる。ただし、様態ソウダは反語文で用いにくいように思われる。

「様態ソウダ」

(34) (日本チームに敗れたブラジルのサッカーチームを見て)あれでも金メダルをとれそうか。

のように、容認可能かもしれないが、その場合、先にあつた発言を承けての引用というニュアンスがつきまとう。反語文中の様態ソウダの用法については、今後の検討課題としておきたい。

「ダロウ」

(35) この期におよんで、誰が信じるだらうか。

一方、古代語では、やや事情が異なっている。不定疑問タイプ、判定疑問タイプに生起できたベシ、ム、ラム、ケム、マシが反語タイプの文に生起できるのは言うまでもないが、不定疑問、判定疑問で生起できなかった、メリ、終止ナリが反語タイプに限り、生起するのである。(注5)

「メリ」

(ヤームル)

(36) 弁「く院の御ありさまに並ぶべきおぼえ具したるやはおはすめる。」(源氏、若菜上)

(37) 昔物語にも、心もてやとはある事もかかる事もあめる。(源氏、総角)

(36) く、「院(源氏)の御有様に太刀打ちできるだけの信望をそなえていらつしやる方がおいでだらうか(いはしない)」。の意。(37)、「昔物語でも、姫君の考えだけでとかくの事(男性の侵入)が起こるだらうか。(起こりはしない、みんな



女房の橋渡しによるのだ」の意。二例ともヤハーメルであることが注意される。

(カームル)

(38) く、思しかげざりし事なれば、尽きせずいみじうなむ。なめにかたほなるをだに、人の親はいかが思ふぬる。ましてことわりなり。(源氏、葵)

葵の上が急死した後、母大宮が嘆き悲しむ場面である。この例については、すでに、松尾捨治郎(一九六一)に指摘がある。

くめりは疑問体に用いられないのが原則である―中略―其で此の原則は、早くから宣長や義門によって認められ、玉緒も玉緒線分も、共に係結用例中の何くめるの条の下は、空欄にしてある。けれども、何事にも若干の例外のあるのが言語現象の常である。

松尾氏は、この例外について、「不定詞は『思ふ』に係るのであって、メリには係らない」という説明を試みているが、一方では「連体形めるで結んであるのは何故か。係結の大法に反しはせぬか。」と疑っている。たしかに、形態変化をおこしている以上、『係り』の作用はメリまでおよんでいると見るのが自然であるから、『思ふ』に係る」という説明は成り立たないであろう。依然として、「何くめる」がなぜ起こりえたのかという疑問は残されたままなのである。

〔終止ナリ〕

次に終止ナリの例の検討に入りたいと思う。

(39) 「まろはいかで死なばや。世づかず心憂かりける身かな。くうきことあるためしは下衆などの中にだに多くやはあなる。」(源氏、浮舟)

(40) 「さて、いかがさだめらるなる。親王こそまつはし得たまはむ。く」などのたまひては、く(源氏、常夏)

(38)は、浮舟が自らの身の上を嘆く場面である。「私はどうかして死んでしまいたい。世間並にも生きていけないなさない身の上だったのだ。こんなつらい目に会う例は下々の者の中にだつてたくさんあるうか。(ない)」という意。やはり、『反語』をあらわしていると思われるのである。(39)は、内大臣が玉鬘の縁組について予想をめぐらせる場面である。「源氏は玉鬘の縁組について、どう決着をつけるおつもりか。(トイウト、ワカリキッタコトサ) 兵部卿宮こそが玉鬘を獲得なさるのであるうか。」という意。この例も、自問自答のかたちをとっており、『疑問』を表わしているとは認めがたい。むしろ、『反語』をあらわしているといつていい。

従来、メリ、終止ナリが『疑問表現』をとらないという指摘はなされていたが、反語表現にのみ許されるということについては、事実の確認にとどまっていた。なぜ、『反語』をあらわす場合に限り、メリ、終止ナリが生起したのであろうか。

これを考える上では、メリ、終止ナリと同様に、『推定』をあらわすと言われているベシのありかたが示唆的であろう。ヤ、力の結びになるベシは、やはり『反語』をあらわすことが多いのである。

(41) (源氏) 「など頼もしげなくやはあるべき」(源氏、胡蝶)

(42) (源氏) 「何わざしてかは暮らすべき」(源氏、若菜上)

このように、ベシは一応『疑問』『反語』の両方に用いられるけれども、用例の量では『疑問』よりも『反語』の割合がかなり高い。特に、ヤの結びとなった場合はほとんど『反語』である。

〔ベシ〕

(43) 死ぬべきやうやあるべき。(竹取)

(44) 汲みそめてくやしと聞きし山の井の浅きながらや影を見るべき(源氏、若紫)

また、ベシの文末用法で力が下接する場合、ベキ力が少なく、ベキカハによる『反語』が多いという事実がある。(注

6) この事実もベシの反語への傾きを示していると考えられよう。

つまり、ベシ、メリ、終止ナリという狭義《推定》を表わす助動詞は、疑問よりも反語で用いられることが多いわけである。この他に、ほとんどの場合反語で用いられるものとしては、マジ、ジがある。

マジ、ジは、《否定》という意味的特徴によって、典型的な疑問文には生起できないが、反語文に生起する。(注7)

[マジ]

(45) その前に立つる車はいみじう制するを、「なごて立つまじき」としてひて立つれば、(枕)

[ジ]

(46) はづかしく心づきなきことは、いかでか御覽せられじと思ふに、(枕)

ここで、反語文の特質について考えてみたい。反語文の理解については、次のような記述が見られる。

いわゆる反語というのは、話し手が、内心に一つの事実に対する肯定または否定の確信を持ちながら、しかも表面は一応、疑問の形をもつて、敢えて相手に問いかける形式をとり、それに対して当然発せられるべき相手の答えを予想することによって、内心の肯定または否定を一層強調して表現するものであって、(阪倉篤義(一九五

七)

反語文と助動詞との関係については、

反語表現の場合には、多く『む・まし・べし・じ』等の推量の助動詞または否定の助動詞を伴って、断定的な、端的な問いかたを避けるところに、(問いと) 差異を認めることができるのである。同(一九五七)

という記述がある。反語文に対する阪倉氏の記述は明晰かつ妥当なものである。だが、「推量の助動詞」との関係についての記述は、あくまでも反語側からのものであって、助動詞側に立つてみると、次の二点が疑われる。

第一に、反語文が強調を意図しているものであるにもかかわらず、わざわざ推量の助動詞を用いて断定的、端的な

言い方を避けようとする必然性についての疑いであり、第二には、婉曲用法が指摘されるムはともかくとして、マジ、ベシ、ジなどが断定的、端的な言い方を避ける機能を果たしえるのか、という疑いである。(特にベシの場合) 反語文の側からは、先の「断定的な、端的な問いかたを避けるという」理解が成り立つとしても、助動詞の意味の問題としては、なお検討の余地が残されているように思う。

もう少し、反語文についての記述を見よう。

(反語表現は) 問いかけと断定とのあいだのひるがえりを、うちに籠めている。宮地裕(一九七九)

確認(要求) 志向は、より確かな判断の確言・主張志向に転じていくと見てよい。そういう確言・主張志向をあらわに担って成立するのが、もつとも反語らしい反語の表現といつてよいだろう。山口堯二(一九八三)

このように、反語文の本質的意味は《断定》にあると言える。(注8) よって、その表現における助動詞の意味も文の意味としての《断定》に結びつくものと言つてよからう。ここに、メリ、終止ナリが反語におけるのみ生起し、ベシが反語に偏る理由が求められるのではないかと思う。前に、ナム係り結びとの関係からメリ、終止ナリがム、ラム、ケム、マシなどと一線を画し、断定文のなかにあることを述べた。ここでも、それを思い出すべきであろう。

ところが、現代語では、ラシイ、ヨウダなどの疑似モダリティ形式は、《疑問》は勿論のこと、《反語》さえも表わしえない。形だけの見せ掛け《疑問》すら持ちえないのである。メリ、終止ナリ、ベシが反語文で用いられるとき、現代語訳の上では、真のモダリティ形式である、ダロウと置き換えられてきたのである。表面を繕うような処理であるが、反語文とモダリティ助動詞との本格的な検討がなされてこなかった弊害の顕われであろう。

助動詞と同様にモダリティを表す形式として叙法副詞が挙げられよう。本項では、疑問表現と叙法副詞との関係についていささか考えてみたい。

まず、現代語の叙法副詞について考えてみよう。叙法副詞は、現代語のモダリティ助動詞一般と同様に疑問文、反語文では生起しない。

(47) \*たぶん、誰が来ますか？

(48) \*もしかしたら、どこへ行きますか？

(49) \*こんなひどい仕事、おそろく誰ができるものか？

これは、英語の文副詞の場合も同様であるという。(注9)

一方、古代語の叙法副詞と疑問表現との関係については明らかでない。先に述べたように、古代の叙法副詞(認識系)そのものが種類が多くなり、疑問、反語での使用について体系的に見ていくだけの材料を持ち合わせていないからである。(注10)

#### 四 まとめ

以上の考察をもとに、疑問文、反語文におけるモダリティ助動詞の生起の事実をまとめると、表1、2のようになる。表の結果をもとに、疑問文とモダリティ助動詞との関係についてまとめておこう。

表1 現代語

	不定疑問	判定疑問	反語
様態ソウダ	○	○	○
ヨウダ	×	×	×
ミタイダ	×	×	×
ラシイ	×	×	×
ハズダ	×	×	×
カモシレナイ	×	×	×
ニチガイナイ	×	×	×
ダロウ	○	○	○
伝聞ソウダ	×	×	×

表2 中古語

	不定疑問	判定疑問	反語
ベシ	○	○	○
マジ	×	×	△
メリ	×	×	△
終止ナリ	×	×	△
ム	○	○	○
ラム	○	○	○
ケム	○	○	○
マシ	○	○	○
ジ	×	×	△

現代語では、モダリティ助動詞は一般に典型的な疑問文には生起しにくいといえる。生起できるのは、様態ソウダとダロウだけであって、これらはむしろ例外的である。様態ソウダが典型的な疑問文に生起可能であることについては、容に説明することができる。様態ソウダはその名のとおり、事態の意味が濃厚である。よって、事態に吸収され、疑

問の対象になりうる。一方、ダロウが疑問文に生起することについては、いまだに合理的な説明がなされていない。ダロウは様態ソウダと異なり、事態に吸収される（つまり、ダロウという形式が事態の意味が強いとは思われない）とはとても思われない。よって、疑問の対象ではなく、むしろ不定語や力の働きと融合して、疑問（特に《疑い》）の実現に積極的に参画しているといえる。もちろん、その際のダロウは《推量》を表しているとは言えないのである。従来のように、ダロウを推量の典型のように捉えたものでは疑問化可能であることの説明がつかない。そこで、森山（一九九二）の言うようにダロウを判断形成過程を表すものであるとする理解が注目されるであろう。

中古語の場合は、現代語と異なる面がある。まず、反語文に限ってメリ、終止ナリが生起することである。これは、現代語とは異なる現象である。たとえば、現代語で、ラシイ、ヨウダ等が反語文に限って生起するということはない。実際にメリ、終止ナリが反語文で用いられた例はそう多くないから、断定的なことは言えないけれども、反語文の質そのものが現代語と中古語では異なる可能性もあるう。

それから、中古語の場合は、ベシ、ム、ラム、ケム、マシと多くの助動詞が疑問文に生起している。疑問が判断停止を意味するものであるとすれば、これらの助動詞は現代語のモダリティ助動詞に比べると、相対的に判断性が希薄であったのではないか。現代語と中古語を対照させたとき、この違いについても注意する必要がある。

文の意味として、「疑問すること」（判断の中止）と「判断すること」（判断の遂行）とは結局、相反するのであり、表現上どちらかが選択されなければならない。述語構造上に境界線を引くとするなら、まさにそれが推定と推量の違いということであろう。そして、推量はある条件のもとに発動される意味であって、ダロウやムを推量の助動詞の典型として固定化するような従来の意味把握は見直されるべきである。

### おわりに

疑問表現とモダリティ助動詞との関係論は現代語、古代語ともに今後さらに進められるべきである。その上で、反語表現の分析が課題となろう。レトリカル側面だけでなく、文法的、意味的特徴についての分析がなされるべきである。疑問表現そのものの研究の深まりが、モダリティ研究に資する面が大きいであろう。

### 注

1 周知のように、古代語の疑問表現は係り結びによって実現されることが多い。本章の内容は第三章を補完することになる。

2 仁田（一九九〇）では《疑い》《問いかけ》のように分けて整理されている。

3 「鬼か、神か、狐か、木魂か。かばかりの天の下の験者のおはしますには、え隠れたてまつらじ」（源氏、手習）名にしおはばいざ事とはむ宮こ鳥わがおもふ人はありやなしやと（伊勢物語）

なお、数は少ないが、選択疑問タイプの文にモダリティ助動詞が生起した例もある。

(ム)

年の内に春は来きけりひととせをこそとやいはむことしとやいはむ（古今一）

(ベシ)

「思ふべしや、いなや。」（枕）

4 (村上天皇は) 草子をひろげさせ給ひて、「その月、なにのをり、その人のよみたる歌はいかに」と問ひ聞えさ

- せ給ふを、く(枕・「清涼殿の丑寅のすみの・・・」)
- 5 ムは和歌では、くメヤの形で《反語》を表す
- 6 此島正年(一九七三)三四四頁、参照
- 7 田野村(一九九二)の言う「疑問文の肯定優位」が関係してくると思われる。
- 8 "The rhetorical question is interrogative in structure, but has the force of a strong assertion."  
R.Quirk(1985) p.825
- 9 荒木一雄他(一九七七)によれば、英語の rhetorical-question においても、通常、疑問文には生起しない(《E法助動詞》(musE, mayEなど)が生起するという。(GはエビSTEMミック用法を表す)
- 10 新英文法選書「副詞」参照。
- 10 カナラズの疑問化については、第一部第四章で検討をおこなっている。

## 第七章 假定表現とモダリティ助動詞

はじめに

本章では、古代語のモダリティの研究を進めていく一つの試みとして、假定条件文の帰結部に生起するモダリティ助動詞の実態について考究してみたい。モードとモダリティとの関係についての考究である。

## 一 研究史概観

假定条件文とモダリティ助動詞との関係を考えるとき、二つの観点が可能であろう。一つは假定条件節内部においてモダリティ助動詞のありようを見るといふ観点、もう一つは假定条件の帰結の位置（主節）においてモダリティ助動詞のありようを見るといふ観点である。前者については第一部第二章で述べた。本章では後者の観点からの考究を進めることにしたい。

假定条件文の主節におけるモダリティ助動詞のありようについては、いくつかの個別的な記述は存在するが、まとまった記述は、なされていないように思われる。この観点から従来、どういう研究がなされてきたか、まずは概観しておこう。

## 一・一 現代語

現代語の研究においては、久野○（一九七三）に次の記述が見られる。

S<sub>1</sub>ナラS<sub>2</sub>は次のような特徴を持つている。……

S<sub>2</sub>は、話し手の判断・意志・決意・要求・命令を表わさなければならぬ。

さらに、この観点からの記述を発展させたものとしては、益岡隆志（一九八七）が挙げられる。

……（次の）(35)や(36)のような、与えられた事柄を非現実的なものとして述べる文（すなわち「概言文」と「価値判断文」）は「くナラ」の帰結表現になりうるが、

(37)のような、与えられた事柄を現実的なものとして述べる文は、「くナラ」の帰結表現にはなりえない、……

(35) 太郎が来るなら、花子は帰るだろう／かもしれない。

(36) \*太郎が来るなら、花子は帰るべきだ／帰った方がよい。

(37) \*太郎が来るなら、花子は帰る。

この事実が「現実—非現実」というモダリティの対立が、「くナラ」という条件表現を含む文の文法性に深くかかわることを示している。

ひじょうに興味深い指摘であるが、「現実—非現実」の対立が、「モダリティの対立」として扱えるものかどうかについては、「モダリティ」概念の本質に関わる問題であって、検討の余地が残されているように思われる。

仁田義雄（一九八九）には、

現実世界での事態なのか、想定世界での事態なのか、反事実的に仮想された世界での事態なのか、などといった言表事態の存在のあり様の類型を、本稿では仮に〈モード（様態）〉と呼んでおく。

モードは、その文のモダリティやテンスの現れなどにある種の影響を与えるものと思われる。……

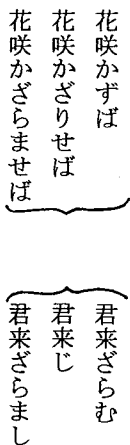
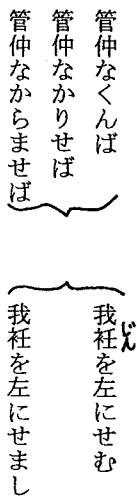
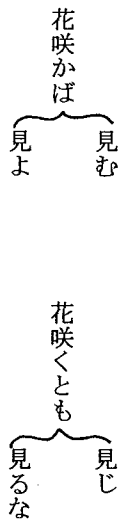
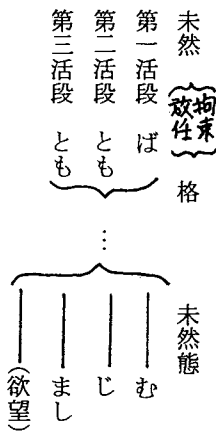
という指摘があり、「モードと他の文法カテゴリとの相互関係などといったものへの詳しい考察は、総て今後の課

題である。」と述べられている。  
現代語の研究においては、仮定条件節の帰結のモダリティを考えることの有効性が示唆されているものの、まとまった記述はこれからという段階にあると言えよう。なお、本稿では、先の仁田氏の理解に従って、「モード」という術語を用いることとする。

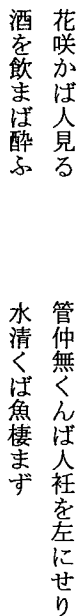
一・二 古代語

古代語では、助動詞各論における断片的な記述はあるが、やはり、まとまった記述は、なされていないように思われる。(注1) その中であって、松下大三郎(一九三二)に注目すべき記述が見られる。松下は「成分の照応」として「係結法」と「未然法」の二つを立てるが、この「未然法」こそが、まさに本章で注目する現象にあたるものである。(注2) 松下は「未然法」を「有形の未然法」と「無形の未然法」とに分けている。少し長くなるが、本稿と直接かかわる「有形の未然法」について説明している部分を引用する。

有形の未然法は上の語の未然性に照應すべき下の語の未然性が語形の上に現れてゐる未然法である。



こういう風に照應する。次の様には決して云はない。



未然態を表す助動詞は「む」「じ」「まし」の三つであるが、可然態の「べし」「まじ」の二つも未然態を成す場合がある。しかし古文の推想態の助動詞「らむ」「けむ」「めり」「なり」「らし」「けらし」の五つ(ママ)は現然的の推想であって全く未然の意義はない。この五つと「む」「じ」などとを混同して漫に想像の助動詞などと稱するのは杜撰である。

この松下の記述は、あまり取り上げられることがなかったようであるが、古代語のモダリティを考える上では、きわめて興味深いものであつて、注目されなければならない。

このような、現代語、古代語の先行研究のなごれを受けて、考究がなされる。古代語に焦点をあてることから、とりわけ松下（一九三二）に示唆を得た点が多い。なお、本稿のテーマについては、英語の法助動詞の研究の中にも、たとえば、パーマー（一九七九）、ユーツ（一九八三）など参照すべきものがあることを付言しておきたい。

## 二 現象の記述

さて、従来の研究をふまえて、考究を進めることになるが、まず、古代語において、かかる現象の実態を明らかにしておく必要がある。そこで、今回は平安初期の文学作品を資料として、実態を押さえておくことにする。用例の調査に用いた作品は、三代集『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』および『竹取物語』『伊勢物語』『土佐日記』である。（注3）手順としては、まず、それぞれの作品に用いられている仮定条件文（順接仮定、逆接仮定ともに）を抽出する。その結果については表1に示すとおりである。次に、それらの仮定条件文の帰結句に見られるモダリティ助動詞の分布を調べた。調査結果を表2に示す。表2にもとづき、用例分布の状況に見られる特徴的な点をとりあげて考究を進めていくことにしたい。

【表1 仮定条件節の分布】

作品名	用例数	用例数／全歌数	割合（％）
古今集	136	→ 136/1111	12.2
後撰集	155	→ 155/1425	10.9
拾遺集	146	→ 146/1351	10.8
竹取物語	27（1）	（ ）内は和歌の用例数	
伊勢物語	33（29）		
土佐日記	5（4）		



【表2 帰結節におけるモダリティ助動詞の分布】

	古今	後撰	拾遺	竹取	伊勢	土佐	小計
ベシ	8	6	11	5	3	0	33
マジ	0	0	0	0	0	0	0
メリ	0	0	0	0	0	0	0
終止ナリ	0	0	0	0	0	0	0
ム	51	60	49	9	8	0	160
ラム	3	0	0	0	0	0	3
ケム	0	0	0	0	0	0	0
マシ	29	32	36	4	6	3	110
ズ	3	0	0	0	0	0	3
ジ	12	10	13	1	3	0	39
ラシ	0	0	0	0	0	0	0
ベラナリ	0	1	0	0	0	0	1
ケリ	1	0	5	0	0	0	6
連体ナリ	0	0	0	1	0	0	1
複合形式	0	0	0	0	0	0	0
その他	0	1	0	0	0	0	1

(注)

1. モダリティ助動詞ではないが、それらと関係が深い連体ナリも調査に加えた。なお、項目中、「複合形式」とはナナリ、ナメリ、ナルベシ、ナラムなどの連体ナリの複合形式を指す。「その他」の1例はバカリナリである。
2. 厳密にはモダリティ助動詞の範囲から出るが、否定辞ズも調査の対象に加えてある。これは、マジ、ジといった否定系のモダリティ助動詞との比較を意図することによる。

二・一 モダリティ助動詞の分布

まず、帰結節におけるモダリティ助動詞の分布について概観しておこう。  
 表2に示した用例の分布から、モダリティ助動詞を三つに分けることができる。(モダリティ助動詞ではないが、連体ナリについても考察の範囲に加えておく。)

A類	用例がかなり見られるもの—ム、マシ、ベシ、ジ
B類	用例が少数見られるもの—ラム、ケリ、連体ナリ、ベラナリ
C類	用例が全く見られないもの—マジ、メリ、終止ナリ、ラシ、ケム 連体ナリの複合形式(ナナリ、ナメリ等)

この三類について、順に検討していくことにする。

二・二 分布の特徴

二・二・一 A類の特徴

A類に属する助動詞の用例は次のようなものである。

- (1)「あはずしてこよひあけなば」春の日の長くや人をつらしと思はん(古今集二四)  
 (2)「いたづらに身はなしつとも」玉の枝を手おらでただに帰らざらまし(竹取物語)  
 (3)思ふどち所も替へず住み経なむ「たちはなれなば」恋しかるべし(拾遺集四一六)  
 (4)「あるじにかはらけとらせよ。」「さらすは」飲じ。(伊勢物語)

帰結にムとマジが多usedされることについては、それぞれの個別論で指摘されているとおりなのだが、意外とベシの用例が多いことが注目されよう。後で検討することになるが、狭義(推定)をあらわす助動詞で帰結に生起するのはベシだけである。ベシの意味として特徴的な(可能性)〈妥当性〉といったものがどのように関与しているのか、追究されるべきである。ただし、その前にベシの多義性を十全におさえる意味記述が要請されるであろう。

また、否定系ではほとんどジが用いられていることがわかる。ズで終止する例は少数でいずれも反語の例であった。松下(一九三二)によれば、マジも未然法にかかわるということだが、マジは、今回の調査範囲においては用例が見られなかった。もつとも、三代集にはマジの用例そのものが無いので、散文作品の調査範囲を拡大するか、調査する時代の幅を広げるかすれば、確認することができるのかもしれない。

マジについては問題が残るが、他の助動詞については松下の観察は正しいようである。ここから、それぞれの助動詞の意味、用法をめぐって詳細に分析していくことも、もちろん可能であろう。しかし、こまかく立ち入る方向は助動詞各論に譲り、今回は現象を大局的に押さえることを目指したい。

#### 二・二・二 B類の特徴

松下(一九三二)で言及されていなかったのが、このB類であった。少数例ではあるが、それだけに位置づけをししておく必要がある。そこで、個々の助動詞の場合について、いささか立ち入って検討してみたい。

##### a. ラム

帰結にラムが用いられている例は以下の三例である。

- (5)刈りごもの思ひ乱れてわれ恋ふと妹しるらめや「人しつげずは」(古今集四八五)  
 (6)わが恋を人しるらめやきたへの枕のみこそ「知らば」知るらめ(同五〇四)  
 (7)「浅茅生の小野の篠原しのぶとも」人しるらめやいふ人なしに(同五〇五)

この三例には次のような共通点がある。

- [1]『古今集』巻十一、恋歌(二)にある。  
 [2]「読み人しらず」歌である。  
 [3]ラムは已然形である。  
 [4]ラムの上接語は「知る」である。  
 [5]歌全体が反語的な情意に含まれている。

これらの共通点をもとにすれば、ラムの許容された条件について、次の二点を考慮に入れるべきであろう。

- ①ある時期に流行した類型的な表現として用いられる。  
 ②反語的な意味あいのもので用いられる。

①については、和歌の表現の変遷という視点から、考究されなければならないであろう。②については、〈反語表現〉をめぐる複雑な問題があるため、本稿の範囲では扱い切れない。ここでは、ラムの用例が固定的なものであること、したがって、原則的に、帰結句には用いられないということを確認するにとどめておきたい。

##### b. ケリ

次にケリについて見ていくことにしよう。ケリは六例用いられている。

- (8)「恋しきに命をかふるものならば」死はやすくぞあるべかりける(古今集五一七)

(9) 「さ夜ふけてねざめざりせば」時鳥人づてにこそ聞くべかりけれ (拾遺集一〇四)

くちばいろのおしき

(10) 「あしひきの山のこの葉のおちくちば」色の惜しきぞあはれなりける (同四一七)

(11) 「かくばかり恋しきものとしらませば」外に見るべくありけるものを (同八七四)

(12) 「紅のやしほの衣かくしあらば」思ひそめずぞあるべかりける (同九七五)

(13) 「独して世をしつくさば」高砂の松の常磐もかひなかりけり (同一二七一)

これらを見ると、四例までがベカリケリ (ベクアリケリ) という複合用法であることがわかる。これらはベシの〈可能性〉との融合という条件のもとで生起することが可能になったと推定される。(注4)

では、(10)、(13)の例はいかがであろうか。(10)は物名歌に長じた輔相の作で、「山の木の葉が落ちて朽ちたならば、その色の惜しまれるような美しさにつくづく心がひかれることだ」という内容である。また、(13)は紀貫之の作で、「ただ一人で生き長らえ、寿命を全うしたとしても、常緑で朽ちることのない高砂の松のように、無為孤独でさびしくてたまらず、何の生きがいもないことだ」(以上、岩波新大系本現代語訳)という内容である。仮定条件の類型という観点からすると、両者とも一般的に考えられる事柄を条件としたものであることが注意される。

ケリの意味については諸説あるが、(10)、(13)のケリは、夙に富士谷成章が『けり』は同じく言ひ定めたる詞ながら、理にかゝはれる方が重くて、みづから言へる詞となれり」と看破したように、〈説明〉的な意味を表わしていると思われる。〈説明〉を表わすケリは、仮定条件節の一般的条件性に呼応することによって、帰結に許容されていると思われる。

#### c. 連体ナリ (注5)

連体ナリの例としては、次の二例が確認された。

(14) 「さし籠めて守り戦ふべきしたくみをしたりとも」、あの国の人を、え戦はぬ也。弓矢して射られじ。」(竹

#### 取物語)

この箇所(「あの国の人を、え戦はぬ也」)は、古本系本文においては「あのかにの人にはみなあきなむず。あひたゝかはん人もあらじ。」となっている。帰結にムズ、ジが用いられていることに注意したい。古本系が古態を反映したものであるかどうかについては疑問が持たれているが、この箇所に限って言えば、今回調査した範囲で見られる規則性にはよく合っているように思われる。本文の問題もあるので、現段階においては存疑とするほかないであろう。

次に、第二例について検討してみよう。

(15) 「山階の宮の草木ときみならば」われはしづくに濡るばかりなり (後撰集一三九一)

「あなたが山科の草木におなりになるなら、私はおそばを離れずにその草木に置いた露の雫に濡れているほかありません。泣き濡れているほかありません。」という内容である。

バカリナリについては、すでに富士谷成章が「末ばかり」の用法として注目しているように、かなり固定化した表現形式であって、一種の複合辞と見ることも可能であろう。(注6)ただ、それが内在的にモーダルな意味を有するとはまては言い切れない。一次的には〈限定〉の意をあらわすが、文末という環境において、派生的にモーダルな意味を表わしているように思われる。

#### d. ベラナリ

(16) 「わが恋の教にしとらば」白妙の浜の真砂もつきぬべらなり (後撰集六四三)

「我が恋の教を教えとるならば、あの真白な浜の砂も尽きてしまうでしょう」という内容である。ベラナリは一般になされるように、ベシとの対応を考えるべきであろう。帰結の生起もベシに準じた理解が可能かもしれない。

以上、連体ナリ、ベラナリの例を見てきたが、いずれも問題があると言えよう。これに連体ナリの複合形式(ナナ

リ、ナメリ、ナルベシなど）が用いられていないことなどを考え合わせると、先のラムと同様、やはり例外の域を出ないと位置づけられそうである。

### 二・二・三 C類の特徴

帰結において用例が全く見られないのがC類である。（ただし、マジについては先述のとおり保留せざるを得ない）なぜ、これらは生起しなかったのであろうか。

その手がかりとなるのはメリ、終止ナリ、ラシといった、いわゆる「推定系の助動詞」がそろって用いられていないことであろう。その構造は現代語においても保持されているようである。（注7）では、これら「推定系の助動詞」に共通する意味的特徴とは、いったいどのようなものであろうか。

個別論の教えるところによれば、現実事態との不可分性に求めることができよう。この意味的特徴は「主観—客観二分論」の把握において、「客観的」ととらえられ、狭義「推量」と区別して「推定」を立てる根拠でもあった。現実事態との不可分性を、今仮に「現実性」と呼ぶことにしよう。仮定条件節によって「非現実」の世界が設定されるとすれば、主節においてそれと反する「現実性」を許容することは、文の表現態度の一貫性を欠くことになる。帰結に「現実性」の制約が存することは当然のことであろう。しかも、それは今回の調査の範囲においては、かなり厳しい制約であることが認められるのである。

では、「推定系の助動詞」以外の助動詞の場合についてはどうか。結論から言えば、やはり「現実性」という観点から説明が可能と思われる。具体的には連体ナリ（およびその一統）とケムである。ここにラムも加えておいてよい。これらもやはり「現実性」を色濃く帯びている助動詞なのである。その証拠として、これらがいずれも「原因推量」の用法を持つことに注目したい。（注8）

そもそも、「原因推量」とは現実事態の成立の原因を推し量ることであって、仮定された「非現実の事態」の原因を推量することは原理的には考えにくい。そこには「現実性」の存在が必須となるのである。とすれば、「現実性」排除の制約によって、やはり帰結節から排除されることになるのではなからうか。

一方、同じム系統の助動詞でも、ム、マシは単独で「原因推量」を表わすことはできない。（注9）また、山口堯二（一九六七）に指摘があるように、ム、マシは「希望」「意志」を表わすという、意味的共通性を有している。従来言われているように、ム、マシという組とラム、ケムという組とは、かなり意味的性格が異なるが、その本質的なところは「現実性」と「非現実性」という対立において押さえられよう。これらは、形態的な観点から、一括して扱われる場合が多いけれども、意味的には多次元的な領域が設定されるべきであろう。

### 三 まとめ

以上のような現象の観察とそれをめぐっての解釈をもとに、この段階のまとめと今後の見通しを示しておきたい。

○古代語においては、「非現実性」を表現する場合、ほとんど義務的に「非現実性」の標識（ⅡA類）によってマークされていたのではないか。（もちろん、標識は助動詞に限定されない。他の表現形式が用いられることもあろう。）

○従来の研究においては、それらの標識でマークされる「非現実性」の方に注意が偏りがちであった。今後はもっと「現実性」について検討されるべきである。特に「原因推量」の原理を考える上で、この視点は重要である。

○従来、広義「推量の助動詞」という枠組みは、「現実性」—「非現実性」の対立をうまく組み込んだ形で、解題、再編成されるべきではないか。また、その方向においてモダリティの本質を解明することに近づけるので

はないか。

○解体、再編成の過程において、当然、従来の（あるいは今後展開される）助動詞個別論との接触が要請されることになる。「モード論」を個別論とつきあわせることによって、従来の個別論における記述の価値を違った角度から見直すことが可能となろう。

○モードの視点から、現代語と古代語との対照研究が可能になるのではないか。（すでに、その萌芽は松下の研究に見られる）この視点は、日本語のモダリティの基本構造を考える上で有効性を持つことが予想される。

おわりに

本稿では、モードという視点から古代語のモダリティを分析することの有効性について考えてみた。その出発点として、仮定条件節の帰結におけるモダリティ助動詞の分布をめぐって考究をおこなった。これから各時代の記述を積み重ねていかなければならないことは言うまでもない。また、今回割愛せざるを得なかったが、帰結節における係助詞の分布、それを通して見られる意味、機能についての考究も重要である。その論については別稿を期したい。

注

1 山口堯二（一九八〇）には、「可能性の表現形式である仮定の条件形式は、後句の帰結に主体の推量・意志・命令・反語などの志向を導く傾向が強い。」という包括的な説明がある。

2 松下大三郎（一九三二）では「未然法」が「係結法」と並んで取り上げられている。大まかではあるが古代語と

現代語との対照といった視点からの記述が見られることにも注目しておきたい。

○連詞を構成する相対的の二成分の間には互に其の性質を一致せしむる必要の有るものが有る。之を成分の照應といふ。

○日本語における成分の照應は係結法と未然法との二つである。係結法は文語に於ける法則であって口語には存しない。未然法も口語では著しくない。

○未然拘束格又は未然放任格より成る修用語を受ける被修用語は未然態を用ゐる。この照應を未然法といふ。この法は主として文語に存するものである。

3 用例調査に用いた注釈書は以下のとおりである。『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』|| 新日本古典文学大系、『竹取物語』|| 古典文学大系（以上、岩波書店）『伊勢物語』|| 日本古典文学全集（小学館）、『土佐日記』|| 岩波文庫

4 山口堯二（一九八〇）では、仮定条件法について、「仮定条件法は、条件になる事柄を、成立可能な、ありうる事態として取り上げるといふ性格を一般にそなえている。いわば可能性の表現形式といえよう」と述べている。この理解に立つならば、帰結節に多くベシが用いられるのは、ベシの〈可能性〉という意味的特徴が仮定条件法そのものの意味的性格とよく適合することによると言えるのではなからうか。

5 連体ナリの位置づけについては、第二部第四章参照。なお、連体ナリと体言ナリとの差異については、第二部第三章で論じる。

6 「末ばかり」は副助詞バカリの文末用法。富士谷成章『あゆひ抄』参照。バカリナリの表現性については森重敏（一九七三）参照。

7 推定系のヨウダ、ラシイ、ミタイダは帰結節に生起しにくい。それに対して、カモシレナイ、ニチガイナイ、ダ

ロウは不自由なく生起できる。

また、高山善行（一九八七a）の現代小説二十作品を資料とした調査によれば、カモシレナはヒョットシタラ、モシカスルトのように仮定条件節の形式をとる叙法副詞との共起が顕著であって、他のモダリテイ助動詞と性格が異なる。現代語のモダリテイ助動詞と叙法副詞の共起はモードの視点からも検討されるべきであって、例えば〈確実度〉といった次元で単純に序列化されるべきではないことは、この事実をもつても明白である。

8 ラムの〈現実性〉については、森重敏（一九七二）に指摘がある。なお、連体ナリ、ラムと〈原因推量〉との関わりについては、第二部第八章参照。

9 ただし、ムはナリに下接した場合に限って、〈原因推量〉を表わし、ラムに近い意味機能を持つ。糸井通浩（一九九〇）参照。

## 第八章 否定表現とモダリティ助動詞

はじめに

本章では、否定表現とモダリティ助動詞との関係について考究する。これまでの研究では、否定表現の研究とモダリティ助動詞の研究とを別々におこなってきたと言える。しかし、両者の関係について論じることは、それぞれの研究にとって有益であろう。否定表現とモダリティ助動詞の関係論の見通しを示してみたい。(注1)

## 一 否定形式とモダリティ助動詞の承接

古代日本語において否定表現の中心を担う表現形式は、「否定の助動詞」ズである。形式形容詞ナシも否定を表現しえたが、古代においては、ズの優位を播るがせるに至っていない。否定表現とモダリティ助動詞との関係について考究するということは、形式的には、ズとモダリティ助動詞との承接について、意味的には、否定事態とそれを対象とする判断について観察していくことになる。

さて、ズとモダリティ助動詞の承接のありかたは、ズの上接、下接によって二種類に分かれる。ここで前者を「ズ上接」、後者を「ズ下接」と呼ぶことにしよう。こうして、ズとモダリティ助動詞全体との関係について考える視点は、従来の研究においてはなかったことである。従来は、それぞれの助動詞の個別論の中で、ズとの承接ということ断片的に取り上げられるにすぎなかった。しかし、そういう方法では、否定とモダリティ助動詞全体の関係の見通

しが立たないことは明らかである。そこで、本章のような視点が要請されることになるのである。

さて、ズ上接、ズ下接それぞれの場合についての助動詞承接の状況については、第一部第一章で概観してあるが、ここで再びその実態を確認しておきたい。

表 ズとの承接

	ズ上接	ズ下接
ベシ	○	○
マジ	×	×
メリ	○	×
終止ナリ	○	×
ム	○	×
ラム	×	×
ケム	○	×
マジ	×	×

否定の意味を含むジ、マジを除けば、ズ上接は、さまざまにモダリティ助動詞について可能である。こうして否定事態が判断の対象となるのは、至極当然のようにも思える。ただし、その中であって、ザルラムの用例が全く見られないことは注意されてよい。なぜ、ラムだけが否定事態を対象としないのであろうか。ザルラムをめぐる問題については、第二部第九章で論じる予定であるので、ここでは現象の指摘にとどめる。

一方、ズ下接は、ただ一つベシだけが可能である。よって、議論は結局のところベシの個別論の範囲に収まるであらう。ただし、その下接のありようは多様であり、ベシの多義性と相関して複雑な様相を呈していることは注意される。

以上、概略について述べたが、次節では、ズ上接、ズ下接の実態を観察し、そこから見いだされる問題について考えてみたい。

## 二一 ズ上接

否定辞ズがモダリティ助動詞に上接するとき、どのような特徴が見られるだろうか。従来の研究では、先述のように「否定+推量」を体系的に扱うというテーマ設定自体がなされておらず、まだ現象の観察が充分なされていない段階である。そこで、何はともあれ、実態を押さえおく必要がある。そこで、全体を量的に把握するために、『源氏物語』を資料として、「ズ+モダリティ助動詞」の用例分布を調べてみた。以下、表にあらわれた用例分布の傾向について指摘しておこう。

先述のとおり、ザラムの用例が見られないのははつきりした特徴と言えよう。他に特徴的な点としては、ザルベシの少なさとザラムシの多さを指摘しておく必要がある。以下、それらを含めて、それぞれの承接形ごとに実態を見ていくことにしたい。ザラムについては、第二部第九章で扱う予定であるので、本節では例を挙げるにとどめる。

## 二・一 ザルベシ

『源氏物語』において観察されるザルベシは以下の七例である。

- (1) (源氏)ガ花散里ニ対シテ、何やかやと、例の、なつかしく語りひたまふも、思さぬことにあらざるべし。(花散里)
- (2) かうやうにおどろかしきこゆるたぐひ多かめれど、情なからずうち返りこちたまひて、(源氏ノ)御心には深うしまさるべし。(賢木)

(3) 中将におとづれたまふことも同じことにて、御文などは絶えざるべし。(賢木)

(4) (源氏ハ)さやうにあながちなるさまに、御心やぶりきこえんなどは思さざるべし。(少女)

(5) 今もさるべきをり、(源氏)ガ朧月夜ニ風の伝にもほのめき聞こえたまふこと絶えざるべし。(少女)

(6) (源氏)「よろづの草子歌枕、よく案内知り見つくして、その中の言葉を取り出づるに、詠みつきたる筋こそ、強うは変らざるべけれ。」(玉鬘)

(7) (句宮ト薫ハ)げにいとなべてならぬ御ありさまどもなれど、いとまばゆき際にはおはせざるべし。(句宮)

ザルベシは源氏物語に七例しかない。これは、源氏物語におけるベシの総用例数からするときわめて低い割合である。しかも、すべて文末用法として用いられており、文中用法の例は見られない。これについては、何か理由があるのか、偶然なかつたのか知りたいところだが、用例数そのものが少ないため何とも言えない。しかも、七例中六例までが文末終止の用法であって、曲調終止も少ない。

地の文において、語り手の想像を表す例がほとんどであり(6)を除いて、意味としては、ナルベシと連続するであろう。たとえば(1)は、「何やかやと、いつものように、情こまやかに人をひきつけるようにしてお話になるのも、お口のさきばかりではないのである」という意、(7)は、「薫ト句宮ハ」いかにもそろいもそろってほんとに並み一とおりではないご容姿であるけれども、まったく見るもまぶしいというほどではいらつしやらないようである」の意である。

ザルベシがこのように作者の説明的表現に用いられるのは、ザリに内包されたアリの働きによるものであると思われる。形容詞述語の場合と合わせて、アルベシとして分析されるべきものであろう。

また、ザルベシは訓点資料にも用例が認められるものであり、ズに下接するモダリティ助動詞としては珍しく、和漢文体において用いられたことが報告されている。(注2)



## ◇不定語との共起

不定語と共起したザリケムの全用例を挙げる。

(8) (薰)「思ひわびては、などかかるともなしたてまつらざりけむ。それに延ぶるやうもやあらまし。」(早蕨)

(9) などで、京に迎へてかかる事をもせさせざりけむ、と口惜しう思さる。(澤標)

(10) 院の御前にて、親王たち、内親王、いづれかはさまざまどりの才ならばさせたまはざりけむ。(絵合)

これらは、すべて《反語》を表わしたものである。たとえば、(8)は「あの方(＝浮舟)をどうして尼姿にでもしてさしあげなかつたのだらう」の意である。

不定語と共起しているわけではないが、「しづ心なく花の散るらむ」のように、意味的に不定語を補って解釈される例がある。

(11) く、(真木柱八)うらやましう、かやうにてもやすらかにふるまふ身ならざりけんを嘆きたまふ。(真木柱)

(姫君は弟君たちが羨ましく、「どうしてこんなふう自由にふるまうことのできる男の身ではないのだろうか」とお嘆きになっている)

## ◇ヤの結び

通常、ヤの結びとして否定がくることは珍しいが、ズを含むザリケムが結びになっている。

(12) く、よろづの事うひうひしき心地すれど、めづらしきにや、え忍ばれざりけむ、く(閑屋)

(13) 賀茂のいつきには、孫王のゐたまふ例多くもあらざりけれど、さるべき皇女やおはせざりけむ。(賢木)

いずれも作者が地の文で用いているものであり、わざと《疑問》の形をとって述べているように見える。たとえば(12)は「(空蟬八)この珍しいお便りにて、とてもこらえることができなかつたのであろうか」という意である。

## ◇二人称主語

ケムは通常、三人称主語をとるが、二人称主語をとるものがある。(一例のみ)確認要求的用法かと思われる。

(14) (薰)「心のどかによろづを思ひつつ、年ごろにさへなりにけるほど、必ずしも心ざしあるやうには見たまはざりけむ。されど、今より後、何ごとにつけても、必ず忘れきこえじ。」(蜻蛉)

「万事を気長に考えていては年月を過ぎしてしまったのですから、あなたはこのわたしのことを実意があるようには御覧にならなかつたでしょう」という意である。

## ◇現在との隔絶

ザリケムはケムの《過去推量》の働きによって、当然過去の否定事態を述べることになるのだが、その場合の《過去》は現在と隔絶されたものである。

(15) (源氏)「いにしへの人は、まことに賢き方やすぐれたることも多かりけむ、情だちたる筋は、このごろの人に入しもまさらざりけむかし。く(初音)「昔の人はほんとうに賢いという点ではすぐれていることも多かったらうが、情味があるという筋では、このごろの人にとてもかなわなかつたであらうな」

一方、同じく過去の否定事態に対する推量であっても、ザリツラムは現在と切り離されない《過去》を表わしている点でザリケムとは異なるのである。

## ◇不定語との共起

不定語ナドと共起している例が二例見られ、いずれも《反語》を表わしている。マシとムとの連続性が注意される。マシは平安中期になると、意味的にムに近づくことが知られており、ナドとの共起もそれを反映しているものとして把握できるように思われる。

- (16) (柏木) 「くなどてかは、さてもさぶらはざらまし」となむ事のついでにはのたまはせける。く (若菜下)
- (17) (北の方) 「あはれや、親に知られたてまつりて生ひ立ちたまはましかば、おはせずなりにたれども、大將殿のたまふらんさまに、おほけなくともなどは思ひたたざらまし。く」など、心ひとつに思ひ定むるも、く (東屋)

(16) は「く』どうして、あれを婿にして悪かろう」と、何かの折に仰せられたこともあったのです。(17) は「ああ、実の父親が認めてくださってお育ちになったのであつたら、今ではお亡くなりになってしまったにしても、大將殿がおっしゃってくださるとおりに、畏れ多いながらもどうしてそのつもりにならないでいられよう」という意である。

## ◇文中用法

ザラマシは、マシ一般の性質にしたがつて、仮定条件節内にしか生起していない。

- (18) (源氏八) 心苦しくはあれど、見ざらましかば口惜しからましと思す。(帚木)
- (19) (海人) 「この風いましばし止まざらましかば、潮上りて残る所なからまし。神の助けおろかならざりけり」(明石)

## ◇文末用法

これもマシ一般の性質にしたがつて、原則的に仮定条件節の帰結として用いられる。

- (20) あはれと思ひしほどに、わづらはしげに思ひまはす気色見えましかば、かくもあくがらざらまし。(帚木)
- (21) おもしろき所どころを見つつ、「心若うおはせしものを、かかる道をも見せたてまつるものもがな」(おはせましかば、我らは下らざらまし」と、京の方を思ひやらるるに、(少女)

例外として、一例だけ確定条件節の帰結となり、《原因推量》を表わしていると思われるものがある。これも、やはりムへの近付きを示す現象であろう。

- (22) (乳母) 「くかく心口惜しくいましける君なれば、あたら御さまをも見知らざらまし。く」(東屋)

「ああして情けない気持のお方なのですから、もったいないご器量もよく理解できないのでしょうか」という意である。

## ◇時制に関して

《過去》《現在》を表す例は見られるが、《未来》を表す例が見られない。肯定事態につくマシとの違いが認められる。あるいは、ザラムとの分担がなされているのであろうか。

次に、《現在》《過去》を表す例を挙げておく。

- (23) 夜ひと夜風吹き荒るるに、(女房) 「げにかうおはせざらましかば、いかに心細からまし。く」(若紫)
- (24) く、心の中には、(右近) 「故君(〓夕顔)ものしたまはましかば、明石の御方ばかりのおぼえには劣りたまはざらまし。く」(玉鬘) (もし故姫君(〓夕顔)が生きていらつしやるのであつたなら、明石の御方ぐらいの評判にはひけをおとりになることもなからうに)

- (25) (源氏) 「かかる住まひにしほじまざらましかば、めづらかにおぼえまし」とのたまふに、く (薄雲)

『もしあのころにこれと同じような住まいで苦勞しなかつたとしたら、この景色もさぞ珍しく感じることだろうに』とおっしゃるので、く」という意。

## 二・四 ザメリ、ザナリ

狭義《推定》を表すとされる、メリ、終止ナリにズが上接する例について見ていこう。まず、ザメリ、ザナリとも不定語との共起は見られないが、これはメリ、終止ナリの性質によるものである。(注3)

〔ザメリ〕

◇文末用法

- (26) (博士)「ただかくながら。加ふべきことはべらざめり」と申す。(夕顔)  
 (27) さるは、いといたう過ぐしたまへど、御位のほどにはあはざめり。(朝顔)

◇文中用法

- (28) かの物に襲はれしをり思し出でられて、荒れたるさまは劣らざめるを、ほどの狭う、人げのすこしあるなどに慰めたれど、(未摘花)

(29) (尼君)「く(若紫八) まだ難波津をだにはかばかしくつづけはべらざめれば、かひなくなむ。く」(若紫)  
 また、次のように連体節中に生起した例がある。

- (30) (落葉の宮)「みづから聞こえたまはざめるかたはらいたさに代りはべるべきを、いと恐ろしきまでもしたまふめりしを、く」(夕霧)

上接語としてラ変型活用語が多いという特徴は、メリ一般と同様である。意味は《推定》に偏っており《婉曲》の

例は認めにくい。

〔ザナリ〕

◇文末用法

- (31) (鬘黒)「かの大臣も、もて離れても思したらざなり。女(＝玉鬘)は宮仕をものうげに思いたなり」(藤袴)  
 《推定》

- (32) (源氏)「く春の花の林、秋の野の盛りを、とりどりに人あらしひはべりける、そのころのげにと心寄るばかりあらはなる定めこそはべらざなれ。(薄雲)《伝聞》

◇文中用法

文中用法はあるが、連体節、準体句中に生起した例は見られない。そこが、ザメリと異なっている。

- (33) (匂宮)「むげに物まゐらざなるこそ、いとあしけれ」とて、く(宿木)《推定》

- (34) さるは、そこはかと苦しげなる病にもあらざなるを、思ふ心のあるにやと心苦しく思して、く(若菜下)《推定》《伝聞》

連体ナリの意味に近く、「くものだ」の意を表す用例がある。

(参考例) 姫君、御硯をやらひき寄せて、手習のやうに書きませたまふを、(八の宮)「これに書きたまへ。硯には書きつけざなり」とてく(橋姫)「これにお書きなさい。硯には書きつけるものではありません」と言つて、)

ただし、これも「二般にくと言いますよ」のように解釈すれば、《伝聞》と言えなくもない。

## 二・五 ザラム

ザラムについては、第二部第九章で詳論するため、ここでは挙例にとどめる。

- (35) 君のかうまめやかにのたまふに、聞き入れざらむもひがひがしかるべし。(末摘花)  
 (36) (源氏)「なぞ越えざらん」と、(若紫)  
 (37) よろづの事に、などかは、さても、とおぼゆるをりから、時々思ひ分かぬばかりの心にては、よしばみ情だたざらむなん、めやすかるべき。(帚木)  
 (38) しひていとほしき御ふるまひの絶えざらむもうたてあるべし。(空蟬)  
 (39) 返しせねば情なし、えせざらむ人ははしたなからん。(帚木)  
 (40) ただひたぶるに児めきて柔かならむ人を、とかくひきつくるひては、などか見ざらん。(帚木)

## 三 ス下接の場合

## 三・一 ズ下接の型式

ベシのズ下接には以下の四タイプが認められる。

- |     |                  |
|-----|------------------|
| I   | ベクモアラズ(ベクモ見エズ)   |
| II  | ベキニモアラズ(ベキナラズ)   |
| III | ベキコトナラズ(ベキホドナラズ) |
| IV  | ベカラズ             |

まず、連用形ベクが係助詞モを介して否定されるタイプ、これを「I型」とする。ベクモアラズ(音便形ベウモアラズを含む)のようにアリを介した形がほとんどであるが、ベクモ見エズも少数見られる。次に、連体形ベキが、いわゆる「断定の助動詞」ナリ(ニアリ)を介して否定されるタイプ、これを「II型」とする。ベキニ(ハ)アラズがその代表的な形であり、平安中期以降はニアリが熟化したベキナラズが増えるようである。II型と連続するタイプとして、ベキ+形式名詞+ナリにズが下接するタイプがある。これを「III型」とする。具体的には、ベキコトナラズ、ベキヤウナラズ等がこれにあたる。ベシに直接ズが下接したベカラズ、これを「IV型」とする。すでに指摘されているように、このタイプは漢文体専用といつてよく、和文体で使用されることは稀である。(注4)

これら四種のタイプを対象として、ズ下接の実態を見ていくことにしよう。  
 (調査した作品：『竹取物語』『伊勢物語』『土佐日記』『和泉式部日記』『蜻蛉日記』『枕草子』『紫式部日記』『源氏物語』『桐壺巻』『朝顔巻』『更級日記』『堤中納言物語』)

ベシは、その多義性に応じて、否定された場合にも様々な意味を表わすことが知られている。以下、取り出されてくる意味を一つ一つ見ていくことにしたい。なお、意味の微妙な問題なのですべての用例に現代語訳を付す。

a 様態性否定（～シソウニナイ）

(41) かの家に行きてたゝずみありきけれど、かひあるべくもあらず。（姫の家へ行つて、たたずみ歩くのだが効き目がありそうにもない。）〔『竹取物語』〕「I」

現代語の《様態》を表わすソウダにあたる意味の否定ということで様態性否定としておく。(41)のようにベクモアラズの形がほとんどだが、ベクモ見エズの例もある。視覚動詞「見ゆ」と結び付くのはベシが様態性を帯びているからであろう。

b 可能否定（～デキナイ、～スルワケニイカナイ）

(42) りしよりも、いたうわづらひまさと聞けば、いひしごと、みづから見るべうもあらず。（あの時よりもつと容体がひどくなったと聞くと、あの人が言ったように、あの人の邸へ行って自分の手で看病することもできず、～）〔『蜻蛉日記』〕「I」

ベシの意味として《可能》を立てるかどうかの議論は容易ではないが、ここではその問題には立ち入らないことにし、一応意味として《可能》を立てておくことにする。《可能》の意は本来、否定表現で出てきやすいものだが、ベシでも否定の方が肯定の場合よりは出てきやすいようである。

c 必然性否定（～スルハズガナイ）

(43) やむごとなくせちに隠したまふべきなどは、かやうにおほぞうなる御厨子などにうち置き、散らしたまふべく

もあらず、～（貴い方からのもので、ぜひ隠しておかねばならないものなどは、このようなありふれたお厨子などに放ってお置きになるはずもなく、奥深いところにとっておかれるはずだから、～）〔『源氏物語』〕「I」このタイプの例は、現代語ハズダとベシとの対照を試みる上で興味深い。ハズダとベシとの対照については、次項で詳しく述べる。

d 必要性否定（～スル必要ガナイ、～スルマデモナイ）

(44) 冬も、氷したるあしたなどはいふべきにもあらず。（冬でも、氷の張つた朝などは、今さら言うまでもない。）〔『枕草子』〕「II」

作者が「書くまでもないことだ」「書くほどのことではない」のように、詳しく叙述しないという態度表明をする場合にはほぼ限られ、『枕草子』で使用が目立つ。ベシの《必要性》は、否定において表面化する意味であり、肯定表

e 義務性否定（～スルベキデハナイ）

(45) 下衆などのなかにもむつかしきこと言ふを聞こしめして、「かく人のおぼしたまふべきにもあらず。うたでもあるかな」と心づきなれば、～、召使などの中でも不愉快な噂を立てるのを宮はお聞きになって、「こんなふうには北の方が女のことを悪く思われ、おっしゃるべきでもない、本当にいやなことだ」と氣にくわぬことと思われたので。）〔『和泉式部日記』〕「II」

eタイプの例は和文体では少ないが、漢文体の資料では多く見られる。これが会話文で使用されると、結果的に《否定命令》すなわち《禁止》を表わすことになる。

f 説明性否定（～スルワケデハナイ）

(46) なれたる人は、こよなくにことにつけてもあつつき顔に、我はいと若人にあるべきにもあらず、又おとなに

せらるべきおぼえもなく、(昔からいる女房たちは何ごとにつけてもひどく物馴れ顔だが、私は別に新参というわけでもなく、また人から一目置かれる古参の待遇を受けるほどのご信任もなく、)《『更級日記』》[II] 相手の推論から導かれるであろう結論を予測し、その自分が予測した結論を先回りして否定しておこうとするのが説明性否定である。古代語では、現代語ノデハナイに相当する意は二ハアラズによって表現されることが多いが、(46)ではさらにベシが加わった形を取っている。

g 適当性否定 (スルニフサワシイ、スルノガ適当デアル)

(47) 唐葵、日の影にしたがひてかたぶくこそ、草木といふべくもあらぬ心なれ。(唐葵、日の光の移るに従って花がそちらを向くというのは、草木というにふさわしくない分別心だ。)(『枕草子』)[I]

意味としては《義務》に近いが、《義務》ほど強い拘束力を持っていないので、《妥当性》としておく。《義務》とは拘束力の強弱の面で連続性を持つものである。

### 三・三 現代語ハズダとの対照

前項で取り出されてきた意味について見てみると、epistemic (認知的) な意味は《必然性》だけであって、他はすべて、dynamic (動力的) deontic (義務的) な意味が取り出されていることがわかる。なぜ《必然性》に限って否定化が可能になるのであろうか。この問題について、現代語ハズダと対照させて考えてみたい。

現代語のモダリティ助動詞は原則的にズを下接しない。しかし、ハズダは例外であり、ハズガナイ(ハズジャンナイ)の形をとることができる。

(48) (あの強い) 西武が巨人に負けるはずがない。(日本シリーズ戦前の予想)

(49) まさか、実の父親が自分の妻子を殺すはずがない。

否定化に関して、ハズダが他形式と差異が生じるのは、ハズダの表わす《必然性》そのものが特異な性質を持つからであると思われる。では、それはどのような性質であろうか。

これを考える上では、奥田靖雄(一九九三)の以下の記述が示唆的である。

「……、「はずだ」をとまなう文は意識のなかで進行する思考・想像の過程をえがきだして、現実の世界の出来事を直接的にはえがいているわけではない、ということになる。正確に言えば、《私》の思考・想像の過程に生じてくる《私》の判断をえがいて、いるのである。この判断は、現実の世界からうけとった材料をあやつりながら、未知の 世界を思考・想像のなかにくみだてていく、意識の運動である。」

ここで、的確に示されているように、いったん現実世界から話し手自らが仮設した仮想世界に移行するのがハズダの特性である。したがって、仮想世界(話し手の思考、想像の世界)において下した話し手の判断(仮想判断とでも言えようか)を否定しているわけで、現実世界における話し手の推量的判断それ自体を否定することは原理的にありえないと考えられる。いったん仮想世界に移行できるところが、ハズダが他の形式と異なる点であり、この性質によつて否定化可能になる。おそらく古代語ベシもこのハズダと同じ必然性を表わすことによつて、否定が可能になるであろう。

ハズダの否定のありかたと類似したものは、現代語ワケダの否定においても観察される。野田春美(一九九二)は、ワケデハナイを「推論命題否定」と呼び、話し手が聞き手の推論を勝手に予想し、先回りして否定しているとする。これも、やはり、現実世界においてではなく、仮想世界において下された判断(仮想判断)が否定されているものと理解される。

現代語の研究では、ハズダは判断の《確かさ》において二チガイナイと同じグループに位置付けられることがある

が、『確かさ』はおそらく本質的な性質ではなくて、両者を『確かさ』の次元で括ることは問題であろう。ニチガイナイとの連続性を見るだけではなく、ワケダやノダとの連続性にもつと注意が向けられるべきであろう。(注5)

以上、ベシにズが下接する現象を取り上げ、その実態を観察した。

おわりに

本章では、否定表現とモダリティ助動詞との関係について、その実態を観察してきた。ズ上接については、メリ、終止ナリはさほど問題がないが、ム系については深く探るべき問題がいくつか存することが知られた。ズ下接については、ベシの個別論において意味の派生の問題などと連関させて考えなければならぬ。本章で提起した問題については、第二部においてさらに検討されることになる。

注

- 1 個別的な問題については第二部に譲り、まず、全体像を見ていくことにする。
- 2 門前正彦(一九六〇)参照。
- 3 メリ、終止ナリは、いずれもヤ、カ結びになりにくい。第一部第三章参照。
- 4 『源氏物語』におけるベカラズの唯一例。

(横川の僧都)「く人の命久しかるまじきものなれど、残りの命、一二日をも惜しまずはあるべからず。」(手習)

- 5 その意味で、寺村秀夫(一九八四)がハズダをワケダと同じ「説明のムード」の形式として位置づけていることは注目される。

第九章 まとめと課題

はじめに

先に、疑問表現・仮定表現・否定表現といった文表現とモダリティ助動詞との交渉について見てきた。本章ではこれらの結果を総合してみようと思う。さらに、可能表現、伝聞表現などとの関係についても見通しを示しておきたい。

一 疑問表現・仮定表現・否定表現

第六章と第八章で見てきたように、疑問表現・仮定表現・否定表現との関係は、モダリティ助動詞の性質を知る上で重要な視点となる。本章では、それらを整理・総合してみたいと思う。まず、疑問表現・仮定表現・否定表現との関係を整理して、表1で示す。

個々のモダリティ助動詞が、それぞれの文表現において生起するかどうかは、それらの有する意味的特徴と深く関わっているものと予想される。言い換えれば、それぞれの文表現に生起するかどうかの意味的特徴のテストになっているのである。そこで、以下、生起すること、生起しないことがどのような意味的特徴につながるかを考えてみよう。まず、疑問表現について。これについては確かなことはまだわかっていないことが多く、はっきりしたことは言にくい。結果として狭義《推定》と狭義《推量》が截然と分かれることから、《証拠性判断》を表しているかどうかを示すものと思われる。(注1)

表1 疑問表現・仮定表現・否定表現とモダリティ助動詞

	疑問		仮定		否定	
	疑問	反語	仮定節内	帰結節	否定上接	否定下接
ベシ	○	○	○	○	○	○
メリ	×	△	×	×	○	×
終止判	×	△	×	×	○	×
ム	○	○	×	○	○	×
ラム	○	○	×	△	×	×
ケム	○	○	×	×	○	×
マシ	○	○	○	○	○	×
マジ	×	△	×	×	×	×
ジ	×	△	×	○	×	×

次に仮定表現について。仮定節内の生起については、モダリティ助動詞がその表す意味において、事態の意味と判断的意味のどちらが濃厚であるかと関わるであろう。(注2) 一方、帰結節の生起については、事態の現実性/非現実性の対立(モード)と関わるであろう。

最後に否定表現について。これについては、否定の意味を含むマジ、ジを予め横に置いておく必要がある。その処置を施した上で考えてみよう。

まず、否定辞上接の場合は、判断の対象となる事態内部の問題であるから、モダリティ助動詞自体の意味的特徴にはあまり関わらないように思われる。実際、ほとんどのモダリティ助動詞に否定辞が上接することができるのである。ただ、ラムだけは例外であり、否定辞が上接し



表2 モダリティ助動詞の意味的特徴

	推定性	事態性	現実性
ベシ	-	+	-
メリ	+	-	+
終止ナリ	+	-	+
ム	-	-	-
ラム	-	-	+
ケム	-	-	+
マシ	-	+	-
マジ	※	+	+
ジ	※	-	-

ていない。個別的に説明されなければならない問題である。(注3)

否定辞下接の場合は、仮定節内の生起と同様であった、事態の意味と判断の意味の濃淡に関わってくる。

こうした理解の上で、モダリティ助動詞の意味的特徴を整理したのが表2である。以下、表2より注意される点について述べる。

#### ○ベシの特殊性

表2によると、ベシだけがすべての文表現において生起していることになる。特に、否定辞が下接可能であることから、判断の意味が希薄であつて、むしろ事態の意味の濃厚さが予想される。これは、従来ベシが接尾語的性格が強い形式と理解されてきたことと一致する。また、表2の結果を見ると、マシと類似する面も持つことも注意される。この類似性が両者に共通する形容詞性によるものかどうか、今後さらに検討した

#### ○マジとジの意味的対立

マジとジの文構造的位置の違いについては、先に指摘した通りである。(注4) 意味的特徴においては、《現実性》

《非現実性》に関しての違いが注目される。仮定条件文の帰結の位置に生起するかどうかという観点によると、マジはより《現実性》が強く、ジはより《非現実性》が強いと言うことができよう。

#### ○ム系助動詞の下位区分

同じム系の助動詞ではあるが、「現実性—非現実性」という基準で見ると、ム、マシとケム、ラムは明確な対立を示していることがわかる。ム、マシとケム、ラムの対立はこれだけではない。前二者はその形式単独で原因推量を表さないが、後二者は単独で原因推量を表すという違いがあり、注意される。この違いと「現実性—非現実性」の対応関係については第二部で検討することにし、ここでは指摘にとどめる。

以上、疑問表現、仮定表現、否定表現とモダリティ助動詞との関係について述べた。もとより、これらは見通しにすぎず、細部に関しては個別論において、修正がなされる必要がある。

#### 二 可能表現

可能表現とモダリティ助動詞との関係については、ベシの意味記述の問題を中心に議論されたきた。ベシが《可能》を表すとされるのは、たとえば、以下のような例である。

月夜に「梅の花を折りて」と、人のいひければ、折るとてよめる

- (1) 月夜にはそれとも見えず梅の花香をたづねてぞ知るべかりける(古今四〇)  
(明るい月夜の晩には「これが梅だ」とは見えない。闇夜に香りをたずねて始めてどこにあるか知ることができ  
るものだ)

越のくにへまかりける人によみてつかはしける

(2) よそにのみ恋ひやわたらん白山のゆきみるべくもあらぬわが身は(古今三三八三)

(遠く離れた状態で恋い慕い続けようか。白山の雪を見に行くことができない私は)

このように、ベシには「〜できる」と訳すことができる例がかなりある。したがって、一般に、辞書、文法書類では、ベシの意味として《可能》を認めているわけである。しかし、このような《可能》は文脈から導かれるものであり、ベシという形式そのものの意味に担わせるのは妥当か否かという問題が生じてくる。この問題については、橋本(一九七九)、伊藤(一九八八)によって指摘されている。

また、他にも問題がある。ベシ以外のモダリティ助動詞によって《可能》(現代語訳のレベルにおいて)を表している場合があるのである。たとえば、伊藤(一九八八)では、ム、マシが《可能》を表す例として以下の三例を挙げている。

(3) 三輪の山いかに待ちみん年ふともたづぬる人もあらじと思へば(古今七八〇)

(4) 鶯の谷よりいづるこゑなくは春くることをたれか知らまし(同一四)

(5) 老いぬとてなどかわが身をせめぎけん老いずは今日にあはましものか(同九〇三)

もし、ベシに《可能》を認めるとすれば、これらム、マシにも同様に《可能》の意味を認めなければならないはずである。しかし、実際、文法書、辞書類の記述ではそうはなっておらず、ム、マシの意味として《可能》を立てることは通常行われていない。明らかな矛盾が認められるわけである。

これまでの研究で指摘された主な問題点はこの二点である。

《可能》を形式の意味として認めるかどうかは、難しい問題であり、ここで直ちに論ずる余裕がない。ただ、《可能》という意味を形式に担わせるにせよ、切り離すにせよ、我々が当該助動詞を含んだ表現から《可能》という意味

を感じ取っていることは確かなことであるから、やはりこの事実在即して議論を出発するべきであろう。

つまり、「ベシ、ム、マシは可能表現と結び付きやすい」ということは、確実に言えるということである。一方、他のモダリティ助動詞は、可能表現と積極的に結び付いているとは言えないだろう。この事実を前提に議論を進めていく必要がある。

ところで、そもそも可能表現は二つの側面から捉えることができる。それは、情意の側面と事態の側面とである。情意の面から言えば、話し手の《願望》を基底とすると言える。一方、事態のありかたの側面から言うと、事態の実現性と関わりとを言えるのではなからうか。可能表現の関与する事態には既実現事態と未実現事態の両方の場合があるのだが、古典の文章では実際に用いられるのは未実現事態のようである。これは、可能表現がほとんどの場合、否定の形でなされることも関わるであろう。(注5) ム、マシは未然形接続ということから、未実現性との関わりが深く、可能表現になりやすいと言えよう。同じ、ム系助動詞でも、ラム、ケムは未実現性の希薄なものであり、通常《可能》の意味で訳されることはない。

さて、ここでベシが《可能》と結び付きやすい理由について考えてみよう。

ベシは終止形接続であり、ム、マシのように未実現性は積極的に表していないと思われる。ただ、ベシには《様態》(現代語くシソウナにあたる)という意味があることに注目したい。(注6) ベシの《様態》は、『あゆひ抄』の記述のとおり、《可能》と密接な関係があるのである。

「ソナ」また「サウナ」と言ふを詳しくすれば、いささか願はしき心をば「ラレソナ」さもあらぬことをば「ソナ」と言ふ。「ラレソナヤウス」「ソナヤウス」と言ふ心なり。なほ心得て「ラレソニ思ハルル」「サウニ思ハルル」とも見るべし。(巻四《六倫》第三(一)《可倫》)

ここで挙げた『あゆひ抄』の記述は、「願はしき心」という表現からわかるように、《願望》の面からの把握である

ように見える。他方、事態の実現性という観点から見れば、ベシが未実現事態の実現様態を表している（したがってアスペクト的）ことに注意しなければならない。ここに、ベシが《可能》を表し得ることの根拠が求められるのではなからうか。（注7）

### 三 伝聞表現

本節では、伝聞表現とモダリティ助動詞との関係について考えてみる。古代語の研究では、伝聞表現は、(1)「他者から情報を入手したことを表す」、(2)「聴覚によって情報を得たことを表す」、の両方を指しているのが一般的である。一方、現代語研究では通常、(1)のみを言うのが一般的であるから、現代語研究と古代語研究とで伝聞概念に差異が生じているわけである。このような差異については、通時的観点からは興味深い問題を含んでいるが、その検討は別の機会に譲ることとし、ここでは(1)(2)両方を対象とする広義の伝聞表現について取り上げることにする。

伝聞表現と関わりが深い形式は、終止ナリ、ラム、ケムである。まず、それらが《伝聞》を表しているとされる用例を挙げておこう。

- (6) 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。（土佐）
- (7) 代々の国の司など、用意ことにしてさる心ばへ見すなれど、さらにうけひかず。（源氏、若紫）
- (8) 鳥は異所のものなれど鸚鵡いとあはれなり。人のいふらむことをまねぶらむよ。（枕）
- (9) 天に生るる人のあやしき三つの途に帰らむ一時に思ひなすらへて、今日長く別れ奉らぬ。（源氏、松風）

(10) あはれ、きのふ翁丸をいみじうも打ちしかな。死にけむこそあはれなれ。（枕）

(11) なき人のすみか尋ねいでたりけむしのかんざしならましかばとおぼすもいかひなし。（源氏、桐壺）

ただし、これら三つの形式には質的な違いが認められ、同一の次元で論じられるものではない。終止ナリが連体法においても終止法においても《伝聞》の意味を表すのに対して、ラム、ケムは通常の場合、連体法においてのみ《伝聞》の意味を表すということが報告されている。終止ナリの《伝聞》は形式の意味として認められようが、ラム、ケムの場合は、形式の意味ではなく、連体法という構文的条件の下で発現する文脈の意味として理解するべきものである。連体法に置かれることによつて、判断性が抑制されて、結果的に証拠性 Evidentiality が卓越するものと一応は考えられるのであるが、詳しく検討する準備ができていない。課題としておきたい。

### 四 その他

その他の表現とモダリティ助動詞との関係について簡単に触れておきたい。

まず、婉曲表現との関係について。ム系の助動詞が連体節中に生じた場合に、《婉曲》を表すとされる。ただし、この意味は文脈的なものであり、形式に帰されるものではない。ところが、メリの場合は形式の意味として把握されているように見える。「婉曲の助動詞」と言われることもある。メリがム系助動詞と異なるのは、連体法のみならず、終止法においてさえも《婉曲》が認められるということであろう。そこから、形式に内在する意味として《婉曲》を認めようという気持ちができやすくなってくるのではないか。同じく狭義推定形式の終止ナリの方には、積極的に《婉曲》を認めていないことも注意される。

次に命令表現について。命令表現と関わるのは、ムとベシである。ムとベシとの共通性は《妥当性》に求めることができる。(注8) いずれも、事態の《妥当性》に関わる意味を有していることから、命令化が可能になっているものと思われる。

最後に、詠嘆表現(厳密には感嘆表現と分けるべき)について。この表現は、モダリティ表現とは対立的であり、原則的にモダリティ助動詞は生起しない。詠嘆表現は確定的な事実に対して、ある程度距離をおいてながめる表現であるから、そもそも事実よりも話し手の判断が主であるモダリティ助動詞による表現と合わないであろう。

#### おわりに

文表現とモダリティ助動詞との関係についてまとめてみた。見通しについて述べようとしたものだが、いくぶんかでも第二部における個別的研究への橋渡しが出来ていればと思う。また、同時に、今後の課題とすべきいくつかの点についても言及した。

#### 注

- 1 反語については不明な点が多く、現段階においては保留しておく他はない。
- 2 これは当然、文構造的観点からの考究と相関する。第五章参照。
- 3 ラムに否定辞が上接しにくいことについては、第二章第九章参照。
- 4 マジとジの文構造上の位置づけについては、第五章参照。

- 5 文法論における可能表現の位置づけについては明確にされていない。ただ、可能表現が幅広くモダリティなど様々な文法範疇と関わるものであることは確かなことである。可能表現とモダリティ表現の連続性については、井島(一九九一)参照。特に、《可能》と《可能性》をめぐる考察は参考になる点が多い。
- 6 ベシと可能の問題については、渋谷(一九九二)一六七頁参照。可能表現の側からモダリティ助動詞の意味に言及したものとして注目される。
- 7 肯定の可能表現は情報価値が少ない。古典の文章においては、特殊な場面・文脈を必要とする。
- 8 ベシのアスペクト的性質に注目する視点については、森山卓郎氏のご教示による。
- 9 尾上圭介(一九九二)参照。
- 10 ただし、「しづ心なく花の散るらむ」タイプラムは、「『かな』の意にかよふらむ」と言われ、《詠嘆》を表すと解釈される場合がある。もし、ラムに《詠嘆》を認めてよいとすれば、ちょうど、現代語のダロウが、  
今年の巨人は、どうしてこども勝てないんだろうねえ。  
のように、しみじみとした感情を表し得たと思われるが、使用される文型が制約されているのはいかにも特殊である。簡単にダロウと置き換えるべきものではない。

## 第一部のおわりに

第一部では、文とモダリティ助動詞との交渉について考究をおこなった。

第一章～第五章では、文構造との交渉という観点から検討を加え、モダリティ助動詞を述語階層の中に位置づけた。その位置づけをビジュアルに示したのが、中古語モダリティの階層モデル（第五章）である。現在の段階では最善と思われるが、階層に位置づけられない形式もあり、その処理も含めて、今後さらに修正を加え、より正確なものにしていきたいと思う。また、現代語ほどきちんと階層化できないと思われるが、テンス・アスペクト、ヴォイスなどのカテゴリーについても整備し、モダリティ層と連続させてみたい。これまで助動詞論という枠内で扱われていた形式はすべて、述語階層モデルに位置づけられ、より質の高い文法記述が期待されるであろう。

第六章～第九章では、文表現との交渉という観点から、様々な文表現との関わりについて考えてみた。第九章が一応のまとめとなるが、分析が不十分な点を残している。その主たる原因は、それぞれの文表現そのものについての考究が私人としても研究の段階としても、あまり進んでいないことが考えられる。とりわけ、反語表現、婉曲表現、詠嘆表現などのように、主としてレトリカルなレベルで議論されてきた表現について、文法的観点、意味的観点から見直し、きちんとした位置づけを目指すことが急務であるように思われる。

今後の研究に向けて、いくつかの課題を残すけれども、第一部では中古語モダリティの体系についての見通しを立てることができたように思う。その見通しをもとに、第二部では、それぞれのモダリティ助動詞に関する個別的問題を取り上げて考究していくことになる。まず、大局を見ようという意図から、第一部では、敢えて取り上げなかった問題、問題提起にとどめたものなどについて、深く掘り下げてみる場となる。その検討を通して、第一部の内容の見

なおしが当然なされることになろう。

## 第二部

### モダリティ助動詞の

#### 機能と意味

## 第二部のはじめに

第一部の総体的研究を承けて、第二部ではモダリティ助動詞の個別的問題を取り上げて考究する。

第一章～第四章は、ナリを中心とした、断定のモダリティをめぐっての考究である。「断定のモダリティ」は、これまで本格的に論じられることがなかったテーマであり、したがって、未解決の問題が多いのは当然と言えよう。本来、「断定」は文成立論と直結する意味なので、論じ方によっては、かつての陳述論へ回帰するおそれがある。しかし、本章では抽象論に走らず、まず、ナリという形式の構文的特徴を客観的に押さえていくことから出発する。

ナリをめぐっては、「ナリ論争」と称される議論があり、昭和三十年代から四十年代にかけて活発に議論がおこなわれたことはよく知られている。しかし、この議論は未解決の重要な問題を残したまま、いつの間にか立ち消えになって、いまだに収束を見ていない。この議論をきちんと整理しておかないと、モダリティ論を展開していくことは、とうてい不可能である。

そこで、本論は、第一章で「ナリ論争」の軌跡をたどり、その現在の意義と今後の研究課題を明確にしておく。続く第二章では、構文的観点から連体ナリと終止ナリの差異を明らかにする。第三章では、これまで区別が曖昧であった、連体ナリと体言ナリの差異について検討し、コプラ形式の組織について考える。第四章では、連体ナリと係り結びとの関係、終止形述語との関係について検討し、コプラ論の有効性について考えてみたい。

第五章～第九章は、推量のモダリティに関しての考究である。いくつかのテーマを設定し、それに関わるモダリティ助動詞について考究する。ただし、個別形式を概論的に論じるのではなく、いずれもモダリティの本質に関わる問題として取り上げている。

第五章では、モーダルな意味の派生の観点から、ベシの成立について考える。モダリティ助動詞の多義性の派生過程を取り上げる。第六章では、《推定》とテンスの関係について取り上げる。狭義《推定》の助動詞メリ、終止ナリがテンス形式を下接した場合について調査、分析をおこなっている。第七章は、モーダルのスコープをめぐっての考究である。ここでは、ラムの構文的特徴が中心となる。古来から問題とされてきた、「しづ心なく花の散るらむ」構文の問題について考えることになる。第八章は、事態の「現実性―非現実性の対立」(モード)という観点から、ムとマシの意味的対立について考えてみる。第九章では、否定推量のシステムをめぐっての論である。否定推量を表す複合形式ザラムを中心に、ザルラム、ジ、マジとの関係を論じる。

第二部では、主に伝統的な国語学でなされた、助動詞の個別研究の成果を継承しながら、新しい視点からそれらを発展させる試みである。

## 第一章 断定モダリティ論の前提

—ナリ論争の展開と学史的意義—

はじめに

連体ナリと終止ナリの差異をめぐる議論は、助動詞の研究において最も活発になされた議論のひとつである。古く東西の研究者が加わり、ついには「ナリ論争」と呼ばれるに至った。ところが、昭和四十年代半ばに一応の見通しが得られてからは目だつた進展が見られず、議論が停滞しているように見える。この状態については研究者の怠慢と責めるべきではなく、むしろテーマ自体の性格に依るところが大きいように思われる。

およそ、助動詞研究においては二形式の差異を求めていく手法が一般的である。たとえば、「ツとヌの差異」「キとケリの差異」「ラムとラシの差異」など。それぞれ、また本質的な答えは得られていないものの、それなりに手堅い成果を挙げてきたと言えよう。ところで「連体ナリと終止ナリの差異」という問題を考えるとき、その特殊性に注意する必要がある。他の場合は二形式が別個の存在であることが保証されている。ところが、ナリの場合は別々の形式として扱われるべきか、同一の形式として扱われるべきかを問うていく議論であつて、二形式の性質の違いを測定していく議論とは性質を異にする。それは自然、助動詞の意味体系に直結していく議論であり、本来的に個別論として扱うことが困難な性格を持っていると言えよう。こう考えたとき、ここ二十年ほどの議論の停滞は「ナリ論争」がもはや個別的に議論することの限界に達していることを露呈したものと見てよい。と同時に、今後どのように、総体の論としてのモダリティ論が組み上げられるかが問われていることを知らしめているであろう。

さて、総体の論に向かうためには、まず研究のながれを整理し、大切に継承していくべき部分と積極的に捨て去り、あるいは改めていくべき部分を見極めておくことが肝要であろう。その上でこれから進んでいく方向を定めていかなければならない。近年、学説史が盛んにまとめられるようになってきたが(注1)、その重要性を改めて確認しておきたい。研究分野の細分化、専門化や方法論の多様化によつて全体的な見通しが悪くなっていることもあるが、かかる学説史に対する要請は古代語の文法研究が転換期にあることを顕著に示しているのではないだろうか。本章もまた、その要請から起こされたものである。

ただし、ナリの学説整理については既にいくつか出されており(注2)、とりわけ近世から近代にかけては考証的な研究がなされているので記述を最小限にとどめ(注3)、むしろ議論の活性化した昭和三十年以降にポイントをおいて「研究のながれ」を見ていきたい。また、時代的には、中古に関する論考を中心に取り上げることとし、語源関係、上代語関係(ナリの表記の問題など)、中世語関係(ナリの区別の崩壊過程を追うものなど)の論考は割愛する。これは、成立論と生態論の混同、通時論と共時論の混同を避けるという理由によるが、まず中古の共時面を押さえておきたいという、本論の目的にもよるものである。

## 一 議論の成立

## 一・一 富士谷成章

連体ナリと終止ナリの差異をめぐる議論は富士谷成章の記述から始まつたと言われている。

《有倫》〔何にあり〕〔何なり〕これを〔靡なり〕といふ。《なり身》の〔未なり〕にまがはすべからず。〔里に



「チャ」または「デアル」など言へり。靡を受けては「ノデアル」「ノチャ」など里す。

先立たぬ悔いの八千度悲しきは流るる水の返り来ぬなり

—中略—

《なり身》〔何なり〕これを〔未なり〕といふ。《有倫》の〔なり〕は〔にあり〕の引き合へるにて、受けざまもたがへり。それをば〔靡なり〕といふ。まがはずべからず。里「ハイ」と言ふ。

秋の野に人まつ虫の声すなりわれかと行きていざとぶらはむ〔あゆひ抄〕

接続のしかたの違いによって、「靡なり」「未なり」に分かち、前者は「チャ」「ノチャ」後者は「ハイ」という意味の違いを指摘している。これが議論の発端であり、特に「未なり」を「ハイ」と理解することが「終止ナリ」《断定・詠嘆》説〕に向かう路線を方向付けたと言つてよい。「未なり」に関してはさらに、次の記述が示唆的である。

おほよそ、「鳴くなる声」など句中にあるは、里言寄り合はねば、すぐには当てにくし。かりに「ハイ、ソノ」と当てたれど、さる言葉常にも聞かぬことなり。されど心は得やすし。

《めり身》〔何めり〕大かた〔なり〕とよむに似ていささかたがふべし。〔なり〕は近く見聞く事を定かに詠む言葉なり。〔同〕

この記述より、将来終止ナリ《断定・詠嘆》説の弱点となる「連体節中に《詠嘆》が許容されてよいか」という問題点がすでに指摘されている。また、メリとの対応が指摘され、終止ナリは「近く見聞く事を定かに詠む」という理解が示されている。終止ナリは後世、《伝聞》（その規定の仕方はいろいろあるにしても）に象徴されるように、聴覚性と結びつけられる傾向が強い出発点としては視覚も含めた「見聞く」であることは注意されるべきである。

以上のような富士谷成章の記述は単に議論の扉を開いたというだけでなく、議論の本質に関わる示唆的なものであったと言えよう。

#### 一・二 本居宣長

次に本居宣長の記述について見ておきたい。

春くれば雁かへるなり、人まつ虫の声すなり、などの類のなりは、あなたなる事をこなたより見聞きていふ詞なれば、これは、アレ雁ガカヘルワ、アレ松虫ノ声ガスルワなど訳すべし。此なりは、チャと訳すなりとは別にて、語のつづけざまもかはれり、チャとうつす方は、つづく詞よりうけ、此なりは、切るる詞よりうくるさだまり也〔古今集遠鏡〕（以下、必要に応じて傍線を付す）

接続によるナリの区別に関して、また意味理解に関して成章とほぼ一致している。終止ナリに関してはやはり「見聞」という理解を示すが（注4）、「あなた」「こなた」という対象の存在する場と発話者の場とが対比的にとらえられていることは注意されてよい。このように富士谷成章、本居宣長という両巨人がほぼ一致した見解を表明したことにより、解釈上、「連体ナリと終止ナリを区別する姿勢」を確定すると同時に意味的差異の理解の方向性も確定されたといつていい。後世の研究者も何等かのかたちでその見解の影響を受け、あるいは依存しているのである。

#### 一・三 東条義門

近世の研究に關してもうひとり東条義門を挙げておきたい。

拾遺春に、春霞立るをみればあら玉の年は山よりこゆる也けり 続詞花 信濃のやとくさにおける白露はみがける玉とみゆるなりけり 山家集 雲にまがふ花の下にてながむれば臚に月は見ゆる也けり

これらはこゆ也みゆ也とあるべき様に思はる。その故は月をみゆる也けりこゆる也けりとやうになりをば連体言を受る辞とせるは多くは其上に云ることを解釈する意はへあり

又、みゆなりきこゆなりとやうに截断言を受るをりのなりは

秋の野に人まつむしの声すなり 古今秋 のたぐひいづれも然なんスなんと物にまれ事にまれ指示するころば

へありと思ひをり 然るに右に出せる拾遺なる続詞花なるなどの越る也みゆる也とあるはいかならんと思ひてしに」(『活語雑話』)

さらに『活語指南』でも連体ナリと終止ナリの区別が指摘されている。

断を受るなりと連体を受るなりと二つあり、こゑすなりなどもはあれあれと云きみあり。声がするわあれあれ也

連体言を受るなりはこれ此通りそれ其通りなどわけをいい述るきみあり。此連体言やたたちに体言やを受るナは本二アの約りなり

以上の記述から、連体ナリについては「解釈するところばへ」「わけをいい述るきみ」終止ナリについては「指示するところばへ」「あれあれと云きみ」のように把握されている。終止ナリについては成章、宣長の理解を引き継いでいるように見えるが、連体ナリについては「背後の事情を意識しながら断定する」という気分を読み取っており興味深い。しかし、「此截断言を受るなりはにありの約りとはいひがたし。少異あるか」と述べているように、義門も本格的に連体ナリと終止ナリの区別を論じるには至っていないようである。その他、富士谷御杖、中島広足、鹿持雅澄、富樫広蔭などにも終止ナリに関する記述があるが省略する。(注5)

近代以降も大槻文彦のユニークな説を除けば、基本的には国学の記述が継承されていくのであり、三矢重松、山田孝雄等の指摘も国学の精神を受け継いだものと言えよう。近世において作られたイメージは(とりわけ終止ナリに関して)、あたかも厚い岩盤のごとくそそり立つことになる。以上、議論の成立期における重要な記述を見てきた。

## 二 議論の展開

### 二・一 松尾捨治郎

ナリの議論を活性化させ、論争の幕を開けたのは松尾捨治郎であった。(注6)松尾は終止ナリが旧来主張されてきたように《断定・詠嘆》をあらわすのではなく、《伝聞・推定》をあらわすということを繰り返し主張している。

どうも終止形所属のなりを詠嘆と見ては、前後の意義の通じない場合が多いのに悩まされた。例へば

……………

我が子は二十になりぬらむ、博打してこそ歩くなれ。(『梁塵秘抄』)

——中略——

く、といふことだ さうだ といふ口語に当たるなりの例を古来の歌文に求めて、其が終止形所属であるか連体形所属であるかを、調べてみると、終止形の下のは大部分之に当たり、連体形の下のは(助動詞ではなく不完全動詞)は之に当たる者がない。即ち、終止形所属のなりは他から伝聞したことを語るか、又は自分が其の事実を推定する意である。推定といふのは、普通の想像よりはやや断定に近い意を含んでは居るが、推量想像を基調としたものであるから、之を想像の一種と見て差支えがない。一文の中に終止形所属のなりと連体形の下のなりとが併せ用ゐられて居るので有名な土佐日記冒頭の文、

男のすなる日記といふものを女もして見むとするなり

といふのも「男が日記を書くといふことを聞いて居る」意に見て、初めて記者の擬装的態度がよく味はれる。

(『国語法論攷』)

このように松尾によつて終止ナリ《伝聞・推定》説が提出された。古代の文学作品から、終止ナリの用例を帰納し、意味的に《伝聞》、《推定》で理解するという結論にいたる。また、《推定》について《推量》と《断定》との中間的なものであるという位置づけを与えており、このイメージは現在でもほぼ変っていないのではないだろうか。(注7) 松尾は《伝聞》については当初、「人づてに聞いた」の意として理解していたようであるが、その定義は明確でない。《伝聞》概念の「曖昧さ」は後世まで引き継がれていく。

大正八年、彗星のように立ち現われた松尾説は、しかし、すぐには支持が得られなかった。《伝聞・推定》説に賛同する佐伯梅友の講演までに四半世紀の月日が流れることになる。その後、松尾説が大方の支持を得るに至つて、研究のパラダイムは確実に転換されたと言える。終止ナリの理解をめぐつての対立の図式がまさに、ここから描き出されていくのである。

## 二・二 山田孝雄、松下大三郎、橋本進吉、時枝誠記

次に、世に四大文法として有名な文法家たちがナリをどのように把握しているか見ておきたい。

まず、山田は連体ナリを格助詞二と存在詞アリが結合したものと理解し、説明存在詞と名付けて複語尾からはずしている。一方、終止ナリについては「いづれも感動を強めてその断定を強勢ならしめるもの」とし、国学以来の理解を引き継いでいる。

松下は、早々と松尾説を支持している。

文語で推想態を示す方法は「らむ」「らし」「けむ」「けらし」「めり」「なり」を附けるに在る。「なり」は従来詠嘆の助辞と云はれてゐるが詠嘆などの意はない。やはり軽い推想で「めり」よりも客観的で判定性の不明確の度が極めて微なものである。——中略——「秋の野に人待つ虫の声すなり我がと行きていざ訪らはむ」について「聲がする様だ、確かにそうらしい」といふ意である。「なり」が詠嘆でなくて推想であること及びこれに第二活段

の用ゐられることを発見したのは松尾捨治郎氏である。——中略——「なり」は第三活段へ附くのである。(ラ行変格の第三活段は「り」「る」の二つがあつて「る」の方に附く。)「なり」が第四活段へ附いて「聲するなり」などいふのは二活の「に」の轉活用であるから違ふ。(『改撰標準日本文法』)

ちなみに、松下は連体ナリについては「断定の助助辞」とする。

橋本はナリの扱い方についてきわめて慎重な態度をとっている。

指定の「なり」は連体形につきますが、また古く終止形に付くものがありました。——中略——これ等の「なり」を詠嘆の意に解して、詠嘆の意味の「けり」と共に詠嘆の助助詞の中に入れる説もありますが、この「なり」については色々異説もあり、私自身としても、之を詠嘆の意味に解するのは誤りで「なり」は本来指定の「なり」とおなじものであると考へておりますし、——中略——この種の「なり」が指定の「なり」と同じものであるとしても、終止形に付く事は之と違つてゐますから、さういふ意味で別に出すことも理由はありますが、之を詠嘆の助助詞とするのは賛成できません。(『新文典別記 上級用』)

違いを認めるにせよ、結局どちらのナリも「指定」が本来の性質であつて積極的に「詠嘆」を支持することに難色を示している。しかし、一方で「助助詞の分類について」(『国語と国文学』昭和十一・十)においては連体ナリは「指定」、終止ナリは「詠嘆」(実は伝聞)と分類されており、終止ナリ《伝聞・推定》説の支持、《断定・詠嘆》説の支持に関して慎重な態度をとっている。

時枝は『日本文法 文語編』において連体ナリは「指定」、終止ナリは「伝聞・推定」をあらわすとして松尾説を支持している。しかし、その根拠については明らかにされていない。ただし、終止ナリのラ変型活用語の承接に関してアリナリ→アナリという変化を考へるといふ見解を示していることが注目される。

以上のように、松尾説を積極的に支持する松下、時枝、伝統的な《断定・詠嘆》説を支持する山田、態度表明を保

留している橋本とナリの把握に関しては様々である。

## 二・三 佐伯梅友、遠藤嘉基

松尾説に賛意を示し、《伝聞・推定》の普及に大きく貢献したのは佐伯梅友の論考である。(注8) 佐伯は『平家物語』から《伝聞・推定》説を補強する好例を指摘したのである。(注9) 以下の文章は、信濃に流されていた大納言資方が赦によって都に召し返されて院参し、後白河法皇に今様を歌うよう求められた場面である。

法皇「いかにや、夢の様にこそおぼしめせ。ならばぬひなの住まひして、詠曲な(ン)ども今はあとかたあらじとおぼしめせども、今様一つあらばや」と仰せければ、大納言拍子と(ツ)て「信濃にあんなる木曾路河」といふ今様を、これは見給ひたりしあひだ、「信濃に有りし木曾路河」とうたはれけるぞ、時にと(ツ)ての高名なる。(巻六・嘆声)

ナリとキとの違いに注目し、「あんなる」を「伝聞」の意で解さないと資方の機転が生きてこない、したがって話の面白さがわからないという。つまり、「直接体験」のキと対比するためにはナリの意味を「間接体験」(すなわち「伝聞」)の意で理解するべきだという主張である。この理解は妥当であり、ほぼ疑う余地がない。

一方、遠藤嘉基は《伝聞・推定》説を否定する立場をとる。まず、「新講和泉式部物語(七)」において、《伝聞・推定》説に対する疑問を提出した後、「新講和泉式部物語(九)」において

(イ) 傳聞推定は断定とは次元を異にしたことばである、もちろん接続の相違は意味のそれを示すものであろうけれども、次元を異にしたものが文法的意思として取り上げられていいものであるうか

(ロ) 鑑賞の立場に立つて考えると、傳聞推定説には疑問が出てくる、すなわち、この説は今まで多く散文に用例が求められているようだが、和歌にあてはめてみると、鑑賞に堪えられない、かえって詠嘆の気持ちが強い(注10)

という二点を指摘している。そして、終止ナリの表現は「断定と情意の総合的表現」であるという見解を示している。「詠嘆」を改めて「情意」と言っているもの、別の箇所では「詠嘆のふんいきが生まれる」(六一下)「詠嘆的なふんいきがকাশ出される」(六一上)「詠嘆的なものが感じられる」(同)と述べていることからすれば、「よ」「かな」の感動の助詞による「詠嘆」との区別を考えた上でのことであって、やはり伝統的な《断定・詠嘆》説を継承する理解と言えよう。

さて、前出の二つの論考において、遠藤の提起した問題は二つある。まず、助動詞の意味の把握あるいは規定の仕方に関する問題である。それを端的に示すのは、「傳聞推定説なるものは表現の意味と素材の意味とを混同しているのではないか」と疑問を呈している部分である。「音響に関わっている」のは素材の問題であってそれを助動詞の意味として認めることへの疑問である。(注11) 助動詞の意味を素材の把握の仕方(次元)で規定しようとするならば「素材の意味」が領海侵犯をしてきては困るといふわけである。そして、連体ナリも終止ナリも素材の把握においては「断定」であって差がない(終止ナリには「情意性」が加わるのであるが)と見る。これは、助動詞の意味を考える上において「ゴトの意味」と「判断の意味」との関係をどのように扱っていくかに関わる大問題であって、助動詞の本質論であるといつていい。(注12) この問題は現在においても解決されていない。

もうひとつは、終止形の陳述(その定義は明確でない)と終止形接続の助動詞の関係に関する問題である。終止ナリの情意性が生まれてくる原因について述べるところで、

終止形は体言と違つて、そこで判断を示す主体の働きが完了しているから、それに「なり」が加わると、いよいよ陳述が強まることになり、そのために、主題が情景であるばあいは、情意が自然にকাশ出されるのではないか。

と述べている。他の終止形接続の助動詞の場合も「情意性」を認め得るのか、といった疑問もあるが、ここでは措く

ことにする。ここで注目したいのは、用言の終止形のところですのである種の判断を積極的に認め、それに助動詞の「判断の意味」が加算されて「情意性」が生まれるという理解である。一方で、終止形そのものに「判断の意味」になわせた、終止形終止句そのものに「判断の意味」をになわせる考え方をとらない立場もある。終止形接続の助動詞の問題は現時点においても解明されていない。今後の重要課題のひとつと言えよう。

以上の二点はナリの議論の範囲を越えて、助動詞意味論、文構造論の本質に関わる問題であり、問題提起のかたちではあるが遠藤の論考は示唆的である。

このように、佐伯、遠藤という解釈文法の二大巨匠がはやくに取り組んだことは、ナリの議論が古典の読解という実用的要請において展開されるという性格を象徴しているように見える。また、その性格ゆえに意味的観点からの分析に傾斜していくのも必然であったと言えよう。両大家の見解の対立はそれぞれの門下生にも受け継がれながら、議論をさらに活性化させていくことになる。

## 二・四 小松登美、田島光平

実用上の要請もあって意味解釈の面からの分析や議論に偏っていた中で、構文的観点から連体ナリと終止ナリの差異を指摘したのが小松登美である。この研究がナリの構文的観点からの研究の基礎を築いたといっていいたいだろう。小松は連体ナリと終止ナリの確例（上接語が終止連体異形の例）を分析し、次のような原則を帰納した。

1 「終止なり」を伴う動詞の主語は、話し手以外の存在である。したがって「なり」直上の動詞主語が話し手自身の場合、その「なり」は「連体なり」と断定しうる。（ただし、「連体なり」を伴う動詞の主語が、話し手以外のことはむろんあるから、この原則の逆用はできない。）

2 「終止なり」には、話し手の聞く行為と何らかの意味で関係ある環境下にあられる傾向が強く認められる。従って文脈上、話し手の聞く行為と関係づけられない環境下にあられる「なり」は、「連体なり」である蓋

然性がきわめて高い。

3 「終止なり」と「連体なり」とは活用形ならびに下の語への接続にそれぞれ限定がある。

細則イ 未然形は「連体なり」しかない。

ロ 連用形中「に」の形は、「連体なり」しかない。

ハ 連用形「なり」が「けり」を取るのは「連体なり」のみである。「き、つ」へは、「終止なり」が接続する蓋然性が高い。

ニ 終止形では、仮定の「とも」へは、「連体なり」が、詠嘆の「や、な」へは、「終止なり」が接続する。（「かし」へは、いずれも接続する。）

ホ 連体形では連体法は「終止なり」があらわれる。各種助詞類へは「終止なり」が、推量の助動詞類へは「連体なり」が、接続する。

4 係結びの際、「係助詞」なる（または「なれ」）の形で結んでいるのは原則として「終止なり」である。さらに、ラ変活用語につづく「なり」に、以上諸原則をあてはめて行くと、

5 ラ変活用語撥音便形につづく「なり」は、「終止なり」である。

〔講座 解釈と文法4〕土佐日記の解釈と文法上の問題点

これらの原則については、後の研究者の調査によって確認されているところであって、（注13）現在でも大筋は動かないものである。小松登美によって、ナリの議論が文と連絡がついたのであり、その功績は大きい。意味的レベルで議論していると形式から離れた抽象論に終始してしまう危険性が大きいがこの小松原則の提示によってナリが文法の問題として議論の場を得たと言えよう。

さて、ここまで終止ナリに注目して研究のながれを追ってきた。連体ナリはいかように扱われていたのか。その実態は田島光平に詳しい。

この助動詞（＝連体ナリ）は、研究対象としてはたいへん不遇な取扱いを受けているように思う。前述の、接続の面と、いつ現われたかということ以上には深い関心が払われていないようである。一つには、これは、古典文法の研究が古典の解釈と結びついてなされることが多く、現代語に正しく言い換えられれば、それ以上に深い関心を呼ぶことが少いといった事情によるものかと思う。

田島は、あまり注目されることがなかった連体ナリに注目し、その意味、用法を『竹取物語』など平安初期の資料で観察している。その記述の中で示唆的な点を二点挙げておきたい。

まず、連体ナリが根拠をもつて「説明」に用いられるという点である。

平安時代初期の連体形承接の「なり」は、その連体形が体言的に用いられる場合を除いては、根拠をもつて（明示または暗示）相手（聞き手または読者）に説明する場合に用いられる辞であった。（「連体形承接の『なり』について―竹取物語を中心にして―」『国語学』56）

「已然形ナバ」あるいは「ステ」というかたちによって根拠が明示的に示される場合、表面上根拠があらわれないけれども、文脈の背後に根拠が場合、いずれにしても何等かの根拠をもつて相手に説明する例が多いという。これは登場人物の会話に限らず、物語の地の文の例においても作者が読者にむかって「いま私が言ったのは、こういうわけだったのですよ。」という語りかけと理解できるという。現代語ノダの研究において「説明のムード」と呼ばれている用法にあたるものであろう。（注14）

第二点として、連体ナリと《原因理由推量》をあらわすラムとの対応を指摘していることである。

あしくさぐればなきなり

これは子安貝の話である。石上中納言は従者から「貝がない」という報告を受けて、「あしくさぐればなきなり。」と立腹したというのである。これを考えてみるに、子安貝の「ない」ということは分っていることであるから、中納言の言いたいのは「悪しく探れば」という「ないこと」の理由・根拠である。これは「なきはあしくさぐればなり」と言うのと内容としては同じことを言っている。従ってこの「なり」はある事柄の根拠に対する断定を示す語として働いている。これは、

吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風をあらしといふらむ（古今集・秋下）の「らむ」が原因・理由に対する推量を示すといわれるのと対応すべき用法である。この推量に対して断定なのである。（『同』）

「原因理由推量」の本質を考え、連体ナリとラムとの関係を考えていく上においてこの指摘は重要である。「断定の助動詞」「推量の助動詞」というフレームにとじ込められて接触することが難しかった連体ナリとラムとを対応させる視点を明確に示したことは意義深いことである。

以上のように、田島は従来、注目されにくかった連体ナリに光をあてて観察、分析をおこなったわけだが、連体ナリ特有の性格を抽出していくことによって事実上、連体ナリと終止ナリを分離していくことになり、連体ナリと終止ナリの差異を明確にしていくことになった。その成果は、後に北原保雄などによって受け継がれていくことになる。

## 三 議論の熟成

## 三・一 塚原鉄雄

文体的観点からの分析において、実証的な方法によって成果をあげたのが塚原鉄雄である。「活用語に接続する助動詞（なり）の生態的研究―王朝仮名文学作品を資料として―」（『国語国文』昭和三十四・七）をとりあげてみる。

この論考ではまず、古来からの《断定・詠嘆》説を（甲）説、松尾以来の《伝聞・推定》説を（乙）説とし、（乙）説が（甲）説の批判となりえていないことを指摘する。特に、重要なのは《伝聞・推定》概念の拡大に対して批判をおこなっていることである。塚原は（乙）説の論拠となつていくつかの条件の中で「話し手の〈聞く〉行為と、常に何らかの意味で関係していること」をとりあげ、この条件が拡大適用されていることを指摘する。〈対象が話し手の視界の外にある場合〉をも《伝聞・推定》とすることに對して、「推量の助動詞」「回想の助動詞」との示差性が求められないという批判が加えられている。この批判はもつともであり、掘り下げていけば、いわゆる「あなたなる場」の認定の問題に行着くであろう。このように《伝聞・推定》概念そのものの厳密な定義がなされていないことについては、塚原の指摘するとおりであろう。ただ、それを言うなら、同じように《断定》《詠嘆》概念が拡大化されていないかという検討や両者の厳密な定義が必要とされるであろう。

さて、塚原は、この（甲）（乙）の議論において「理論的な追求と、実証的な調査とが、ともに不徹底のままに放置されている」ことから、平安朝の仮名文学作品を資料として〈地の文〉〈心理〉〈会話文〉〈和歌〉において連体形に接続するナリ、終止形に接続するナリ、および両者の識別が困難なナリについてその使用状況を調査し、その特色を明らかにしている。そして次のような仮説を導出する。

いま、『源氏物語』以降の作品を、除外して検討すると、『日記文学』では、終止形接続の〈なり〉が、〈地の文〉にも用いられるけれども、『物語文学』では、『会話文』にしか、用いられていない、ということになる。それぞれのジャンルが、成立する環境条件を考慮すれば、この事実は、ひとつの仮説を、導き出すであろう。すなわち、終止形接続の〈なり〉は、口頭語的性格を具備したのではなかったか。連体形接続の〈なり〉が、平安朝以降の成立であり、終止形接続の〈なり〉は、その意味で、古形を保存するものであった。一種の規範意識―恐らく体言接続との相関関係がある―から、連体形接続が、標準的な方式とされたが、連続的に継承される口頭語の世界では、終止形接続が、伝統的に保存され、私的な『日記文学』では、文字言語としても、使用されたのではあるまいか。この仮説は、勅撰集の詞書に、終止形接続が、見当らない事実をも説明し得る。標準的な連体形接続は、社会的な文体に用いられ、無論、私的な文体にも用いられたけれども、私的な文体には、伝統的な終止形接続の、活躍し得る余地が、残されていたと考える。

これは、連体ナリと終止ナリの使用されている文体の差異を明らかにした、重要な指摘である。さらに、和歌に用いられた終止ナリについても、「鑑賞的目的の立場に依拠して表現された和歌には用いられず、伝達的手段としての観点に、立脚して詠作された和歌にだけ用いられている。」という分析を行なっている。このような実態調査をもとにした分析はきわめて有意義である。いきなり意味の問題に入るのではなく、まず「使用状況」を押えようとする堅実な方法である。

ただ、その分析の結果を見れば、むしろ《伝聞・推定》説を支持する立場にとつてきわめて有利な材料を提供しているように思われる。それは、『伝聞表現』がいかにような「場」でなされるかについて考えてみればあきらかである。《伝聞》という文字面の印象に引かれると、どうしても《聞く》行為をイメージしてしまいがちであるが（そして実際その方向で拡大されるのだが）『伝聞表現』が実現される「場」は実は「語られる場」なのである。たとえば、

長島監督は留任する／そうだ／んだつて／らしい

といった《伝聞表現》は聞き手と対話していない場面では不自然であろう。従来、あまり注意されていなかったようだが、《伝聞表現》とは「相手に語る場」においてのみ成立し得る表現であることが重要である。したがって、もし、終止ナリの意味に《伝聞性》が認められるならば、塚原の指摘した「物語の会話文での多用」や「伝達的手段としての観点に、立脚して詠作された和歌にだけ用いられる」といった使用状況の報告は《伝聞・推定》説論者にとってはその説を補強する上で非常にありがたい報告となるであろう。この報告がその後有効に生かされていない（特に《伝聞・推定》論者の間で）のは残念である。

また、「無論、連体形接続の（へなり）」と、終止形接続の（へなり）」との異同が、文体的な相違にとどまるか否かは、決定できない。それには、意味機構の検討が必要となる」と言われるように、文体的観点からの分析と意味的観点からの分析が連絡するかたちで展開していけば議論の生産性が増すことはまちがいないであろう。その点は、今後に残された大きな課題であると思われる。

### 三・二 北原保雄

構文的観点からの研究として大きく貢献したのが北原保雄であろう。北原のナリに関する論考はいくつかあるが、とりわけ重要な「終止ナリと連体ナリ―その分布と構造的意味―」（『国語と国文学』昭和四十一・九）をとりあげてみたい。

この論考においては様々な興味深い記述がなされているけれども、あえて絞れば次の二点がポイントになるろう。まず、撥音便形接続のナリが終止ナリと同定されること、第二に連体ナリが準体句を承接することである。

ナリが形容詞に下接する場合に、

① 赤きなり。 美しきなり。

② 赤かんなり。 美しかんなり。

のごとき二様の承接がある。北原は①を第一類のナリ、②を第二類のナリと呼んでいる。そして、各々の活用形の分布を調査すると、

A 終止形（へなり）の用例は、第一類、第二類の両方に分布する。

B 已然形（なれど）の用例も両方に分布する。

C その他では、第一類に用例のある場合には、第二類に用例がなく、第二類に用例のある場合には、第一類の方に用例がない。

という事実が認められるという。そしてこの活用形の分布は中古の仮名文学資料一般に、一致して見られるということである。さらに、第一類のナリが連体ナリの活用形の分布と一致していること、第二類のナリが終止ナリの活用形と一致していることが明らかにされている。この一連の調査によって撥音便接続のナリが終止ナリと認められることとなったわけである。

ただ、連体ナリと終止ナリの差異として稿者が注目したいのは、むしろ後者の指摘である。つまり、連体ナリだけに見られる「くくナリ構文」の存在である。連体ナリには、

宮の御心のいとつらきなり

身のいと心うきなり

のように主格がノやガでマークされてナリで終止する構文が存在している。この文の構造を考えると、一応、



身のいと心うきなり。

身のいと心うきなり。

とすれば、主格助詞ノの顕在をうまく説明できる。つまり、

身のいと心うきなり。

という理解が可能になるわけである。連体ナリは直上の活用語だけを承けているのではなくて、準体句を承けていると解釈されるわけである。このように句との関係に注目する視点は文構造をとらえる上で重要である。(北原は句と終助詞との関係にも注目している)

北原保雄(一九八一)は古代語の助動詞の総体を扱っている。特に連体ナリを基準として助動詞を表現性の面から分類している点には注目する必要がある。連体ナリの位置を客体的表現と主体的表現との境界線として、各助動詞の表現性が色分けされており、文をプロポジションとモダリティに二分する現代語研究の考え方に通じるところがある。また、ベシ、ケリの意味の分化と連体ナリとの承接(上接も下接もする)との関係を明確にしている点などこのような連体ナリの活用は個別論にも有益な点が多い。

このように北原(一九八一)においては、独特の文の重層的構造観の上に立った考究が展開されており、現代語ノダとの対照も見られてナリ研究がみごとに応用されている。今後は古代語において特徴的な「係り結び」との関係をもつものようにつけていくかが課題となろう。文法史上、連体ナリはどのような意義をもつのかという問題は「係り結び」

の問題と相対化して考究されるべきであり、中古に入ってナリが分化してくる必然性もその視点からとらえ得るものと思われる。

### 三・三 大木正義、重見一行、糸井通浩、秋本守英、小松光三

本稿では塚原鉄雄の文体的観点からの分析、北原保雄の構文的観点からの分析の成果を継承しながら、さらに発展させた研究を見ていきたい。

まず、構文的観点から連体ナリを分析し、連体ナリを構成要素にもつ述語文節の構造について検討したのが大木正義である。それまで、終止ナリとの識別という範囲で扱われていた連体ナリと他の助動詞との承接関係を目を向けて詳細にわたって分析を試みている。その他、連体形欠如の問題など興味深い現象を取り上げている。

また、重見一行は田島光平の研究の成果を継承しつつ、情報構造の観点を導入して連体ナリの構文を考究している。ただ、ナルラムについての論考は、ナルラムという個別的な取り上げ方ではなく連体ナリと推量系助動詞群との関係という大きな範囲で扱うべき問題であろう。また、ラムが連体ナリの手を借りずに「原因理由推量」(疑問系も含めて)をなしうる事実との関係をもつと掘り下げるべきではないだろうか。

一方、文体的観点からナリの性格を考究しているのが糸井通浩、秋本守英である。ナリケリという承接に注目して和歌、散文の文体的特徴を明らかにしていく上での指標として使おうという試みである。糸井による和歌や源氏物語の文章の分析、(注15) 秋本による和歌の表現性に関する分析(注16)はそれぞれ成果を挙げている。今後さらに補強していくには構文的観点からの分析との統合が図られるべきであろう。その方向で考えた時、ナリケリというかたちを固定し、連体ナリ+ケリと体言ナリ+ケリとを分けられない処理でよいか、(注17) ニソアリケルといった係助詞割込み型の「ニアリ表現」と「ナリケリ表現」との文体的差異をどうとらえていくかという問題が解決されなければなるまい。かかる係助詞割り込みの現象はもちろん文法的にも問題となるところである。

ナリの複合用法について検討を加えたのが小松光三である。小松は「確認」の深化と変質という観点からナメリ、ナナリなどの複合用法の意味について考察している。演繹的にナリとメリ、ケリなどの意味の共通する「確認」という意味レベルを設定し、そのレベルにおいて助動詞の意味を規定しようとする理解に基づく考究である。ただ、その規定が具体的な現象とどのように結びついていくのかという検証の面において今後課題を残しているのではないだろうか。この課題を克服していくためには、積極的に文との連絡を考えていくべきで、文中要素との関係（上接句、係助詞などの関係）や相互承接などの観点から具体的な構文現象との有機的な関係づけが必要である。これは、小松に限らず従来の助動詞研究全般に見られる弱点と言える。やはり文法は文から出発するべきで、助動詞といえども文の構成要素のひとつに過ぎないことを最確認しておくべきであろう。

以上、近世から現在までながれを追ってきたわけだが、紙数の関係上、取り上げられなかった論考も数多い。富士谷成章の見解を継承した竹岡正夫の論、(注18)メリとの対応から終止ナリを連体ナリから分離した春日和男の論、(注19)上接語や文の題述構造からナリの差異を検討した木之下正雄の論、(注20)アクセントの観点からの奥村三雄の論、(注21)「伝聞表現」について検討した井手至の論、(注22)ラ変型活用語(アリ、侍り)の撥音便表記について検討した大野晋の論(注23)など、研究史上の意義を認めつつも割愛せざるを得なかった。

#### 四 まとめ

今回は中古の共時態に関する論考に範囲を限って、近世から現在にいたる研究のながれを順に辿ってきた。ここでもそのながれを分析の観点から整理しておきたい。

もともと、このテーマ自体が和歌の解釈や実作上の規範という点から注目されたものであった。国学の諸研究に見られるように解釈上、「どのような訳語をあてるか」ということに始まり、意味的観点からの分析が長い間積み重ねられてきた。松尾捨治郎の終止ナリ《伝聞・推定》説もその産物であった。だが、昭和三十年代に入ると、従来おいておかれがちだった連体ナリがとりあげられるようになり、構文的観点からの分析が行なわれるようになった。それらは、結果的に松尾説を補強する形になったが、一方で伝統的な理解を継承する立場は連体ナリと終止ナリの差異を文体的な性質の違いに求める立場からの考究もなされた。構文的観点からは北原保雄の研究、文体的観点からは塚原鉄雄の研究がそれぞれの立場の研究の一つの到達点であると言える。このように、意味偏重主義から脱却して、広い視野から眺めることは間違いないが有意義なことであった。しかし、これは諸刃の刃であって、立場が分れてしまうことによつて議論としては噛み合いにくくなつてしまった。そして、そのまま議論が立ち消えになりつつあるのが現在の状況ではなからうか。もちろん、その後、その背後に、個別論として扱いにくいこのテーマ自体の性質が作用していたことも見逃せない。《断定・詠嘆》説論者も二つのナリを全く同一と見ていたわけではなく、何らかの差異があることを認めた上で、その差異は同一に扱える程度のものだと主張しているにすぎない。また、構文的観点から連体ナリ、終止ナリを別々に切り離す立場が即、終止ナリⅡ《伝聞・推定》を主張するものでもない。その意味では、《伝聞・推定》説を取るか《断定・詠嘆》説を取るかに固執して、問題を単純化、矮小化してしまうよりは、研究のながれの教える部分を積極的に享受し、それを今後、古代語の文法研究にどう活用していくかの方策を練ることに時間を費やした方がはるかに生産的であろう。

そこで、このながれが現在の我々に提起する問題を検討してまとめに代えたい。研究のながれの意義はそこから知られるであろう。ただし、この議論が教えるところは多種多様であるから、最初に区画整理をしておくことにする。ナリの研究を通して提起された問題を、基礎的問題(議論の土台としての枠づくりに関わる問題)、応用的問題(今

後他の諸形式の分析・記述が進むにつれて明らかになるであろう問題)、本質的問題(常に助動詞論につきまとう根本的な問題)の三つに分けてそれぞれ考えていくことにする。

a 基礎的問題

a 1 「伝聞概念」について

従来、「伝聞」概念の理解が一定していないために、議論がかみあいにくい側面があった。「音響に関する素材」まで含めて「伝聞」と言うのか、狭く「人づてに情報を得ること(情報把握)」だけを指して「伝聞」と言うのか。古代語研究においてはまだコンセンサスが得られていないようである。いずれにせよ、「伝聞表現」自体の研究が内省の効く現代語においてさえ充分になされているとは言えないのは、扱いにくい性質を反映しているのであり、古代語を対象とした議論で混乱が生まれてくるのは当然とも言えるであろう。現代語で「伝聞表現」を分析・記述し、手がかりを得るところから始めるべきであろう。

a 2 「詠嘆概念」について

これも「伝聞」概念と同様、きわめて曖昧なままである。一口に「詠嘆」と言っても従来、文末言いきりの際の余情(連体止め、体言止め)、助動詞(ケリ、ラムの特殊な場合)、終助詞(カナ、ナなど)など多様なものがあった。(《断定・詠嘆》論者が「伝聞概念」の拡大解釈を批判することはあっても、《伝聞・推定》論者が「詠嘆概念」の拡大解釈を批判することが見られないのは奇異なことである。)まず、文表現の担う「詠嘆性」と個々の形式帯びる「詠嘆性」とを分けて扱うべきであろう。また、終助詞類は形式それ自体の意味として「詠嘆」というレッテルを貼って済まされがちであるが、もちろんこの扱いは正当でない。「詠嘆」は基本的には「確定的なコトガラを述べ上げる」時に用いられる文表現自体の担う「表現性」として設定されるべきものである。さらに、「感嘆」と「詠嘆」との区別も整理されるべきであろう。(注24)

a 3 「断定の助動詞」の整理

意味的に現代語タとの置き換えがきく場合が多いことにより、体言ナリ、連体ナリ、(ニアリを含む)が一括されることが多いが、構文的には別物であるから分けて扱っていくべきである。体言ナリは体言ニアリとの関係やいわゆる形容動詞との連続性が問題になろうし、連体ナリの方は連体ニアリとの機能分担が明らかにされなければならない。連体ナリを安易に分解・復元して連体ニアリと一括して扱うことは、少なくとも分析のレベルでは避けなければならないであろう。

b 応用的問題

b 1 係助詞との関係

小松登美などの指摘があるように、連体ナリはゾ、ナム、コソ、ヤ、カノ結びにはならない。(この点、体言ナリとも違う)一方、終止ナリはそれらすべての結びになる。(ただしヤ、カは稀少である)一方で、連体ナリはハと打ち合うことがあり、「SHPナリ」という構文を形成することも多い。この現象をどう解釈するかについてはナリの問題として扱える範囲を越えており、各係助詞の機能、係助詞の体系に関する研究と提携して今後さらに分析が進められていくべき問題である。

b 2 連体節中の生起

連体ナリは連体節中に生起しない、一方終止ナリは生起する。ここで、なぜ、連体ナリは連体節中に生起しないのか、また連体節中に生起している終止ナリは一体どのような働きをしているのかという問題が起る。連体ナリを現代語ノと置き換えて「雨が降る日」は言えるが「雨が降るの日」は言えないということから説明できたと見る向きもあるが、それでよいのか。古代語の連体節とモダリティとの関係の分析が充分なされていない現在、この現象の説明には慎重でなければならぬ。逆に現代語の連体節と古代語の連体節の価値を知る上においてモダリティ形式との関係

は有効な手がかりとなるであろう。

### b 3 相互承接の説明

連体ナリと終止ナリの他形式との相互承接に関して、その実態については調査の積み重ねによってほぼ明らかにされているけれども、その説明（特に、キ、ツの承接に関して）がなされていない。また、終助詞との承接にしても終助詞自体の研究が進んでいないこともあつて、説明がなされていないのが現状である。もちろんこれもナリだけの問題ではなく、他形式の個別研究の進展と連動させていかなければならない。従来、相互承接の研究は「助動詞の分類」論に終わりがちで、個々の形式の意味的性格に立ち入った論が充分でない。「分ける」こと自体は実用上（たとえば国語教育において）の意義が大きかろうが、文法研究においては助動詞の単なる箱詰め作業に終わらない、有機的な「相互承接」研究が要請される。

### c 本質的問題

#### c 1 「素材の意味」と「判断の意味」の関係

遠藤によって提起されているように、助動詞の意味を「素材の意味」と「判断の意味」の関わりにおいていかように規定していくかという問題である。これに関しては、「素材の意味」と「判断の意味」を量的に理解し、相互承接の事実と対応的にそれぞれの意味の濃淡の段階差を考える立場もあるが、すべて「素材の意味」において規定する考え方もありうるであろう。

#### c 2 終止形接続、連体形接続の問題

終止形終止の文的単位にさらに助動詞がつくことの意味、また、先行のコトをわざわざ準体句にすることの意味。また、同じくコトガラと言つても終止形終止の文的単位によって表現される場合と準体句によって表現される場合の差異はどこにあるのか。稿者は前者の文的単位を「事態句」、後者の準体句を「素材句」（素材の意味卓越型の句）と

して二種類のコトを想定している。

#### c 3 体系化へ向けての方策

c 1の問題とも連動して、どのようにして助動詞の意味の体系化を図っていくか。その際、いかようにして述語層と連絡をつけていくか。従来の助動詞個別論の記述を取り込みながら、その為にも有効な述語構造のモデルが提示されるべきであろう。これについては別稿を用意している。

以上、ナリの議論が提起した問題のうち、重要と思われる問題を取り上げ検討してきた。こうした形で今後の研究に向けて開かれた部分を示すことにより現時点でのまとめに代えたい。

### おわりに

近世以来の研究により、連体ナリ、終止ナリをめぐる様々な現象の分析化が進んで、ひとつの到達点に達したと見られる現在、この議論をいかに有効なものにしていくか、どのように、文法研究、文体研究等において役立てていくかを思索するべき時であろう。

現象面における「ナリの差異」に関して言えば、議論の未残されたのは「連体ナリと終止ナリはかなり違ったものである」というある種の共通感覚であり、むしろ出発点からさほど離れていないとも言える。しかし、議論の周辺には文構造に関わる大きな問題、助動詞論における本質的な問題など重要な問題提起がなされており、それらの存在を知らしめるだけでも「ナリ論争」の意義は大きかったと言えるのではないか。

今、ナリの調査、分析に関わった膨大なデータが残され、分析方法（他の助動詞の分析にも使える視点が提示され

ている)が残されている。一方で、未解決な問題群も山積みされている。今後我々後学の者が活用し、あるいは解決していかなければ先学の遺産を眠らせたままにしてしまふことになる。いささか狭くなった視野を本来的な体系整理という広い視野に開いていくという軌道修正がとりあえずの課題である。

古代語の文法研究において、「ナリ論争」の検討は必須であると言える。特に「断定のモダリティ」論をなすためには「ナリ論争」の整理、把握が前提となる。中古語モダリティの体系を構築する上で、必ず通らなければならない道なのである。

注

- 1 鈴木泰(一九八四)など。
- 2 築島裕(一九五七)参照。
- 3 武田孝(一九七〇)、佐田智明(一九七四)参照。
- 4 この理解は竹岡正夫(一九五五)などに継承されている。
- 5 富士谷御杖『土佐日記燈』『俳諧天 波抄』、中島広足『玉あられ窓の小篋』、鹿持雅澄『古言訳通』、富樫広蔭『詞の玉櫛』に記述がある。
- 6 《伝聞・推定》説が最初に公表されたのは松尾(一九一八)である。
- 7 高山善行(一九八六)参照。
- 8 佐伯梅友(一九八八)参照。
- 9 詳細は北原保雄(一九七六)参照。
- 10 《断定・詠嘆》説は本来和歌の解釈から帰納されたものであることからすれば自明のことである。
- 11 「詠嘆概念」が定まっていなかったために、拡張使用されているように見える。

- 12 佐治圭三(一九六六)参照。
- 13 北原保雄(一九六六)、小松光三(一九八二)参照。
- 14 寺村秀夫(一九八四)、小金丸(野田)春美(一九九〇)、益岡隆志(一九八九)参照。
- 15 糸井通浩(一九六九)(一九七七)(一九八七)参照。
- 16 秋本守英(一九七〇)(一九八七)参照。
- 17 体言ナリと連体ナリが差異を見せる現象はいくつかある。第二部第三章参照。
- 18 竹岡正夫(一九五五)(一九五六)参照。
- 19 春日和男(一九六四)(一九六八)参照。
- 20 木之下正雄(一九五五)参照。
- 21 奥村三雄(一九六九)参照。
- 22 井手至(一九七〇)参照。
- 23 大野晋(一九五五)(一九八六)(一九八八)参照。
- 24 尾上圭介(一九八六)参照。

## ナリ研究文献一覧

- 山田孝雄 (一九〇八) 『日本文法論』(宝文館)  
 (一九三六) 『日本文法学概論』(宝文館)  
 三矢重松 (一九〇八) 『高等日本文法』(明治書院)  
 松尾捨治郎 (一九一八) 『小疑三束』(『国学院雑誌』大正八・八)  
 (一九二八) 『国文法論纂』(昭和三・四)  
 (一九三六) 『国語法論攷』(昭和十一・九)  
 (一九四三) 『助動詞の研究』(昭和十八・二)  
 松下大三郎 (一九二三) 『標準日本文法』(大正十三・十)  
 橋本進吉 (一九三六) 『助動詞の分類について』(『国語と国文学』昭和十一・十)  
 (一九三五) 『新文典別記 上級用』(富山房)  
 佐伯梅友 (一九四七) 『信濃にあんなる木曾路河』から(『国語学会公開講演会、昭和二十二・五』)  
 (一九四八) 『いはゆる詠嘆の『なり』について』(『国文研究』第一輯)  
 (一九八八) 『古文読解のための文法(下)』(三省堂)  
 松尾 聰 (一九五二) 『古文解釈のための国文法入門』(昭和二十七・一)

- 阪倉篤義 (一九五二) 『日本文法の話』(昭和二十七・五)  
 時枝誠記 (一九五四) 『日本文法 文語篇』(昭和二十九・四)  
 遠藤嘉基 (一九五四) 『新講 和泉式部物語(七)』(『国語国文』昭和三十・二)  
 (一九五四) 『新講 和泉式部物語(九)』(『国語国文』昭和三十・七)  
 小松登美 (一九五五a) 『指定の『なり』と伝聞の『なり』(上)』(『未定稿創刊号』昭和三十・五)  
 (一九五五b) 『終止なり私見』(『未定稿』第三号、昭和三十・十一)  
 (一九六〇) 『土佐日記の解釈と文法上の問題点』(『講座 解釈と文法四』明治書院)  
 竹岡正夫 (一九五五) 『いはゆる伝聞推定の助動詞ナリの本義』(『国語国文』昭和三十・七)  
 (一九五六) 『助動詞ナリの表わすもの―助動詞の意味の検討』(『国語学』二五)  
 原田芳起 (一九五五) 『伝聞推定の『なり』』(『国語国文』昭和三十・七)  
 木之下正雄 (一九五五) 『指定のナリと推定のナリとの相違点』(同上)  
 大野 晋 (一九五五) 『古典語の助動詞と助詞』(『時代別作品別 解釈文法』昭和三十・七)  
 (一九八六) 『現時点から見た源氏物語注釈の問題』(『源氏物語をどう読むか』国文学 解釈と鑑賞別冊)  
 (一九八八) 『日本語の文法―古典編―』(角川書店)  
 春日和男 (一九五五) 『いはゆる伝聞推定の助動詞ナリの原形について』(『国語学』三〇)  
 (一九六四) 『平安時代語の語法―『なり』と『めり』の世界―』(『国語と国文学』昭和三十・十)  
 (一九六八) 『存在詞に関する研究』(『風間書房』)  
 築島 裕 (一九五七) 『終止形に続く助動詞・なり』(『解釈と鑑賞 古典解釈のための助動詞』昭和三十二・十一)  
 塚原鉄雄 (一九五九) 『活用語に接続する(なり)の生態的研究―王朝仮名文学作品を資料として―』(『国語国文』)

昭和三十四・七)

—— (一九六〇) 「更級日記の解釈と文法上の問題点」(講座 解釈と文法四) 明治書院)

森重 敏 (一九六二) 『なり』の表現価値—古今和歌集における理法と比喩』(『国語国文』昭和三十七・八)

田島光平 (一九六四) 「連体形承接の『なり』について—竹取物語を中心にして—」(『国語学』五六)

佐治圭三 (一九六六) 「素材の世界と表現と—終止形接続の(なり)について」(『遠藤博士還暦記念国語学論集』昭和四十一・五)

北原保雄 (一九六六) 「終止なり」と(連体なり)—その分布と構造的意味—」(『国語と国文学』昭和四十一・九)

—— (一九六七) 『なり』の構造的意味』(『国語学』六八)

—— (一九七六) 「活用語を承接する(なり)の変容—覚一本平家物語の場合」(『佐伯梅友博士喜寿記念 国語

学論集』表現社)

—— (一九八一) 『日本語助動詞の研究』(大修館書店)

糸井通浩 (一九六九) 『なりけり』構文—平安朝和歌文体序説—」(『京都教育大学附属高校研究紀要』六)

—— (一九七七) 『なりけり』語法の表現価値—『桐壺』『若菜下』を中心に—」(『国文学解釈と教材の研究』

昭和五十二・一)

—— (一九八七) 「新古今集の文法」(『国文法講座五 時代と文法—近代語—』明治書院)

秋本守英 (一九六〇) 「なりけり」構文統 —(ものは)の提示を中心にして—」(『王朝』昭和四十五・十)

—— (一九八七) 「古今集の文法」(『国文法講座四 時代と文法—古代語—』明治書院)

奥村三雄 (一九六九) 「なり(伝聞推定)」(『月刊 文法』昭和四十四・五)

井手 至 (一九七〇) 「助動詞(なり)について」(『月刊文法』昭和四十五・六)

大木正義 (一九六八) 「連体なり」における連体形欠如について—述語文節の形成法からの接近—」(『言語と文芸』

五六)

—— (一九六九) 「連体なり」とその上接句との構文的関係」(『佐伯梅友博士古稀記念 国語学論集』表現社)

—— (一九七一) 「連体なり」を構成要素にもつ述語文節について」(『月刊文法』昭和四十六・一)

武田 孝 (一九七〇) 「本居宣長と終止形接続の助動詞(なり)(上)(下)」(『解釈』昭和四十五・八、十)

佐田智明 (一九七四) 「終止形承接のナリについて—その中世・近世における把握—」(九州大『語文研究』三七)

小松光三 (一九八〇) 『国語助動詞意味論』(笠間書院)

—— (一九八二) 『ななり』『なめり』『なりけり』の意味機能』(『愛媛国文研究』三二)

—— (一九八四) 「助動詞の諸問題」(『研究資料日本文法 助辞編(二) 助動詞』明治書院)

—— (一九八七) 「古文解釈と助動詞」(『国文法講座二 古典解釈と文法—活用語—』明治書院)

中村幸弘 (一九八七) 「終止形につく『なり』と『めり』」(『国文法講座三 古典解釈と文法—活用語—』明治書院)

岡崎正継 (一九八九) 「推定伝聞の助動詞『なり』について—その承接と意味—」(『國學院雑誌』平成元・三)

高山善行 (一九九〇a) 「連体ナリと終止ナリの差異」(『国語学』一六三)

—— (一九九一b) 「連体ナリと終止ナリ—研究のながれとその意義—」(『国語語彙史の研究』十一集)

—— (一九九四) 「体言ナリと連体ナリの差異について」(『国語語彙史の研究』十四集)

## 第二章 断定と推定

## ―連体ナリと終止ナリの差異―

はじめに

活用語の連体形に接続するナリ（＝連体ナリ）と終止形に接続するナリ（＝終止ナリ）の差異については近世以来盛んに議論されてきたが、問題解決に至らないまま議論が停滞しているのが現状である。この状態が続けば先学による研究の蓄積が生かせないばかりでなく、古代語のモダリティ研究を進めて行く上において大きな障害となるであろう。一方、現代語の研究においては近年、ノダ文の研究やモダリティの研究が進展しており、（注1）その方法や成果はナリ研究に援用できる部分が少なくない。本稿ではこうした現代語研究の視点を導入して、構文的観点から連体ナリと終止ナリの差異を再検討する。その営みを通して、ナリ研究の成果を古代語の文法研究に生かしていくための見取図を描き出してみたい。

## 一 研究の流れ

まず、研究史を概観しておく。（注2）ナリの差異をめぐる議論は『あゆひ抄』における〈靡ナリ〉〈末ナリ〉の区別に関する記述（注3）に始まり、現在に至るまで数多くの論者が出されている。「ナリ論争」という名に象徴されるように、助動詞の研究において最も盛んに議論されてきたものの一つであると言えよう。とりわけ議論が活性化し

たのは、松尾捨治郎氏の「終止ナリ伝聞推定説」が出されて以降である。その後、伝統的な理解との対立が生まれ、いわゆる「ナリ論争」が幕を開けることになった。初期の段階では、もっぱら終止ナリに注目が集まっていたが、田島光平氏の論考（注4）などによって連体ナリにも光が当たるようになり、終止ナリとの差異が明確にされてきた。研究者ごとの見解は異なるけれども、括ってしまえば次の二つの立場に分かれるであろう。「連体ナリも終止ナリも《断定》をあらわす」として両者を基本的に同一のものとして扱う立場と「連体ナリは《断定》、終止ナリは《伝聞》《推定》をあらわす」として両者を全く別々のものと扱う立場である。どちらにしても、結局は助動詞の意味の整理につながる問題であるから、たちまち助動詞の意味組織の論が要請されることになる。ここから「ナリの問題」を個別的に扱うことの困難さが知られるのである。

次に、研究史を分析の観点から整理してみよう。本来、ナリの差異は古典解釈や和歌実作の必要上注目されたものであり、どのような訳語をあてるか、どういう意味で理解すればよいかということに関心が集まっていた。そのため、国学以来、長きにわたって意味的観点からの分析に偏っていた。松尾捨治郎氏の説も用例の意味解釈から得られたものであるし、松尾説をめぐって論争の口火を切ったのが佐伯梅友氏、遠藤嘉基氏という解釈文法の大家であることも決して偶然ではない。

ところが、昭和三十年代からはいささか違った様相を呈するようになる。塚原鉄雄氏に代表される文体的観点からの分析（注5）、北原保雄氏に代表される構文的観点からの分析（注6）の成果が発表され、広い視野からナリが観察されるようになってきたのである。それぞれの立場から、ナリの差異を示す現象の報告が積み重ねられ、二つのナリがかなり違った性格であることが明らかにされてきた。これは意味偏重主義から抜け出したという点においては前進と言えるが、観点の分化により議論が噛み合いにくくなったことも事実である。議論が停滞している背景には「個別論として扱いにくい」というテーマ自体による問題と「分析の観点の分化」という方法的な問題とが存している



思われる。

さて、従来の報告から「連体ナリと終止ナリがかなり違った性格のものである」ということは、ほぼ疑う余地のないところとなったように思われる。しかし、ただ「違う」と述べ立てただけでは問題解決には向かわない。「いかように違うか」を明らかにしなければ議論は収束しないし、ナリ研究が文法研究に益するところも少ないであろう。そこで、本稿ではナリの文構造における位置付けを試み、「いかように違うか」の検討をおこなう。そして、ナリ研究を狭く個別論の枠内にとどめず、古代語の文法研究に積極的に貢献していく方向を探っていきたい。

## 二 現象の整理

連体ナリと終止ナリの文構造における位置付けを考えるために、まず両者がかわる構文現象を押さえておきたい。ナリのかかわる構文現象については、いくつかの報告がなされているが、時代や資料、整理の方法がばらばらで統一性に欠ける。そこで、今回改めてまとまった量の全数調査をおこない、そのデータをもとに構文現象の整理をおこなうことにする。連体ナリと終止ナリが分化した中古の共時面をまず押さえるため、和文系文学作品を資料として用いる。整理の観点は具体的には次の三点である。

- 1 相互承接
- 2 係り結び
- 3 従属節内の生起

この観点から整理された現象の束を総合的に解釈した上で、連体ナリと終止ナリの構文的特点を明らかにしたい。

さて、各作品における連体ナリ（ニアリは含まない）、終止ナリの分布状況を表1に示しておこう。（注7）以下、整理は表1で示したデータの範囲内でおこなう。

[表1 全数調査]

	連体ナリ	終止ナリ	不明		連体ナリ	終止ナリ	不明
竹取物語	17	10	8	古今集	11	13	9
伊勢物語	10	7	2	後撰集	37	16	2
土佐日記	11	5	1	拾遺集	20	18	7
蜻蛉日記	47	41	19	後拾遺集	26	17	10
枕草子	100	29	12	金葉集	10	12	8
紫式部日記	17	8	5	詞花集	7	3	6
源氏物語	440	211	88	千載集	12	22	26
更級日記	13	14	6	新古今集	10	18	31
大鏡	114	31	40				
計	769	356	181		66	119	99

## 二・一・一 否定形式の下接

表2によれば連体ナリにはズ、ジが下接するが終止ナリには否定形式が全く下接していない。一般にモダリティ助動詞は否定形式が下接しないのが普通であり、例外的なベカラズ(注8)も孤例である。否定形式の下接については連体ナリはモダリティ助動詞とは異なり、終止ナリはモダリティ助動詞と性格を同じくする。

では、連体ナリに否定形式が下接するのはどのような場合であろうか。表3を参照されたい。孤例で異文も確認される連体ナリナジ(注9)を保留すれば、残りはすべて連体ナリナズということになる。次に連体ナリナズの全用例

を見ると、シナラネドは一例だけで、あとはすべてベキナリに否定が下接していることがわかる。ここでシナラネドの例を吟味してみよう。

(1) ひきうゑしならねど、松の木高くなりける年月のほどもあはれに、夢のやうなる御身のありさまも思しつづけらる。(源氏物語、蓬生)

(1)のナリは連体ナリとして扱われてきたものであるが、この部分が「ひき植ゑし人はうべこそ老い

[表2 否定、テンス形式の下接]

	否定		テンス	
	ズ	ジ	キ	ツ
連体ナリ	○	△	×	×
ベシ	△	×	○	○
マジ	×	×	△	△
メリ	×	×	○	△
終止ナリ	×	×	○	△
ム	×	×	×	×
ラム	×	×	×	×
ケム	×	×	×	×
マシ	×	×	×	×
ジ	×	×	×	×

[表3 ナラズ、ナラジの分布]

	竹	伊	土	蜻	枕	紫	源	更	大	八代集	計
シナラネド	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
ベキナラネバ	0	0	0	1	0	0	11	0	2	0	14
ベキナラネド	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2
ベキナラズ	0	0	0	0	0	1	0	0	6	0	7
ナラジ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
(計)	0	0	0	1	0	1	15	0	8	0	25

にけれ松の木高くなりけるかな」(後撰集、躬恒)の引用であることが指摘されている。「ひき植ゑし」が和歌自体を指すとすれば、体言ナリとも解釈しうる。(1)を保留するならば、連体ナリの否定はすべてベキナリの否定ということになる。(注10)

(2) 乳母は、うしろめたうわりなしと思へど、荒らましう聞こえ騒ぐべきならねば、うち嘆きつつるたり。(源氏物語、若紫)

(3) 参りたまひなは、また、さやうに怪しくてあらせ奉るべきならず。また、さては、世の人の申すなるやうに、東宮のかせたまはむの御思ひあるべきならずかし」とはおぼせど、(大鏡)

このように、連体ナリには否定形式が下接するが、その用法はきわめて固定的なのである。(注11) 例えば、現代語の命題否定「くノデハナイ」に相当する連体ナリの用法は中古では見られないようである。

## 二・一・二 テンス形式の下接

テンスにかかわる形式としてキ、ツをとりあげ、ナリへの下接を見ていくことにする。表2(前掲)より連体ナリにはキ、ツが下接しないが、終止ナリにはキ、ツともに下接することが確認される。モダリティ助動詞の中ではベシ、マジ、メリといった狭義「推定」をあらわすとされる形式にキ、ツが下接しており、ム、ラム、ケム、マシといった狭義「推量」をあらわすとされる形式にはキ、ツともに下接しない。終止ナリはベシ、マジ、メリと同じ結果を示して

いることが確認されるのである。終止ナリにキ、ツが下接した例を挙げておく。  
 (4) いと、昔物語のあやしきものの事のたとひにか、さやうなることも言ふなりし、と思ひ出づ。(源氏物語、蜻蛉)

(5) いよいよあやしう、ひなびたる限りにて、見ならはぬ心地ぞする。いとど愁ふなりつる雪、かきたれいみじう降りたり。(源氏、末摘花)

表4に示す作品別の分布を見れば、ナリキ、ナリツは紫式部関係の作品に集中していることが注意されよう。特に『源氏物語』のナリキの例は後半の巻に集中している。狭い範囲でしか用いられていない承接形の認定については慎重でなければならない。また、終止ナリにキ、ツが下接しにくいという現象は「伝聞表現」の基本的性格を検討していく上で重要であり、現代語との対照が必要であろう。(注12)

二・一・三 モダリティ助動詞の下接

表5より、連体ナリにマジ、マシ以外のモダリティ助動詞がすべて下接するのに対して、終止ナリにはモダリティ助動詞が下接しない。現代語、古代語に共通して言えることだが、モダリティ助動詞同士は承接しないのが原則である。(注13) この原則からすれば、連体ナリにはモダリティ助動詞が下接するから、ナリ自身はモダリティ助動詞ではないと推定される。一方、終止ナリにはいかなるモダリティ助動詞も下接していないから、ナリ自身がモダリティ助動詞である可能性が高いと言える。

連体ナリへのモダリティ助動詞下接については注意すべき承接形が二つある。

[表4 ナリキ、ナリツの分布]

	竹	伊	土	蜻	枕	紫	源	更	大	八代集	計
終止ナリ+キ	0	0	0	0	1	2	5	0	0	0	8
終止ナリ+ツ	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	3

[表5 モダリティ助動詞の下接]

	連体ナリ	ベシ	マジ	メリ	終止ナリ	ム	ラム	ケム	マシ	ジ
連体ナリ	—	○	×	○	○	○	○	△	×	△
ベシ	○	—	×	○	○	○	×	△	△	×
マジ	○	△	—	○	△	×	×	×	×	×
メリ	×	×	×	—	×	×	×	×	×	×
終止ナリ	×	×	×	×	—	×	×	×	×	×
ム	×	×	×	×	×	—	×	×	×	×
ラム	×	×	×	×	×	×	—	×	×	×
ケム	×	×	×	×	×	×	×	—	×	×
マシ	×	×	×	×	×	×	×	×	—	×
ジ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	—

まず、ナリケムである。ナリケムの存在については従来報告されているがその分布については明らかでない。今回探し得たナリケムの全用例は以下の三例であった。

(6) (薰)「心憂かりける所かな。鬼などや住むらむ。

などで、今までさる所に据ゑたりつらむ。思はずなる筋の紛れあるやうなりしも、かく放ちおきたるに心やすくて、人も言ひ犯したまふなりけむかし」と思ふにも、(源氏、蜻蛉)

(7) (薰)「母のなほなほしくて、はらからあるはなど、さやうの人は言ふことあんなるを思ひて、ことそぐなりけんかし」など、心づきなく思す。(同、蜻蛉)

(8) (薰)「いとおきらむるところなく、はかなげなりし心にて、この水の近きをたよりにて、思ひよるなりけむかし。(同、蜻蛉)

三例とも『源氏物語』蜻蛉巻にあって、すべて薰の心中文に用いられている。このようにナリケムはきわめて狭い範囲でしか用いられていないのであって、承接形としての認定に疑問が残る。(注14)

〔表6 複合用法（散文作品）〕

	竹	伊	土	蜻	枕	紫	源	更	大
ナメリ	1	1	0	8	21	6	125	1	11
ナリケリ	2	6	5	14	15	2	117	2	12
ナルベシ	0	2	1	9	7	5	71	2	2
ナラム	0	1	0	3	10	1	23	2	1
ナナリ	0	0	0	0	7	0	7	1	1
ナリケム	0	0	0	0	0	0	3	0	0
ナルラム	0	0	0	2	1	0	2	0	0
計	3	10	6	36	61	14	348	8	27
全用例数	17	10	11	47	100	17	440	13	114
使用率	17.6 ※	54.5	76.6	61.0	88.2	79.1	61.5	23.7	

〔表7 複合用法（八代集）〕 ※印は100%を示す

	古	後	拾	後拾	金	詞	千	新
ナメリ	0	0	0	0	0	0	0	0
ナリケリ	8	29	10	16	9	3	11	8
ナルベシ	0	3	5	2	0	1	1	0
ナラム	0	0	0	0	0	0	0	0
ナナリ	0	0	0	0	0	0	0	0
ナリケム	0	0	0	0	0	0	0	0
ナルラム	0	5	5	8	1	3	0	2
計	8	37	20	26	10	7	12	10
全用例数	11	37	20	26	10	7	12	10
使用率	72.7 ※	※	※	※	※	※	※	※

次にナルラムである。はやく、宮田和一郎氏によって指摘されていたように、ナルラムはもっぱら和歌に用いられており、文体的偏りがはっきりしている。（注15）したがって、ナリケリ、ナルベシなどのように特に文体的制約の認められない承接形とは分けて扱うのが適切であろう。

さて、ここで連体ナリにモダリティ助動詞が下接した用法（「複合用法」と呼ぶことにする）の量的傾向を見てみよう。表6、表7は連体ナリの全用例中、複合用法で用いられた連体ナリの割合を作品別に示したものである。表6では『竹取物語』『土佐日記』『大鏡』以外は複合用法の例の占める割合が六割を越えている。（注16）表7でも『古今集』以外の七作品は連体ナリの全用例が複合用法で用いられていることが確認される。連体ナリは単独用法に目がいきがちであるが、実際は複合用法で用いられる場合が圧倒的に多いのである。この複合用法は現代語ノダがモダリティ助動詞を伴う、

(9) 消費税が導入されたから、会費が上がったのだろう。

のような用法と類似する。「モダルのスコープ」を拡大して「原因推量」を成立させるといふ機能に関してノダと連体ナリは共通すると推定される。（注17）

次に係り結びの観点からナリの差異について検討してみよう。ここでは最狭義「係り結び」をなす係助詞ゾ、ナム、コソ、ヤ、カをとりあげる。表8は『枕草子』『源氏物語』を資料として、連体ナリ、終止ナリおよびモダリテイ助動詞が先の係助詞の結びになるかどうかを調査した結果である。ここでは参考までに体言ナリの結果も挙げておく。  
(注18)

[表8 係り結び]

	確定系			不定系	
	ゾ	コソ	ナム	ヤ	カ
体言ナリ	○	○	○	×	○
連体ナリ	×	×	×	×	×
ベシ	○	○	○	○	○
マジ	×	○	○	×	○
メリ	○	○	○	△	△
終止ナリ	○	○	○	△	△
ム	○	○	×	○	○
ラム	○	○	×	○	○
ケム	○	○	×	○	○
マシ	○	○	×	○	○
ジ	×	×	×	×	×

まず、終止ナリはゾ以下の係助詞すべての結びとなることが確認される。ベシ、メリといった狭義「推定の助動詞」の結果とほぼ一致しており、ム、ラム、ケム、マシとはナムの結びに関して異なる。  
一方、連体ナリは先に挙げた係助詞の結びとなつた例が確認できない。表8によれば、ゾ以下のどの係助詞の結びにもならないのは連体ナリとジだけである。さらに、連体ナリと同じく「断定の助動詞」とされる体言ナリはゾ、コソ、ナム、カの結びとなっており、むしろ終止ナリに近い結果を示す。一般に助動詞はゾ、ナム、コソ、ヤ、カどれかの結びとなることからすれば、連体ナリはきわめて特殊である。なぜ、連

[表9 文末助詞の下接]

	ゾ	ヤ	カ	カナ	カシ	ヨ	ナ
連体ナリ	×	×	×	×	×	×	×
ベシ	○	○	○	○	○	×	×
マジ	○	○	○	×	×	○	○
メリ	○	○	×	○	○	×	○
終止ナリ	×	×	×	○	×	×	○
ム	○	○	×	×	○	○	×
ラム	×	○	×	×	○	○	△
ケム	△	○	×	×	○	○	×
マシ	×	○	×	×	○	○	×
ジ	×	○	×	×	○	○	○

体ナリは先の係助詞の結びにならないのであるうか。

この問題を考える上で注意されるべき構文がある。

- (10) はやても龍の吹かするなり。(源氏物語、浮舟)  
(11) 身のいと心うきなり。(源氏物語、浮舟)

のように主格助詞ノ、ガが顕在し、連体ナリの終止形で終止する「ノナリ構文」である。(注19) この構文の存在によつて連体ナリが準体節を承けることが明らかになった。連体ナリに上接している準体節は『素材的意味』において一項にまとまろうとする。(注20) それと『判断的意味』を加えながら二項を分節しようとする係助詞とは相容れない。よつて、先の係助詞は準体節中に生起することがないものと思われる。(注21)

次に文末助詞の下接について見てみよう。表9より、連体ナリは文末助詞がどれも下接していないことがわかる。終止ナリはカナ、ナが下接した例が認められる。

- (12) 隠れ沼におふる数をばたれか知るあやめ知らずも待たるなるかな。(蜻蛉日記)

- (13) 御仲どもにまかせて、見放ちきこゆべきななりな。隔てて、今は、誰も誰もさし放ち、さかしらなどのたまふこそ幼けれ。(源氏、若菜上)

他のモダリテイ助動詞はいずれかの助詞が下接しており、やはり連体ナリは特殊な性格を示している。

ところで、現代語ノダには、

- (14) 来年こそ、絶対に東京デイズニーランドへ行くんだぞ／よ／ね。

のように文末助詞が下接する。この点、連体ナリとは性格が異なるのである。

### 二・三 従属節内の生起

ここでは次の四つの従属節における連体ナリ、終止ナリの生起を見ていきたい。(名詞に続いていく節) (仮定的な意味をあらわす節) (原因・理由をあらわす節) (逆接関係をあらわす節) の四つである。それぞれ、「連体節」(連体形+名詞) 「仮定節」(未然形+バ) 「理由節」(已然形+ハ) 「逆接節」(已然形+ド、ドモ) と呼ぶことにする。これらはいずれも文構造の階層的側面に関わるものである。(注22)

さて、表10より、連体ナリは仮定節、理由節、逆接節に生起するが、連体節には生起していない。終止ナリは連体節、理由節、逆接節に生起するが、仮定節には生起していない。次に、両者が差異を示す仮定節と連体節をとりあげ、連体ナリと終止ナリの実態を見ておくことにする。

#### 二・三・一 仮定節

仮定節に生起したと見られる連体ナリの確例は次の三例にすぎない。

- (15) (源氏) 「あひ見ずてしのぶるころの涙をもなべての空の時雨とや見る心の通ふならば」、いかながめの空もの忘れしはべらむ」など、こまやかににけり。

[表10 従属句中の生起]

	連体節	仮定節	理由節	逆接節
連体ナリ	×	△	△	△
終止ナリ	○	×	○	○
メリ	○	×	○	○

(源氏、賢木)

- (16) (帝) 「なほこの源氏の君、「まことに犯しなきにてかく沈むならば」、必ずこの報いありなんとおぼえはべる。」(源氏、明石)

- (17) 近くさぶらふ女房二人ばかりあれど、「すずろなる男のうち入り来たるならば」こそは、こはいかなることぞと参り寄らめ。(源氏、宿木)

一方、終止ナリは仮定節には一例も生起していない。仮定節に生起しないことはベシ、マジ以外のモダリティ助動詞に共通して認められる性格である。また、現代語の認識的判断をあらわすモダリティ助動詞全般とも共通する性格である。(注23)

#### 二・三・二 連体節

一般にモダリティ助動詞は連体節に生起するという共通性を持つ。(注24) 表に示すようにここでも連体ナリはモダリティ助動詞と異なり、終止ナリは同じ性格を示す。連体節中の終止ナリは次のようである。

- (18) 「いみじく思へるなる」仲忠がおもてぶせなる事は、いかで啓したるぞ。ただ今宵のうちに、よろづのことを捨ててまゐれ。さらずは、いみじうにくませ給はん」となん仰せごとあれば、(枕草子)

- (19) 身ひとつのうき嘆きよりほかに人をあしけれなど思ふ心もなければ、「もの思ひにあこがる」なる魂は、さもやあらむと思し知らるることもあり。(源氏物語、葵)

- (20) (夕霧) 「近くてこそ見たまはざらめ、よそにはなどか聞きたまはざらむ。「さても契り深かなる」瀬を知らせむの御心ななり。にはかにうちつづく「べかなる」冥途の急ぎは、さこそは契りきこえしか」(源氏物語、夕霧)

以上で従属節内の生起についての整理を終わるが、終止ナリが従属節内に生起した例がかなりあるのに比べ、連体

[表 11 整理の結果]

	相互承接			係り結び			従属節	
	否定	テンス	モダリティ	複合用法	係り結び	文末助詞	連体節	仮定節
連体ナリ	○	×	○	多	×	×	×	△
終止ナリ	×	○	×	-	○	○	○	×
メリ	×	○	×	-	○	○	○	×

ナリはきわめて少なく、主節に生起した例がほとんどであるという事実を付け加えておきたい。

### 三 現象の解釈

前節でおこなった整理の結果を表11にまとめておく。この結果をもとに連体ナリ、終止ナリの構文的特徴について検討することにした。

#### 三・一 連体ナリ

まず、連体ナリについて確認しておこう。相互承接については、否定形式が下接し（固定的ではあるが）、テンス形式はいっさい下接しない。そして、モダリティ助動詞が下接した複合用法の例がきわめて多い。係り結びについては、ゾ、ナム、ヤ、カ、コソの結びにならず、文末助詞が下接しない。従属節内の生起については、連体節に生起せず、稀に仮定節に生起している。連体ナリは従属節内に生起すること自体が稀である。

以上の結果から、連体ナリが助動詞一般とは全く異なる構文的特徴を示すことが知られるであろう。次に用言と比較してみよう。用言は、時制、否定といった様相的意味を分化し、係助詞の結びになり、連体節などに生起する。連体ナリは用言の構文的特徴とも大きく異なるのである。二アリの熟合によって成立したことから存在詞ア

リとの共通性が予想されるが、アリは用言一般と性格を同じくし、連体ナリの構文的特徴とは一致しない。こうして見ると、連体ナリの構文的特徴と一致するものは他には見当らないのである。

このように、連体ナリはその構文的特徴において助動詞一般と異なり、用言とも異なる。用言は様相的意味を、助動詞は様相的意味をになっているが、連体ナリはそのどちらの面もになっていないことが推定されよう。とすれば、考えられるのは連体ナリがコプラである可能性である。実質的な意味を持たず、もっぱら二項を結合するために機能して、「コトの承認」をはたしているのではないかと思われるのである。

かつて、山田孝雄氏は連体ナリを複語尾とは扱わず、「説明存在詞」（あるいは「説明動詞」として扱われた。（注25））そして、ハとの呼応によって「賓語と主語を結合せしめて文の決定要素をなす」コプラとされたことを思い起すべきである。山田氏以後の研究においては、連体ナリは体言ナリとの関係などから直観的にコプラと言われることが多かったようであるが、今回のように具体的な構文的側面からの考究の結果から、連体ナリがコプラであるとする理解はより確かなものとなったと言えるよう。

#### 三・二 終止ナリ

次に終止ナリの構文的特徴について検討してみたい。第二節で確認してきたように、おおむね他のモダリティ助動詞と共通する結果を示すことから、終止ナリは「コトガラめあての判断」を表わすモダリティ助動詞であると見て間違いないであろう。

他の形式との差異について言えば、係助詞ナムの結びになり、ヤ、カの結びになりにくいことからム、ラム、ケム、マシ、ジと一線を画し、仮定節に生起しないことからベシ、マジとも一線を画す。構文的特徴が一致するのはメリである。従来、メリと終止ナリとは意味的に同一次元に属し、「視覚に基づく判断—聴覚に基づく判断」という対立をなしていると理解されてきたように思われるが、第二節で検討してきたように、構文的にも整然とした対応が見られ

る。メリとの差異については、意味的な問題に踏み込まざるをえず、本稿で扱う範囲を越えるけれども、あえて見通しとして言えば、決定的な差異は終止ナリが「他者から得た情報」を表わし得る点に求められよう。一形式で「状況を根拠とする判断」(《状況把握》)と「他者から得た情報」(《情報把握》)を表現し分けるところに終止ナリの独自性があり、その点、現代語ラシイと共通する。(注26) ただし、両者の対応は断片に過ぎず、現代語、古代語の「伝聞表現」のシステムをあきらかにした上で、その二つを対照していく作業が今後の課題となる。「伝聞概念」をどのように規定するか、そして《証拠性推量》(Evidentials)のシステムの中でどう位置付けていくか、などの基礎的な枠組み作りが必要である。(注27) 今後、具体的な構文現象と意味との対応関係を分析・記述していく作業が積み重ねられなければならない。

### 三・三 まとめ

以上の検討より、連体ナリと終止ナリの差異が鮮明に浮び上がってきたように思われる。連体ナリは二項を結合するコブラであって、いわゆる助動詞とは全く次元を異にする。(注28) コトの承認をあらわし、様相的な意味の次元には属しないと見られるのである。一方、終止ナリはメリなどと同様、様相的な意味の層において位置づけられる典型的なモダリティ助動詞と見てよい。従来、両者を同一に扱う理解があったけれども、今回の考究の結果から、そう理解することはきわめて困難であると言わざるをえない。古代語の文法研究を進めていく上においては、両者の位置する次元の異なりを正しく把握し、その上に立つて文構成を考え、助動詞の意味組織を編んでいくことが肝要であろう。

### おわりに

今回の考究によって、「連体ナリと終止ナリがいかように違うか」のおおよその見通しをつけることができたと思う。今後さらに意味的観点、文体的観点からの研究との統合がはからなければならない。また、今回は中古の共時面に限定して考究を進めたけれども、通時面に対する考究も当然必要である。特に、中古における連体ナリの成立が文法史上どういう意味を持つかという視点は「係り結び」を論じる上で欠かせないであろう。その他、連体ナリとニアリ(ニゾアリケルなど)との関係、(注29)「終止ナリとケリとの関係」「人称とモダリティの関係」など、稿者の力量不足のために考察が及ばなかった点も多い。すべて今後の課題としたい。

### 注

- 1 モダリティに関しては仁田義雄・益岡隆志編(一九八九)、ノダに関しては田野村忠温(一九八九)参照。
- 2 《靡ナリ》(連体ナリにあたる)は「ノデアル」「ノチャ」「未ナリ」(終止ナリにあたる)は「ハイ」という意で理解すること、連体節中の《未ナリ》は《詠嘆》の意でとらえにくいことなど示唆に富む記述が多い。
- 3 研究史の詳細は、第一部第一章に述べた。ナリ関係の基本文献については巻末の参考文献を参照。
- 4 田島光平(一九六四)参照。
- 5 塚原鉄雄(一九五九)参照。
- 6 北原保雄(一九六六)(一九六七)参照。
- 7 連体ナリ、終止ナリの認定については、北原保雄(一九六七)の判別基準に従う。ただし、今回の調査によって判別基準自体の見直しが必要になることになろう。
- 8 ベカラズの例。挙例は資料として用いた『源氏物語』(日本古典文学全集 小学館)による。  
(横川の僧都)「…人の命久しかるまじきものなれど、残りの命、一二日をも惜しまずはあるべからず。」(源氏



物語、手習)

ただし、ベカラズは和文系資料で用いられることが稀で、漢文系資料で多く用いられることが指摘されている。この例は漢文的表現が顔をのぞかせたものと見てよい。

9 ナラジの例。挙例は日本古典文学全集本による。

「……この人々は、みな思ふ心なきならじ。」(源氏物語、常夏)

ただし、河内本系御物本では右のナキナラジ をナキナルカシ、別本の保坂本ではナキニシモアラジとする。

10 北原保雄(一九八一)によれば、連体ナリにズが下接する場合は、

(イ) すべてが已然形『ね』の用例で接続助詞『は』もしくは『ど』が下接するものであること

(ロ) 一例を除いてすべてが『へきならね』という連接であることなどきわだつた偏りが認められる

という報告がなされている。これは『源氏物語』を資料とした調査にもとづいており、範囲を広げた今回の調査では、ベキナラズの例が『蜻蛉日記』『大鏡』(本稿(3)の例)で確認されている。なお、(ロ)の「一例」とは先に吟味した本稿(1)の例である。

11 ベキナリに否定がつく例は中古前期資料には見当らない。まず、ベシと連体ナリが複合してベキナリという助動詞的なまとまりが成立した後には、「ベキナリーベキナラズ」という肯定否定の対立意識から成立したものと推定される。ベキナリは中世においても引き続き用いられる。たとえば、歌学書などではベキナリが頻用される<sup>13</sup>ことがある。

おほかた、歌の良しといふは、心をさきとして、珍しき節をもとめ、詞をかざり 詠むへきなり。『俊頼髓脳』  
月、まことにくまなくとも、空をゆかむ鳥のかげ、にはにうつるべからず。なほ、かずさへといふへきなり。

『同』

12 たとえば、現代語の典型的な伝聞表現形式であるソウダは過去形をとらない。

雨が降るソウダ。

\*雨が降るソウダだ。

《伝聞》とテンスとの関係については第一部第六章参照。

13 たとえば、北原保雄(一九八一)に「表現主体の事象把握についての主体的表現は、一つの文表現においては、原則として一種一回である」(五七八頁)という記述がある。様態的な意味を持つているベシ、マジはこの原則にあてはまらず、モダリテイ助動詞の典型からずれるが、広く考究の範囲に含めておく。

14 北原保雄(一九八一)ではケムが連体ナリに下接するものとして分類されているが、再検討されるべきであろう。

15 宮田和一郎(一九五六)参照。ただし、宮田氏はナルラムを扱う際に体言ナリの場合と連体ナリの場合を区別しておられない。

16 三作品とも漢文体の影響が強い作品であつて、このような量的傾向は文体的観点から説明可能と思われる。

17 「モーダルのスコープ」については田窪行則(一九八七)参照。また、連体ナリの複合用法と「モーダルのスコープ」との関連については、第二部第八章を参照されたい。なお、連体ナリが《原因推量》の成立に関わることにについては、はやく田島光平(一九六四)において指摘されている。

18 第一部第三章参照。

19 北原保雄(一九六六)参照。

20 準体節が《素材的意味》のまとまりであることは形式的に山田文法の言う「擬喚述法」の形式と一致することからも予想される。そこで描かれるコトは現実的・個別的な性質を色濃く帯びたコトである。

21 山口堯二(一九九〇)では、ソ以下の係助詞が論理的なまとまりである準体節に介入しえないという理解が示され

ている。稿者も基本的にこの理解に従う。

22 従属節におけるモダリティ助動詞の生起については第一部第二章参照。

23 仮定節にはソウダ（連用形接続）、ヨウダ、ミタイダのように《様態の意味》を持つモダリティ助動詞だけが許容される。古代語でも《様態の意味》を表わすベシ、マジが仮定節に生起する。第一部第二章参照。

24 ジ、マシが連体節に生起した例は、きわめて少数ではあるけれどもその存在が指摘されている。

幾世しもあらじ我が身を（『古今集』九三四）『古典語現代語助動詞詳説』（学燈社）「ジ」奥村三雄氏担当  
水晶の滝など言はましやうにて長く短く（『枕草子』『同』「マシ」吉田金彦氏担当

25 「従来はこの『なり』『たり』を助動詞と称せり。然れどもこれらは他の語に伴ひて用を完くすること『如し』『す』の如くなれば、それらを単語と認めて差支なきものなるのみならず、これらを用言の補助成分たる複語尾とは決して一列にとかるべきものにあらず。」（『日本文法講義』一一七頁）（『日本文法論』ではナリを「説明動詞」としている。）ナリが複語尾と次元が違うとするのは卓論であるが、山田孝雄氏は積極的に連体ナリと終止ナリの區別をされていない。連体ナリの方を見ての言説ではないかと推測される。

26 森山卓郎（一九八八）では「状況を根拠とした話し手の判断」を《状況把握》、「他者から情報を得ること」を《情報把握》と呼び、現代語ラシイは《状況把握》《情報把握》の両方を担うとしている。稿者の観察によれば、滑稽本等に見られる近世語の終止形接続ソウダも一形式で両方の機能を担っているようである。

27 現代語のモダリティ助動詞における伝聞形式の特殊性については安達太郎（一九九〇）の報告があった。

28 「助動詞の一般は動詞の語尾というべきものであるが、コプラの助動詞は判断の構造そのものから析出されるのである。」（「用言」一七六頁）

「コプラの助動詞『なり』『アール・ダ』およびその一統は、動詞の複語尾としての助動詞一般の外に置かれ

なければならぬ。」（「形容詞文・動詞文概念と文法範疇―述語の構造について―」p.204）などに示された川端善明氏の理解に従う。また、『活用の研究Ⅱ』第五章第三節（一）では、ナ行タ行に亘る繫辞の組織において、ナリは述定形として位置づけられている。

29 この種のニアリを連体ナリに含めて扱うことも可能だが、―そして実際、そう扱われることが多いのだが―連体ナリとの間に何らかの機能分担がなされていることが予想されるため、今回は別扱いにした。ニアリは「―ニアリ」の形では用いられず、ニハアラネド、ニコソアリケレ、ニヤアラム、のように係助詞の割り込みが必須であり注意されるが、その意味機能の解明については別稿を期したい。

◇用例調査は以下の資料による。

『竹取物語』『伊勢物語』『枕草子』（以上『日本古典文学大系』岩波書店）『土佐日記』『紫式部日記』『更級日記』『古今和歌集』『拾遺和歌集』『金葉和歌集』『詞花和歌集』（以上『新日本古典文学大系』岩波書店）『蜻蛉日記』『大鏡』（以上『日本古典文学集成』新潮社）『源氏物語』（『日本古典文学全集』小学館）『後撰和歌集』『後拾遺和歌集』『千載和歌集』『新古今和歌集』（以上『新編国歌大観』角川書店）

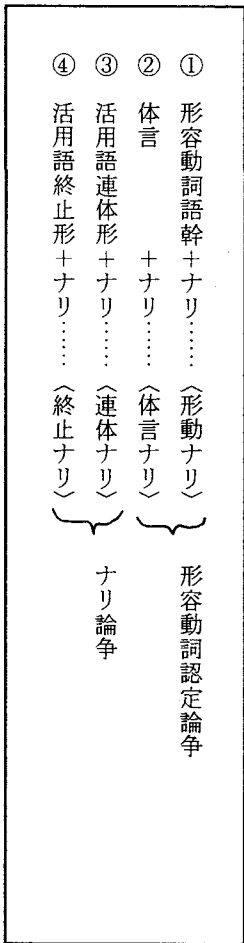
第三章 コブラ形式の組織  
—連体ナリと体言ナリの差異—

はじめに

平安時代語において断定表現の中心的な役割を担う形式は、「断定の助動詞」ナリである。ナリには、体言に下接する体言ナリと活用語連体形に下接する連体ナリとがあるけれども、両者の構文機能の差異については十分にわかっていない。本章では、両者の差異を明らかにし、その位置づけを通してコブラ形式の組織について考えてみたい。

一 研究のながれ

ナリは上接する要素によって四種に分かれる。本章では、連体ナリと体言ナリの差異を取り上げる。(注1)



一般に、体言ナリと連体ナリは「断定の助動詞」として一括した扱いをされることが多い。また、これらを助動詞と認めない立場においても両者の区別についてはさほど明確でない。しかし、構文的機能の面から見れば、語(この場合は体言)を承ける体言ナリと句(この場合は準体句)を承ける連体ナリではその性格が異なるはずであり、それが様々な振る舞いに反映されることが予想される。にもかかわらず、体言ナリと連体ナリの差異については、従来、ほとんど取り上げられなかった。なぜ、この問題が取り上げられなかったのであろうか。その理由については以下の三点が想定される。

- (1) 体言ナリと連体ナリの差異が明らかでなくても、古文解釈においてさほど問題が起こらない。たとえば、現代語訳のレベルにおいては、ダ(体言ナリ)とノダ(連体ナリ)の違いというだけで話が済んでしまう。
- (2) 体言ナリと連体ナリはどちらもナリであって、根は同じである。両者はその本質において同じものであるから、両者の差異を見ようという問題意識自体が持たれにくい。
- (3) 体言ナリは形容動詞論争において扱われ、一方、連体ナリはナリ論争において扱われてきた。(注2) その結果、体言ナリと連体ナリの差異は盲点となってしまった。

- さて、こうした状況にもかかわらず、北原保雄(一九八二)では体言ナリと連体ナリの差異について指摘している。(注3) 北原氏は、体言ナリだけにあって連体ナリには見られない用法として、
- (イ) 係助詞「ぞ」「なむ」「こそ」などの結びとして連体形や已然形で終止する用法
- (ロ) 連体形による連体法の用法
- (ハ) 助動詞「き」を下接させる用法

の三つを指摘している。これは、体言ナリと連体ナリの差異についての記述としては、唯一とも言えるものであり（管見の範囲において）、気づかれにくい点に光を当て、問題を浮かび上げらせたものとして高く評価されるべきであろう。今後、さらにこの成果を継承、発展させていかなければならないが、その具体的な方向性としては、

- a さらに現象の観察を積み重ねていくこと。
- b 可能な限り、現象の説明をおこなうこと。

の二点に尽きるであろう。本章では、この二点に留意しながら、考究を進めていきたい。

## 二 現象の記述

### 二・一 比較の手順

体言ナリと連体ナリの構文的機能を比較する手順について説明しておきたい。

体言ナリは上代から用例が確認されるけれども、連体ナリは中古において成立した形式である。そこで、資料としては『源氏物語』を用いることにする。（注4）まず、『源氏物語』において調査、分析をおこない、徐々に資料を拡大していく必要があるが、今回の調査、分析によっておおよその見通しはつくであろう。

次に、体言ナリと連体ナリの用例を抽出することになるが、この作業にあたっては以下のような技術的な問題が含まれる。

まず、体言ナリについては、形容動詞語幹につくナリとの区別の問題がある。（注5）周知のように、両者は連続

的であり、無理に境界線を引くことはできない。（また、その必要もない）とはいえ、典型的に形容動詞として扱われるものだけ排除しておくことが望ましいであろう。そこで、〈ナリ述語〉であっても、代表的な古語辞典の見出しにおいて形容動詞とされている語は除外しておいた。ただし、形容動詞、名詞の両方が見出しとしてあげているものは広く取り上げることにした。（注6）

次に、連体ナリについては、「ナリ論争」で扱われたように、終止ナリとの区別が問題となろう。これについては、北原（一九六七）で提示された識別法に依拠する。もちろん、それは絶対的な基準ではあり得ないし、現に識別不能な用例も少数ながら存するので、多少の誤差を含むことは結局は避けられないことであろう。

それから、体言や活用語連体形につくニアリについても注意を要する。ニアリは体言ナリや連体ナリと一括して扱われる場合が多い。だが、ニアリ形とナリ形の併存は、そこに何らかの機能分担—たとえば、文法面、文体面において—がなされていることが予想される。ニアリをナリと一括してしまうと、そういう機能分担が見落とされてしまうことになる。そこで、ニアリの形は考究の対象から除外し、別に扱うことにする。（注7）

以上のような方針に従って『源氏物語』から抽出した体言ナリは一三〇三例（ただし、桐壺巻く藤裏葉巻）、連体ナリは四三八例（全巻）であった。これらの用例を対象として、下接語の種類、従属節における生起、係助詞の結びといった観点から、両者の構文機能の差異を明らかにしていきたい。

### 二・二 差異の実態

#### 二・二・一 下接語の種類

a 助動詞

ここでは、否定系（ズ、ジ）、過去・完了系（キ、ツ、ヌ、タリ、ケリ）、推量系（ベシ、マジ、メリ、終止ナリ、ム、ラム、ケム、マシ）が下接するかどうかについて調べてみた。結果は表1のとおりである。この結果をもとに、特徴的な点について立ち入ってみたい。

a 1 否定

体言ナリ、連体ナリともにズが下接している。連体ナリの方にはジが下接した例があるが、孤例である。

(1) 何ばかり深き手ならねど、物の音がらの筋ことなるものなれば、聞きにくくも思されず。(末摘花)

(2) 乳母は、うしろめたうわりなしと思へど、荒らましう聞こえ騒ぐべきならねば、うち嘆きつつあり。(若紫)

(3) この人々は、皆思ふ心ならじ。(常夏)

ズの下接については、いささか注意が必要である。連体ナリにズが下接した例は、上接語がすべてベシであり、すべてベキナラズの形をとる。☆よって、ベキナリという助動詞相当の複合形式の否定と見れば、連体ナリの否定とは認められなくなる。体言ナリ

表1 下接語の種類 (助動詞)

	否定系		過去・完了系				推量系							
	ズ	ジ	キ	ツ	ヌ	タリ	ベシ	マジ	メリ	ム	ラム	ケム	マシ	
体言ナリ	○	×	○	△	×	×	○	×	○	△	○	△	△	○
連体ナリ	○	△	×	×	×	×	○	×	○	△	○	△	△	×

は比較的自由にズが下接しているが、連体ナリは否定とは結び付きにくいと言わざるを得ないであろう。☆

a 2 テンス・アスペクト

体言ナリにはキ、ツが下接するが、連体ナリには下接しない。体言ナリにキ、ツが下接した例は以下のようなものである。

(4) はかなきさまなりし御返りなどもさをさなし。(葵)

(5) 心の限り尽くしたりし御住まひなりしかど。(玉鬘)

(6) (源氏)「日ごろすこしおこたるさまなり」の心地の、にはかにいといたう苦しげにはべるを、(葵)

ただし、体言ナリにキ、ツが下接する例は、すべて従属節に生じたものであって、終止法に立つナリキ、ナリツは見られなかった。(注8)つまり、ナリキ、ナリツが用いられるとしても、それは主節と時制を一致させるためのもので、相対テンスの用法と考えられる。ちなみに、従属節に限ってキ、ツが下接するという特徴は、『源氏物語』の形容動詞中、最も用例数の多いアハレナリ(九四四例)においても同様であって、キ、ツが下接するのは従属節中に限られる。体言ナリと形容動詞との連続性を示す現象であろう。(注9)

a 3 モダリティ

全体的に見て、ほぼ同様の結果を示しているが、マシとラムの下接については差異が認められる。

まず、マシについて。体言ナリにはマシが下接する。

(7) (女)「昼ならまししかば、のぞきて見たてまつらまし」(帚木)

(8) 「心弱くなびきても人わらへならましこと」(梅枝)  
 このように、体言ナリにはマシが下接する例が見られるが、連体ナリにはマシが下接した例が見られない。これは一体どういう理由によるものであろうか。

この問題を説明する手段として、ここで、現代語研究で用いられるモードの観点を導入してみる。モードとは、「事態が(現実的)なものか(想象的)なものか(反事実的)なものか」といった区別に関わる概念である。この観点からすれば、もともと連体ナリは現実性の強いものであると思われる。その証拠に、第一部第七章で述べたように、原則的に仮定条件節の帰結としては用いられない。また、意味的には、現実を起こった事態の背後の事情を説明する性格が強いことは既に知られているとおりである。よって、非現実性の強いマシと結び付きにくいのは当然であろう。一方、体言ナリにマシが下接可能であるのは、体言ナリがモードに関してニュートラルであるからではなからうか。(注10)モードは、事態の(現実性) (非現実性)に関わる概念なのだが、体言ナリは事態の構成要素に過ぎないため、(現実性) (非現実性)が未分化の段階であると思われる。つまり、体言ナリと連体ナリでは、文において機能するレベルの違いが存すると考えられるのである。(この点については後述する。)(注11)

次にラムの下接についてだが、これも体言ナリにあつて連体ナリにはあまりない用法である。(注12)

(9) かぎりとして忘れがたきを忘るるもこや世になびく心なるらむ(梅枝)  
 (10) 「げに、いずれか狐なるらん」(夕顔)  
 ラムには連体ナリ相当の機能が備わっていると考えられる。(これについては後述)ラムの側から言えば、連体ナリを必要としないのである。なお、ナルラムという承接形については糸井(一九九〇)を参照されたい。

b 終助詞

体言ナリには終助詞が下接するが、連体ナリには一切下接しない。(表2参照)体言ナリに下接するのはカシ、ナ、ヤである。

- (11) 思ひしめてしことは、さらに御心に離れねど、ましてあるまじきことなりかし。(賢木)  
 (12) げにをこがましく、うしろめたきわざなりや。(帚木)  
 (13) 「有職どもなりな。心もちるなども、とりどりにつけてこそめやすけれ」(常夏)

二・二・二 従属節内の生起

ここでは、連体節、仮定節(未然形十バで《仮定》を表す句)、理由節(已然形十バで《原因》《理由》を表す節)、逆接節(已然形十ド、ドモで《逆接》を表す節)という四つの従属節を取り上げて、体言ナリ、連体ナリの生起を調べてみる。その結果を表3に示す。

a 連体節

表2 下接語の種類(終助詞)

	連体形接続			終止形接続			
	ゾ	カ	ナ	カシ	ナ	ヤ	ヨ
体言ナリ	×	×	×	○	△	○	×
連体ナリ	×	×	×	×	×	×	×

※ 願望系(テシガナ、ニシガナ、バヤ、ナム、モガナ、ガナ) 禁止系(ナ、ソ) 下接せず。

体言ナリは連体節中に生起するが、連体ナリは連体節中には生起しない。連体節中に生起した体言ナリの例は以下のようなものである。

表3 従属節中の生起

	連体節	仮定節	理由節	逆接節
体言ナリ	○	○	○	○
連体ナリ	×	△	×	△

(15)(14) 「姉なる人」のよすがに、かくてはべるなり。く (帝木)  
 「この「西なる家」は何人の住むぞ、問ひ聞きたりや」(夕顔)  
 一般に助動詞は連体節中に生起することが可能である。ということからすると、体言ナリは助動詞一般と共通するが、連体ナリは異なることになる。

## b 仮定節

体言ナリは仮定節中に用いられた例がかなりあるが、連体ナリが仮定節中に生起した確実な例はごく少数である。

(17)(16) (帝)「なみなみの人ならば」こそ、荒らかにも引きかなぐらめ、(帝木)  
 なほこの源氏の君、「まことに犯しなきにてかく沈むならば」、必ずこの報いありな  
 んとなむおぼえはべる (明石)  
 通時的に見れば、時代が下るにしたがって連体ナリが仮定節中に生起する例が増えてくるということがある。(注13) 山口麿二氏が指摘するように接続表現の分析化ということである。

## c 理由節

体言ナリはかなりの例が生起しているが、連体ナリは確実な例が一例もない。(注14)

(19)(18) 「なかなかにて慰めがたき気色なれば」、こしらへかねたまふ。(薄雲)  
 「さのものとなりたる御文なれば」、なくて御覽せさす。(葵)  
 連体ナリが理由節内に生起しないのは、理由がよくわからない。現代語ノダは、ノダカラのように生起できると対照的である。

## d 逆接節

体言ナリは多数生起するが、連体ナリはやはり稀である。連体ナリが逆接節に生起した確実な例は、次の(22)くらいだが、先述のようにベキナリの否定として処理するならば、確実な例はなくなってしまいうことになる。  
 (20) 「夜もすがらいみじうののしりつる儀式なれど」、(葵)  
 (21) 「みなかねて思し棄てし世なれど」、く (賢木)  
 (22) 「やがて世の政をしたまふべきなれど」、「さやうの事しげき職にはたへずなむ」とて、(澤標)  
 さて、全体を通してみると、体言ナリは主節よりも従属節に生起した例が多く、全用例の六十%ほどになる。それとは対照的に、連体ナリはそのほとんどが主節において用いられていることがわかる。

## 二・二・三 係助詞の結び

最狭義の係り結びに関わる係助詞、ゾ、ナム、コソ、ヤ、カの結びになるかどうか調べてみる。

表4のように、体言ナリはゾ、ナム、コソの結びになるのに対して、連体ナリにはそれらの結びになった例が見ら

表4 係助詞の結び

	確定系			不定系	
	ゾ	ナム	コソ	ヤ	カ
体言ナリ	○	○	○	×	×
連体ナリ	×	×	×	×	×

れない。

(23) また、頼もしき人もなく、げにぞあはれなる御ありさまなる。(須磨)

(24) 「ただかやうに人にゆるされぬふるまひをなん、まだならばぬことなる。」(夕

顔)

(25) 「げにこそ定めがたき世なれと、はかなきことにつけても思しつづけらる。」

(朝顔)

ヤ、カについては、体言ナリ、連体ナリともに結びになっていない。

さて、体言ナリがゾ、ナム、コソの結びとなり、連体ナリはそれらの結びにならない、という差異は何を表しているのであろうか。それは、体言ナリと連体ナリがはたらく構文機能上のレベルが異なることを表わすものと思われる。

体言ナリが結びとなるのは、実は、活用語一般と同様であつてさほど珍しいことではない。問題はむしろ、結びにならない連体ナリの方であろう。連体ナリは係助詞の結びについては、助動詞も含めた活用語一般とは異なると言わなければならない。そこに連体ナリの構文的特徴の独自性が認められるのである。本稿は体言ナリと連体ナリの差異を求めようとするものであつて、連体ナリだけについて詳しい議論を展開するのは、次章に譲ることとする。とにかく、ここで確認しておきたいのは、体言ナリと連体ナリとの構文的単位としてのレベルが違うということである。(注15) この問題に関しては、個々の係助詞の機能の面などから跡付けがなされるべきであり、今後さらに検討したい。

### 三 まとめ

以上、おこなつてきた現象の観察の結果を表5にまとめておく。説明の都合上、もっぱら差異に焦点を当てて述べてきたが、もとより差異の部分だけを見ようと意図してはいるわけではない。言うまでもなく、どの部分が共通し、どの部分が異なるかといった相対化がなされるべきである。そこで、表5では、共通点と差異を合わせて掲げておいた。この表をもとに、「下接語の種類」「係助詞の結び」という面においては、差異が見られるものの、共通する部分もまた少なくない。下接語の種類については、ケリ、メリというアリ系助動詞との承接が多いことや、ケム、ラム、マジ、ジとの承接の少なさ、ムと複合した際(ナラムの形)、ラム相当の表現性を持つことが挙げられよう。係助詞の結びについては、ヤ、カの結びにならないという点が共通している。ヤ、カが疑問表現に関わることからすると、体言ナリ、連体ナリともに疑問表現には受け入れられないのであり、ケリ、メリ、終止ナリといったアリ系助動詞と共通することになる。

こうして共通点を挙げてみると、従来、意味的観点から把握されてきたように、体言ナリと連体ナリをことさら区別しないという考え方もわからないではない。たとえば、おおまかに両者をコブラとして一括し、それでよいとする立場もありうるであろう。しかし、構文機能の差異という観点からは、両者の差異は見過ごしがたいのであつて、差異をもとに両者の次元の異なりを位置づけていかなければならないのである。

では、差異が最も顕著に表れる部分はどこであろうか。それは、従属節中の生起についてである。先述のように、体言ナリが従属節中で多く用いられるのに対して、連体ナリは全くと言っていいほど用いられていない。ここに大き



表5 まとめ

	差 異	共 通
下接語	①体言ナリはキ、ツ（連体法） マシが下接するが、連体ナリにはそれらが下接しない。 ②体言ナリはカシ、ナ、ヤが下接するが、連体ナリは下接しない。	①多→ケリ、メリ ②少→ナリ（伝聞・推定） ケム、ラム（原因推量系） マジ、ジ（否定推量系） ③ムにつくとラム相当 ④連体形接続終助詞には下接しない。
従属節	体言ナリは従属節中に多く生起するが、連体ナリは従属節中にはほとんど生起しない。	
係助詞	体言ナリはゾ、ナム、コソの結びになるが、連体ナリは結びにならない。	ヤ、カの結びにならない。

な次元の異なりを見なければならぬ。体言ナリは従属節に収まるが、連体ナリは従属節には収まり切らず、活用語でありながら、あたかも終助詞のような性質を持つているわけである。従来のように、体言ナリと連体ナリをコブラとして把握するにしても、単にコブラというだけでは正確さを欠くことになる。あえて、言い分けるとすれば、体言ナリは節構成レベルのコブラであり、連体ナリは文構成レベルのコブラであるとも言えようか。こうした次元の異なりが、マシの下接に対する制約や終助詞の下接に対する制約に影響を及ぼしていることは間違いない。今後さらに個別的に検討していく必要がある。

以上述べ来ったような理解にしたがっていけば、コブラの組織的な側面を解明していくことにつながるであろう。もちろん、ここでは節構成レベルの形式と文構成レベルの形式といった次元の異なりが厳しく区別されなければならない。たとえば、前者としては助詞ノ、複合助詞トイフなどが体言ナリとともに組織をなすであろうし、後者としてはゾ、カなどの終助詞が連体ナリとともに組織をなしているであろう。それぞれの組織の解明に向かうことによつて、ナリの問題だけでなく、いまだ説明されざる文法現象を説明可能にすることと思われる。

### おわりに

本稿は、研究史上盲点となつてきた、体言ナリと連体ナリの差異について検討をおこなった。関連する問題としては、名詞述語文の類型の問題、形容動詞との連続性をめぐる問題など多々ある。機会を改めて論じてみたいと思う。

注

- 1 ナリの種類については北原保雄（一九六七）参照。
- 2 「ナリ論争」については、第二部第一章参照。
- 3 北原保雄（一九八一）五一―四頁、五一―七頁参照。
- 4 用例の収集は『源氏物語』日本古典文学全集（小学館）による。本文の認定や個々の用例の解釈については、他の注釈書も参考にした。
- 5 形容動詞の認定をめぐる論争に関しては西田直敏（一九九三）が詳しい。
- 6 『古語大辞典』等、数種の古語辞典の見出しを参考にした。便宜的手段に過ぎないが、分類に固執していたのでは、この分野の研究に進展は望めないであろう。分類という作業を通して得られるものと同時に、切り捨てられるものの大きさを思うべきである。
- 7 ナリを二十アリに分解復元して両者を括る処理は、成立論と生態論の混同であつて妥当性を欠く。こういった分解復元説の批判としては、宮地裕（一九八七）参照。
- 8 たとえば、『金光明最勝王經古点』に、  
世に住（し）たまふこと六百八十億なりき。（卷三 滅業障品第五『西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究』より）  
とあるように体言ナリにキが下接して終止した例が見られるが、少数である。また、時代は下るが、鈴木泰（一九八五）の『群書治要』（鎌倉中期加点）を資料とした調査でも、体言ナリ十キで終止した例は一一四九例中一例しかないという。訓点語においても体言ナリ十キで終止することは多くないと予想されるが、いかがであろうか。
- 9 ただし、たとえば『枕草子』には、

さて、その二十日あまりに、中納言、法師になり給ひにしこそあはれなりしか。（『小白河といふ所は』）  
のように、アハレナリにキが下接した例（コソの結びではあるが）が見られる。今後、他の作品に資料を拡大してさらに検討したい。

- 10 仁田義雄（一九九二）参照。
- 11 「仮定条件節の帰結になりうるかどうか」という客観的基準によって、両者の対立は把握できる。第一部第七章参照。
- 12 第一部第三章参照。
- 13 小林賢次（一九九二）参照。
- 14 ラ変型活用語の連体形に下接した例が二例見られるが、終止ナリとの識別が困難な例として除外した。
- 15 構文的単位としての違いについては、北原保雄（一九八一）に指摘がある。

## 第四章 コ プ ラ 論 の 有 効 性

— 連体ナリの機能と意味 —

はじめに

先に、連体ナリと終止ナリとの差異をめぐって考究し、連体ナリの本質をコプラ形式として了解した。ここではその見通しのもとに、連体ナリのコプラとしての機能、意味について考究し、今まで未解決だった問題の説明を試みる。そして、連体ナリの位置付け、研究対象としてどの領域で扱われるべきかといったことについて考えてみたい。

## 一 連体ナリの構文機能

連体ナリについては、従来の研究で積み残されてしまった二つの未解決問題がある。一つは、「連体ナリにはなぜ連体形がないのか」という問題である。(注1) もう一つは、「連体ナリはなぜ係り結び(狭義)にならないのか」という問題である。説明を簡略にするため、それぞれ「連体形欠如」「係り結び制約」と呼ぶことにしよう。この二つは、解決の糸口さえつかめないまま今日に至っているが、連体ナリの個別研究にとどまらず、文法論上の重要な問題であると思われる。これらの問題について合理的に説明し、個別論を越えて連体ナリを体系的に位置付ける道筋を示すことが本章の目的である。

さて、その第一歩として、連体ナリの構文的機能について整理をおこなう。先の第二部第二章での整理は、終止ナリとの差異を明らかにする目的で行なわれたものであった。調査資料等、データは原則的に第二部第二章で調査したものをを用いるが、本章では、目的が異なるため、当然現象の整理の仕方も異なってくる。

## 一・一 助動詞の下接

## a 未然形接続の助動詞

未然形接続の助動詞ではムだけが下接する。

- (1) おまへの池、またなにの心につけるならんとゆかし。(枕)  
 (2) (女房)「若君はいつくにおはしますならむ。」(源氏・空蝉)  
 マシが下接した例は見あたらない。ナラマシについては、第七章参照。

## b 連用形接続の助動詞

連用形接続の助動詞ではケリだけが下接する。

- (3) 行く水に数かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり(伊勢)  
 (4) 家に預けたりつる人の心も荒れたるなりけり。(土佐)  
 テンス・アスペクトの助動詞キ、ツ、ヌ、タリは一切下接していない。なお、ケムの下接した例は、問題があるため保留しておくことにする。

## c 終止形接続の助動詞

終止形接続の助動詞としては、ベシ、メリ、終止ナリ、ラムが下接している。(ただし、ナルラムは和歌に限られる。)

- (5) これは、病をすれば、詠めるなるべし。(土佐)
- (6) う、かくはかなくて我もいたづらになりぬるなめり、と思す。(源氏・夕顔)
- (7) (源氏)「御仲どもにまかせて、見放ちきこゆべきななりな。う」(源氏・若菜上)
- (8) いつもみる月ぞと思へど秋の夜はいかなる影をそふるなるらん (後拾遺二五六)
- 終止形接続の助動詞ではマジだけが下接していないが、ヌ、ジが下接していないことを考えると、《否定》を含むことが原因かと思われる。

## 一・二 従属節中の生起

## a 連体節

連体ナリが連体節中に生起した用例は見られない。その理由については後述することとし、ここでは現象の確認にとどめる。

## b バ仮定節

バ仮定節中に生起した例は、以下の二例しかない。中古においては、原則的に生起しないとされる。(注2)

- (9) (帝)「なはこの源氏の君、[まことに犯しなきにてかく沈むならば]、必ずこの報いなんとむおぼえはべる。…」(源氏、明石)

- (10) (源氏)「…[心の通ふならば]、いかにながめの空ももの忘れしはべらむ」など、こまやかににけり。(源氏、賢木)

## c バ確定節

連体ナリがバ確定節中に生起した確かな例はない。(注3)

## d ド／ドモ逆接節

ド／ドモ逆接節中に生起した例は以下の二例である。

- (11) 「やがて世の政をしたまふべきなれど」、「さやうの事しげき職にはたへずなむ」とて、う (源氏、澤標)
- (12) う、「まだ深くもあらぬなれど」、「いみじうさくりもよよと泣きて、…」(蜻蛉)

第一例はベキナリの例として処理できるから、厳密には第二例だけということになる。第二例は、有名な道綱放鷹の場面である。「深くもあらぬなれど」の意味がはっきりしないが、諸注釈書の解釈どおり、道綱の未熟さを表わすとするれば、このナリは終止ナリではありえないことになる。作者が我が子について、わざわざ《伝聞》《推定》

を表わす表現を用いるのは、いかにも不自然である。よって、消去法によれば連体ナリとみなしうる。本文の問題もあるかもしれないが、即断はできかねるが、この例を認めたとしても、逆接節中の生起は一例にすぎず、原則的に生起しないと言っている。

ただし、ここで注意しなければならない問題がある。それは、終止連体同形の語に接続したナリの処理である。この問題の具体的な検討については、機会を改めなければならぬ。ただ、ナリに上接する動詞の語彙としては、終止ナリ特有と言える、音響、発話関係の動詞に偏するという事実をここで指摘しておくにとどめる。

### 一・三 係り結び

係り結びについては、先に第一部第三章で考察をおこなっている。ここでは、その結果を確認し、さらに新しいデータを加えておくことにする。係り結びの範囲については諸説あるが、一般に、「狭義係り結び」「広義係り結び」(以下それぞれ、「狭義」と「広義」と略記する)とされる範囲について考えてみたい。

「狭義」は、ゾ、ナム、ヤ、カ、コソの結びを指し、一般に広く言われるところの係り結びである。連体ナリは原則的に「狭義」にならない。つまり、先に挙げたどの係助詞の結びにもならないのである。(注4)

一方の「広義」は、ハ、モ、徒(助詞ゼロ)の結びを指す。「広義」についてみると、連体ナリはハ、モ、徒いずれの結びにもなっていることがわかる。

(13) 行く水にかずかくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり(古今五二二)

(14) はやても龍の吹かする也。(竹取)

(15) 幣には御心のいかねば、み舟も行かぬなり。(土佐)

(16) 「われはかなくて死ぬるなめり。」(蜻蛉)  
この女御の殿にさぶらひたまひしなり。(大鏡)

(17) 数量的にみると、ハの結びとなる例が最も多く、次いでモ、徒の順である。たとえば、『源氏物語』ではハ三十二例、モ二十二例、徒七例、『枕草子』ではハ十九例、モ二例、徒二例となっている。

散文ではハの部分には文脈上明らかなため、省略されることが多い。むしろ、文脈に依存できない和歌において共起率が高いわけである。(注5) モとの共起は少ないが、モが情意性を指向することによるのであろうか。助詞モの文中用法については、今後考えてみたい。徒の結びが会話文に多いことは現代語と共通するであろう。

以上見てきた連体ナリの構文機能をまとめると、表1のようになる。表1の結果をまとめておくと、未然形接続、連用形接続助動詞を下接しないことから、ヴォイス、テンス、アスペクトなどが分化していないことがわかる。動詞述語性が希薄であると言えるだろう。また、原則的に従属節中に生起しないことから、文において生起する位置としては文末述定に限られることになる。係り結びは、「狭義」とは関わらず、「広義」とのみ関わる。

連体ナリの個別論の範囲においては、以上の構文的特徴が確認された。次項において、他の表現形式との比較を試み、相対化を図りたいと思う。

表1 連体ナリの構文的機能

助動詞の下接			従属節中の生起				係り結び							
未然形	連用形	終止形	仮定節	連体節	確定節	逆接節	ゾ	ナム	ヤ	カ	コソ	ハ	モ	徒
△	△	○	△	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○

## 二 連体ナリの位置づけ

連体ナリは一般に「断定の助動詞」と言われ、助動詞の中に位置づけられている。しかし、先行研究をたどつてみると、必ずしも助動詞とする立場ばかりではないことが知られる。たとえば、山田孝雄は「説明存在詞」、松尾捨治郎は「不完全動詞」、北原（一九八一）では「形式動詞」とし、いずれも助動詞（山田の場合は複語尾）とはみなしていない。「連体ナリを助動詞と認めるかどうか」は、結局は助動詞の定義によるのであり、分類至上主義に流れると、議論の生産性がなくなってしまう恐れがある。分類そのものが目的ではなく、むしろその前提となるべき言語現象の記述が要請されるのである。そのために、助動詞一般、終助詞、終止形述語との比較を試み、連体ナリの品詞論上の位置づけについて考えてみたい。

## 二・一 連体ナリと助動詞

先述のように、連体ナリは「断定の助動詞」とされ、助動詞として位置づけられている。たしかに、形態的には助動詞的な側面を持つており、メリ、ケリなどのアリ系列助動詞と似ているところがある。また、そこから終止ナリとの区別の問題が生じてくるのである。だが、構文機能の面において、助動詞とは全く異なる特徴を有していると言わなければならない。

まず、接続については、北原保雄氏が指摘するように、準体句という体言相当のものに接続している。山田文法では一般にいふところの助動詞を複語尾とし、動詞の語尾とするが、この了解からすると、準体句に接続する連体ナリ

は当然、複語尾の範疇には入らないことになる。説明存在詞として特立されるゆえんである。

また、連体ナリは前項で述べたように、従属節中に生起せず、「狭義」に関わらず「広義」に関わる、という特徴を持つてゐる。これも、助動詞一般には見られない特徴である。助動詞一般は、従属節中に生起でき、「狭義」のスコープ（作用域）の範囲内にある。連体ナリの機能的特徴はジに似ているが、ジそのものが助動詞の典型からはずれており、終助詞に近いものであることは先に述べたとおりである。その類似性は連体ナリとジとの文構造上の位置の近さを反映しているものなのである。

意味についてはどうか。助動詞一般は対象の意味と作用的意味を有していると考えられる。濃淡の差はあるものの、質の異なる二つの意味はどの助動詞においても認められるであろう。一方、直感的にしか述べられないけれども、連体ナリには助動詞一般のような意味は認めにくい。助動詞一般の意味とは、そもそもレベルが異なっているように思われるのである。（注6）

## 二・二 連体ナリと終助詞

次に、終助詞との比較を試みよう。

一口に終助詞と言っても、多種多様であつて、それら一つ一つと比較していってもあまり意味がない。そこで、終助詞の中でも、接続（準体句を承ける）、意味の面において、連体ナリと連続するゾ、力を取り上げて比較してみよう。とりわけ、連体ナリとゾについては、夙に春日氏の研究で取り上げられており、関係の深さが知られている。

表2 連体ナリと終助詞

	助動詞の下接			従属節中の生起				係り結び						
	未然形	連体形	終上形	仮定節	連体節	確定節	逆接節	ゾ	ハ	カ	ヤ	ナ	モ	徒
連体ナリ	△	△	○	△	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○
終助詞	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○

表2より、連体ナリとゾ、カとは接続、機能面ではほぼ共通していることがわかる。ただ、不定語の結びについては、連体ナリのみがその機能を持ち合わせていないけれど、文中カの結びの問題として説明可能であろう。大きな差異としては連体ナリは助動詞を下接でき、終助詞を下接できないが、ゾ、カは助動詞を下接できず、終助詞は下接できることである。

「広義」については、ほぼ共通するが、連体ナリが徒の結びになる例が見られるのに対して、ゾ、カはそのような例が見られないことが注意される。以下、ゾ、カがハ、モの結びになった用例を『源氏物語』から挙げておく。(注7) なお、徒の結びになった例は『源氏物語』には見当たらなかった。

## 〔終助詞ゾ〕

(18) かれ(桐壺更衣)は、人のゆるしきこえざりしに、御心ざしあやしくなりしぞかし。(桐壺)

(19) く、後れたる事多かるは、何わざしてかしづきしぞと、(葵)

(20) 人の恨み負はじなど思ふも、世に長うありて、思ふさまに見えたてまつらんと思ふぞ。(紅葉賀)

## 〔終助詞カ〕

(21) 客人は寝たまひぬるか。(帚木)

(22) 繫がぬ舟の浮きたる例も、げにあやなし。さははべらぬか。(帚木)

(23) 親の顔はゆかしきものとこそ聞け、さも思さぬか。(玉鬘)

次に、意味については、助動詞と同様、終助詞の意味記述が十全でないので、やはり確かなことは言いにくい。以下に見通しを述べることにする。

連体ナリもゾ、カも基本的に文構成レベルで働く点は共通するとみてよい。連体ナリは単独用法で用いられたとき、文として《説明》を表すことがある。その場合は、結果として対他性を帯びることになるが、形式自体が対他性を有しているわけではない。その点については、ゾ、カも変わりはないのだが、平叙文のみならず、質問文にも用いられることから、連体ナリに比べて《対他性》に傾いていると見ることができる。また、カは《詠嘆》という《情意性》に傾斜する。この《対他性》《情意性》への傾斜が連体ナリとは異なる部分であるように思われる。こうした表現性については、連体ナリはニュートラルであるように見える。

## 二・三 連体ナリと終止形述語

助動詞、終助詞との比較によって、連体ナリの機能・意味はかなり相対化されたが、さらにここで終止形述語との比較を試みる。終止形述語とは文字通り活用語終止形が述語としてはたらく場合を指している。

花美しく咲く。

鳥鳴く。

では、終止形述語の機能・意味は連体ナリのそれとどう違っているのだろうか。その実態を整理し、表3で示しておこう。

表3 連体ナリと終止形述語

	助動詞の下接			従属節中の生起				係り結び							
	未然形	連用形	終上形	仮定節	連体節	確定節	逆接節	ゾ	ハ	ヤ	カ	コ	ハ	モ	徒
連体ナリ	△	△	○	△	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○
終上形述語	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○

表3からわかるように、連体ナリと終止形述語は構文機能においてほぼ共通している。(注8) 構文機能において連続するとすれば、意味的にも共通する点があると予想される。ただ、従来は「終止形述語の意味をどう考えるか」という問題設定そのものが、なされていないこともあって、終止形述語の意味についてはよくわかっていない。文法研究において、終止形述語の意味は陳述論と結びついて、主に文成立論の中で扱われていたように思われる。その中において、終止形述語の意味そのものについて述べた、川端善明(一九七九)の以下の記述は注目される。

終止形は、述語としての意味が存在詞文・形容詞文のもつ形容詞性に等しく、形式的にも、助動詞的言語層を言語的に分化しない用法をもつが、当然そのことと対応的に、意味的にも存在相的意味、即ち例えば分けて、叙法的な意味と時制的な意味が顕在的でもなく、また相互に分化的でもない。例えば叙法的には一応、直叙であり肯定であるとも言えもするが、これは形容詞的な判断の現実性に他ならないのである。現に在るところの事態(こと)は、原因結果、或いは否定などの契機を含まぬそれ自体性において、消極的に直叙的、肯定的である他ない。終止形の述語もつこのような叙法的性格は、事態の現実性によって単に与えられたものに過ぎないのである。時制的な意味に関しても同様であって、事態の現実性に保証された限りで現在のとも言え、それを抽象場に一般化する限りで恒時的(超時的)とも言えるだけである。(『活用の研究Ⅱ』二七八頁)

連体ナリと終止形述語との共通性という視点を持つことが、どのように議論の生産性をもたらすかについては、後述することにする。

ところで、連体ナリと終止形述語の構文機能はほぼ共通するものの、完全に一致しているわけではない。連体ナリには助動詞ム、ケリが下接しうるのであり、終止形にム、ケリはつかないのである。この差異は看過しがたい問題であるので、それぞれについて個別に検討していこう。

## 二・四 ムの下接

ナラムにおいて、ムの《意志》《未実現》は抑制されている。《現在推量》《原因推量》に傾斜する点でラムに近づいていると言えよう。(注9) 本来、ムとラムは根が一緒であるから、連続面を持つことはむしろあたりまえのことだが、共通性を顕現させる条件づくりに連体ナリが働いていることは注意されてよい。(注10)

ナラムとラムとの連続性を示す構文現象としては、不定語、バ確定節(あるいは相当のものとして「ニテ」「トテ」で表される原因・理由の表現)の帰結になることなどが挙げられよう。

### (不定語)

- (24) (女房)「若君はいづくにおはしますならむ」(源氏・空蝉)  
 (25) く、いかに見えつるならむ、と思ふ。(源氏・総角)  
 (26) (バ確定節およびそれ相当のもの)

「く、」もの思ふ人の魂はあくがるものなれば、「夢も騒がしきならむかし。」(源氏・浮舟)  
 (27) (26) 「く」さすがにいと気色あるところにつきたまへる人にて、「もてないたまふならむ」(源氏・若菜下)  
 不定語の結びは通常力が用いられるが、連体ナリが狭義係り結びに関わらないため、カの結びにならず、疑問詞連



体形終止となっている。

《現在推量》を表す例は以下のとおりである。

- (28) 思ひあまり出でにし魂のあるならむ夜ふかく見えば魂むすびせよ (伊勢)  
 (29) にはかにかの宮のしたまふならむ (源氏・鈴虫)

さて、このようなラムとの連続性は、述語のありかたに即して言えば、ムが本来の未然形述語性を喪失していると言えよう。それは、連体ナリの有する存在詞性、直接的には連体ナリが内包するアリの作用によるものである。

### 二・五 ケリの下接

連体ナリにケリが下接してナリケリという形をとると、《詠嘆性》が顕現する。

- (30) 行く水に数かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり (伊勢)  
 (31) 家に預けたりつる人の心も荒れたるなりけり (土佐)  
 (32) 命にもまさりて惜しくある物は見はてぬ夢のさむるなりけり (古今六〇九)

このようにナリケリは和歌の歌末に好んで用いられるが、散文にも用いられる。その時のケリにはテンス・アスペクトの意味が感じられない。

なお、ケリの意味の主観面と客観面については、上代語について吉田茂晃 (一九八九) が指摘しており、従うべき卓見である。これは、一般化すると、アリケリと非アリケリの問題になり、その線でいけば中古にも適用できると思われる。

見方を変えてケリの側から言えば、接続による意味分化のありかたとして了解されよう。

動詞性述語 +ケリ……《過去》  
 形容詞性述語+ケリ……《詠嘆》

以上の検討から、ムとケリの下接については次のように考えられる。一般におこなわれているように、助動詞の接続を基準にして、連体ナリに未然形、連用形を認めることは、形態につきすぎた考え方であって、内実に即していなであろう。つまり、連体ナリは動詞述語と同じような価値の未然形、連用形を持つておらず、その形態変化は接続のための消極的なものにすぎないのである。それはたとえば、終止形接続の助動詞との接続において見られる連体形と等しいものと思われる。述語としての消極性という点から言うと、形容詞述語性の強いものであると認めてよいだろう。(注11)

連体ナリと終止形述語との間に差異が存する事実は動かないが、それはけっして本質的な差異ではありえず、むしろ連体ナリと終止形述語との機能、意味の共通性に注目することが重要である。

### 三 連体ナリの領域

ここまでの検討により、連体ナリを助動詞として扱うことが適切でないことは明らかである。そもそも、連体ナリ

しては位置づけられない。むしろ終止形述語、終助詞との連続性を重視するべきである。では、それはどのような領域なのであろうか。

川端善明(一九八九)では、ソとナリ(断定)との連続性を文の世界と述語の世界の連続」としてとらえられている。

即ち(有倫)のアリ(ナリ)と、正当に(属)に、そしてより限定するならば(属)に所属すべきものとしてのソは、対応するのである。前者は文に実現したものととしての繫辞であり、後者は述語に実現したものととしての繫辞である。前者は係結における係助詞であり、後者は述語における助動詞である。もとより、すべてにおける係結を(たとえば承認の中止である(疑)の係結や、即目的な喚体の係結においてさえ)繫辞の実現と呼び得るにしても、ソにおけるそれは最も端的な形式化であり、すべての助動詞を繫辞(存在詞)の様相的・様態的な変容と呼び得るにしても、変容としてもそれらと呼び得るような端的な形式化において、ナリ(アリ)は存する。

(二二八頁)

ここで述べられているように、ナリとソは繫辞性を持つことにおいて連続的にとらえうる。その連続性の顕われとして、前節で見たように構文的な対応があるのである。ナリとソを連絡する繫辞性(根源的なアリと呼んでもよい)は終止形述語とそれらをも連絡するであろう。注連体ナリの位置する領域は、終助詞、終止形述語との連続性において理解されるべきものである。

終止形述語 …… 連体ナリ …… 終助詞

では、先のような把握によって、どのような言語現象の説明がなされるであろうか。

実は、この把握によって、はじめて「連体形欠如」「係り結び制約」の説明が可能になると思われるのである。まず、前者の問題について説明を試みることにしよう。

「連体形欠如」はそれだけを個別に説明しようとすることは本筋ではないし、またできないだろう。たとえば、現代語「のだ」と置き換えて説明することがおこなわれている。(注12) たしかに、現代語では、

\*雨が降るのだ日に、研究室に訪ねて行った。

のように、連体節中にノダは生起しない。このように、現代語ノダが連体節中に生起しない事実をもって説明しようとするが、そもそも現代語ノダはノナラ、ノダカラ、ノダガノダケレドモのように文中に自由に現れうるのであり、意味的に置き換えが効くからといって、本来機能の異なるノダと安易に置き換えること自体に無理がある。

では、どのように説明されるべきであろうか。ここで、連体ナリがバ確定節、ド逆接節に生起しない事実注目したい。つまり、連体ナリは連体形のみならず、已然形も欠如しているのである。(もちろんコンソの係り結びにもならない)「連体形欠如」「已然形欠如」は、結局、連体ナリが従属節において生起しないことを示すが、要するに連体ナリが文の述定においてのみ働くことを意味しているというだけのことである。つまり、連体ナリが用いられると文が成り立ってしまい、もはや文の一部分となることはできないわけである。その意味では先述のように終助詞に近い性質を持っていると捉らえてもよい。

従来の研究では、連体ナリに已然形が存在することを前提に議論をしていたために、このように統合的に考えることは、そもそもできなかったのである。先入観にとらわれた陥穽と言えるであろう。

次に「係り結び制約」について説明してみよう。

狭義係り結び(以下、「狭義」で示す)は佐治(一九九一)で述べられているように叙述部をスコープとすると

思われる。しかし、叙述部は広義係り結び（以下、「広義」で示す）のスコープに包摂される。言い換えれば、係り結びのスコープは二重構造をなしているということである。「狭義」と「広義」の差は文構造の観点からすればスコープの広狭の差であると解釈される。また、文成立の観点からすると、文の基底をなすのは「広義」の方であるということになる。

このような考えの上に立てば、連体ナリが「狭義」に関わらず、「広義」にのみ関わるという性質は、連体ナリ自身が文の構造の基底をなしているからではないかと考えられる。述語の様相性とは次元が異なり、文の成立そのものに直接関与するレベルにあるのではないかと思われるのである。連体ナリが存在すると文が成り立ってしまい、「連体形欠如」「已然形形欠如」が生じるのである。

また、連体ナリと同様に、終助詞、終止形述語も二項の分節結合に関わるのだから、原理的に繫辞アリを内包しており、これらも係り結びをなしていると見てよい。係り結びを狭義のみに限定するのは、形態につきすぎたものであり、そこからは、実用文法（教育文法）的な価値以外、何も見えてこないであろう。

文法研究における「係り結び論」には、規範意識を追究しようとする国語学史のながれに位置付けられる方向がある。その一方で、有効に文を分析できるか、文法現象を体系的に捉らえ得るかという現在の価値において、係り結びの範囲を設定していこうとする方向がある。両者は異なる方向であるが、文法研究においては共存させるべきものである。本研究は言うまでもなく、後者の立場を取っている。「係り結びの研究」はまず係助詞の研究からという先入観と連体ナリは助動詞論において扱われるものだという先入観を両方取り去って見たとき、連体ナリの研究は「係り結び論」に直結していくものと思われる。（注13）

### おわりに

連体ナリの研究は、助動詞論の枠内で行われてきたが、それは修正されるべきである。連体ナリを助動詞と位置づけるのは形態につきすぎた見方であり、その線でのみ論じるのは文法論の本筋を見誤ることになる。連体ナリを出発点として「係り結び論」に向かうことが可能であり、むしろその方向においてこそ、連体ナリについて論じる意義が認められなければならない。

### 注

1 厳密に言うと、終止形接続に接続する際のナルが連体形とされるが、これは例外である。連体形と言うよりも、接続形と言う方が事実に合わせて思う。

2 ここで挙げたナラバの二例については本文の異同は見られない。

タルナラバの例が二例あるが、いずれも異文が見られ、確例とは認めがたい。

（柏木）「…まことにさる御執の身にそひたるならば、厭はしき身もひきかへ、やむごとくこそなりぬべけれ。」

（柏木）

（青）×

（河）×

（別）そひたるならば—そひたらは保

近くさぶらふ女房二人ばかりあれど、すずるなる男のうち入り来たるならばこそは、こはいかなることぞと

も参り寄らぬ、…(宿木)

(青) うちいりきたるならば—うちいりきたらば三

(河) X

(別) うちいりきたるならば—にはかにいりきたらば陽—いりきたるならば—保桃

なお、小林賢次(二九七九)では、「活用語十ナラバ」について中古和文資料を用いて調査され、用例が見出しがたいことを指摘している。

3 ナレバは、『源氏物語』に疑問例が二例ある。

(源氏) 「ここには、常にもえ参らぬがおぼつかなければ、心やすき所にと聞こえしを、心うく渡りたまへるなれば、まして聞こえがたかべければ。く」(源氏・若紫)

(青) 給へるなれば—給へかなれば御横柳池肖三

(河) わたり給へるなれば—わたり給ぬへかなれば七高尾大園

上達部は、みなさるべきかぎりよろこびしたまふも、この君にひかれたまへるなれば、人の目をも驚かし、心をもよろこばせたまふ、く(源氏・紅葉賀)

(青) ひかれ給へる—ひかれつる柳

(河) 給へるなれば—たてまつり給ことなれば七高尾平大

(別) X

第一例はベカナリとする異文が見え、ナレバのナリを終止ナリと解釈している本文がある。第二例では、コトナレバとしていったん形式名詞コトでまとめあげており、体言ナリと解釈するものがある。

4 ごく少数、例外があるが本文の問題を含む例であり、今は保留しておく。

5 和歌においては、ハと連体ナリの共起率が高い。和歌の論理性を表すものである。

6 田島光平(一九八二)では、時枝文法において、連体ナリが詞か辞かという問題提起をしている。

7 ハ、モが明らかに副助詞的な意味で用いられている例は除外している。

8 終止形述語については従来の分析が文体的観点に偏し、文法的意味的側面からの分析が進んでいないという問題がある。ただし、テンス・アスペクトの観点からは、最近注目されている。

9 連体ナリとラムとの連続性については、第二部第八章参照。

10 成立論上のムとラムとの関係については、川端善明(一九七九)参照。

11 このような形容詞述語性を考えると、「不完全動詞」「形式動詞」のように「く動詞」のような呼称は適当でないと思われる。

12 たとえば、小松英雄『やまとうた』(二二〇頁)

13 大野晋氏の研究が発表されて以来、「係り結び論」を情報構造の問題として論じる方向が確立されたように見える。たしかに興味深い問題ではあるが、研究の段階性を考えれば、まず文構造を押さえるのが先決ではなからうか。情報構造の面を向けすぎることによって、「係り結び論」の豊かさから離れていくことが危惧される。

文構造に関して言うと、今後追究されるべき問題は数多く残されている。たとえば、中古語の「広義く」に関して、具体的なデータが示されていないことであり、今後の調査分析が必要である。コンピュータを活用することによって、「語彙索引」ならぬ、「構文現象の索引」が作られるべきであろう。

## 第五章 モーダルな意味の派生

## ―助動詞ベシの成立をめぐる―

## はじめに

古代語助動詞ベシの成立については、従来よりさまざまな説が見られるが、それらの妥当性についての検討がなされていない。本稿では、意味的観点からベシ成立説の妥当性を検証し、その営みをとおしてベシの多義性について考えてみたい。

## 一 研究史

ベシの成立については数多くの説があり、それらが言い放たれたままになっているのが現状である。しかし、それぞれの説の妥当性は問われてよいはずである。ただし、妥当性の検証は文献上に現われた実態に即してなされるべきであって、抽象論を展開することや無理な原則を立てることは慎むことが肝要であろう。

さて、数多いベシ成立説の中で次の二説は他の説と比べていささか次元を異にしているように思われる。一つはベシの成立をウベシと関係づける説で、これを「ウベシ説」と呼ぶことにしよう。もう一つは接尾語との関係から成立を説くものであり、これを「接尾語説」と呼ぶことにする。両説はベシの成立について言及される際にはしばしば取り上げられるものであり、注目されてきた説である。とりわけ、「ウベシ説」は一般によく知られており、賛同する

研究者が多いように見受けられる。両説が他説と決定的に異なるのは、どちらもベシという個別の形式の成立を説明するにとどまらず、説の延長線上において、他のモダリティ助動詞の成立に説明が及ぶことである。その意味で、他の成立説とは次元を異にしていると見なければならぬ。次節では、両説が実際どのようなものであるか、その内容について具体的に見ていくことにする。

## 一・一 ウベシ説

「ウベシ説」については広く知られているが、その成立と展開については必ずしもよくわかっていない。現在広く知られるようになったのは、佐伯梅友氏の記述によるところが大きいと推測される。

次に、『ベシ』であるが、この『ウベ』は、『ウベ』(宜)に関係があるのではないかと言われる。『ベシ』は、周囲の事情、前後の模様、従来の経験などから考えて、どうしてもこうあるだろう(自然的動作の場合)、どうしてもこうする方がよさそうだ(意志的動作の場合)というように推量するのを根本として、可能、勧誘、命令などの意に、発展して行くものようである(『奈良時代の国語』一七六頁)

ただし、「〜と言われる」のように伝聞表現をとっていることから、この説が佐伯氏以前に存在することは明らかである。たとえば、松岡静雄は、

ウベ(宜)の原語ベに形容詞語尾シが結合した語で、「當然」の意である。……此意味から轉じて話者自身のこととをいふ場合には意向の表示となり、相手又は第三者にいふ場合には命令になるのである。……(『日本語学』一七四―一七五頁)

と述べている。

さらに溯れば、ホフマン『日本文典』においてベシの古形をムベ(宜)と結び付ける説が見られる。現在のところ、「ウベシ説」としては最も古いものである。ホフマンは来日を果たせなかつたのであるから、日本の文献を見て示唆を得ていることは、まず間違いないものと思われる。とすれば、「ウベシ説」の萌芽は江戸時代にはすでに存在していたことになる。このように、来歴を辿ればかなり遡ることができそうであるが、本稿の趣旨はそういった考証にあるのではない。当面、説の展開について輪郭を押さえておけばよい。

先述のように、「ウベシ説」は佐伯氏以降も賛同する研究者が多い。ベシの成立説として最もよく知られているというだけではなく、多くの研究者から積極的に支持されている説であると言えよう。(注1)

## 一・二 接尾語説

阪倉篤義氏は、『べし』『し』『らむ』『けむ』について(『佐伯梅友博士古稀記念国語学論集』所収、後に『論集日本語研究 助動詞』有精堂に収められた)において、表題に掲げられた四助動詞の成立に関する新説を出された。

阪倉氏はハルカ、シツカ、サダカのように情態言を構成する接尾語カ、同じく情態言を構成する接尾語マ(クツマ、フツマ、コリズマなど)に注目される。そして、マの音交代形としてバという要素を想定される。以下、論文から引用する。

……この「カ」の形をもつ情態言が、接尾語シをとって叙述性をもつものとなり、形容詞化する際に、「ケシ」の形をとると同様に、みぎの「バ」という情態言は、形容詞化して「ベシ」という形をとったことが想像される。このべは、ケシのケと同様に、常に乙類なのである。(b a + i v b e)。——中略——

以上のようにして、ここにベシという接尾の要素が成立するとともに、これは、いわゆる肥大した接尾語と

なることよって、あらたに、さかんな形容詞構成力を持つにいたったと考えられる。ただ、問題のマが、わずかに「ぐずま」という終止形接続の形で生き残ったのと同様に、このベシもまた、動詞の終止形に接続して、特殊な形容詞を構成する接尾語であった。ということは、前述の終止形の性格からも了解しやすいように、このベシは、上接の語と密着して一語の形容詞と意識されるよりは、むしろこれと切り離して意識されやすいものであった。そこから次第にこれを、むしろ文法的要素(形態素)として見るべき性格がよくなってきたものと考えられる。そうなることよって、このベシにも、いわゆる辞的な性格が加わってきたのである。大体、一般に、山田孝雄博士のいわゆる「複語尾」としての性格をもつ助動詞なるものにおいては、その成立に右のような事情を想定すべき場合が多いと考えられるのであるが、ことにこのベシの場合、前述のごとき詞的なものに結びつくその意義かりに言えば、『……する」という状況にある』というような意義は、右のようなところに、その由来をもつものと考えなくてはならない。

ウベシ説が広く知られ、かつ多くの研究者の支持を得ているのに対して、この接尾語説はあまり知られておらず、積極的に支持されているように見えない。ベシ成立説として取り上げられるときも、紹介にとどまり、本格的に批判がなされることもないようである。(注2)

以上、ウベシ説、接尾語説について見てきた。両説を比較すると、ウベシ説の方が一般に浸透しているように見える。しかし、両説のどちらがより妥当性が高いかについては明らかでない。今回は意味変化の観点から両説の妥当性を検証してみた。両説ともベシの意味の実態に繋がるかどうかのポイントであり、特にウベシ説はその点において支持を得ているように見える。そこで、意味の問題にしばって検討を行うわけである。次節では、ベシの意味変化のありように即して両説の妥当性を検証してみたい。

## 二 ベシの意味

## 二・一 従来の研究

ベシの意味についてはかなりの研究の蓄積がある。基本文献としては、中西宇一(一九六九)、堀口和吉(一九七九)が挙げられよう。意味変化の検討に入る前に、ベシの意味を理解する上での基本的な考え方について確認しておきたい。中西氏はベシの核的意味として、「様相的推定」(対象自体に存する必然の結果として把握される現実的・様相的推定)と「論理的推定」(物事のことわりによる必然の帰結として把握される観念的・論理的な推定)を設定される。前者は、現代語「シ」(シ)「ソウダ」に相当し、後者は「スルハズダ」に相当する意味を表わすという。そして、ベシの多義はこの二つの核的意味からの派生であるとされる。ベシの基本的意味としては、後者に重きが置かれがちだったが、それと対等な位置に「様相的推定」を置いたことは注目すべきであろう。ただ、二つの核的意味のどちらが重要なのか明らかでない。

堀口(一九七九)においても、上接の動詞を「自然の動き」と捉えた場合、事態の成立相に関わる意味として、《様相》を表すという指摘がなされている。これらの研究においても指摘されているように、ベシは一般に「推量の助動詞」と位置づけられてはいるが、《様相》といった客体的な意味を持つて注意されることが注意される。この意味はベシが連用形態を持つことや相互承接のありかたから明らかであろう。《様相的推定》《様相》として指摘された客体的な意味は、後に意味変化を考える上で重要な役割を担うものである。

## 二・二 意味の実態

次に、ベシの意味の実態を観察しておきたい。ここでは、成立論との連続性を考慮して、上代および平安初期の実態を見ておくことにする。調査資料としては、『万葉集』『竹取物語』『伊勢物語』『土佐日記』を用いた。ベシの意味については、高山善行(一九九五)に準じて以下のような意味項目を立てることにする。(注3)

## a 《様相》(シソウダ)

(1) 常人の恋ふといふよりはあまりにて我れは死ぬべく(之奴倍久) なりにたらずや(万一六六)

(2) ある時は、浪に荒れつゝ海の底にも入りぬべく、ある時は、風につけて知らぬ国に吹き寄せられて、(竹取)

## b 《可能》(スルコトガデキル)

(3) 梅の花咲きたる園の青柳はかづらにすべく(須倍久) なりにけらずや(万八一七)

(4) しのぶ山しのびてかよふ道もがな人の心のおくも見るべく(伊勢)

## c 《必然》(スルハズダ)

(5) 佐保川の水を堰き上げて植ゑし田を刈れる初飯はひとりなるべし(独奈流倍思)(万一六三五)

(6) これを聞きて、まして、かぐや姫、聞くべくもあらず。(竹取)

## d 《必要》(スル必要ガアル)

(用例ナシ)

## e 《義務》(スルベキダ、シナケレバナラナイ)

(7) ますらおは名をし立つべし(立倍之) 後の世に聞き継ぐ人も語り継ぐがね(万四一六五)

表2

	意味	意味項目	万葉集(全 132 例)	全体(全 236 例)
(I)	《事態の意味》	a、b	70 (53.0)	114 (48.3)
(II)	《義務の意味》	e、g	40 (30.3)	63 (26.7)
(III)	《推量的意味》	c、h	22 (6.9)	59 (25.0)

※ ( ) 内は%を表す

(I) 《事態の意味》は客体性の色濃い意味であり、判断性の最も希薄なものである。実際、用例にあたってみると、《様態》と《可能》は判別に迷う場合が少なくない。両者が意味的に近接していることを示すものである。(II) 《妥当の意味》は事態の妥当性に関する意味であり、他者への拘束力の強弱によって、《義務》《適當》の差異を生じることになる。(III) 《推量的意味》は最も判断性の濃いものである。一般に言う狭義《推量》に相当する。これらを判断性の濃淡の段階としてとらえるならば、(I) ↓ (II) ↓ (III) の順で、より事態性の強い意味から判断性の強い意味へとという段階差としてとらえることができよう。また、これら三つの意味区分は、英語の法助動詞における dynamic, deontic, epistemic の区別にはほぼ対応するものである。さて、こうして意味項目を整理した上で、それぞれの用例の分布を見ると、表2のようになる。

(I) 《事態の意味》	…… a 《様態》、 b 《可能》
(II) 《義務の意味》	…… e 《義務》、 g 《適當》
(III) 《推量的意味》	…… c 《必然》、 h 《推量》

の意味が出揃っていることがわかる。ここで、意味変化について考えるために a、h の意味を整理しておく。a、h の意味を以下のように大きく三つに括ってみる。ただし、用例数が少なく、意味的に特殊な d、f は除いておく。

表1

	a	b	c	d	e	f	g	h	保留
万葉集	50	20	6	0	12	1	28	16	40
竹取物語	7	9	6	0	16	0	2	11	3
伊勢物語	6	11	1	0	1	0	4	10	5
土佐日記	7	4	0	0	0	0	0	9	5

- f (8) 駿河の国にあなる山の頂にもてつくべきよし仰せ給。(竹取)
- f 《説明》(〜スルワケダ)
- g (9) ぬばたまの妹が干すべく(保須倍久) あらなくに我が衣手を濡れていかにせむ(万三三七二二)
- g 《適當》(〜スルノガヨイ)
- (10) 験なきものを思はずは一杯の濁れる酒を飲むべく(可飲有良師)あるらし(万三三三八)
- h (11) く、あやしう、さやうにてあるべき女ともあらず見えければ、(伊勢)
- h 《推量》(〜スルニチガイナイ、〜スルダロウ)
- (12) なかなかに死なば安けむ君が目を見ず久ならばすべなかるべし(奈可流倍思)(万三三九三四)
- (13) この人々の深き志は、この海にも劣らざるべし。(土佐)
- 作別別の意味の分布を表1に示しておく。
- 本稿で a 《様態》としているのは、堀口氏の《様相》にあたるものである。また、d 《必要》は平安中期には見られるが、今回の調査範囲においては用例が確認されなかった。f は孤例であり、意味項目として認めるかどうか検討を要するが、一応挙げておくことにする。(注4) また、いわゆる《婉曲用法》や意味の判別に迷うものは、判別保留として一括した。
- さて、表1から、既に『万葉集』の段階において、平安時代に見られるほとんど



表2より明らかのように、『万葉集』においても四作品全体を見ても、用例数としては(Ⅰ)Ⅴ(Ⅱ)Ⅴ(Ⅲ)となっている。とりわけ、(Ⅰ)の割合が高く、前節において注意したベシの客体性が実際に確認されることになる。こうした意味の実態をふまえて、次項では「ウベシ説」「接尾語説」について具体的に検討してみよう。

### 二・三 意味変化の方向性

ベシのようなモーダルな意味を表す表現形式の意味変化について伝統的な国語学の分野では、断片的な記述はあるものの理論化されていない。では、他言語の研究についてはどうだろうか。

たとえば、Traugottは Subjectification (主観化) という概念で意味変化の方向性について説明している。つまり、《外面的状況を描写する意味》から、《内面的状況(評価/知覚/認識にかかわる状況)を表わす意味》へと変化する方向性である。英語の場合、モーダルな表現の形式として、典型的なものとしては法助動詞が挙げられるが、その意味変化は、root meaning (根源的意味) から epistemic meaning (認識的意味) への変化であり、主観化の原則に合うものと言えよう。たとえば、法助動詞 *must* の意味が《義務》から《推量》へという変化はその一例である。

さらに、英語の法助動詞の意味発達という視点からは、以下のような指摘もある。

法助動詞の意味発達に関する入手可能な歴史的証拠はすべてその発達が動作主指向的法性から認識的法性への一定方向の発達であることを示している。実際、逆方向の発達は理論上あり得ないと考えている。(Bybee and

Paolucci 1985 中野(一九九三)より引用)

また、こうした方向性は、法助動詞だけでなく、法副詞 (evidently, apparently, obviously など) にもおいても確認され、最初は動詞を修飾する様態副詞だったものが、モーダルな意味をもつようになるという指摘もある。こうした意味変

化は、本稿の意味規定に即して言えば、《事態的意味》／《義務的意味》から《判断的意味》へという変化の方向である。

さて、この方向性を考える時、実はこの原則は日本語にもほぼ当てはまるのではないかと思われる。たとえば、ヤウナリ、サウナ、ゲナなどの助動詞には《様態》から《推量》への変化が認められるし、同じくモーダルな意味を担う叙法副詞(ムード副詞)類についても、キット、タブンのように本来、《情態》《程度》を表していたものの意味が変化した例が認められる。一方、逆方向の意味変化については、少なくとも助動詞については考えにくいし、また、そうした例も確認していないのである。今後、反例が出てくる可能性が全くないわけではないが、現在のところ、この意味変化の方向性かなり確かな原則と言えるのではないだろうか。

次節では、このような意味変化の視点から、ウベシ説と接尾語説の妥当性について考えてみたい。

### 三 成立説の妥当性

#### 三・一 ウベシ説

ウベシ説では副詞ウベ(亘)の語義によつて、その形容詞形ウベシが「当然だ」「もつともだ」という意味を表わすとする。そして、このウベシが助動詞化することにより、《必然》《推量》という《判断的意味》を表すことになり、助動詞ベシの本義となるという理解がなされる。こうした《判断的意味》を出発点として意味の派生を考えると、『万葉集』の段階で既に多様な意味の派生がなされていたことになる。

ここで問題となるのは、先に《様態》《可能》を括った《事態的意味》の存在である。『万葉集』においても平安初期作品においても、用例数の中で大きな割合を占めるのは、実は《事態的意味》であった。ウベシ説にもとづくと、結果的に《判断的意味》から《事態的意味》へという変化が想定されることになる。つまり、「く」にちがいない」「はずだ」という《判断的意味》から、「く」のような様子である」「く」すること可能である」という意味の派生を想定することになる。この変化は前節で確認した原則とは全く逆方向の変化となる。また、観察の途上ではあるが、知り得る限り、日本語におけるモーダルな形式の意味変化の方向性とも合致しない。

さらに、ここでもう一つ問われなければならないことがある。それは、そもそもなぜベシは多義性を持ち得たか、という問題である。助動詞一般に比して、なぜ、こども多義的であり得たのであろうか。これは単純素朴な問いであるが、それだけに積極的に問われていないようである。ウベシ説では、先述のように、本義を《必然》《推量》とするが、そのようなはつきりとした核的意味を持つものが、およそ、それらとはかけはなれた意味も含めて、多義を派生するのは不自然ではなからうか。

以上のように、意味変化の方向性、多義性の獲得という観点からすれば、ウベシ説は問題があることを指摘しておく。

### 三・二 接尾語説

「接尾語説」では、本来ベシの中心の意味はかなり抽象的なものであったとする。阪倉氏は、「……する」という状況にある」という意味を想定されている。これを今仮に《状況》と表示すれば、《状況》は事態のありかたを表すものであるから、《状況》は《事態的意味》(特に《様態》)と近接しており、移行しやすいものであったと思われる。

その後、《義務的意味》《判断的意味》が派生したと考えれば、意味変化の原則によく合うことになる。こうして、接尾語説の理解に立てば、意味変化の方向性について無理なく説明ができるのである。では、「多義性の獲得」についてはどうか。「く」という状況」というのはきわめて客体的な意味であって、

《事態的意味》に溶け込みやすい。したがって、強固な核的意味とはなりえず、文脈依存性が強い性質のものであったと思われる。様々な場面、文脈によって、多様な意味の派生が行なわれた背景には、そうした事情があったのではないかと思われる。

このように、接尾語説による説明には無理がない。意味的観点において検討するかぎりにおいて、接尾語説はウベシ説よりも妥当性が高いと判定されなければならないのである。

### 三・三 ゲナリの成立

以上のように、接尾語説の妥当性の高さが確認されたのであるが、ベシ以外の助動詞についても同じ理解によって、成立過程を説明できるであろうか。もし、説明できるとすれば、接尾語説の一般性が高まり、説の妥当性もさらに高まるであろう。ここでは、そうした一例として中世語の助動詞「げなり」の成立を取り上げてみたい。

ベシと接尾語ゲとの関係については、『あゆひ抄』において次のように記されている。

『サウニ』と当つる時、《可倫》の里言と同じ。もとより脚結の心よく通ひたるうちに《可倫》は重く、この隊

ここで指摘されているように、ベシと接尾語ゲは《様態》という意味において、通じるところがある。では、そのゲが助動詞化したとされるゲナリの成立については、どうであろうか。

実質名詞「気(け)」に由来するとされる接尾語「げ」は、平安時代以降用いられたとされる。「げ」の意味については、

外見的な状況から判断して、…と見える、いかにも…のさまである、の意を表す。「げ」全体は、多くは形容動詞語幹となる。…様子。…そう。(名詞に付いて)…のけはい、…らしさの意を添える。』(『古語大辞典』小学館)

という記述がある。ゲが本来、「様態」を表わしていたことに注意する必要がある。中古においてゲの上接要素は、形容詞語幹、形容動詞語幹、動詞連用形、助動詞、名詞と多彩である。(ただし、割合的には形容詞語幹が圧倒的に多いという。)

- (14) (更衣)「…、いとかく思ひたまへましかば」と息も絶えつつ、聞こえまほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、」(源氏・桐壺)
- (15) 世にもてかしづかれたまへるさま、木草もなびかぬはあるまじげなり。(源氏・葵)
- さて、鎌倉時代以降、接尾語ゲが助動詞化して、ゲナリ(ゲナ)が成立する。

- (16) サシモナクトモアリナン物ヲト難候ケナリ。『教訓抄』巻八
- (17) 「ヤレ杜鵑八吾ガ心中ヲ知テ、不如婦ト啼クゲナヨ」ト思ウテ、(『中華若木詩抄』)

ゲナリが助動詞化した背景には、シク活用形容詞語幹形態、およびシク活用助動詞マジ、マホシが終止形態と一致することにより、ゲの上接部が句として意識され、ゲと切り離されて意識されたのではないか。そして、切り離された結果、ゲナリが助動詞化したものと思われる。

では、意味変化の面についてはどうだろうか。仙波光明(一九七六)、小林千草(一九八七)などによれば、ゲナリの意味は《様態》から《推量》へと変化するという。ゲナリは最終的には《伝聞》を表すようになるので、その点はベシとは異なるが、『事態の意味』から『判断の意味』へという意味変化の方向性については、接尾語説で想定されるベシの場合と一致していることがわかる。

結局、ゲナリは事態の《状況》を表す接尾語ケをもとに助動詞化したものであり、意味としても《様態》から《推量》へと変化しており、接尾語説で説かれるベシと類似の成立例となるのではなからうか。ここではゲナリの成立について考えてみたが、他の助動詞(特に終止形接続助動詞)の成立についても今後検討がなされなければならない。その積み重ねによって、接尾語説の妥当性がより正確に知られることになる。

おわりに

モーダルな意味の派生がどのようにおこなわれるか、ベシの成立の問題と関係づけて考えてみた。ここで取り上げた上代語く中古語のベシはほんの一例にすぎず、他の時代の他のモダリティ形式についても、実態を調べてみる必要がある。日本語の史的研究を通じて、「一方向性仮説(hypothesis of unidirectionality)」を検証することになる。

注

1 佐伯梅友氏以降、「ウベシ説」を基本的に支持する立場としては、小松登美氏、大野晋氏、大野透氏、北原保雄氏、吉田金彦氏などが挙げられる。吉田金彦(一九七三)参照。

2 川端善明(一九七九)ではベシの語源をウベシに求めることを「迂遠」とし、  
「阪倉篤義氏が接尾語で、或いはその子音交代形としてのバ(更にその母音交代、乃至一種の露出形としてメ乙

「ベ乙が考えられる」に、ベシ・マシジの第一音節を求められたことは興味深い。」(四九二頁)という指摘がある。

3 本章では、第一部第八章で提示した意味項目を修正して用いている。

4 f 《必要》としては次のような例が挙げられる。

冬も、氷したるあしたなどはいふべきにもあらず。(冬でも、氷の張った朝などは、今更言うまでもない)(枕草子)

《必要》はベシが否定表現に用いられた場合に限って出てくる意味である。通常、辞書には記載されない。

5 ベシの文構造的な位置については、第一部第五章参照。

6 ベシの意味の派生過程については、核的意味(中心の意味)を想定して説明することは困難である。A→B→C

…のような連続的な派生を考えている。池上嘉彦(一九七五)参照。

7 山内洋一郎(一九八九)においてもゲナリの成立について言及されている。

用例調査に使用した注釈書類……『万葉集』(新潮日本古典集成・新潮社)、『竹取物語』『伊勢物語』(日本古典文学全集・小学館)、『土佐日記』(新日本古典文学大系・岩波書店)、『万葉集』の本文・訓みについては、佐竹昭広・木下正俊・小島憲之『万葉集』(塙書房)を参考にした。

#### 〔付記〕

「ウベシ説」に関しては小松登美氏より貴重な資料をご送付いただき、私信にて懇切なご教示を賜った。

また、英語の法助動詞については、毛利可信氏、渋谷勝己氏よりご教示をいただいた。

## 第六章 推定形式とテンヌ

—メリ・終止ナリをめぐって—

はじめに

中古語モダリティ助動詞の中で、メリ、終止ナリ（活用語終止形接続ナリ）にはテンス形式が下接することがある。（注1）しかし、その詳しい実態についてはまだ明らかにされていないようである。本稿では、まずそれらの実態について観察し、その結果をもとに推定形式の特質について考えてみたい。

一 研究史

中古語のモダリティ助動詞であるメリと終止ナリは、一般に狭義《推定》を表わすとされる。また、メリは「視覚に關わる《推定》」、終止ナリは「聴覚に關わる《推定》」を表わすと言われ、その対応が注意されている。（注2）

メリ、終止ナリがム、ラム、ケムなどの狭義《推量》を表わすものと一線を画する性質として、テンス形式の下接を挙げることができよう。北原保雄（一九八一）に以下のような指摘がある。

ところで、「なり（推定・伝聞）」と「めり」とは、推量の助動詞である（といわれているものである）にもかかわらず、連用形が認められる。ただ、その例数は僅少であり、しかも、いとどうれふなりつる雪かきたれいみじう降りけり。（源氏・末摘花）

かやうにことなるをかしきふしもなくのみぞあなりし。（源氏・宿木）

すすめ聞こゆる盃などをいとめやすくもてなし給ふめりつるかなと（源氏・宿木）

あま君その程までながらへ給はなむと宣ふめりき。（源氏・若菜上）

などのように、「つ」あるいは「き」が下接する例に限られ、中止法や連用法の例は全く認められないようである。したがって、大局的には、「なり（推定・伝聞）」「めり」「む」「らむ」「けむ」「らし」「じ」などと同類の助動詞であるとみなしてよいであろうが、「つ」や「き」に上接するということは、「音が聞こえる」「目に見える」というような客体的なところが残っているからか、あるいはそのような起源的な事情が形態的に残存しているからであると解釈せざるをえないであろう。「なり（推定・伝聞）」や「めり」には、現代語の「らしい」のように客体の側に即した表現と主体の側に即した表現（推量表現）との二面にゆれるところがあるのかもしれない。この点については、もう少し掘り下げて考察する必要がある。（四五二頁～四五三頁）

メリ、終止ナリの性質について考える上で重要な指摘である。ここで述べられているように、「掘り下げた考察」がなされていないのが現状であって、そのために実態の観察を行なうことが第一に要請されることである。

さて、モダリティ助動詞に対するテンス形式下接の問題は、現代語の研究においても取り上げられている。仁田義雄（一九九一）ではモダリティ形式のうちテンス形式が下接するものを疑似モダリティと呼んでいる。

真の典型的なモダリティは、言表事態や発話・伝達のあり方をめぐっての発話時における話し手の心的態度の言語的表現である。こういった「発話時における」「話し手の」といった要件を充たした心的態度の表現を（真正モダリティ）と本章では仮に呼び、この要件から外れたところを有している心的態度の表現を（疑似モダリティ）と仮称する。（五二頁～五三頁）

疑似モダリティ形式とは、真正モダリティ以外の用法を持つ形式である。つまり、形式自体が、過去になったり、

否定になったり、話し手以外の心的態度に言及したりすることがあるものである。(五四頁)

「カモシレナイ」「ヨウダ」「ラシイ」「タイ」「ツモリダ」などは、いずれも、上の例文が示すように、その形式自体がタ形を取っている。したがって、これらは、もはや発話時の心的態度を表すものではない。さらに言えば、これらが表しているものは、心的態度や心的態度に関わるものであるにしても、もはや主体的な心的態度の表明そのものといったものではなく、客体化された心的態度の存在や、そういった心的態度を起こさせる客観的な世界の様相といったものへと、移っているものと思われる。」(五五頁)

モダリティ助動詞にテンスが下接するという現象は、個別論にとどまらず、述語の階層について議論する上においても重要であろう。(注3) 現代語については機会を改めて検討してみたい。

とにかく、今回検討する古典語については、まとまった記述がなされていないのが現状であって、実態を観察するところから始めなければならない。以下、その手順について説明する。

まず、テンス形式としては助動詞キ、ツをとりあげることにする。ツは一般にアスペクト形式として了解されているが、近過去を表しうることから、二次的にテンスの意味を表わしている。よって、今回広く考究の範囲に含めることにした。また、ケリは一般に「過去の助動詞」と呼ばれ、当然テンス形式として扱えるのだが、実際にはメリ、終止ナリに下接する確例は見られない。(注4) 結局、キもしくはツが下接する場合(以下、メリキ／ツ、ナリキ／ツと表示する)について見ていくことになるわけである。

次節では、実際にメリキ／ツ、ナリキ／ツの個々の用例を観察していくことになる。少数例の検討になるし、相互承接の微妙な問題が関わってくるから、可能な限り異文を示すことにする。(『校本枕草子』『源氏物語大成』などによる)

なお、資料としては中古初期～中期成立とされる、以下の和文学作品を用いた。用例収集に用いた注釈書名と合わせて記しておく。『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』『土佐日記』『和泉式部日記』『蜻蛉日記』以上日本古典文学全集(小学館)、『枕草子』日本古典文学大系(岩波書店)『紫式部日記』新日本古典文学大系(岩波書店)『源氏物語』日本古典文学全集(小学館)〔

## 二 メリキ／ツの実態

メリキ／ツ用例の分布は以下のとおりである。

表1 作品別用例分布(メリキ／ツ)

	メリキ	メリツ
竹取物語	0	0
伊勢物語	0	0
大和物語	0	0
平中物語	2	0
土佐日記	0	0
和泉式部日記	0	0
蜻蛉日記	0	0
枕草子	4	0
紫式部日記	3	0
源氏物語	5	2

平安初期作品では、メリキが『平中物語』に二例生起しているだけである。メリツは用例が確認できない。つまり、用例は平安中期に集中しているのである。(ただし、『蜻蛉日記』には一例も用いられていない。)また、メリツは『源氏物語』に二例用いられているだけで、他の作品には見られない。以下、作品別に用例を見ていくことにしよう。

【平中物語】

(1)「いとものはかなきたよりにつけてありしことななり。その人はさだかにも知らじ。おのらも見しかば、はじめわたりの返りことはすめりし。その人の、ものへいましぬめりしかば、心には思ひながら、えせぬぞ。みづからは手もいとあし、歌はた知らず。あたらし、ことどもを」とぞいひける。

男が文使を介して娘に文を送る。最初は返事が来ていたが、そのうち返事が途絶えてしまい、何度も文をやるがいつこうに返事が来なくなってしまった。不審に思った男は事情を探ることにした。そこで、その娘付きの女房が返事の来ない事情を説明する場面である。「最初のうちは、代筆をする人が返事をしていただけの様子だった。ところが、その人がどこかへいらつしやたようで、(お嬢様としては)気にかげながらも、お返事ができないのですよ。」と説明している。「おのらも見しかば」とあるように、女房があたかも自分自身の目で見たかのように報告しているのである。この二例が数少ない平安初期の例で、他はすべて平安中期作品の例である。平安初期に用例が少ないのは、メリ、終止ナリそのものがまだ成立期にあったことによるのであろう。平安初期、『平中物語』だけに用いられた理由については明らかでないが、この作品は語法面において特殊な性格を示すことが指摘されており、さらに検討していきたい。(注5)

【枕草子】

(2)さればとて、はじめつかたは、かちありきする人はなかりき。たまさかには壺装束などして、なまめき化粧じてこそはあめりしか。「説経の講師は……」

作者が過去を回想している場面である。「自分が若い頃に聴聞に熱中したが、その頃はまだ一般の若い女性を見ることはなかった。他の女性は、まれに、おめかしをして出かけたようだった。」という部分である。以下に校異を示しておく。能因本では「ありしか」とし、メリが使われていない。

(三) はめ

底(能)・あ・りしか

(前) ……

(堺) コノ段ナシ

(3)「う。まだ上におはしましつる折からあるをば、知らざりける」とて、それより後は、局の簾うちかづきなどし給ふめりき。「職の御曹司の西面の……」

藤原行成との親交についての章段。行成が作者の寝起き顔をのぞき見たという事件の後で、「それより後は……」と後日談を語る。段末尾にあって、話の締めくくりに位置に用いている。「そのとき以来、(行成が)平気で私の部屋の簾をくぐって入り込んだりなさるようでした。」という意。

(三)

底(能)し給ふめりき

(前) コノ段ナシ

(堺) コノ段ナシ

(4)さてのちぞ、袖の帳などとり捨てて、思ひなほり給ふめりし。「頭中将のすずろなるそら言を……」

大意即妙の答えをした作者の機知を評価して、それまで作者の悪口を言いふらしていた斉信が考えを改める話である。(3)と同様、「さてのちぞ、……」と時の表現を用いて後日談を語る。「後に、(斉信が)機嫌を直したようだった。」

の意。前文にある「声などするをりは、袖をふたぎて、つゆ見おこせず、……」と呼応している。

(三)

底(能)おもひなをり給ふめりし

(前)

(堺) コノ段ナシ

(5)左衛門の陣までいきて、倒れさわぎたるもあめりしを、「かくはせぬことなり。〜」などくすしがる者どもあれど、聞きも入れず。「故殿の御服のころ……」

女房たちが大騒ぎする有様を描写的に表現している。

(三)

底(能)あめりしを

(前)

(堺) コノ段ナシ

用例を見ると、(2)、(5)は見たままを描写しているかのようで、様態性が強く顕われている。一方、(3)、(4)は時の表現の存在によって回想性が強く感じられる。話の末尾という場所は、物語の文章においてはケリがしばしば位置する場所である。

【紫式部日記】

(6)「そこらの上達部・殿上人にさし出でて、「まぼられつること」とぞ、のちに宰相の君など、口惜しがり給ふめりし。さるは。悪しくも侍らざりき。ただあはひのさめたるなり。小大輔は、紅一重ね、上に紅梅の濃き淡き五つをかさねたり。唐衣、桜。源式部は、濃きに、又、紅梅の綾ぞ着て侍るめりし。」

第一例、「のちに」で示されるように後日談として描かれている。第二例、衣装の色についての描写である。

(7)右の大匠、「和琴いとおもしろし」など、聞きはやし給ひ、されたまふめりしはてに、いみじきあやまちのいとほしきをこそ、見る人の身さへ冷え侍りしか。

酒の席での頭光の失態のありさまを描写的に表現している。

【源氏物語】

【メリキ】

(8) (女房)「御心地の重くならせたまひしことも、ただこの宮の御ことを、思はずに見たてまつりたまひて、人わらへにいみじ、と思すめりしを、さすがにかの御方には、かく思ふと知られたてまつらじと、ただ御心ひとつに世を恨みたまふめりしほどに、はかなき御くだものをも聞こしめしふれず、ただ弱りになむ弱らせたまふめりし。うはべには、何ばかりことごとしくもの深げにももてなせたまはで、下の御心の限りなく、何ごとも思すめりしに、故宮の御戒めにさへ違ひぬることと、あいなう人の御上を思し悩みそめしなり」と聞こえて、

(総角)

メリキの連続使用が見られる部分。(第一〜第四例をア〜エとする)

ア 匂宮が結婚後、中の君のもとに通つてこないことを「世間体が悪い」と思う大君の心の内を推定。

イ 大君が自分の胸のうちで匂宮と中の君との仲を恨む。

ウ 大君が衰弱していく様態を描写。

エ 大君がどこまでもつきつめて考えていくという心の内を推定している。「うはべには」と様態との対比が明瞭である。

イ、ウはメリのない本文がある。エはベカメリキ、ベカメリとするものがある。



ア イ ウ エ

(青) × (青) × (青) × (青) ×

(河) × (河) × (河) × (河) ×

(別) × (別) 給めりし—給し横陽 (別) 給めりし—給し平 (別) おほすめりしに—おほすへかめりしに

—陽—おほすへかめるに平

(9) 七月にぞ后めたまふめりし。源氏の君、宰相になりたまひぬ。(紅葉賀)

地の文の用例である。藤壺立后の場面。文体については後述するが、メリキ／ツは『源氏物語』で地の文で用いられることが少ない。しかも、この位置は段落の冒頭部分で、(3)、(4)と同様にケリが使われてよさそうな場所である。

全集本注「重大な公事なので『めりし』と婉曲に叙する」古典集成注「物語作者として重大な国事に関する記述を遠慮して、ぼかした書き方」とするが、他にどのような類例があるか知りたいところである。

(青) きさききる給めりし—きさききにみたまふめりし横—きさききにみ給めりしを陽

(河) ×

(別) ×

〔メリツ〕

(10) 母君「……身にあまるまでの御心ざしの、よろづにかたじけなきに、人げなき恥を隠しつつ、交らひたまふめりつるを、人のそねみ深くつもり、やすからぬこと多くなり添ひはべりつるに、……」(桐壺)

桐壺更衣の母が命婦に向かつて、娘(桐壺更衣)の死に至る経緯について語る場面。母が更衣の他者との付き合い方を推定的に述べている。異文について。ツのないもの、ツのかわりにキを用いているものがあり、『過去』という時のはばに対する解釈の揺れを表わしているのである。

(青) 給ふめりつるを—給めるを肖三

(河) 給ふめりつるを—たまふめりしを河

(別) 給ふめりつるを—給めりしを御国妻—ナシ陽

(11) 君は入りて臥したまひて、「……、これかれ、灯明かくかかけて、すすめきこゆる盃などを、いとめやすくもてなしたまふめりつるかな」と、宮の御ありさまをめやすく思ひ出でたてまつりたまふ。(宿木)

薫が勾宮の新婚第三夜の儀(披露の祝宴)の様子を回想する。

(青) ×

(河) もてなし給めりつるかなと—もてなし給めりつるなど大

(別) ×

以上で個々の用例の観察を終わる。次に、これらの用例を通してみた、メリキ／ツの統語的特徴、意味的特徴、文体的特徴について考えてみたい。

〔統語的特徴〕

まず、メリキ／ツの上接語について見てみることにする。表2を参照されたい。

上接語として目立つのは、「思す系」をはじめ、「思考・感情」を表わすものが多いことである。これは、メリの上接語の一般的な傾向とは異なるものである。メリの上接語としては、ラ変型活用語が多いことが指摘されており、とりわけ助動詞ナリ(断定)が多いという。(注6)ところが、メリキ／ツにナリが上接した例は一つもないのである。(その理由については後述)

表2 メリキ／ツの上接語

『平中物語』	のたまふ	2
(返りごとを) す	言ふ	1
(ものへ) います	聞こゆ	2
『枕草子』	咎めきこゆ	1
(化粧じて) あり	申したまふ	1
(うちかづき) す	御覧ず	1
思ひなほる	弱る	1
(倒れさわぎたるも) あり	ゐる	1
『紫式部日記』	紛る	1
惜しがりたまふ	いそぐ	1
(紅梅の綾ぞ) 着てはべる	いましむ	1
ざれたまふ	(住まひ) す	1
『源氏物語』	慰めかぬ	1
思す系※	萎えばむ	1
思ふ	(文通) す	1
心+動詞※	(事) そぐ	1
嘆く		
恨む		
恋ふ		
定む		
以上、思考・感情系		

※思す系……思し嘆く、思しおく、思し寄る、思しわたるなど。

※心+動詞……心寄す、心覚む、心おく

次に下接語についてみると、接続助詞が多いことに気付く。つまり、従属節(この場合は接続節)での用法が多いということである。そこで、メリキ／ツを大きく文中用法と文末用法に分けて分布を調べてみた。(表3参照)

表3 文中用法と文末用法

『平中物語』	文中	1
	文末	1
『枕草子』	文中	1
	文末	3
『紫式部日記』	文中	1
	文末	2
『源氏物語』	文中	38
	文末	13

傾向としては、文中用法が多く、文末用法が少ないことがわかる。これは、キが文中用法が多いことによるであろう。文末用法は、単に終形終止する例がほとんどなく、係り結び、連体止めなど、曲調終止する例が多い。終助詞がほとんど下接しないのは、終助詞が係助詞の結びになりにくいためであろう。

〔意味的特徴〕

メリキ／ツの対象となる事態は大きく二つに分かれる。

一つは、人の具体的な動作、外見を描写するもので、

様態性、描写性が濃厚なタイプである。たとえば、(6)(8)ウのような例である。もちろん、名詞を使って語彙的手段による《様態》の表現とはレベルが異なる。(注7)

もう一つは、特に『源氏物語』で多く見られるものだが、人の動作、外見などを根拠として、《思考》《感情》といったその人の心的内容を推定するものである。たとえば、(8)ア、イ、エのような例である。これは、推定性が濃厚なタイプと言えよう。どちらのタイプも視覚でとらえられる事態に関わってはいるが、後者の方がモダリティ助動詞らしい用法と言えよう。用例の割合としても圧倒的に後者が多い。

使用場面としては、身分的に下位の者が上位の者に「報告する」場面が目立つ。この問題は文体的特徴に深く関わってくる。典型的なものは、先(8)のような例で女房が大君のありさまを薫に報告している。

表4 文体別用例分布

	平中物語				枕草子				紫式部日記				源氏物語			
	会	心	地	他	会	心	地	他	会	心	地	他	会	心	地	他
メリキ	2					4					3		36	10	3	2
メリツ													1	1		

なお、『婉曲』については、定義の問題などいろいろ検討すべきことが多く、今回は立ち入らない。(注8)

【文体的特徴】

文体別の用例分布については表4を参照されたい。

大まかな傾向としては、メリ一般の特徴と差が無いと言える。表4より、日記・随筆は地の文のみに用いられ、会話文・心話文は用例が見られない。一方、『源氏物語』では会話・心話が多く、地の文が少ない。物語は地の文では、ケリという「語り」の形式が選択されるため、キが入る余地がない。よって、メリキも排除される。一方、キを基調として述べられる随筆・日記類では、地の文にそういった制約がかからない。ジャンルによつて、分布が異なる背景にはこのような事情があったのではないかと推測される。また、通時的に見れば、秋本守英(一九七四)が指摘するように、平安初期作品から中期にかけての文体の変容とメリ使用との相関を想定する必要がある。

三 ナリキ／ツの実態

ナリキ／ツの用例分布は表5を参照されたい。まず、用例を観察しておこう。

表5 作品別用例分布(ナリキ／ツ)

	ナリキ	ナリツ
竹取物語	0	0
伊勢物語	0	0
大和物語	0	0
平中物語	0	0
土佐日記	0	0
和泉式部記	0	0
蜻蛉日記	0	0
枕草子	1	1
紫式部日記	2	1
源氏物語	5	1

【枕草子】

(12) 掃部司まゐりて、御格子まゐる。主殿の女官御きよめなどにまゐりはてて、起きさせ給へるに、花もなければ、「あな、あさまし。あの花どもはいづち往ぬるぞ」と仰せらる。(中宮)「あかつきに、『花盗人あり』といふなりつるを、なほ枝などすこしとるにやとこそ聞きつれ。誰がしつるぞ、見つや」と仰せらる。

中宮が朝起きてみると、庭にあるはずの造花がないことに気付く場面。「早朝に『花盗人がいる』という声を聞いたけれど、枝を少し盗っていったくらいに聞いた。誰が盗ったのですか、誰が見ましたか」という意。実際に声を聞いたことに対して用いている。なお、ツは近過去を表している。この部分の中宮の会話は文末ツが基調となっている。なお、前田家本では終止ナリがなく、単に「いひつるは」としている。

(三) にはな を  
底(能) あか月・・ぬすむ人あり・といふなりつるは

(前) にはな つ ひ・

(塚) コノ段ナシ

(13) (中宮) 「その女出で来て、いみじう手をすりていひけれども、『仰せごとにて。かの里より来たらん人に、かく聞かすな。さらば、屋うちこぼたん』などいひて、左近の司の南の築土などに、みな棄ててけり。『いと堅くて、おほくなんありつる』などぞいふなりしかば、げに二十日も待ちつけてまし。今年の初雪も降り添ひなまし。』と、御前にも仰せられ、』

雪山が残るかどうかの賭けをする話。中宮が清少納言に対して『雪がたいそう堅くて量が多い』と侍たちが言っていたようだから、二十日まででももっただろう』と語る場面。

(三) るな そ

底(能) いとたかくておほくなんありつ・・と・いふなりしかは

(前) コノ段ナシ

(塚) コノ段ナシ

【紫式部日記】

(14) 右の宰相中将の、あるべきかぎりはみなしたり。桶洗のふたりととのひたるさまぞ、「さとびたり」と、人ほほ多むなりし。

五節の舞姫が参入する場面。右の宰相中将(藤原兼隆)の方はなすべきことがすべて整っている。桶洗の童女が二人そろって畏まっている様子を、「田舎びている」と人々が笑っている、という意。(注9)

(15) 女の声にて、「いづこより入りきつる」と問ふなりつるは、「女御殿の」と、うたがひなくおもふなるべし。

かつてわがもの顔に振る舞っていた左京のところへあたかも弘殿女御方から出したように偽って手紙を送る場面。女の声で「どこから入ってきたの」と尋ねていることから、「女御方からの手紙だ」と疑いもなく思い込んでい

るようだ、という意。

(16) 夜さりの御湯殿とても、さまばかりしきりてまゐる。儀式おなじ。御書の博士ばかりやかはりけむ。伊勢守

致時の博士とか。例の孝経なるべし。又、挙周は、史記文帝の巻をぞよむなりし。七日の程、かはるがはる。湯殿の儀式を回想する場面。周辺にケム、ナルベシといった推量表現が目立つ。(注10)

【源氏物語】

ナリキの用例は後半の巻に集中している。(ただし、ナリツはこの限りではない)

(17) (玉鬘) 「故宮(Ⅱ) 螢兵部卿宮) 亡せたまひて、ほどもなくこの大臣(Ⅱ) 紅梅右大臣) の(真木柱ノモトニ)

通ひたまひしことを、いとあはつけいやうに世人はもどくなりしかど、思ひも消えず、かくてものしたまふも、さすがさる方にめやすかりけり。定め なの世や。いづれにかよるべき」などのたまふ。(竹河)

玉鬘の会話。「世間の人は非難していたようだけれど」の意。積極的に対話とみなせる根拠はなく、独話とみなしうる。別本にナリとケリ、メリが交替した本文がある。

(青) ×

(河) ×

(別) もとくなりしかと—もときけれと西—もとくめりしかと保—もとくめりしを国

(18) (中の君) 「いとあはれなる人の容貌かな、いかでかうしもありけるにかあらん。故宮にいとよく似たてまつりたるなめりかし。故姫君(Ⅱ) 大君) は宮(Ⅱ) 八の宮) の御方さまに、我は母上に似たてまつりたるこそは、

古人ども言ふなりしか。げに似たる人はいみじきものなりけり」と思しくらぶるに、涙ぐみて見たまふ。(東屋)  
 中の君の心話(浮舟についての感想)。「姉は父(八の宮)に自分は母に似ている」と老人たちが言ようだった。ナ  
 リとメリが交替した本文がある。

(青) ×

(河) いふなりしか—いふめりしか河

(別) いふなりしか—いふめりしか御宮陽保国—いふなりし池

(19) (浮舟の母君) ……鬼や食ひつらん、狐めくものやとりもて去ぬらん、いと昔物語のあやしきもの事のたと  
 ひにか、さやうなることも言ふなりし、と思ひ出づ。(蜻蛉)

浮舟の母の心話。昔物語でこう言う。カ結びはこの例のみ。終止ナリとしてはめずらしい。「ほんに昔物語の不  
 思議な魔性のものしわざの話だったか、そんなことも言っていたようだ。」(集成本訳)

(青) ×

(河) ×

(別) ×

(20) (僧都) 「あやしく。かかる(浮舟) 容貌ありさまを、などて身をいとはしく思ひはじめたまひけん。物  
 の怪もさこそ言ふなりしか」と思ひあはするに、……(手習)

僧都の心話。「物の怪もそのようなことを言っていたようだった。」の意。(注11)

(青) いふなりしかと—いふなりしかと—いふなりしかと—いふなりしかと

(河) ×

(別) さこそいふなりしかと—いふなりしもさそあなりしと保

(21) (小宰相の君) 「かの僧都の山より出でし日なむ、尼になしつる。いみじうわづらひしほどにも、見る人惜

しみてせざりしを、正身の本意深きよしを言ひてなりぬる、とこそはべるなりしか」と言ふ。(手習)

小宰相の会話、上接語「はべり」は異例。

(青) 侍なりしか—侍しか榊—はへなりしか三

(河) ×

(別) 侍なりしかと—侍しかと宮池国阿桃—うちはへなりしか—陽  
 次にナリツの例を挙げる。

(22) いよいよあやしう、ひなびたる限りにて、見ならはぬ心地ぞする。いとど、愁ふなりつる雪、かきたれいみ  
 じう降りけり。空の気色はげしう、風吹きあれて、大殿油消えにけるを、点しつくる人もなし。(末摘花)

女房が寒さを愁う場面を受けている。(注12) 『源氏物語』でナリツはこの一例のみ。

(青) ×

(河) うれふなりつる—うれへなりつるに七宮尾大鳳—うれえなりつるも平

(別) うれふなりつる—うれう(へ)なりゆ(つ)るに御

以下前節と同様に、統語的特徴、意味的特徴、文体的特徴の三点について述べてみたい。

〔統語的特徴〕

まず、上接語について調べてみよう。表6を参照されたい。

表6 ナリキ/ツの上接語

『枕草子』		源氏物語』	
言ふ	2	言ふ	3
『紫式部日記』		もどく	1
ほほゑむ	1	はべり	1
問ふ	1		
読む	1		

表7 文中用法と文末用法

『枕草子』	文中	2
	文末	0
『紫式部日記』	文中	1
	文末	2
『源氏物語』	文中	1
	文末	4

この表から明らかのように、上接語にははっきりした特徴が見られる。それは、ほとんど発話動詞に限られるというところである。「もどく」の原義は《まねをする》だが、この場合は《非難する》の意で用いられているので、発話動詞に準じて扱うことにする。「ほほゑむ」は、もし「ほほ」が擬声語だとすれば、音声が付帯したであろう。文中用法と文末用法に分けてみると、メリキとは違って文末用法が多い。また、曲調終止が徹底しており、くナリキという形で終止した例は見当たらなかった。

〔意味的特徴〕

通常、終止ナリは、音声にかかわる事態に広く用いられるが、ナリキ/ツは上接語がほぼ発話動詞に限られるというところから、

表8 文体別用例分布

	枕草子				紫式部日記				源氏物語			
	会	心	地	他	会	心	地	他	会	心	地	他
ナリキ	1						2		2	3		
ナリツ	1						1				1	

(23) ○○が「××××」と言うようだった。

のように《伝聞》(広義)の意になる。《伝聞》には、「噂」「言い伝え」といった漠然としたもの(18)(15)と、(13)(15)のように実際に具体的な発話を聞いたとするものがあがる。

現代語の典型的な伝聞形式ソウダは通常テンスが下接しないが、(注13)終止ナリはテンスが下接しうるのだから、同じく伝聞形式とは言っても、性質が異なるようである。(注14)典型的な伝聞形式とはなりきっておらず、現代語のヨウダ、ラシイと同様に様態性と未分化の段階にあるのではなからうか。現代語、古代語の《伝聞》については、プロトタイプと周辺という観点から、種々のものを整理していく必要がある。

〔文体的特徴〕

文体的特徴については表8を参照されたい。

ナリキ/ツにはジャンルによる使用文体の違いは認められない。物語の地の文に用いられにくいこと、日記・随筆の心語文に用いられていないことくらいである。ただし、メリキ/ツの場合とは違って、用例数そのものが少なく、本文の異なるも多いので確かなことは言いにくい。メリキ/ツという承接からの類推によって成立した可能性も考えられよう。

## 四 まとめ

以上の実態をもとに、メリキ／ツ、ナリキ／ツという承接が果たす役割と意義について述べる。

先に述べたように、メリキ／ツ、ナリキ／ツは《報告する》という場面での使用が目立つ。ここで典型的な「報告」の場面について考えてみよう。《報告する》という発話行為がなされるとき、先に見た例の範囲においては、人の情報に関わるものが通常であった。しかも、そこでの事態は人の状態だけではなく心的内容に関わってくるものであった。金水敏（一九八九）の述べるように、現代語の《報告する》文体においては、他者の心的状態を直接形で表現することはできず、何らかのモダリティ助動詞を付加して間接形にして表現する必要がある。（注15）

（太郎の近況について報告する場面）

(24) 太郎は「悲しい」と思っていたよ。

(25) 太郎は「悲しい」と思っていたらしいよ／ようだよ。

おそらく古典語でも事情はかわらないものと思われる。ただし、間接形を作る上で選択されるモダリティ助動詞はどれでもよいというわけではなく、いくつかの条件が満たされている必要がある。

条件の一つは、「《過去》を表わすことができる」ということである。《報告する》と発話行為は過去の事態について語ることになるので、これは当然のことである。モダリティ助動詞の中でどれが条件を満たすだろうか。今回取り上げたメリ、終止ナリは言うまでもないが、《過去》を表わすだけならケム、ラム（ツラムの形）も可能であろう。

しかし、条件はこれだけではない。もう一つの条件は、「事態をできるだけ忠実に再現することができる」ということである。たとえて言えば、事件の実写フィルムのようなものである。報告者の視点が事件を撮影して、それを持

ち帰って被報告者に見せる。よって、それは生々しく実際に起こった事態になるべく近づけたリアルな表現でなければならぬ。裏を返せば、なるべく報告者の主観的判断の色合い（たとえば事態の解釈など）を消し去ることが必要である。事件に対するコメントは特に必要とされていないのである。

さて、ここでモダリティ助動詞の選択について考えると、ケム、ラムは主観の色が出過ぎてしまい、この条件を満たすことができない。そこで、メリ、終止ナリが選択される。それらが上接語でナリ（断定）をとらないのは、ナリ（断定）の機能によつて報告者の「推論」という意味が成立し、主観的判断の色合いが出てしまつからであろう。（注16）

このように考えると、メリ、終止ナリはその描写性によつて、《報告する》という発話行為に適応しやすい形式であったと思われる。推定形式＋テンスという形式が用いられる必然性はそのあたりにあるのではなからうか。文体的側面からの要請によつて成立した承接であると思われるのである。

## おわりに

本稿では、メリ、終止ナリにテンス形式が下接する現象の実態を観察し、その特徴について述べた。実態の観察が中心であったために、個々の現象の説明については、問題提起にとどまる部分が少なくない。また、現代語の疑似モダリティ形式との対照、伝聞表現の整理など、残された課題については稿を改めて検討したい。

## 注

1 中古語のモダリティ助動詞の範囲については序論参照。

- 2 こうした把握は語源説の影響が強いと思われるが、このような単純な対立をなすかどうか疑わしい。
- 3 金子弘（一九八九）など文体的観点からの研究も興味深い。
- 4 メリケリは『源氏物語』に存疑の例が一例ある。
- 5 阪倉篤義（一九九三）など参照。
- 6 『古典語現代語国語助詞動詞詳説』（学燈社）におけるメリの項目（吉田金彦氏担当）参照。
- 7 《様態》を表わす語彙については、渡辺実（一九八二）参照。
- 8 《婉曲》については、他の助動詞の問題も合わせていざれ検討してみたい。
- 9 「ほほゑむ」の語構成に関しては検討課題である。なお、「ほほゑむなりし」を「ほほえみたりし」とする本文がある。
- 10 「よむなりし」を「よむなるへし」とする本文があるが、ソの結びという点で疑問が残る。
- 11 （物の怪）「この人は、心と世を恨みたまひて、われいかで死なむ、といふことを、夜昼のたまひしにたよりを得て……」（手習）を受ける。
- 12 （女房）「あはれ、さも寒き年かな。命長ければ、かかる世にも逢ふものなりけり」（末摘花）を受ける。
- 13 ソウダツタが《伝聞》を表わす実例についてはまだ見いだしていない。
- 14 森山卓郎（一九九五）参照。森山論文は現代語の《伝聞》の問題について初めて正面から扱ったもので学ぶところが多い。
- 15 「直接形」「間接形」の区別は神尾昭雄（一九九〇）による。なお、柴田敏（一九九五）は「情報のなわ張り理論」を用いて、メリと終止ナリの使い分けを分析しており、注目される。
- 16 ナリの機能によって断定のスコープが拡大することによる。



## 第七章 現実性と非現実性

## —ムとマシの対立をめぐって—

はじめに

ムとマシは同源と言われ、それぞれの個別論において、主に意味の面から研究が積み重ねられてきた。しかし、両者の差異についてはまだ客観的に確かめられていない。今回は連体ナリとの承接に注目して、『現実性』と『非現実性』の観点から、両者の差異について考えてみたい。

## 一 研究史

ム、マシについては、すでにいくつかの先行研究がある。それらを見ると、ム、マシを扱う研究では両形式の対立が常に意識されているようである。だが、そのわりに、ムとマシとの対立点を的確に示した研究はほとんど見られないようである。その中であって、山口堯二（一九六八）『まし』の意味領域（『国語国文』昭四三・五、『論集日本語研究7 助動詞』有精堂、所収）は、ムとマシとの対立を指摘しており、注目される。

山口（一九六八）では、ムとマシの共通性と対立点について以下のように述べている。

「む」は語源的に「まし」とつながるばかりでなく、そのはたらきの上でも、推量以外に希望（意志）の表現にも用いられるという点で、「まし」との共通性をそなえている。しかし、「まし」が素材的に反事実である事態に

用いられることが多いのに対して、「む」は素材的にやがては実現することが予想される単なる未来の事態に用いられることが多く、その点では、「まし」と対立しよう。そこで、共に希望（意志）の表現にも用いられるという点から、両者の共通性を、いま仮に、非事実性と呼ぶなら、その非事実性をそなえた意味領域の中で、「まし」の領域はより非現実的であり、「む」の領域はより現実的であるということになる。

この論は、丹念な用例解釈から帰納して得られた結果であり、マシ研究の基本文献とされるものである。（注1）この卓論によって、意味的観点からの要点はほぼ尽くされているように思えるけれど、論の説得力をさらに高めるには、意味的観点からの分析に加えて、より具体的に、構文的な裏付けがほしいところである。意味的観点から想定される、共通性と対立点をどのように客観的な形で取り出し、具体化できるかが課題であろう。

その課題に対する取り組みとして、本論では、第一部第七章において、ムとマシの共通性を取り出した。ムもマシも仮定条件節の帰結の位置に生起しており、山口の言う「非事実性」（本研究での「非現実性」）という共通性を表しているのである。この共通性を認めた上で、一方の対立点をどうやって客観的に取り出せるだろうか。本節では、連体ナリとの承接関係に注目して、ムとマシとの対立点を明らかにしてみたい。

## 二 連体ナリとム

ムは連体ナリに下接することができる。連体ナリにムが下接した、ナラムの例は以下のようである。

- (1) (供人)「いとすきたる者なれば、かの入道の遺言破りつべき心はあらんかし」さてたたずみ寄るならむ」と言ひあへり。（源氏・若紫）

(2) 殿の内の方は、御むすめとも知らで、「なに人、また尋ね出でたまへるならむ。むつかしき古物あつかひかな」  
 (源氏・玉鬘)

(3) (柏木八) おどろきて、いかに見えつるならむ、と思ふ。(源氏・若菜下)

(4) (匂宮八) あひ見ぬとだえに、人々の言ひ知らする方に寄るならむかし、など ながめたまふに、(源氏・浮舟)

(1)、「(良清八) 好色な男だから、その入道の遺言を破ってしまおうとする魂胆があるのだろうよ」「それで(入道の家の周囲を)うろついているのだろう」の意。(2)、「どんな方をまた捜し出されたのであろう。やつかいな骨董趣味だこと」の意。源氏が昔の恋人を引き取ったような憶測している。(3)、「(柏木は) 目が覚めて、『どうしてこんな夢をみたのだろう』と思う」(4)、『しばらく逢わずにいる間に、女房たちの言つて聞かせたほうに心が傾いているのであろう』などとも思いにふけていらつしやると、(1)の意。(1) (3)はいわゆる《原因推量》を表している。それぞれ、「良清が入道の家をうろつくこと」「(猫の) 夢を見たこと」の背後の《原因理由》を推量しているのである。一方、(2) (4)は《現在推量》の意味を表している。

さて、ナラムはどのような構文的特徴、意味的特徴を持っているのであろうか。

まず、構文的特徴について考えてみよう。連体ナリが構成要素となつていことから、ナラムがおおよそ連体ナリの構文的特徴を受け継ぐことになるのは当然である。従属節中に生起せず、もっぱら終止法であること、狭義係り結びにならないこと、仮定条件節の帰結にならず、バ確定節などの《原因理由》を表す節の帰結になることがあげられる。これらの特徴は、単独用法におけるムのそれとは全く異なつたものである。

なお、不定語との共起は連体ナリにおいては異例のことである。中古の不定語は疑問用法においては、係助詞力を伴うことが多く、狭義係り結びにならない連体ナリとは共起しないのが原則なのである。ちなみに、共起する不定語

でイカ系が多いのは、ラ変型活用語に下接するムの特徴である。

次に意味については、ム単独でしばしば見られるような《予想》《意志》をあらわすものがなく、《現在推量》《原因推量》に限られることが注意されよう。この意味的特徴はやはりム単独用法で見られるものでなく、むしろラムの特徴である。つまり、ナラムとラムは連続性を持つていると考えられる。ただ、ラムはしばしば疑問表現に用いられ、連体ナリは原則的には疑問表現で用いられることがないのだが、ナラムのときに限つて疑問を表すことができる。ナラムは連体ナリとラムとの中間に位置する存在であると言えよう。

もちろん、ナラムとラムは全同であるわけではない。ラムが従属節に生起する用法を持つのに対して、ナラムは連体ナリの性質によって、文終止の位置にしか用いられない。その意味では、ナラムの方が不自由な形式であつたと言える。しかし、このような複合形式が成立した背景には、一語の助動詞で表現していたものを、分析的に表現しようとする表現指向が作用していたと見るべきであろう。(注2) それに加えて、体言ナリにムがついたナラムという形態が複合辞として固定していたという事情も考えておかなければならない。

では、ムが連体ナリにつくという現象をムの側から見ると、どういふことが言えるのだろうか。連体ナリは現実事態との結び付きが強く、それ自身も終止形述語と共通して《現実性》をもつ。それが端的に現れるのが《原因推量》用法であつた。連体ナリが《原因推量》と関わる例は以下のようなものである。

(5) おはしながらとくも渡りたまはぬ、なまうらめしかりければ、例ならず背きたまへるなるべし。(源氏・紅葉 賀)

(6) ただ暑きころなれば、かくおはするなめり、とぞ思したる。(源氏・宿木)

(5)、「ただ暑いころだから、(中の君が) こうして弱つていらつしやるのだろう」の意。匂宮が、「中の君の体調が悪い」という現実事態の原因理由について推量している。(6)、「君(＝源氏)がお帰りになりながらすくにもこちらへ

お越しにならないのが少々恨めしかったので、(紫の上八)「いつになく背を向けておいでなのだろう」の意。「紫の上が源氏に背を向けている」という現実事態の原因・理由を推量している。本来、ベシ、メリはそれ自身単独で《原因推量》を表すことができない形式であり、連体ナリが付加することによって、はじめて《原因推量》を表しうるものである。

そもそも、《原因推量》とは、現実の既定の事態を対象として、その背後にある事情を推量するものであるから、連体ナリのつく事態は、当然《現実性》の強い事態であるはずである。このような連体ナリの性質から考えれば、連体ナリに下接しているムもまた、《現実性》との結び付きが強い形式であると言えよう。しかしその一方で、ムは反事実に関わる《非現実性》用法も持っているから、環境によって、《現実性》《非現実性》の両面に関わる性質を持っていると見なければならぬ。こうした両面性を持つていることが、意味領域の広さに対応的であつて、ケム、ラムを分出する基盤であつたと推定されるのである。

### 三 連体ナリとマシ

次に連体ナリとマシとの関係について考えてみよう。連体ナリとマシの関係について本格的に論じた研究はまだなされていないが、北原保雄(一九八一)は連体ナリとの承接関係を基準として助動詞の分類を試みた研究であつて注目される。そこで、北原の研究において、マシがどのように位置づけられているかを確認しておくことにしよう。

北原(一九八一)によれば、マシは連体ナリに下接する助動詞とされている。

さて、一口に古代といつてもそこに含まれる時代は長いのであるが、その中古においては、助動詞は、「連

体ナリ」に上接するか下接するかという基準によつて、次のように三つのグループに分類される。

- (a) 常に「連体ナリ」に上接するもの
  - す・さす・しむ・る・らる・まほし・(たし)・つ・ぬ・たり・り・き・まじ・(体言たり)・(補助動詞)
- (b) 常に「連体ナリ」に下接するもの
  - む・らむ・けむ・まし・じ・らし・めり・なり(推定・伝聞)
- (c) 「連体ナリ」に上接することも下接することもあるもの
  - けり・ず・べし

ただし、右の分類は、中古の、主として源氏物語など和文資料に基づくものである。中古の文献資料のすべてについて詳しく調査した結果に基づくものではないから、一部にあるいは訂正されるところがあるかもしれないが、ほぼ右のようになるものと見てよいであろう。(五二二～五二二頁)

この分類によれば、マシはムなどと同様、常に「連体ナリ」に下接するところの(b)グループに所属している。ところが、稿者の調査では、連体ナリに下接するマシの用例を見いだすことはできないのである。稿者の調査は平安初期～中期の主な和文学作品を資料としたものであり、以下、調査した作品名を列挙する。(『竹取物語』、『伊勢物語』、『土佐日記』、『蜻蛉日記』、『枕草子』、『紫式部日記』、『源氏物語』、『更級日記』、『大鏡』、『古今和歌集』、『後撰和歌集』、『拾遺和歌集』、『後拾遺和歌集』、『金葉和歌集』、『詞花和歌集』、『千載和歌集』、『新古今和歌集』(使用した注釈書：『竹取物語』、『伊勢物語』、『枕草子』)以上『日本古典文学大系』岩波書店、『蜻蛉日記』、『大鏡』以上『日本古典集成』新潮社、『源氏物語』は『日本古典文学全集小学館』、その他の作品は『新日本古典文学大系』岩波書店を用いた)

北原(一九八一)の調査で用いられた資料とどの程度重なるかは明らかでないが、ともかく、連体ナリ+マシに関

しては、まとまった数の用例が見つかる可能性が少ないことだけは確実である。とすれば、先の北原の分類はマシについては見直されなければならないことになる。(注3)

ただ、ナラマシという形が全くないのか、というところではない。体言ナリの場合にはマシが下接しうるのであって、ナラマシという形は確実に存在するのである。(注4) 体言ナリにマシが下接した例は以下のものである。(『源氏物語』から挙げる)

- (7) (女)「昼ならましかは、のぞきて見たてまつりてまし」と、ねぶたげに言ひて、(源氏・帚木)
- (8) 男君ならましかはかうしも御心にかけたまふまじきを、(源氏・澤標)
- (9) (右近)「容貌はいとかくめでたくきよげながら、田舎ひこちごちしうおはせましかは、いかに玉のきずならまし。」(源氏・玉鬘)

(10) (玉鬘)「…かやうなる御心ばへならましかは、などかはいと似げなくもあらまし。」(源氏・螢)

(11) (弁の尼)「…すこし近きほどならましかは、そこにも渡して心やすかるべきを、」(源氏・東屋)

(7)、『昼間だったら覗いて拝見するのだけれど』と、眠そうに言つて(8)の意。(8)、「男君だったとしたら、こんなにもお心におかけになるまいものを」。(9)、「お姿はこんなにおきれいでいらつしやうて、もし教養がなく無骨であつたとしたら、どんなにか玉のきずであつただろうに」(10)、「親などに知つていただいて、世間並みの身の上で、このような(源氏ノ)お心づかいをいただくのなら、何ほど不似合いなこともあるか」(11)、「もう少し近い道のりでしたら、そちらへお預けすれば安心なでしょうが、」の意。いずれの例も、事実とは反対のことを仮想して述べている。

では、ナリの原形ともいえるニアリにマシが下接するであろうか。厳密には、ニアリとナリは分けて扱われるべきであるが、そこは譲歩することにして、あくまでも暫定的にラフに扱うことにする。その場合、連体形+ニアリにマシが下接することが可能であれば、連体ナリ+マシがあつてもそう不自然ではないと一応は言える。はたして実際はどうであろうか。

結論的に言うと、ニアリ+マシという形は存在する。しかし、その場合もやはり、**体言+ニアリ+マシ**なのであつて、かつして活用語連体形+ニアリ+マシではないのである。ニアリ+マシの例はすでに『万葉集』において用いられているが、いずれも体言+ニアリ+マシの形をとっている。

- (12) ぬば玉の夜渡る月にあらませば (安良麻世婆) 家なる妹に逢ひて来ましを (三七六一)
- (13) 大船に妹乗るものに有らませば (麻勢婆) 羽ぐくみ持ちて行かましものを (三五七九)
- 一方、中古ではあまり数は多くない。たとえば『源氏物語』では次の一例だけである。

(14) (中の君)「いさや。やうのものと、人笑はれなる心地せましも、なかなかにやあらまし。」(源氏・東屋)

やはり、活用語連体形+ニアリ+マシの用例は見る事ができない。この現象ひとつとつてみても、体言ナリと連体ナリとを区別して扱う処理が必要である。一般におこなわれているように、一括して「断定の助動詞」とする扱いは適切ではないわけである。

それにしても、連体ナリに対して、なぜこのように厳しいマシ下接の制約が存在するのであろうか。この制約が意味することは、いったいどういうことであろうか。

この制約には、モードの問題が深く関係しているように思われる。マシはムと同様、仮定条件節の帰結になることができたのみならず、仮定条件節中においてもしばしば生起することがある。ということは、ムと比べてかなり『非現実性』の色合いが濃いものであると言ふことができるのではなからうか。マシの個別論においてしばしば言われるように「反事実」との結び付きやすさも、そのあらわれと見てよいのではないか。

ところで、一方の連体ナリはというと、実に『現実性』の濃いものであると思われる。それ自身が仮定条件節中に

生起することもなく、また、原則的に仮定条件節の帰結になることもない。(注5)ラムとの関係において述べたことだが、《原因・理由》を表し得たのも、その《現実性》が基盤になっているように思われる。(注6)また、直感的な把握ではあるが、終止形述語との共通性においてもきわめて《現実性》の色濃い形式であることは容易に理解できることである。

このような理解が正しいとしたならば、連体ナリにマシが下接しないのは、文表現上、連体ナリの《現実性》とマシの《非現実性》が矛盾を引き起こすからであると言うことができる。文において事態を描くときに、その事態を現実のものとして描くか、非現実のものとして描くかは必ずどちらかが選択され、両方を混在させることは理論上できないのである。

#### 四 まとめ

以上の検討より、ムとマシとの対立点が鮮明になってきたと思われる。山口論文に言うように、ムはマシに対してより《現実性》の強い形式なのである。ただし、《非現実性》を表しえないかという点、そうではなく、先述のように、ムは《現実性》《非現実性》の両面を有し、このどちらかの面を環境によって使い分けているものと思われる。

一方、マシはそのような両面性は持つておらず、もっぱら非現実モードにおいて用いられる形式である。このような《非現実》モード専用の形式は現代語にないため、我々がマシの働きを実感することは難しいが、古代語においてはモードの区別によつて形式が分化されていたのである。

しかし、そのマシも平安中期にはムとの区別があいまいになり、やがては衰退、消滅していくことになる。マシが衰退、消滅していく理由は、もっぱら《非現実性》だけに關わるというモードの片面性にあつたのか、積極的に活用形態を分化させなかつたことによる不自由さにあつたのか、現段階においては明らかでない。

最後に今回は取り上げる余裕がなかつたが、述語構造におけるマシの位置についても、今後さらに見直されなければならぬだろう。(注7)

#### おわりに

今後は通時的視点からの検討が必要であろう。ム、マシの対立は、なぜ解消されたのか、現代語で反実仮想の形式がないことをめぐつての考察については、古代語の推量システムと現代語の推量システムの対照の観点から分析が必要である。

#### 注

1 『古語大辞典』語誌項目も参照。山口論文意義は「素材論と助動詞意味論との混同を指摘し、修正したこと」「推量の助動詞」の意味領域について見通しを示したこと」の二点であろう。

2 複合辞を用いて分析的に表現するようになった例としては、マジ、ジーザラム、ケムーツラム(ツラウ)などの例を挙げることができよう。

3 北原(一九八一)では、連体ナリで助動詞を分類する理由の一つとして、「すべての助動詞が上接もしくは下接

すること」をあげている(五一七頁)が、もし、マシが下接した確かな例がなければ、この点についても修正が必要になる。

4 連体ナリと体言ナリの差異については、第二部第三章参照。

5 第一部第七章参照。

6 ラムと同様に理解できる。第二部第八章参照。

7 述語構造におけるマシの位置づけに関しては、福沢将樹(一九九四)による高山論文の階層モデルに対する批判がある。

## 第八章 モーダルのスコープ

—ラムの特殊性をめぐって—

はじめに

ラムの意味・用法をめぐる研究は、和歌などの解釈をもとに意味、用法を記述・類型化するという方法が一般的であった。個別的研究としては手堅い成果が期待できる方法だが、他の諸形式との示差性やモダリテイの構造を明らかにしていくためには、この方法の積み重ねだけでは不十分である。個別論の枠を積極的にはずして、他の諸形式との意味・用法の連続性をあきらかにし、有機的連関を描き出していく視点が要請されるであろう。本稿ではその試みとして、主格がノヤガでマークされて連体形で終止する準体句とモダリテイ助動詞との関係に注目し、ラムの持つ構文的機能の特殊性について検討する。

一 議論の前提

次のような構文について考えることから始めよう。

- (1) 春立てば花とや見らむ白雪のかかれる枝に鶯の鳴く 素性法師（古今集六）
- (2) 雀の子を犬君が逃がしつる。（源氏物語、若紫）

古典文法のテキストなどでおなじみの例だが、このように主格がノあるいはガでマークされて連体形で終止する表

現は、和歌においてしばしば見られ、《詠嘆》を表すと言われている。山田文法でいう「擬喚述法」にあたるものである。この詠嘆性については、述語連体形に担わせるべきではなく、後述のように、準体句が文終止に用いられた結果と見るべきであろう。本章では、準体句とモダリテイ助動詞との関係について考えてみたい。

近藤泰弘（一九八六）に次のような指摘がある。

これらの文（格助詞「の」「が」）によって主語が示されて、文末が連体形で終わるタイプの文）に対する連体形の末尾助動詞を調べてみると、やはり推量・意志の「む」、過去推量の「けむ」、また「まし」「じ」「らし」などムードに関するものは全く現れてこない。全体に用例が少ないこともあるが、しかし完了の「たり」「り」「つ」、過去の「けり」、否定の「ず」などは用いられる。

八代集を資料として調査した、近藤（一九八六）は、中古語のモダリテイを考えていく上でひじょうに興味深いものである。ただし、八代集には吟味すべき例がいくらか存在しているようである。ここでは古今集の例を挙げておく。

- (3) 桜花ちりかひくもれ老いらくの来むといふなる道まがふがに 在原業平（古今集三四九）
- (4) 老いらくの来むとしりせば門さしてなしたへてあはざらましを 読み人知らず（同八九五）
- (5) 梓弓ひき野のつづらすゑつひにわが思ふ人に言のしげけん 読み人知らず（同七〇二）

これらの例は準体句中にムが生起しているものと認め得る。(1)(2)は引用句中で用いられたものである。ただし、(1)はク語法の使用やいわゆる（伝聞）をあらわすナリの使用、(2)は同じくク語法の使用「く、昔ありける三人の翁のよめるとなむ」という左注の文句から伝承歌と思われ、(3)もシゲケという形（形容詞シゲシの古形）が用いられていることから判断すれば、典型的な中古語の語法の例とは認めにくいであろう。紙数の関係上、散見する問題例のいちいちの指摘、考証は省略するが、ムだけでなくナリ（伝聞推定）やジも準体句中に生起し得ることを付け加えておく。また、ケリは八代集の和歌で見る限り、

(6)かをとめてとふ人有るを菖蒲ぐさあやしく駒のすさめざりける 惠慶法師(後拾遺二一〇)  
 しか見当らなかつた。『ノ(主格)ケル』はむしろ詞書において多用されるのであって、文体的な使い分けが見られる。慎重に扱うべきであろうが、少なくともケリが和歌において準体句中で用いられることが稀であるとは言えるだろう。

このように細部に目をやれば問題がないわけではないが、「準体句中にモダリテイ助動詞が生起しにくい」という傾向は確かに認められる。モダリテイ助動詞の総体を考える契機として近藤(一九八六)でなされた指摘はきわめて示唆的なものであると言えよう。(注1)

## 二 特殊性の確認

ところで、問題となるのはラムの場合である。ラムは他のモダリテイ助動詞と異なり、準体句中に生起していると見られる例がかなり確認されるのである。ここでは八代集中の例をいくつか挙げておく。

- (7)久方の光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ 紀友則(古今集七)  
 (8)わがやどにさける藤波たちかへりすぎがてにのみ人の見るらん 凡河内躬恒(古今集一二〇)  
 (9)心から花のしづくにそぼちつうくひずとのみ鳥の鳴くらん 藤原敏行(古今集四二二)  
 (10)秋風にかきなす琴のこゑにさへはかなく人の恋しかるらむ 壬生忠岑(古今集五八六)  
 (11)あまのすむ里のしるべにあらなくにうらみんとのみ人のいふらん 小野小町(古今集七二七)  
 (12)秋風は身をわけてしも吹かなくに人の心の空になるらむ 読み人知らず(古今集七八七)

- (13)たなばたのあまのと渡るこよひさへをち方人のつれなかるらむ 読み人知らず(後撰集二三八)  
 (14)おくからにちぐさの色になるものを白露とのみ人のいふらん 読み人知らず(後撰集三二〇)  
 (15)秋の野の草もわけぬをわが袖の思ふなべにつゆけかるらむ 紀貫之(後撰集三一六)  
 (16)神なびのみむろのきしのくづるらむ立田の川の水の濁れる 高向草春(拾遺集三八九)  
 (17)我が宿は播磨瀧にもあらなくにあかしもはてで人の行くらむ 読み人知らず(拾遺集八五五)  
 (18)から衣そでしの浦のうつせ貝むなしき恋にとしのへぬらむ 藤原国房(後拾遺集六六〇)  
 (19)いにしへの難波のことを思ひいでて高津の宮に月のすむらん 師頼(金葉集一九一)  
 (20)くれてゆく春はのこりもなきものををしむ心のつきせざるらん 隆季(千載集一二五)  
 (21)見てだにも飽かぬころを玉鉾のみちの奥まで人の行くらむ 紀貫之(新古今集八六一)  
 前節で述べたように、他のモダリテイ助動詞は準体句中に起り得ることが稀であったのに対して、ラムの場合はかなりの例が認められるのである。この特殊性の内実を探ることは、ラムの意味・用法を考えていく上において、また中古語のモダリテイを考えていく上において重要であろう。以前より盛んに議論されてきた「しづ心なく花の散るらむ」歌の解釈を考える上でも当然、問題となるところである。そこで、「ラムが準体句中に生起する」現象についてつこんだ考察を試みることにする。

## 三 準体句の意味的性格

まず、準体句の意味的性格について押さえておく。準体句の意味的性格について最初に本格的な検討を加えたのは



山田孝雄氏であろう。それは、「擬喚述法」の名のとおり、喚体と述体との中間的存在として理解されるものであったと言える。(注2)

かかかる述法に立てるものは其の余韻によりて述体ながらも喚体の性質を帯びたるなり。而して上にはかの「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」なき時にあらはれて、しかして準体形をとるなり。——中略——これらの諸例を通じて主語の存する場合の係助詞のたすけぬものは格助詞も「の」「が」の附属せることに注目すべきなり。(『日本文法論』)

右のような「擬喚述法」に対する記述が示唆的である。たとえば、「花の美しき」「鶯の鳴く」などは外形的には述体の体裁をとつて立ち現れるものの、内容的には喚体性のものであると把握される。「花は美し」「花ぞ美しき」が積極的に二項文節型表現であるとすれば、準体句は論理的格関係を堅持した一項完結型表現と理解されてよい。つまり、素材と素材との結合を素直に示し、コトの体裁をとつてにすぎないわけである。したがって、その素材性においては体言相当であり、そこに名詞一語文の延長線上に理解しうる根拠が認められよう。「余韻」として感じられるものも、コトの承認から生じる広義の〈詠嘆性〉の発現として了解され、「ねずみ！」(突然目の前に飛び出したねずみを見て驚いて)といった名詞一語文の表現性と結局はつながるものである。また、準体句の意味的性格をあえて文の表現類型に引きつければ「現象描写文」の持つ意味的性格と近似していると言える。(注3)コトへの承認はあるにせよ、主観の加工を加えない、まさに〈コトガラの意味〉の表出と言えるのである。

このように準体句の意味的性格を理解する限りにおいて、モダリティ助動詞が準体句中に起りえないことは容易に了解されるであろう。しかし一方で、モダリティ助動詞の一つであるラムが準体句中に容易に生起し得るという事実は単なる例外としては片付けられない、きわめて重要な例外であることが再確認されることになる。

#### 四 例外の説明

##### 四・一 仮説1

先の例外を説明するために、次のような仮説を立ててみる。

【仮説1】準体句中で用いられているラムは句の意味的性格と同化しているのではないか

助動詞の意味を理解する上においてはその対象の意味と作用的意味が重要なポイントとなる。ラムは一般に「推量の助動詞」と位置付けられているように、普段は作用的意味の色合が強い形式だが、準体句という環境においてはその対象の意味が取り出されてくる。そして、構文の持つ意味的性格(≡コトガラ性)と同化したのだと理解するわけである。これは通常、普段着を着て生活している人が葬式の際に(周囲に合わせて)喪服を着るようなものである。このように考えれば、一応説明がついたように見える。

しかし、【仮説1】を用いた説明に関しては、たちまち、次のような疑問が立ち起つてくるであろう。なぜ、ラムだけが準体句中に生起しうるのか。むしろ、ムやメリ、終止ナリ、ベシ等の方が対象の意味の色合が濃いように思われるのに、それらが準体句中に生起することはきわめて稀でラムだけが多用されるのはなぜか。たとえば、助動詞の相互承接順位についていえば、ラムはもはやいかなる助動詞をも下接させない位置にある。また、いわゆる確定条件法のくバ従属節中にも生起できない。(注4)さらに、係助詞ナムの結びにもならない。(注5)文構造を階層的に

理解する立場に立つて言えば、助動詞層において最下層に位置している形式の一つであることは言うまでもなからう。このような事実から作用的意味の色合が最も濃い形式の一つであるラムが容易に句の意味と同化するのとは不自然だし、何より他の諸形式が生起しえない事実の説明がきわめて困難である。他の形式だって喪服は持っているはずなのである。この疑問が残る以上、【仮説1】でもってラムの特殊性の内実を説明することは困難であるように思われる。

#### 四・二 仮説2

ここで、問題の出発点に立返ってみよう。この議論は一応、一般的理解において設定された枠を踏襲したかたちで出発した。しかし、ここに至ってその枠の設定そのものを考え直す必要が出てきたように思われる。つまり、「ラムは本主に準体句中に生起しているのか」が検討されるべきであろう。これを形態的な面から考えるならば、ラムが連体形であるか終止形であるかという認定の問題と関わってくる。ラムが準体句中にあることは、少なくとも形の上からは、ラムが連体形であることをもって保証されるはずである。終止、連体同形であるラムだが、「しづ心なく花のちるらん」歌の検討を通してなされた先学の指摘によれば、おおよそ次のような点から連体形であると認定される可能性を持っている。

- a. 格助詞ノの結びである。
  - b. 省略された疑問詞の結びである。(注6)
  - c. コトが省略されていると想定する。(注7)
- b, cについては省略されているかどうか検証のしようがないので、現在のところ保留せざるをえない。また、「省略」を前提に議論を進めていくのはきわめて危険であろう。そこで、以下aについて検討してみることとする。

たとえば、近藤氏は格助詞ノの存在をもつてラムが連体形であろうと推定され、その上に立って準体句中にあると見ておられるようである。これは一般的な理解に従った推定であつて穩当である。たしかに、単文中に主格助詞ノがあれば連体形で終止するのが古典文法の原則と言えるであろう。しかし、原則には例外がつきものである。やはりこの原則にも例外があることを見逃してはならないであろう。その例外とは終止ナリと連体ナリとの差異をめぐる議論においてとりあげられた、

身のいと心憂きなり。(源氏、浮舟)

のような構文の存在である。北原保雄(一九六六)では、この構文を「のーなり構文」と名付けておられ、連体ナリ特有の構文として検討を加えている。(注8)確かに、この例では単文中に主格助詞ノがあつても文末ナリは連体形で終っていない。したがって、

「身のいと心憂き」なり。

のように文中に準体句が埋め込まれていると解釈されるのである。

さらに、北原(一九六六)で指摘されているように、終助詞カナの用いられた構文も合わせ考えるべきであろう。「カナの意に通ふラム」(注9)という宣長の記述から象徴されるように、ラムとカナは助動詞、助詞という品詞論の枠を越え、その(詠嘆性)において意味的に連続しているととらえうる。そしてカナも連体ナリと同様に準体句と接触するのである。たとえば、

(22) まつ人にあらぬものから初雁のけさ鳴くこゑのめづらしきかな 在原元方(古今集二〇六)

(23) 白妙にほふ垣根の卯の花のうくも来てとふ人のなきかな 読み人知らず(後撰集一五四)

のごとき構文が和歌においてしばしば見られる。これも先の連体ナリと同様に、

「こゑのめづらしき」かな。

のように準体句が埋め込まれており、カナがその外に位置していると解釈される。さすがに、このカナが準体句中にあると主張する人はいないであろう。これは、先に確認した準体句の意味的性格を考えれば自明のこととも言える。さて、原則にこのような例外がある以上、文中にある主格助詞ノの存在は、もはやラムが連体形であることを保証していない。そこで、ラムが準体句中にあるという考え方を思い切つて捨ててみる。すると、第2の仮説が成り立つであろう。

【仮説2】ラムは準体句の外にある。

この仮説に基づけば、ラムと準体句との関係は準体句と連体ナリ、カナとの関係と同様に、埋め込まれた準体句に接しているものとして扱うことが可能となる。これを図示すると次のようである。

① 準体句	+	連体ナリ	(「身のいと心憂きなり」タイプ)
② 準体句	+	ラム	(「しづ心なく花の散るらん」タイプ)
③ 準体句	+	カナ	(「こゑのめづらしきかな」タイプ)

右の②と③が意味的連続性を持っていることは先にも述べた。では、①と②には関連はないのであろうか。この点については次節にて検討を加えてみたい。

## 五 モーダルのスコープ

これまでの研究においては、連体ナリとラムとを積極的に接触させようという試みはほとんどなされていないと言つてよい。(注10) 連体ナリは終止ナリとの差異を求めていく方向に向いていたし、ラムはム、ケム、ラシなどいろいろゆる「推量の助動詞」との差異を求めていく視点が多かつたように思う。このようなありかたでは、連体ナリとラムが接触する場を求めるのは困難である。また、一般に連体ナリは「断定の助動詞」、ラムは「推量の助動詞」という別の意味的カテゴリーに収められており、両者の接触がなされない一因となっているようである。はたして、両形式には接触の場はないのであろうか。

ここに一つの興味深い事実がある。それは、「〈原因推量〉をあらわす場合に連体ナリが用いられる」ということである。その例をいくつかあげておく。

- (24) 詳しく言ひつづけんのことときさまなれば、漏らしてけるなめり。(源氏、賢木)  
 (25) (柏木)「例のいとおどろおどろしき酔ひにもあらぬを、いかなればかかるならむ。つつましものを思ひつるに、気のはりぬるにや。」とみづから思ひ知るる。(源氏、若菜下)  
 (26) (源氏)「く、いと際々しうものしたまふあまりに、深き心をも尋ねずもて出でて、心にもかなはねば、かくはしたなきなるべし。」(源氏、篝火)

(27) 鹿をさして馬といふ人有りければかをもをしと思ふなるべし。藤原仲文(拾遺集五三五)

普通、ム、メリ、ベシといった形式は単独で〈原因推量〉をあらわすことはできない。ところが、連体ナリに下接した時、〈原因推量〉をあらわすことが可能になるのである。まさに、連体ナリの手を借りて〈原因推量〉を実現し

ていると言っている。一方、ラムは単独で〈原因推量〉をあらわしうる形式である。このように連体ナリとラムとの接触の場合は〈原因推量〉という用法に求められるであろう。とすれば、次に「両形式が〈原因推量〉とどのように関わっているか」ということが当然問われるべきであろう。ところが、この点に関する根本的な議論は古代語を対象とした研究ではまだなされていないように思われる。

ここで、現代語研究に目を移すと、田窪行則（一九八七）において、モーダルのスコープと従属節の意味解釈との関わりについての言及があり注目される。

A 彼が行ったから、彼女も行っただろう。

だと「彼が行ったから」は〈判断の根拠〉であって〈理由〉の読みは困難である。ところが、ダロウの前にノを入れて

B 彼が行ったから、彼女も行ったのだろう。

としてやると、「彼が行ったから」は〈理由〉の読みが可能になる。Aではダロウのスコープは直前の「彼女も行った」だがBでは「彼が行ったから、彼女も行った」全体がスコープに入ることになるのである。

A 彼が行ったから、「彼女も行った」だろう。

B 「彼が行ったから、彼女も行った」のだろう。

いわば、ノの介入によってモーダルのスコープが拡張されたことになるわけである。

さて、このような考え方が理論的に妥当であれば、当然古代語に援用されてもよいであろう。つまり、連体ナリは先の現代語ノに相当すると見るわけである。そうすれば、連体ナリにメリやベシが下接したナメリやナルベシなどはノダロウに相当することになる。古典の文章を現代語訳する際、ム、ベシなどが単独で生じた場合にはダロウという訳語をあてるとは比較的少ないけれども、ナラム、ナルベシとなるとノダロウで訳され、〈原因推量〉の意で理

解されることが多くなる。この事実を照し合せてみても、先の理解は大筋正しいものと思われる。

一方、ラムは単独で〈原因推量〉をあらわすわけだから、それだけでノダロウ相当（機能的に）であると理解している。これを図式的に示すと次のようになる。

〔現代語〕	〔中古語〕
ノダロウ	連体ナリ+ム、メリ、ベシ
ラム	ラム

このようにラムは連体ナリ相当の機能を内包していると解釈される。その連体ナリの機能とは、〈従属節までモーダルのスコープに入れること〉である。この機能をラムは自前で備えているが、ム、ベシ、メリなどは備えていないから連体ナリの協力が必要となるのである。ここから、単独で〈原因推量〉をあらわしうるか否かの違いが生れてくるものと思われる。また、それは「根拠性の推量」(Evidential)との差異を分析する上でも重要なものであろう。

以上の考察から、一見、何の関係もなさそうに見えた連体ナリとラムとの機能的連続性を指摘することができたとと思う。したがって、主格のノが文中にあっても、「仮説2」のようにラムが準体句の外にあると見てもいいし、外に位置できることこそ他のモダリティ助動詞との大きな違いであるとも言える。

さて、ここで「仮説1」と「仮説2」のどちらがより有効であるか考えてみよう。「仮説1」は問題が残るにしても否定されてしまったわけではない。ラムの意味、用法の分析や準体句の分析が進むにつれて妥当性が増すこともありうるであろう。しかし、他の諸形式との連関を考えることができる点、また〈原因推量〉について考えることができる点など、議論の生産性においては「仮説2」の方が有効性が大きいであろう。主に意味的観点から作られた既製

のカテゴリーを解体して、構文的情報をも組み込んだ新たなカテゴリーを構築していくことをねらっている筆者の立場からは、当面「仮説2」が支持されることになる。ただし、その細部に至る検証については今後俟たれるところである。(注11)

### おわりに

もとより本稿はラムの意味、用法の全体像を見ようという主旨のものではない。それは構文的機能の一側面を照射したにすぎないものであろう。ただ、ラムのような形式は、いきなり意味的な問題に入るよりもむしろ、一つ一つの構文的環境における behaviour に注目した分析を重ねていく方が有効であるように思う。本稿はそのような試みの一つであって、準体句との関係から映し出されるラムの構文的機能についての検討であった。したがって、ラムの意味、用法の全体像をどのように描き出していくかは今後の課題である。また、準体句自体の分析も今後進めていくべきことの一つである(注12)。残された課題も多いが、モータルのスコープといった視点からモダリティ助動詞の中のラムの特殊性を説明していく方向づけを示すことで、本稿の目的はほぼ達成されたと言える。御批判、御叱正をいただければ幸いである。

### 注

- 1 たとえば、典型的なモダリティ形式を認定するためのテストの一つと成り得るであろう。
- 2 中古の私家集についても調査したが、「くノ(主格)くラム」の例は「伊勢集」「貫之集」などにおいてもかなり確認される。
- 3 擬換述法については尾上圭介(一九七七)(一九八六)参照。
- 4 現象描写文については仁田義雄(一九八六)(一九八九)参照。
- 5 第一部第二章参照。
- 6 第一部第三章参照。
- 7 富士谷成章『あゆひ抄』における「しづ心なく花のちるらん」の解釈など参照。
- 8 時枝誠記(一九五四)参照。
- 9 北原保雄(一九六六)参照。
- 10 本居宣長『詞の玉緒』参照。
- 11 「仮説2」を取る場合、ラムの上接語は連体形であるはずである。ところが、八代集中に二例「見ゆ」が上接した例があり、反例となる。この二例については、「見ゆ」の語彙的な問題として説明される可能性もあり、保留せざるをえない。ただし、今のところ、「仮説2」を撤回するほどの反例であるとは見ていない。
- 12 信太知子(一九九六)参照。

## 第九章 否定推量の諸相

—ザラムの機能と意味を中心に—

はじめに

本章では、ザラムを中心において、中古語の否定推量をめぐる問題について考えてみたい。中古には、ジ、マジという否定推量の助動詞があるにもかかわらず、なぜ、ザラムが必要とされたのか。ザラムとザルラムの関係、ジ、マジとの関係などについて考えてみたい。

## 一 先行研究

ザラムについての先行研究には以下のものがある。

○小松登美（一九六一）平安時代語資料でジとザラムの違いについて調査・分析。

○桜井光昭（一九七〇）『源氏物語』に限定してジとザラムの違いを調査・分析した研究。小松（一九六一）を追認。

○小林賢次（一九七七a）（一九七七b）院政・鎌倉期のザラム、ジ、マジなどを総合的に調査・分析した研究。

ザラムを精査した小松（一九六一）では、ザラムがジの文中用法の欠如を補完しているという指摘がある。この把握は、大筋正しいと思われるが、やや単純化されすぎた感もある。今後は、ザラムの性質をさらに掘り下げた上で、

ザラム、マジなどとの関係について総合的に考えてみる必要がある。この構想のもとで、本章では、ザラムを中心に、まず実態を観察するところから始めることにする。

## 二 ザラムの実態

中古におけるザラムの用例分布は表1のとおりである。（注1）以下、表1で調査したザラムの用例を文末用法、文中用法に分けて見ていくことにする。

## 二・一 文末用法

## ◇終止形終止

終止形終止の例が見られないことについては、小松（一九六一）に指摘がある。裏を返せば、ザラムは曲調終止が原則ということである。

表1 作品別用例分布

散文資料		和歌資料	
竹取物語	7	万葉集	13
伊勢物語	2	古今	7
大和物語	8	後撰	10
平中物語	1	拾遺	15
土佐日記	1	後拾遺	0
和泉式部日記	2	金葉	2
蜻蛉日記	13	詞花	2
枕草子	21	千載	5
紫式部日記	0	新古今	2
源氏物語	128		
更級日記	1		
堤中納言物語	3		

## ◇不定語との共起

『源氏物語』における不定語との共起は、ナニ系（ナド一六例、ナニ二例、ナソ一例）、イカ系（イカガ一三例、イカデ三例）である。イカ系が多いことなど「形容詞+ム」の場合とほぼ同じであり、これは、ザリの形容詞性によるものである。また、『源氏物語』では他の不定語は用いられない。（この傾向は『源氏物語』以外の散文作品でも見られる。）

和歌では、タレ（誰）、イツコ、イツなど多様な不定語が用いられる。和歌では、レトリカルな表現の許容度が高いため、「誰がくしないだろうか（誰もくする）」「いつくしないだろうか（いつもくする）」のような表現が用いられるものと思われる。

## 「ナド（力）」

(1) (源氏) 「く女にて、(夕霧ヲ) ながかめでざらむ。などかおこらざらむ」とわが御子ながらも思す。(夕霧)  
 (源氏が夕霧の容貌について)

(2) (薫) 「さるべきゆゑあればこそは、さやうにも睦びきこえらるらめ。などか、今まで、かくもかすめさせた  
 まはざらん」とのたまへば、く「中の君が異母妹浮舟の存在を薫に明かす場面」(宿木)

## 「ナニ」

(3) 「くかかるをりにもて離れなんも、何かは、人わらへに世を恨みたるけしきならで、さもあらざらん。」(柏木)

## 「ナソ」

(4) (源氏) 「なぞ越えざらん」と、うち誦じたまへるを、身にしみて若き人々思へり。(若紫)

## 「イカガ」

(5) えならぬ御衣に(源氏ノ) 匂ひの移りたるを、いかが人(＝明石の君)の心にもしめざらむ。(明石)

(6) (薫と匂宮ガ) く、うち連れたまへるを、山がつどもは、いかが心まどひもせざらむ。(総角)

## 「イカデ」

(7) 立ち寄りて物語などしたまふついでに、言ひ出でたり。めづらかにあやしと、いかにかおどろかれたまはざらむ。(手習)

(8) くと言ふを聞くに、いかにかはあはれならざらむ。人やあやしと見む、とつつましようて、奥にむかひてゐたまへり。(手習)

すべての例が《反語》で用いられている。

次に係助詞の結びについて見ていくことにしよう。ヤの結びとなったザラムの例は『源氏物語』には見られない。

『枕草子』には一例だけある。

(9) く、「さしもやあらざらん」とうちたゆみたる舞人、御前に召す、ときこえたるに、ものにあたるばかりさわぐも、いといと物ぐるほし。

(なほめでたきこと)「まさかそんなことはあるまい」と油断した舞人が、「主上のお召し」と触れたところ、大慌てにあわて騒ぐのも、いよいよ狂気のさただ。

ヤの係り結びと否定との関係については近藤要司(一九九五)「(三) 係り結びをする場合 I 結びが用言、確定系助動詞などであるもの」において、

打ち消しのズが結びとなるものは一例を除いて、

身づからヤは、かしこに出で給はぬ(東屋 五卷一八五)

のような依頼や勧誘の意味となるものである。このような依頼勧誘も質問の表現効果の一種であり、Iタイプ

ほとんどの用例は、質問や反語になるのである。(一〇七頁)(注2)と述べられている。現代語の疑問文については、田野村忠温(一九九一)の指摘するように、「肯定優位」という現象が指摘されるが、古典語の場合も同様に考えてよからう。つまり、単なる疑問文であれば、わざわざ否定の形で問う必要がないということである。

次にゾ、ナム、コソの結びについて観察しよう。

#### ◇ゾの結び

(10) 「く、この一つの事にてぞ、この世の濁りをすすいたまはざらむ」と、ものの心を深く思したとるに、く (胡蝶)

#### ◇コソの結び

(11) 「くげにたぐひなき御身にこそあたらざらめ」と、く (若菜上)

(いかに自分も比類のない御身の相手としては不相応ではあろうけれども)

#### ◇ナムの結び

用例ナシ。

ゾ、ナム、コソの結びについては、ムの一般的性質を反映しているにすぎず、特に変わったところはない。

### 二・二 文中用法

次に文中用法を見ていくことにする。文中用法としては、準体用法、連体用法、接続用法の例が見られる。

#### ◇準体用法

準体用法には、頻出する構文がある。

「……………ザラム」モ……………形容詞(広義) + (ベシ)

という構文である。

#### 「一モ一形容詞一ベシ」

(12) 君のかうまめやかにのたまふに、(姫君||末摘花ガ)聞き入れざらむもひがひがしう思ひたまへわづらひて」と、ほほ笑(末摘花)

(13) しひていとほしき御ふるまひの絶えざらむもうたてあるべし。(空蟬)

文中ムと文末ベシの呼応が目立つ。次にベシのない例を挙げる。

#### 「一モ一形容詞」

(14) (命婦)「あやしきことのはべるを、聞こえさせざらむも、ひがひがしう思ひたまへわづらひて」と、ほほ笑みて聞こえやらぬを、く (末摘花)

(15) また、さりとて、かかる所に生ひ出で、数まへられたまはざらむも、いとあはれなれば、ひたすらにもえ恨み背かず。(松風)

これらは、意味としては、「くしないのも、くだ」というパターンが多い。文末述語はマイナス評価のものがほとんどである。(例 「くしないのも、ひねくれている/いやだ」など)

#### ◇連体用法

連体用法については表2を参照されたい。ザラムに下接する名詞は形式名詞が目立つ。



## ◇接続用法

接続用法については表3を参照されたい。モノカラ、モノユ○の使用が目立つ。

表2 ザラムに下接する名詞

こと	9	人	7
ほど	4	心地	1
かぎり	2	心まどひ	1
のち	1	住まひ	1
さき	1	山	1
こなた	1	山道	1
とき	1		

表3 ザラムに下接する助詞

ものから	6
ものゆ	3
に	5
ど	2
を	1

準体用法については、ザラムの問題というよりも、むしろムの問題として興味深い。これまでの研究ではあまり注意されてこなかったように思われるが、準体句の発達とモダリティ助動詞との相関は、調査、分析の必要があるだろう。

## 二・三 ザラムの意味

次に、ザラムの意味的特徴について観察する。

## ◇《妥当性》

《妥当性》とは、文字通り「くくすることが妥当である」という意味である。以下、用例を挙げる。

(16) (源氏) 「くさばかりの御齡にもあらず、今はなどか何くことをも、御心に分いたまはざらむ。」(胡蝶) (源氏

(あなた(玉鬘)は、自分の考えが言えないほどのお年頃でもありませんし、今では、どうして何事もご自分で分別できぬことがありますしょう)

(17) くくと、たち返りやすらひたまへるさまを、都の人目馴れたるだになほいとことに思ひきこえたるを、まいていかがはめづらしう見ざらん。(橋姫)

(くくと、引き返して出でがてにためらうていらつしやる(薫ノ)お姿を、都の人の、こうした貴人をいつも見慣れている者でさえ、やはり格別だと思ひ申し上げているのだから、なおさらのこと、この山里人(Ⅱ女房たち)の目にはどうしてまたとないみごとなお方と映らぬはずがあるうか)

(18) たねしあればいにも松はおひにけり恋をし恋ひばあはざらめやも(古今五二二)  
(種さえあると、固い岩にも松は生育するものである。同様に一心に恋をするなら逢えないということがあるだろうか。必ず逢えるものだよ)

(19) 濡れ衣をいかが着ざらん世の人はあめの下にし住まんかぎりは(拾遺集一二二五)  
(濡れ衣をどうして着ないで済ますことができようか、世間の人は。天の下に、すなわち雨の下に住んでいる限りは)

先述のように、ザラムが不定語の結びになった場合、原則的に《反語》と解されたが、そこで取り出される意味は《妥当性》に関わるものである。よって、諸注釈書の現代語訳も「くするはずがあるうか、いや、必ずくする」「くすることがあるうか、いや、必ずくする」というものがほとんどである。本来、《妥当性》はベシが担う意味であるが、反語文という環境においては、ムとベシとの意味が近づくように思われる。(注3)

◇《意志》

ザラムが《意志》を表しているかどうかについては、小松(一九六一)と桜井(一九七〇)で意見の相違が認められる。桜井は《意志》の例は「全くない」するが、小松は「ほとんどない」としながらも次の例を《意志》の例かと疑っている。

(20) かぐや姫、「なにことをか、のたまはん事はうけたまはらざらむ。変化の物にて侍りけん身とも知らず、親とこそ思ひたてまつれ」と言ふ。「おつしやることは、どんなことでも、うけたまわらないことがありません」

ようか。変化の者でありますとかのわが身のほどをも考えず、親とばかり思いもわけておられますの「と言ふ。」しかし、文脈的に言うと、この例も先の《妥当性》に当てはまると思われ、《意志》を表しているか否かは必要はないであろう。主語が一人称であるので、《意志》のように見えるだけのことである。

◇《未実現性》

事態の《未実現性》を表す例がある。

(21) くと書きて、(作者)「兼家方」これ見たまはざらむほどに、さし置きて、やがてものしね」と(道綱二)教へたれば、「さしつ」とて帰りたり。(蜻蛉日記)

(22) く、位さばかりと見ざらむかぎりは、ゆるしがたく思すなりけり。(常夏)「官位が婿とするにふさわしい程合いになつたと認められないうちは)

文中用法で形式名詞に続くときに限って顕現するもので、ムの対象的意味が取り出されたものと思われる。一般に、こういうムを《婉曲》とするが、《婉曲》という不確かな用語で記述するのは改められるべきであろう。

以上、ザラムの実態を観察した。ムに否定が上接することの特殊性は、文末用法に現れ、文中用法ではさほど明確に現れるものではなかった。また、意味について言えば、上接要素の非意志性によって、本来ムが表しうる《意志》が排除されていることが特徴である。

三 ザラムとザルラム

第一部第八章で「ザルラムが散文で用いられないのはなぜか」という問題を提起した。この問題について、ザラムと関係づけて考えてみよう。ザルラムは源氏物語において一例もない。では、他の作品についてはどうであろうか。宮田(一九四七)が夙に指摘しているように、ザルラムは散文にはないが和歌には用いられるのである。まず、それらの用例を見ておくことにする。

◇ザルラムの用例

万葉集』全三例

(23) 狛山に鳴くほととぎす泉川渡りを遠みここに通はず(一)に云ふ、「渡り遠みか 通はざるらむ」(渡遠哉不通有武)(二〇五八)

(狛山に鳴くほととぎすは泉川の川幅が広いので、こちらに通つて来ない／また、川幅が広いとて通つて来ないのだろうか)

- (24) 恋しけく日長きものを逢ふべかる宵だに君が来まさざるらむ (不来益有良武) (二〇三九) (恋しいのは長い間なのに逢うはずの夜さえ君はなせいらつしやらないのだから)
- (25) 熟田津に船乗りせむと聞きしなへなにかも君が見え来ざるらむ (所見不来将有) (三二〇二) (熟田津で船出をするに聞いたのに、どうして君はお見えにならないのだから)

古今集 全二例

- (26) 人を思ふ心は我にあらねばや身の迷ふだに知られざるらむ 読み人知らず (五二三)
- (あの人を思う心は、既にあの人についてしまつて私のもとにないからだろうか、我が身がこんなに分別を失っているのも知らぬげであるのは)

この歌については解釈が分かれる。新大系では、「人を思う「心」というものはわたくし自身ではないので、そのわが身迷い乱れることさえも分らないでいるのでしょうか」とする。

- (27) 玉かづら今は絶ゆとや吹く風の音にも人の聞えざるらむ 読み人知らず (七六一)
- (今はもうすっかり縁が絶えたと思つて、あの人は風の便りほどにも消息を聞かせてくれないのでありましか)

後撰集 全二例

- (28) よそなれど心許はかけたるをなか思ひに乾かざるらん よみ人知らず (九八八)
- (遠くに離れてはいますけれども、心だけはあなたに寄せていますのに、どうしてこの私の「思ひ」の「火」によつて、袖の涙は乾かないのでしょうか)

- (29) 宇多の野は耳なし山か呼子鳥呼ぶ声にだに答へざるらん よみ人知らず (二〇三四)
- (宇多の野だと思つておりましたあなたは、実は耳なし山だったので。呼子鳥ならぬ私の呼ぶ声に対して、

どうしてお答えくださらないのでしょうか)

拾遺集 全四例

七夕庚申にあたりて侍ける年

- (30) いとどしく寝も寝ざるらんと思ふかな今日の今宵に逢へるたなばた 元輔 (一一五二)
- (ますます寝られないだろう、と思うことだ。七夕で、しかも庚申の日にあたる今日の今宵に、牽牛星と出逢つた織女星は)
- (31) 身は早く奈良の都になりにしを恋しき事のふりせざるらん よみ人知らず (八六一)
- (私の身はずつと以前から、あの人から忘れ去られて奈良の都のようになってしまつたが、どうして恋しさは古びることなく、相変わらず思い悩んでいるのだろうか)
- (32) 涙河水まさればやしきたへの枕の浮きて留まらざるらん よみ人知らず (二二五八)
- (あなたに見捨てられて流す私の涙の川の、水が増したから、枕が浮いて止まらないのだろうか)
- (33) 年経れどいかなる人か床古りてあひ思ふ人に別れざるらん 大江為基 (一一二九六)
- (長い年月を経て一緒に暮らしても、いつたいどのような人が、久しく床を共にして、愛し合っている人と死別しないことがあるのだろうか)

◇枕草子 一例

『枕草子』では、やはり和歌に一例見られる。清少納言が馬寮のまぐさを貯えた建物から出火したことについて語る下僕の話を受けて、

- (34) (清少) みまくさをもやすばかりの春の日に夜殿さへなど残らざるらむ (僧都の君の御乳母のままなど)
- まぐさを燃やす程度の火で(草を萌え出させる程度の和らかい春の陽光で) どうして夜殿(淀野)までが残ら

表4 ザラムとザルラム

		ザラム		ザルラム	
		散文	和歌	散文	和歌
文中用法	連体用法	○	○	×	×
	準体用法	○	×	×	×
	接続用法	○	△	×	×
	中止用法	×	×	×	×
文末用法	不定語(カ)	○	○	×	○
	ヤ	×	△	×	○
	ゾ	△	×	×	×
	ナム	×	×	×	×
	コソ	△	△	×	×
	終止形終止	×	×	×	△

なかったのでしょうか)

ちなみに『源氏物語』は和歌にも用例がない。ただし、ズとラムの間にツが介入したザリツラムは三例見られる。

(35) 月ごろ、など強ひても聞きならさざりつらむ、と悔しう思さる。(明石)

(36) 御心にも、なとて今まで立ちならさざりつらむと、過ぎぬる方悔しう思さる。(賢木)

(37) 「くなどは、かくさだかに思ひ知りたまひけることを、今までは告げたまはざりつらむ。」(明石)

すべて、「どうして今までくしなかったのか(してくれなかったのか)という意で用いられており、ツの働きによって『現在』から隔絶されていない『過去』を表している。

ザルラムの特徴を構文、意味、文体に見ると以下のとおりである。

構文的……文末用法に限られる  
 意味的……すべて『原因推量』である(『現在推量』がない?)  
 文体的……和歌専用である

ザラムとザルラムの文中用法と文末用法の分布をまとめると表4のようになる。

表4から、ザルラムは構文的にも文体的にも不自由な形式であったと言えるのである。一方、ザラムは先述のように、文中、文末どちらにも使える機能的な性質を有している。また、ザラムは意味の上でもザルラムと連続的に理解できる。たとえば、『原因推量』『現在推量』を表す例がある。

(38) 「苦しき目見せたまふと、恨みたまへるも、さぞ思さるらんかし。行ひをしたまひ、よろづに罪軽げなりし御ありさまながら、この一つの事にてぞ、この世の濁りをすすいたまはざらむ」と、ものの心を深く思したるに、く(朝顔)(あの一のことで現世の濁りをすすげないでいらつしやらないのであろう)(『原因推量』

(39) 「(前の夫八)いかにしてあらむ。あしうてやあらむ。よくてやあらむ。わがあり所もえ知らざらむ。く(大和物語、葦刈り)(どうしているかしら。苦しい生活をしているかしら。なんとかうまくやっているかしら。わたくしのいる所も知ることができないのでしよう)(『現在推量』

本来、ムとラムの意味は連続的なものであって、ム、ラムに否定辞が上接していない場合においても意味の連続性は認められるであろう。(注4)

さて、このように、意味的にザラムと置き換え可能であるならば、制約の少ないザラムを使った方が効率的である。一方、ザルラムは和歌の世界でのみ用いられた固定的、慣例的な複合形式と言えるのではなからうか。原理的に、ラ

表5 ザラム、ジ、マジ

		ザラム	ジ	マジ
文中用法	連体用法	3 2	0	2 6
	準体用法	3 6	0	7
	接続用法	1 8	2	6
	中止用法	0	0	1 4
文末用法	不定語(カ)	3 2	0	5
	ヤ	0	0	0
	ゾ	2	0	0
	ナム	0	0	0
	コソ	7	0	0
	終止形終止	0	6 1	6

ただし、ジ、マジに関しては桐壺巻～花宴巻まで。

ムが否定事態を対象とすることが不可能でない以上、ザラムによる代行が行われていた可能性が認められるのである。ザラムが散文で用いられない理由について考えてみたが、「ザラムによる代行」という解釈は、まだ仮説の域を出るものではなく、今後、ム、ラムの個別論の進展によってその妥当性が検証されるべきものである。

#### 四 ザラムとジ、マジ

ザラムとジ、マジの構文的機能の差異を表5にまとめておく。

ザラムとジの違いについては、小松(一九六〇)の指摘するように、ジの文中用法がほとんどなく、それをザラムが補完しているように見える。しかし、ここにマジを重ね合わせて見ると、実は、マジも文中用法が多く、マジが

ジの用法を補充しているとも言える。しかし、意味についてみると、マジの文中用法は連体用法に認められるように《様態性》に傾くが、ザラムは《仮想性》に傾く。つまり、文中においては、ザラムの《非現実性》に対してマジの《現実性》が対立しており、意味レベルの対立が使い分けを決定しているように思われる。

また、ザラムの準体用法の多さが目立つが、これは準体句の発達段階とザラム使用の増加との相関を予想させるものである。

より分析的な表現を指向する、日本語表現の大きな流れから見ると、ジ、マジの衰退とザラムの成長は表現スタイルの変化に合致するものと言えるかもしれない。

おわりに

否定推量をめぐる問題について考究した。《否定》をめぐっては、十分分析がされておらず、まだまだ開拓の余地がありそうである。《否定》そのものの原理的な研究もなされるべきである。また、通時的に見れば、ジ、マジの衰退と否定辞ナシとの関係など、課題とすべき点が多く残されている。

注

1 参考までに、『万葉集』のザラムの全用例を挙げておく。

仮名書きの例は次の二例だけである。

荒津の海潮干潮満ち時はあれどいつれの時か我が恋ひさらむ(吾孤悲射良牟)(三八九一)(荒津の海には潮の

満ち干に時の決まりがあるが、どんな時に私が恋しく思わないということがあろうか)  
命をし全くしあらばあり衣のありて後にも逢はざらめやも(安波射良米也母)(三七四一)(命さえ無事であつたら、(あり衣の)ありて「こつしてとつとつ逢わずじまい」といふことがあるうか)  
仮名書きでない例を以下に挙げる。

言のみを後も逢はむとねもころに我を頼めて逢はざらむかも(七四〇)  
さを鹿の鳴くなる山を越え行かむ日だにや君がはた逢はざらむ(九五三)  
朝づくの日向黄楊櫛古りぬれど何しか君が見れど飽かざらむ(二五〇〇)  
切目山行きかふ道の朝霞ほのかにだにや妹に逢はざらむ(三〇三七)  
見えずとも誰れ恋ひざらめ山の端にいさよふ月を外に見てしか(三九三)  
玉の緒を沫緒に縋りて結べらばありて後にも逢はざらめやも(七六三)  
明日香川七瀬の淀に住む鳥も心あれこそ波立てざらめ(一三六六)

明日の宵逢はざらめやもあしひきの山彦響め呼びたて鳴くも(一七六一)

あぢかまの塩津をさして漕ぎ船の名は告りてしを逢はざらめやも(二七四七)

まそ鏡見ませ我が背子我が形見待てらむ時に逢はざらめやも(二九七八)

春まけてかく帰るとも秋風にもみたむ山を越え来ざらめや(四一四五)

2 ジ、マジがヤの結びにならないことについては、第一部第三章参照。

3 研究会の席上、野村剛史氏より、「《妥当性》は反語文そのものが表す意味であり、ムに担わせるのは問題ではないか」という旨のご意見をいただいた。たしかに、文末においては、文の意味と助動詞の意味とは一体化しており、分離することは難しい。まだ、解決ができていないが、今の段階では、構文的に似た振る舞いをするところのある、

ムとベシの意味を繋ぐ手がかりとして、「《妥当性》を認めておきたいと思う。

4 ムとラムとの関係については、川端善明(一九八九)参照。ムは「非体験的時間事態への推論」、ラムは「非体験的空間事態への推論」という性質を持つという。

さて、ラムは、このような、終止形接続法助動詞の一般情況のうちにあつて、直接にはムとラシとの相互限定においてその意味を決定されるであろう。或る一つの状態・動作の予定、乃至予想させる成立を意味するムが、自然に、非体験的時間事態への推論という方向をとるのに対し、ラムは、その相関にあつて相違へ、而も推論過程を意味として含むが故に更に、非体験的空間事態への推論という構造をとり易いであろう。それがこの助動詞に関する、現在性の意味なる一半の理由でもある。(川端善明『活用の研究Ⅱ』四八三頁)

この把握によれば、ラムの《現在推量》と《原因推量》の用法がよく説明できると思われる。《現在推量》は、現前のある事態とそれとは隔絶した場にある事態との関係について推論するものだが、《原因推量》も既実現事態とその背後にある事態との関係について推論するものである。とすれば、両者において本質的に共通するのは、空間性であろう。上代語では、ラムは、《現在推量》が多く、《原因推量》はあまり見られない。中古になると、《原因推量》用法が拡大するという事実がある。これは、《現在推量》が比喩的に転用された結果ではないか。用例分布だけでなく、原理的にも、その逆は成り立ちにくいように思われる。

## 第二部のおわりに

第二部では、第一部での総体的研究の成果をふまえて、個別研究をおこなった。実際には、基礎的データの整備から始めなければならないテーマもあり、相当量の研究の蓄積があるテーマもあり、さまざまであった。実態調査に重点を置く章と理論的な面に重点をおく章があり、やや不統一な感もあるが、研究の段階ということを考慮すれば、仕方がないことであつた。新しい調査データを提示し、これまで説明がなされていなかった現象に対して説明を試みたつもりである。

特に、連体ナリについては、モダリテイ論の基礎をなす形式という把握のもと、多くの紙数を費やした。未解決の問題に光を当て、問題解決の糸口を示し得たのではないかと思う。また、その考究をとおして、助動詞論と係り結び論との連絡を試みた。新しい係り結び研究への一視点を提示したつもりである。とにかく、「ナリ論争」で得られた成果については、今後も正しい方向性をもって、継承、発展されなければならない。決して、風化させてはならない。

全体的に見ると、ナリの問題から入ったためか、終止形接続のモダリテイ助動詞に関わる論に偏つたようである。結果的に、その他のモダリテイ助動詞に対しての分析が不十分となっている。たとえば、ムについては、《意志》と《推量》の関係、《婉曲》用法の問題など、取り上げられていない。用例調査をおこない、それなりの見通しは立っているが、まだ論をなす段階に達していないのが、残念である。

古代日本語の叙法システムに関わる根源的な問題として、未然形述語と終止形述語との対立の問題があるけれども、それを検討する上では、上代語のモダリテイ論が前提となるであろう。ここでは、終助詞の問題が重要になってくるだろう。いずれにしても、本論の範囲を大きく越えることになり、扱いきれなかった。すべて、今後の課題としてお

きたい。

## あとがき

以上、第一部、第二部を通して、モダリテイ助動詞を中心に、中古語のモダリテイについて考究をおこなった。第一部では主に構文機能の観点から、文の述語構造とモダリテイ助動詞との交渉について考究した。第二部では、モダリテイ助動詞の個別的問題について、構文機能、意味の面から分析をおこなった。国語学の伝統的な助動詞論の成果を継承しつつ、本論なりに、新しい観点、新しい分析方法を提示することができたと思う。

しかし、それと同時に、中古語モダリテイの研究において今後の課題とすべき点も明確になった。たとえば、終助詞については、個別的記述の積み重ねられていない現在の段階では、体系的に論じることが不可能であり、本論ではほとんど手つかずである。これから、地道に一つ一つ記述を進めていくよりほかはない。

また、平叙文を中心に扱ったため、願望系モダリテイ、詠嘆系モダリテイについて取り上げることができなかった。これまで、比較的研究が手薄な部分ではあるが、既に一部おこなわれているように、希望喚体、感動喚体の概念を有効に活用しながら、体系的に整理していく必要がある。

本論では史的対照という観点に立って、中古語の共時態を考究の主たる対象としたが、通時的研究もこれからなされるべき課題である。その際、モダリテイ表現の変遷をシステムの変遷として捉えていく視点が要請されよう。

モダリテイの史的研究は、まだ緒についたところである。開拓期であるがゆえの困難さと稿者自身の力量不足が相俟って、本論には、不十分な部分、課題とすべき部分が多い。それらについては、これから少しずつ克服していかねばならない。

思えば、この研究に取りかかったのは、今から十三年前のことであった。当時は、アスペクト研究が隆盛で、モダリテイが本格的に論じられることはなかった。まして、モダリテイの史的研究などというと、手本とすべき研究もなく、一から自分で作っていかねばならない状況であった。史的対照という方法もその試行錯誤の中から生まれた。当初は、方法論としての価値がなかなか理解してもらえず、いくら必要性を説いても、概して皆の反応は冷やかであった。だが、近藤泰弘氏、金水敏氏によって史的対照の有効性が説かれ、最近では価値が認められつつある。両氏の活躍は心強いものであったし、本論の内容そのものについても、両氏のご教示に負う部分が多いのである。

状況が変わったのは、内容だけではなかった。古典語研究については、コンピュータ、インターネットの利用が当たり前になってきた。本論の用例調査においても、用例カードを一枚一枚積み重ねる方法から、検索ソフトを使って自動的に用例検索をおこなう方法へと変わってきた。『源氏物語』をはじめとして、索引類の整備も進められ、研究者の事務的作業の負担は、ずいぶん軽減されたように見える。たしかに、便利にはなったが、その陰で切り捨てられたものはないか、という危惧がある。機械化が進むにつれ、人間でしかできない、経験的な部分の価値がますます高まるものと思われる。

ここ数年、現代語のモダリテイ研究の進展はめざましいものがある。いずれこの流れは史的研究に及ぶであろう。本論は、その出発点と言えるかもしれない。とにかく、モダリテイの史的研究はこれからである。研究課題は山積しているのである。ささやかな内容のものではあるが、本論が今後のモダリテイ研究のために少しでも役に立てばと願ってやまない。

最後になってしまったが、本論の研究は、多くの方々のご指導、ご教示によって成り立っている。また、資料提供という形でご助力いただいた方もいる。すべての方々に心より御礼を申し上げます。特に前田富祺先生には本論の執筆をお勧めいただき、十三年の長きにわたって、ご指導いただいた。前田先生のご指導なくしては、本論は完成できなかった。この場を借りて、厚く御礼を申し上げる次第である。



本論と既発表論文との関係については次のとおりである。

序論 あらたに加えた。

## 第一部

- 第一章 あらたに加えた。
- 第二章 「従属節におけるムード形式の実態について」(『日本語学』第六卷第二号)
- 第三章 「《係り結び》と《推量の助動詞》——中古における、文法と助動詞の交渉——」(『語文』第五一輯)
- 第四章 「中古語の叙法副詞—クマエの機能—」(『国語論究』第六集、印刷中)
- 第五章 「中古語モダリテイの階層構造——助動詞の森羅をめぐって——」(『語文』第五八輯)
- 第六章 「推定表現と質問表現の交渉」(『待兼山論叢』第二二集)をもとにまとめ直した。
- 第七章 「モダリテイとモード——古語における仮定文の階層表現をめぐって——」(『日本語学』第一二卷第一三三号)
- 第八章 「助動詞ベシと否定」(『宮地裕・敦子先生古稀記念論集日本語の研究』明治書院)
- 第九章 あらたに加えた。

## 第二部

- 第一章 「〈連体ナリ〉と〈終止ナリ〉——研究のなれの蘊——」(『国語語彙史の研究』第一一集)
- 第二章 「〈連体ナリ〉と〈終止ナリ〉の差異について」(『国語学』第一六三集)
- 第三章 「〈体言ナリ〉と〈連体ナリ〉の差異について」(『国語語彙史の研究』第一四集)
- 第四章 「〈連体ナリ〉の構文的性格をめぐって」(『国語学会成年総会大会要』)をもとにまとめ直した。
- 第五章 「助動詞ベシの成立——蘊の現象——」(『国語語彙史の研究』第一六集)
- 第六章 「推定形式とテンス」(『大手前女子大学論集』第三〇集)
- 第七章 「〈連体ナリ〉の構文的性格をめぐって」(『国語学会成年総会大会要』)をもとにまとめ直した。
- 第八章 「ラムの特殊性をめぐって——「ト」を「能」の潜在——」(『日本語学』第九卷第五号)
- 第九章 「否定推量の諸相」(『大手前女子大学論集』第三一集、印刷中)

## 参考文献

(ナリ研究史に関する文献は第二部第一章の末尾に挙げてある。重複を避けるため、ここでは挙げていない)

## 日本語学・国語学関係

- 秋本守英(一九七四)「助動詞『めり』の文章史的考察」(『国文学論叢』一九)  
 (一九八七)「古今集の文法」(『国文法講座4』明治書院)  
 浅見 徹(一九六六a)「単文主格の発達―中古仮名文中の助詞『の』―」(『国語国文』昭和四一・五)  
 (一九六六b)「助動詞の展開―『らむ』の場合―」(『岐阜大学研究報告―人文科学―第一五号』)  
 安達太郎(一九九一)「いわゆる『確認要求の疑問表現』について」(大阪大学『日本学報』一〇)  
 (一九九五)『日本語疑問文における判断の諸相』(大阪大学学位論文)  
 (一九九六)「副詞から見た証拠性判断の意味特徴」(『神戸大学留学生センター紀要』第3号)  
 (一九九七a)「副詞が文末に与える影響」(『広島女子大学国際文化学部紀要』第3号)  
 (一九九七b)「認識の意味とコト・モノの介在」(未公刊)  
 (一九九七c)「『だろっ』の伝達的な性格」(未公刊)

- 有田節子(一九九二)「日本語条件文研究の変遷」(益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお出版)  
 池上嘉彦(一九七五)『意味論』(大修館書店)  
 (一九八二)「するとなるの言語学言語と文化のタイポロジーへの試論」(大修館書店)  
 井島正博(一九九二)「可能文の多層的分析」(仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版)  
 (一九九六)「相对名詞または格助詞による時の副詞節」(『山口明徳教授還暦記念 国語学論集』明治書院)  
 糸井通浩(一九九〇)「助動詞の複合『ならむ』『なるらむ』―散文体と韻文体と―」(『国語語彙史の研究』一一)  
 伊藤光浩(一九八八)「可能の『べし』存疑―八代集に於ける―」(『中央大学国文』三二)  
 磯部佳宏(一九八八)「不定語『いかで』の構文的性格―意味用法・表現性をめぐって―」(『山口国文』昭和六三・一  
 号)  
 犬飼 隆(一九九〇)「情報の博搜と提供を」(『国文学 解釈と鑑賞』第五五卷七号)  
 伊牟田経久(一九七六)「ナムの係り結び」(佐伯梅友博士喜寿記念『国語学論集』表現社)  
 (一九八二)「ゾ・ナム・コソの差異―蜻蛉日記を中心に―」(馬淵和夫博士退官記念『国語学論集』  
 内田賢徳(一九九二)「助動詞ラシの方法」(吉井巖編『記紀萬葉論叢』塙書房)  
 漆谷広樹(一九八八)「形容動詞」語幹構成要素の『げ』に関する一考察」(『専修国文』四二)  
 大鹿薫久(一九九五)「本体把握―『らしい』の説―」(宮地裕・敦子先生古稀記念論集 日本語の研究』明治書院)  
 大野 晋(一九九三)『係り結びの研究』(岩波書店)  
 岡田伸夫(一九八五)『副詞と挿入文』(新英文法選書九・大修館書店)  
 小田 勝(一九九〇)「中古和文における接続句の構造」(『国学院雑誌』平成二・八)  
 尾上圭介(一九七七)「語列の意味と文の意味」(『松村明教授還暦記念 国語学と国語史』)

- (一九七九) 「助詞『は』研究史に於ける意味と文法」(『三十周年記念論集 神戸大学文学部』)  
 (一九八二) 『文の基本構成・史的展開』(『講座日本語学二 文法史』明治書院)  
 (一九八三) 「不定語の語性と用法」(『副用語の研究』明治書院)  
 (一九八六) 「感嘆文と希求・命令文―喚体・述体概念の有効性―」(『松村明教授古稀記念 国語研究論集』明治書院)  
 (一九九〇) 「文法論―陳述論の誕生と終焉―」(『国語と国文学』六七巻五号)  
 (一九九二) 「モダリティ論の方法」(『文法懇話会発表資料』)  
 (一九九七) 「叙法論の構想―動詞終止形を中心に―」(『文法懇話会発表資料』)  
 加藤浩司(一九九六) 「上接語の相違から見た助動詞キ・ケリの差異」(国語学会平成8年度秋季大会要旨)  
 門前正彦(一九五七) 「漢文訓読史上の一問題―打消助動詞の連体形について」(『訓点語と訓点資料』八)  
 (一九六〇) 「漢文訓読史上の一問題(三)―助動詞〈ざり〉について」(『訓点語と訓点資料』一三)  
 春日和男(一九六八) 『存在詞に関する研究』(風間書房)  
 金子 弘(一九八九) 「動詞+ラシカッタという言い方をめぐって―会話文・地の文の別と文法カテゴリーの順序―」(『山形女子短期大学紀要』二二)  
 神尾昭雄(一九九〇) 『情報のなわ張り理論』(大修館書店)  
 紙谷栄治(一九八二) 「助動詞の相互承接についての一考察」(『語文』四〇)  
 (一九八四) 「助動詞の相互承接からみたテンス・アスペクト」(『同志社国文学』二四)  
 (一九八六) 「複文についての一考察」(宮地裕編『論集 日本語研究(一) 現代編』明治書院)  
 神谷かをる(一九九三) 『仮名文学の文章史的研究』(和泉書院)

- 川端善明(一九六三) 「喚体と述体―係助詞と助動詞とその層」(『女子大國文』一五)  
 (一九七六) 「用言」(『岩波講座 日本語6 文法1』岩波書店)  
 (一九七八) 「形容詞文・動詞文概念と文法範疇―述語の構造について―」(『論集日本文学日本語5』角川書店)  
 (一九七九) 『活用の研究II』(大修館書店)  
 (一九八三) 「副詞の条件―叙法の副詞組織から―」(渡辺実編『副用語の研究』明治書院所収)  
 (一九八九) 「組織と分類―あゆみ抄大旨による脚結の統一把握―」(『奥村三雄教授退官記念国語学論叢』奥村三雄教授退官記念論文集刊行会編)  
 (一九九四) 「係結の形式」(『国語学』一七六)  
 川村 大(一九九五) 「ベシの諸用法の位置関係」(『築島裕博士古稀記念国語学論集』汲古書院)  
 (一九九六) 「ベシの表す意味―肯定・否定・疑問の文環境の中で―」(『山口明穂教授還暦記念国語学論集』明治書院)  
 北原保雄(一九六六) 「終止なり」と「連体なり」―その分布と構造的意味―」(『国語と国文学』昭四一・九)  
 (一九六七) 「なり」の構造的意味」(『国語学』六八)  
 (一九六八) 「文法」(馬淵和夫著『上代のことば』第四章)  
 (一九八一) 『日本語助動詞の研究』(大修館書店)  
 (一九八四) 『文法的に考える』(大修館書店)  
 (一九八四) 『日本語文法の焦点』(大修館書店)  
 (一九九六) 『表現文法の方法』(大修館書店)

- 金水 敏 (一九八九) 『報告』 についての覚書』 (『日本語のモダリティ』 ころしお出版)
- (一九九二) 『伝達の発話行為と日本語の文末形式』 (『神戸大学文学部紀要』 一六)
- (一九九二) 『談話管理論からみた『だろろう』』 (『神戸大学文学部紀要』 一九)
- (一九九五) 『日本語史からみた助詞』 (『月刊言語』 平成七・十一)
- 金田一春彦 (一九五三) 『不変化助動詞の本質―主観的表現と客観的表現の別について― (上) (下)』 (『国語国文』 二二卷二・三)
- (一九五五) 『古代アクセントから近代アクセントへ』 (『国語学』 二二)
- 工藤 浩 (一九八二) 『叙法副詞の意味と機能―その記述方法をもとめて―』 (国立国語研究所報告七一、研究報告集 三)
- 黒田徹・宇田川義明 (一九八八) 『『らしい』』 『ようだ』 は『だろろう』と違う―『夏の花』『雪国』を具体例として―』 (『解釈と鑑賞』 第五三巻七号)
- 久野 〇 (一九七三) 『日本文法研究』 (大修館書店)
- 国立国語研究所 (一九六〇) 『話しことばの文型 (一)』 (秀英出版)
- (一九九一) 『副詞の意味と用法』 (日本語教育指導参考書一九)
- (一九八五) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』 (秀英出版)
- 此島正年 (一九七三) 『国語助動詞の研究』 (桜楓社)
- 小林賢次 (一九七七 a) 『院政・鎌倉時代におけるジ・マジ・ベカラズ』 (『言語と文芸』 八四)
- (一九七七 b) 『院政・鎌倉時代における否定推量・否定意志の表現―ジ・マジ・ベカラズの周辺―』 (『香川大学教育学部研究報告』 一卷四三号)
- (一九七九) 『中世の仮定表現に関する一考察―ナラバの発達をめぐって―』 (『中田祝夫博士功績記念 国語学論集』 勉誠社)
- (一九九一) 『条件表現の歴史』 (『講座日本語と日本語教育一〇 日本語の歴史』 明治書院)
- (一九九六) 『日本語条件表現史の研究』 (特に、『第三章 中世における反実仮想条件表現―呼応形式の推移を中心に―』) (ひつじ書房)
- 小林千草 (一九八七) 『近代語の文法―鎌倉室町時代語―』 (『国文法講座五 時代と文法―近代語』 明治書院)
- 小林由美子 (一九九二) 『複合形容詞『―がたし』『―にくし』について―『源氏物語』を中心に―』 (大阪大学文学部卒業論文)
- 小林芳規 (一九八二) 『古代の文法Ⅱ』 (『講座国語史四 文法史』 大修館書店)
- 小松登美 (一九五五) 『筆のすさび』 (『未定稿』 創刊号)
- (一九六一) 『じ』と『やらん』 (『未定稿』 九号、昭和三六・九)
- 近藤 明 (一九八九) 『助動詞ツ・又に否定辞が下接する場合―又ナデを中心に―』 (『国語学研究』 平成元・一二)
- 近藤泰弘 (一九七九) 『構文上より見た係助詞『なむ』―『なむ』と『ぞーや』との比較―』 (『国語と国文学』 昭五四・一二)
- (一九八六) 『文法 (史的研究)』 (『国語学』 一四五)
- (一九八六) 『結び』の用言の構文的性格』 (『日本語学』 昭和六一・二)
- (一九八七) 『古文における疑問表現―(や)と(か)―』 (『国文法講座三』 明治書院)
- (一九八九) 『ムード』 (『講座 日本語と日本語教育四 日本語の文法・文体 (上)』) (明治書院)
- (一九九〇) 『文法研究における現代語と古典語』 (『解釈と鑑賞』 平成二・七)

- (一九九二)「中古語のモダリティの助動詞の体系」(『日本女子大学文学部紀要』第四〇号)
- (一九九三)「推量表現の変遷」(『月刊言語』二月号)
- (一九九七)「文の構造をどう扱うのか—古典語の複文構造の概観—」(『解釈と鑑賞』平成九・七)
- 近藤要司 (一九九五)「源氏物語の助詞ヤについて」(『宮地裕・敦子先生古稀記念論集 日本語の研究』平成七・一一)
- 佐伯梅友 (一九五〇)『奈良時代の国語』(三省堂)
- 佐伯哲夫 (一九六八)『べし』(『国文学解釈と鑑賞』昭和四三・一二)
- 阪倉篤義 (一九六六)『語構成の研究』(角川書店)
- (一九六九)『べし』『らし』『らむ』『けむ』について(『佐伯梅友博士古稀記念国語学論集』後に『論集 日本語研究? 助動詞』有精堂、所収)
- (一九七五)『文章と表現』(角川書店)
- (一九九三)『日本語表現の流れ』(岩波書店)
- 坂詰力治 (一九九三)「室町時代における副詞について—「カナラズ」と「サダメテ」をめぐる—」(近代語研究会編『近代語研究第九集』武蔵野書院)
- 桜井光昭 (一九七〇)『じ』は『む』の否定か(『月刊文法』昭和四五・六)
- 佐治圭三 (一九六六)「素材の世界と表現と—終止形接続の(なり)について—」(『国語国文』遠藤博士還暦記念号)
- (一九九一)『日本語の文法の研究』(ひつじ書房)
- 信太知子 (一九九六)「古代語連体形の構成する句の特質—準体句を中心に句相互の関連性について—」(『神女大國文』第七号)
- 柴田 敏 (一九九四)「ナナリとナメリの(判断)について」(『森野宗明教授退官記念論集 言語・文学・国語教育』

## 三省堂

- (一九九五)「助動詞メリとナリ(終止形接続)との使い分けについて」(『静岡英和女学院短期大学紀要』二七)
- (一九九二)『日本語可能表現の諸相と発展』(『大阪大学文学部紀要』三三・一一)
- 鈴木一彦 (一九八七)『ざらむ』『ざるらむ』『ざりけむ』(『古典を読むための助動詞と助詞の手帖』学燈社)
- 鈴木 泰 (一九八四)『き』『けり』の意味とその学説史(『武蔵大学人文学会雑誌』十六巻三・四合併号)
- (一九八五)「ナリ述語」と「タリ述語」(『日本語学』四・一〇)
- (一九九二)『古代日本語動詞のテンス・アスペクト—源氏物語の分析—』(ひつじ書房)
- (一九九五)「メノマエ性と視点(Ⅰ)—移動動詞の〜タリ・リ形と〜ツ形、〜ヌ形のちがひ—」(『築島裕博士古稀記念 国語学論集』汲古書院)
- (一九九六)「メノマエ性と視点(Ⅱ)—移動動詞の基本形を中心に—」(『山口明穂教授還暦記念 国語学論集』明治書院)
- (一九九六)「メノマエ性と視点(Ⅲ)—古代日本語の通達動詞の evidentiality (証拠性)—」(鈴木泰・角田大作編『日本語文法の諸問題』ひつじ書房)
- 仙波光明 (一九七六)「終止連体形接続の『げな』と『さうな』—伝聞用法の発生から定着まで—」(『佐伯梅友博士喜寿記念 国語学論集』表現社)
- 高梨信乃 (一九九〇)「条件節と理由節—ナラとカラの対比を中心に—」(『待兼山論叢』二四)
- 田窪行則 (一九八七)「統語構造と文脈情報」(『日本語学』昭和六二・五)
- (一九九三)「談話管理理論から見た日本語の反事実条件文」(益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお出版)

版)

竹内美智子 (一九八六) 『平安時代和文の研究』 (明治書院)

田野村忠温 (一九八九) 『現代日本語の文法——「のだ」の意味と用法——』 (和泉書院)

—— (一九九〇) 「文における判断をめぐって」 (『東アジアの諸言語と一般言語学』三省堂)

—— (一九九二) 「疑問文における肯定と否定」 (『国語学』一六四)

—— (一九九二) 「らしいとようだの意味の相違について」 (『言語学研究』一〇)

—— (一九九二) 現代語における予想のそうだの意味について——ようだとの対比を含めて」 (『国語語彙史の研究』第十二集)

田淵和子 (一九七三) 「源氏物語における係助詞『ぞ』と『こそ』について」 (『高知女子大國文』九)

築島 裕 (一九六三) 『平安時代の漢文訓読語につきての研究』 (東京大学出版会)

—— (一九六九) 『平安時代語新論』 (東京大学出版会)

—— (一九八六) 『平安時代の国語』 (国語学叢書三、東京堂出版)

寺村秀夫 (一九八二) 「対照言語学と日本語学」 (『講座日本語学——総論』明治書院)

—— (一九八二) 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』 (くろしお出版)

—— (一九八四) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 (くろしお出版)

時枝誠記 (一九四一) 『国語学原論』 (岩波書店)

—— (一九五〇) 『日本文法 口語篇』 (岩波書店)

—— (一九五四) 『日本文法 文語篇』 (岩波書店)

徳田 淨 (一九三六) 『国語法査説』 (文学社)

中右 実 (一九九四) 『認知意味論の原理』 (大修館書店)

中田祝夫 (一九六三) 「解釈文法雑筆 (その二)——『べし』と『まじ』およびその『裏』と『表』(その一)——」 (『国

文学 言語と文芸』昭和三八・七)

—— (一九六八) 「断定(なり・たり・だ・です)」 (『国文学解釈と鑑賞 特集日本語の助動詞の役割』昭和三三

・一二)

中西宇一 (一九六九) 「『べし』の意味——様相的推定と論理的推定——」 (『月刊文法』昭和四四・一二)

—— (一九八六) 『日本文法入門——構造の論理——』 (和泉書院)

—— (一九九六) 『古代語文法論 助動詞篇』 (和泉書院)

仁田義雄 (一九八四) 「係結について」 (研究資料日本文法五 『助辞編(一) 助詞』明治書院)

—— (一九八五) 「文の骨組——文末の文法力テゴリーをめぐって——」 (『応用言語学講座第一巻 日本語の教育』

明治書院)

—— (一九八六) 「現象描写文をめぐって」 (『日本語学』昭和六二・二)

—— (一九八九) 「文の構造」 (『講座 日本語と日本語教育四 日本語の文法・文体(上)』明治書院)

—— (一九八九) 「現代日本語文のモダリティの体系と構造」 (『日本語のモダリティ』くろしお出版)

—— (一九九一) 『日本語のモダリティと人称』 (ひつじ書房)

仁田義雄・益岡隆志編 (一九八九) 『日本語のモダリティ』 (くろしお出版)

西田直敏 (一九九三) 『日本文法の研究』 (和泉書院)

丹羽哲也 (一九九一) 「『べきだ』と『なければならぬ』」 (『大阪学院大学 人文自然論叢』二三・二四)

—— (一九九二) 「過去形と叙述の視点」 (『国語国文』六一巻九号)

野田春美 (一九九〇) 「ムードの『のだ』とスコープの『のだ』」(『日本語学』平成二・三)

—— (一九九二) 「単純命題否定と推論命題否定——『のではない』と『わけではない』——」(『梅花短大國語国文』

## 五)

野田尚史 (一九八九) 「真性モダリティをもたない文」(仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版)

—— (一九九二) 「テンスから見た日本語の文体」(『文化言語学——その提言と建設——』三省堂)

—— (一九九六) 『は』と『が』(『新日本語文法選書』・くろしお出版)

野村剛史 (一九九一) 「助動詞とは何か」(『国語学』一六五)

—— (一九九五) 「ズ、ム、マシについて」(『宮地裕・敦子先生古稀記念論集 日本語の研究』明治書院)

橋本 修 (一九九四) 「上代・中古和文資料における、ノチ節のテンスとアスペクト」(『文藝言語研究 言語篇』二

## 六)

橋本研一 (一九七九) 「『べし』における可能の意味」(『田辺博士古稀記念国語助詞助動詞論叢』桜楓社)

橋本進吉 (一九六九) 『助詞・助動詞の研究』(岩波書店)

橋本博幸 (一九九〇) 「漢文訓読語の国語文への受容——『サダメテ』の場合——」(『訓点語と訓点資料』第八四集)

浜田敦・井手至・塚原鉄雄 (一九九一) 「国語副詞の史的研究」(『新典社』)

林田 明 (一九七五) 「係結の言語生態論的研究」(千葉大『人文研究』四)

富士谷成章 (一九七三) 『あゆひ抄』(中田祝夫・竹岡正夫共著『あゆひ抄新注』風間書房)

福沢将樹 (一九九四) 「状態」のタを通して見た日本語の階層構造」(『国語学会平成6年度秋季大会要旨』)

福島邦道 (一九五九) 『『べし』』(『国文学』昭和三四・一)

ホフマン (一八六七) 『日本語文典』(東洋文庫)

堀口和吉 (一九七九) 「助動詞の意味——『べし』をめぐる——」(『山辺道』一三三)

前田桂子 (一九九三) 「江戸咄本におけるゲナとサウナく伝聞の例を中心に」(『筑紫語学研究』四)

前田富祺 (一九八三) 「漢語副詞の種々相」(渡辺実編『副用語の研究』明治書院、所収)

—— (一九八五) 『国語語彙史研究』(明治書院)

益岡隆志 (一九八七) 「モダリティの構造と意味——価値判断のモダリティをめぐる——」(『日本語学』第六卷第七号)

—— (一九九一) 『モダリティの文法』(くろしお出版)

—— (一九九三) 『日本語の条件表現』(くろしお出版)

—— (一九九七) 『複文』(くろしお出版)

松尾捨治郎 (一九三六) 『国語法論攷』(文学社)

—— (一九六一) 『助動詞の研究』(白帝社)

松岡静雄 (一九二六) 『日本語学』(刀江書院)

松下大三郎 (一九三二) 『改撰標準日本文法』(勉誠社)

松山陽子 (一九六七) 「中古文学における助動詞『めり』」(『藤女子大学国文学雑誌』二)

南不二男 (一九七四) 『現代日本語の構造』(大修館書店)

—— (一九八七) 「現代語の文法」(『国文法講座六 時代と文法——現代語』明治書院)

—— (一九九三) 『現代日本語文法の輪郭』(大修館書店)

三原健一 (一九九五) 「概言のムード表現と連体修飾節」(仁田義雄編『複文の研究』(上)(下))くろしお出版)

三宅知宏 (一九九四) 「認識的モダリティにおける実証的判断について」(『国語国文』六三・一一)

—— (一九九五) 「推量』について」(『国語学』一八三)

- 宮坂和江 (一九五二) 「係結の表現価値―物語文章論より見たる―」(『国語と国文学』昭二七・二)
- 宮地敦子 (一九七九) 『身心語彙の史的研究』(明治書院)
- 宮地 裕 (一九七九) 『新版 文論』(明治書院)
- (一九八七) 『時枝文法』(『国文法講座1』明治書院)
- 宮島達夫 (一九九四) 『語彙論研究』(むぎ書房)
- 宮島達夫・仁田義雄編 (一九九六) 『日本語類義表現の文法(上)(下)』(くろしお出版)
- 宮田和一郎 (一九四七) 「さるらむ」は歌語か」(『国語国文』第一六卷三号)
- (一九四八) 「助動詞〈ざり〉」(『国語国文』第一七卷七号)
- (一九五六) 「歌語『なるらむ』『さるらむ』—中古語法覚書(十五)—」(『平安文学研究』第十  
八輯、昭和三一・五)
- 森重 敏 (一九四六) 「上代係助辞論」(国語国文昭和二二・二)
- (一九五一) 「間投助詞から終止としての係助詞へ」(『国語国文』昭二六・六)
- (一九五八) 「係結」(『統日本文法講座』一・明治書院)
- (一九五九) 『日本文法通論』(風間書房)
- (一九七一) 「萬葉集における『らむ』と『といふ』との交渉」(『萬葉』第五八集)
- (一九七三) 『なり』の表現価値(上)」(『国語国文』X)
- 森野 崇 (一九八六a) 「係助詞『なむ』の伝達性―源氏物語』の用例から―」(『国文学研究』九二)
- (一九八六b) 「係助詞『なむ』の機能―そのとりたての性質と待遇性をめぐって―」(『国語学  
究と資料』一一)

- (一九九二) 「平安時代における終助詞『ぞ』の機能」(『国語学』一六八)
- 森本順子 (一九九四) 『話し手の主観を表す副詞について』(くろしお出版)
- 森山卓郎 (一九八八) 『日本語動詞述語文の研究』(明治書院)
- (一九八九a) 「認識的ムードの形式をめぐって」(『日本語のモダリティ』くろしお出版)
- (一九八九b) 「認識のムードとその周辺」(『日本語のモダリティ』くろしお出版)
- (一九九二) 「日本語における『推量』をめぐって」(『言語研究』一〇二)
- (一九九五) 『伝聞』考」(『京都教育大学国文学会誌』二六)
- (一九九六) 『文の述べ方』(『日本語文法セルフマスターシリーズ6』くろしお出版)
- 山口仲美 (一九八四) 『平安文学の文体の研究』(明治書院)
- 山口堯二 (一九六八) 『まし』の意味領域」(『国語国文』昭和四三・五) 後に『論集日本語研究7 助動詞』有  
精堂、所収)
- (一九八〇) 『古代接統法の研究』(明治書院)
- (一九九〇) 『日本語疑問表現通史』(明治書院)
- (一九九〇) 「疑問助詞『やらん』の成立」(大阪大学『語文』第五十三・五十四輯合併号)
- (一九九一) 「推量体系の史的变化」(『国語学』一六五)
- (一九九一) 「日本語通史―解釈の通史性―」(『日本語学』平成三・五)
- 山口佳紀 (一九八五) 『古代日本語文法の成立の研究』(有精堂)
- (一九八七) 「活用形の機能」(『国文法講座2』明治書院)
- (一九九三) 『古代日本文体史論考』(有精堂)



- 山内洋一郎(一九八六)「助動詞『じ』の已然形」(『国文 研究と教育』昭和六一・二)  
 ───(一九八九)『中世語論考』(三省堂)
- 山田小枝(一九九〇)『モダリティ』(同学社)
- 山田孝雄(一九〇八)『日本文法論』(宝文館)
- ───(一九二二)『日本文法講義』(宝文館)
- ───(一九三六)『日本文法概論』(宝文館出版)
- 山梨正明(一九八六)『発語行為』(『新英文法選書』大修館書店)
- ───(一九九五)『認知文法論』(ひつじ書房)
- 吉田金彦(一九七三)『上代語助動詞の史的研究』(明治書院)
- 吉田茂晃(一九八九)『けり』の時制面と主観面―万葉集を中心として―(『国語学』一五七)
- ───(一九九五)「形容詞+ム」型述語の諸相」(『島根大学法文学部文学科紀要』第二三号)
- 渡辺 実(一九七二)『国語構文論』(塙書房)
- ───(一九八二)「語彙と文体」(『講座日本語の語彙①』明治書院)
- ───(一九九六)『日本語概説』(岩波書店)

### 英 語 学 関 係

- 小野 茂(一九六九)『英語法助動詞の発達』(研究社)
- 細江逸記(一九七三)『動詞叙法の研究』(篠崎書林)
- 荒木一雄他(一九七七)『現代の英文法九 助動詞』(研究社)
- F.R.Palmer(一九七九)『Modality and the English Modals』(Longman)
- 毛利可信(一九八〇)『英語の語用論』(大修館書店)
- グリーンボーム(一九八三)『英語副詞の用法』(研究社)
- Coates(一九八三)『The Semantics of the Modal Auxiliaries』(邦訳 沢田治美『英語法助動詞の意味論』研究社)
- F・R・パーマー(一九八四)『英語の法助動詞』(桐原書店)
- R.Quirk(一九八五)『A Comprehensive Grammar of the English Language』(Longman)
- Chafe and Nichols,ed(一九八六)『EVIDENTIALITY: The Linguistic Coding of Epistemology (ABLEX) Traugott(一九八九)「On the rise of epistemic meanings in English」(Language 六五)
- Sweezer(一九九〇)『From etymology to Pragmatics』(Cambridge University Press)
- 中野弘三(一九九三)『英語法助動詞の意味論』(英潮社)
- 河上誓作編(一九九六)『認知言語学の基礎』(研究社)

高山善行『日本語モダリティの史的研究』訂正

13頁2行	注5 → 注4	
16頁17行	『講座日本語学』 → 宮地裕他編『講座日本語学』(明治書院)	
18頁3行	Dictum → Dictum	
25頁9行	指摘され → 指摘されて	
25頁10行	知らる → 知られる	
52頁16行	堯 → 堯 (128頁17行, 161頁13行, 162頁13行も同じ)	
58頁10行	助動詞はは → 下線部削除	
65頁2行	consensus → consensus	
74頁12行	問題 → 問題が	
79頁14行	松尾氏は → 松尾捨治郎 (一九六一) では	
107頁14行	少しづつ → 少しずつ	
114頁小見出し	助動詞 → 下線部を削除	
127頁10行	福沢 → 福沢 (一九九四)	
142頁3行	容に → 容易に	
143頁2行	強いとは思われない → 下線部削除	
144頁2行	レトリカル → レトリカルな	
148頁1行	久野 → 久野 (381頁12行も同じ)	
163頁2行	カモシレナイ → カモシレナイ	
179頁15行	ス → 否定辞	
281頁14行	注連ナリ → 下線部削除	
282頁15行	捉えて → 捉えて	
297頁4行	すること → 捉えることが	
336頁10行	山口論文 → 山口論文の	
340頁16行	シゲシンの古形 → シゲシンの古い未然形	
359頁2行	モノユ → モノユ	
371頁7行	末 → 未	
381頁13行	語彙研究 (一四五) [条件分けを表現する] あかぜ文 (2) 『教育国語』82、昭六〇・九) を挿入	

(記号、レイアウトの訂正)

26頁7、8行	矢印を縦向きにする
26頁18行	(注3) → (注3) 括弧の重複を直す
32頁19行	三字下げ (33頁1行も同じ)
48頁6行	資 → 》
58頁15行	「ベシの…」以下の部分、改行せず前文に続ける
59頁3行	「言えないだろう」の後に句点を入れる
80頁15行	一字下げ
85頁12行	」を削除
87頁表2	(9.3%) (0.6%) に訂正
97頁表7	タリ (完了) に訂正
125頁7行	く → く
145頁5行	引用符を横向きに訂正
180頁7、8行	字間を詰める (188頁17行, 249頁19行も同じ)
193頁11行	「考えられる」の後の句点を削除
199頁17行	「強いが」の後に読点を入れる
255頁15行	星印を削除 (256頁1行も同じ)
301頁8行	矢印を縦向きに訂正 (204頁18行も同じ)
358頁19行	目立つ。 → 目立つ。